秋田県文化財調査報告書第105集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ

——柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡——

1984・3

秋田県教育委員会

東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ

――柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡――

秋田県教育委員会

序

東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は，秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から昭和56年度までは鹿角市が対象でしたが，昭和57年度からは小坂町を対象として発掘調査を行っております。

鹿角市ではこれまで34ケ所の遺跡，発掘総面積154,435 m²におよぶ調査を行いましたが，この報告書は昭和56年度に実施した柏木森，中ノ崎，明堂長根の３遺跡の調査結果を収録したものです。本報告書が鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後にこの調査にご協力いただきました顧問，専門指導員日本道路公団，鹿角市，同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年３月

秋田県教育委員会

教育長　斉藤　長

例　　言

1．本報告書は，東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和56年度発掘調査を行った10遺跡のうち，柏木森遺跡（遺跡番号No.15），中ノ崎遺跡（遺跡番号No.16），明堂長根遺跡（遺跡番号No.31）の発掘調査報告書である。

2．遺跡については機会をみて発表してきたが，本報告書を正式のものとする。

3．発掘調査遺跡の記載は遺跡番号順による。

4．発掘調査に関して，下記の諸氏から御指導，御教示を賜わった。記して感謝の意を表する。（敬称略，順不同）

青森県埋蔵文化財調査センター主査　　遠藤　正夫

青森県埋蔵文化財調査センター主事　　成田　滋彦

秋田県鹿角市教育委員会主事　　秋元　信夫

5．本報告書の執筆と編集は下記の調査員と補佐員が協議して行った。

Ⅰの1　小玉準　　Ⅰの2　桜田隆　　Ⅱの2　小林克

柏木森遺跡　岩見誠夫　小林克　松岡忠仁　藤井安正　関直　高橋学　花田孝夫　阿部義行

中ノ崎遺跡　橋本高史　山崎文幸　米村博美　佐藤幸夫　安保徹　鈴木秋良　鈴木功　福本雅治

明堂長根遺跡　小玉準　畠山圭　高橋修　米田哲　阿部明人　佐藤雅子

6．本報告書のⅡの1「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。

7．石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏の指導を仰いだ。

8．報告書に使用した地図は建設省国土地理院発行の5万分の1，2万5千分の1及び日本道路公団作成の千分の1の地形図である。

9．遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版　標準土色帖」(日本色彩研究所）を使用した。

10．遺物の実測には，画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

11．遺跡の写真撮影は主に次の者があたった。

柏木森遺跡　関直　松岡忠仁　高橋学　花田孝夫　阿部義行

中ノ崎遺跡　橋本高史　鈴木功　安保徹　鈴木秋良　橋本雅治

明堂長根遺跡　小玉準

12．遺物の写真撮影は主に次の者があたった。

高橋学　橋本高史　鈴木功　安保徹　渋谷志　熊谷安　高橋れい子

13．遺物の実測，採拓，トレース，整理等は上記調査員，補佐員の他に次の者があたった。

柏木森遺跡　津島満子　安保幸子　池田邦子　浅石悦子　田中春美　熊谷恵子
松本良子　加藤正子　小松睦子

中ノ崎遺跡　柳沢照子　奈良栄子　奈良美栄子　大野甲子　高橋チエ子　松本幸子
岡本龍子　山田喜美子　土屋ひさ子　加藤正子

明堂長根遺跡　金沢美津子　中村陽子　熊谷裕子　越後谷栄子　岡本龍子

14．本報告書に記載した遺物の実測図，拓影の縮尺は原則として½，⅓，および35%とした。
その他のものは任意である。

目　　次

序
例　言

Ⅰ　はじめに……1
　1　発掘調査に至るまで……1
　2　調査の組織と構成……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
　1　地形と地質……3
　2　環境と周辺の遺跡……9

柏木森遺跡

　1　遺跡の概観……19
　2　調査の方法……19
　3　調査の経過……21
　4　遺跡の基本層位……21
　5　遺構と遺物……27
　6　まとめ……65

中の崎遺跡

　1　遺跡の概観……103
　2　調査の方法……105
　3　調査経過……107
　4　遺跡の層位……113
　5　遺構と遺物……114
　6　まとめ……248
付1　土壌の燐酸分測定について……249
付2　^{14}C 年代測定結果……250

明堂長根遺跡

1　遺跡の概観…… 337
2　調査の方法…… 337
3　調査の経過…… 337
4　遺跡の層序…… 339
5　遺構と遺物…… 339
6　まとめ…… 361

挿　図　目　次

第１図　段丘地形図……4
第２図　露頭柱状図……6
第３図　東北縦貫自動車道関係及び周辺遺跡……13

柏木森遺跡

第１図　柏木森遺跡グリッド配置図……20
第２図　柏木森遺跡基本層序……22
第３図　柏木森遺跡遺構配置図……25
第４図　溝跡実測図……28
第５図　掘立柱建物跡実測図……29
第６図　土壙実測図(1)……30
第７図　土壙実測図(2)……31
第８図　土壙実測図(3)……32
第９図　土壙実測図(4)……33
第10図　土壙実測図(5)……34
第11図　土壙実測図(6)……35
第12図　土壙実測図(7)……36
第13図　土壙実測図(8)……37
第14図　土壙実測図(9)……38
第15図　土壙実測図(10)……39
第16図　土壙実測図(11)……40
第17図　土壙実測図(12)……41
第18図　出土遺物・第Ⅰ群土器(1)……43
第19図　出土遺物・第Ⅰ群土器(2)……45
第20図　出土遺物・第Ⅰ群土器(3)……47
第21図　出土遺物・第Ⅰ群土器(4)……48
第22図　出土遺物・第Ⅰ群土器(5)……49
第23図　出土遺物・第Ⅰ群土器(6)……50
第24図　出土遺物・第Ⅱ群，第Ⅲ群，第Ⅳ群土器……53
第25図　出土遺物・第Ⅳ群土器……54
第26図　出土遺物・第Ⅱ群，第Ⅳ群土器……55
第27図　出土遺物・第Ⅳ群土器……56
第28図　出土遺物・第Ⅳ群土器……57
第29図　出土遺物・第Ⅳ群土器……58
第30図　出土遺物・第Ⅴ群土器……60
第31図　出土遺物・石器(1)……63
第32図　出土遺物・石器(2)……64
第33図　鹿角地域内早期末～前期初頭出土土器……68

中の崎遺跡

第１図　遺跡位置図……104
第２図　グリッド配置図……106
第３図　遺構配置図……109
第４図　Ｓライン断面図……111
第５図　ＳＩ001竪穴住居跡……115
第６図　ＳＩ001竪穴住居跡カマド……117
第７図　ＳＩ001竪穴住居跡，ＳＤ006溝……119
第８図　ＳＩ001竪穴住居跡出土遺物(1)……121
第９図　ＳＩ001竪穴住居跡出土遺物(2)……122
第10図　ＳＩ002竪穴住居跡……123
第11図　ＳＩ002竪穴住居跡カマド……124
第12図　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物……125
第13図　ＳＩ003竪穴住居跡……126
第14図　ＳＩ003竪穴住居跡カマド……128
第15図　ＳＩ003竪穴住居跡，ＳＤ004溝……129
第16図　ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物(1)……131
第17図　ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物(2)……132
第18図　ＳＩ008竪穴住居跡……133
第19図　ＳＩ008竪穴住居跡カマド……134
第20図　ＳＩ008竪穴住居跡出土遺物……135

第21図　ＳＩ009竪穴住居跡 …… 137
第22図　ＳＩ009竪穴住居跡カマド …… 138
第23図　ＳＩ009竪穴住居跡，ＳＤ005溝…… 139
第24図　ＳＩ009竪穴住居跡出土遺物 …… 141
第25図　ＳＤ005溝出土遺物 …… 142
第26図　ＳＩ012竪穴住居跡 …… 143
第27図　ＳＩ012竪穴住居跡カマド …… 146
第28図　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物(1) …… 147
第29図　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物(2) …… 148
第30図　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物(3) …… 149
第31図　ＳＩ014竪穴住居跡 …… 150
第32図　ＳＩ018竪穴住居跡 …… 150
第33図　ＳＩ018竪穴住居跡出土遺物 …… 151
第34図　ＳＩ034竪穴住居跡 …… 152
第35図　ＳＫ010土壙 …… 153
第36図　ＳＫ016土壙 …… 154
第37図　ＳＫ017土壙 …… 154
第38図　ＳＫ021土壙 …… 155
第39図　ＳＫ024土壙 …… 156
第40図　ＳＫ025土壙 …… 156
第41図　ＳＫ026土壙 …… 157
第42図　ＳＫ027土壙 …… 157
第43図　ＳＫ027土壙出土遺物 …… 158
第44図　ＳＫ028土壙 …… 159
第45図　ＳＫ029，ＳＫ030土壙…… 160
第46図　ＳＫ031土壙 …… 161
第47図　ＳＫ032土壙 …… 162
第48図　ＳＫ032土壙出土遺物 …… 162
第49図　ＳＫ033土壙 …… 163
第50図　ＳＫ033土壙出土遺物 …… 163
第51図　ＳＸ011合口甕棺 …… 165
第52図　合口甕棺実測図(1)…… 166
第53図　合口甕棺実測図(2)…… 167
第54図　ＳＸＦ035焼土遺構 …… 168
第55図　ＳＸＦ036焼土遺構 …… 168
第56図　ＳＩ101竪穴住居跡 …… 169
第57図　ＳＩ101竪穴住居跡出土遺物(1) …… 170
第58図　ＳＩ101竪穴住居跡出土遺物(2) …… 171
第59図　ＳＩ102竪穴住居跡 …… 172
第60図　ＳＩ102竪穴住居跡出土遺物(1) …… 173
第61図　ＳＩ102竪穴住居跡出土遺物(2) …… 174
第62図　ＳＩ102竪穴住居跡出土遺物(3) …… 175
第63図　ＳＩ103竪穴住居跡 …… 176
第64図　ＳＩ103竪穴住居跡出土遺物 …… 177
第65図　ＳＩ104竪穴住居跡 …… 179
第66図　ＳＩ104竪穴住居跡カマド …… 180
第67図　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(1) …… 181
第68図　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(2) …… 182
第69図　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(3) …… 183
第70図　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(4) …… 184
第71図　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(5) …… 185
第72図　ＳＩ106竪穴住居跡 …… 187
第73図　ＳＩ106竪穴住居跡出土遺物 …… 188
第74図　ＳＩ107竪穴住居跡 …… 189
第75図　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(1) …… 191
第76図　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(2) …… 192
第77図　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(3) …… 193
第78図　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(4) …… 194
第79図　ＳＩ108竪穴住居跡 …… 195
第80図　ＳＩ108竪穴住居跡出土遺物(1) …… 196
第81図　ＳＩ108竪穴住居跡出土遺物(2) …… 197
第82図　ＳＩ108竪穴住居跡出土遺物(3) …… 198
第83図　ＳＩ112竪穴住居跡 …… 199
第84図　ＳＩ112竪穴住居跡カマド …… 201
第85図　ＳＩ112竪穴住居跡出土遺物(1) …… 203
第86図　ＳＩ112竪穴住居跡出土遺物(2) …… 204
第87図　ＳＩ112竪穴住居跡出土遺物(3) …… 205
第88図　ＳＩ113竪穴住居跡 …… 206
第89図　ＳＩ113竪穴住居跡カマド …… 207
第90図　ＳＩ113竪穴住居跡出土遺物(1) …… 208
第91図　ＳＩ113竪穴住居跡出土遺物(2) …… 209
第92図　ＳＩ117・117′竪穴住居跡 …… 211
第93図　ＳＩ117・117′竪穴住居跡出土遺物 …… 212
第94図　ＳＫ105土壙 …… 213
第95図　ＳＫ110土壙 …… 213
第96図　ＳＫ114土壙 …… 214
第97図　ＳＫ115土壙 …… 214
第98図　ＳＫ116土壙 …… 214
第99図　ＳＫ118土壙 …… 215
第100図　ＳＫ118土壙出土遺物…… 215
第101図　ＳＫ119土壙出土遺物…… 216
第102図　ＳＫ128土壙…… 216
第103図　ＳＫ131土壙…… 216
第104図　ＳＫ132土壙…… 217

第105図　ＳＫ133土壙…… 217
第106図　ＳＫ134土壙…… 218
第107図　ＳＫ135土壙…… 218
第108図　ＳＫ131，135土壙出土遺物 …… 219
第109図　ＳＫ140土壙…… 219
第110図　ＳＫ141土壙…… 220
第111図　ＳＫ143土壙…… 220
第112図　ＳＫ146土壙…… 221
第113図　ＳＫ147土壙…… 221
第114図　ＳＢ111掘立柱建物跡…… 223
第115図　ＳＢ120掘立柱建物跡…… 224
第116図　ＳＢ136掘立柱建物跡…… 225
第117図　ＳＢ149掘立柱建物跡…… 226
第118図　ＳＤ148溝跡…… 227
第119図　ＳＩ301竪穴住居跡…… 228
第120図　ＳＩ301竪穴住居跡カマド…… 229
第121図　ＳＩ301竪穴住居跡出土遺物(1)…… 230
第122図　ＳＩ301竪穴住居跡出土遺物(2)…… 231
第123図　遺構外出土土器実測図(1) …… 233
第124図　遺構外出土土器実測図(2) …… 234
第125図　遺構外出土土器実測図(3) …… 235
第126図　遺構外出土土器択影図(4) …… 236
第127図　遺構外出土土器択影図(5) …… 237
第128図　遺構外出土土器択影図(6) …… 238
第129図　遺構外出土土器択影図(7) …… 239
第130図　遺構外出土土器択影図(8) …… 240
第131図　遺構外出土石器実測図(1) …… 241
第132図　遺構外出土石器実測図(2) …… 242
第133図　遺構外出土石器実測図(3) …… 243
第134図　鉄器実測図(1) …… 244
第135図　鉄器実測図(2) …… 245
第136図　鉄器実測図(3) …… 246
第137図　鉄器実測図(4) …… 247

明堂長根遺跡

第１図　グリッド配置図…… 338
第２図　土層柱状図…… 339
第３図　遺構配置図…… 340
第４図　ＳＫ001・002土壙…… 341
第５図　ＳＫ003・004・037土壙 …… 342
第６図　ＳＫ005～007土壙…… 343
第７図　ＳＫ008～011土壙…… 344
第８図　ＳＫ012・013・015土壙 …… 345
第９図　ＳＫ016・018土壙…… 346
第10図　ＳＫ019～021土壙…… 347
第11図　ＳＫ022～024土壙…… 348
第12図　ＳＫ025～027土壙…… 349
第13図　ＳＫ029～031土壙…… 350
第14図　ＳＫ032～034土壙…… 351
第15図　ＳＫ035～037土壙…… 352
第16図　ＳＫ038～040土壙…… 353
第17図　ＳＤ001～003溝実測図…… 355
第18図　ＳＤ004溝実測図 …… 356
第19図　ＳＤ005～008溝実測図…… 357
第20図　ＳＢ001掘立柱建物跡実測図 …… 358
第21図　ＳＸ001・002その他の遺構実測図…… 359
第22図　ＳＸ003～005その他の遺構実測図…… 360
第23図　遺構内出土遺物(1)…… 362
第24図　遺構内出土遺物(2)…… 363
第25図　遺構内出土遺物(3)…… 364
第26図　遺構内出土遺物(4)…… 365
第27図　遺構内・遺構外出土遺物…… 366

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……10

柏木森遺跡

第１表　石器石質・出土地点一覧表……62
第２表　縄文時代早期末～前期初頭土器編年（青森県内）……67

中の崎遺跡

第１表　ＳＩ001竪穴住居跡観察表 …… 114
第２表　ＳＩ002竪穴住居跡観察表 …… 118
第３表　ＳＩ003竪穴住居跡観察表 …… 127
第４表　ＳＩ008竪穴住居跡観察表 …… 135
第５表　ＳＩ009竪穴住居跡観察表 …… 136
第６表　ＳＩ012竪穴住居跡観察表 …… 145
第７表　ＳＩ018竪穴住居跡観察表 …… 151
第８表　ＳＩ034竪穴住居跡観察表 …… 153
第９表　ＳＩ101竪穴住居跡観察表 …… 168
第10表　ＳＩ102竪穴住居跡観察表 …… 171
第11表　ＳＩ103竪穴住居跡観察表 …… 178
第12表　ＳＩ104竪穴住居跡観察表 …… 179
第13表　ＳＩ106竪穴住居跡観察表 …… 186
第14表　ＳＩ107竪穴住居跡観察表 …… 186
第15表　ＳＩ108竪穴住居跡観察表 …… 194
第16表　ＳＩ112竪穴住居跡観察表 …… 198
第17表　ＳＩ113竪穴住居跡観察表 …… 205
第18表　ＳＩ117竪穴住居跡観察表 …… 210
第19表　ＳＩ117′竪穴住居跡観察表…… 210
第20表　ＳＢ111掘立柱建物跡観察表 …… 223
第21表　ＳＢ120掘立柱建物跡観察表 …… 224
第22表　ＳＢ136掘立柱建物跡観察表 …… 225
第23表　ＳＢ149掘立柱建物跡観察表 …… 226
第24表　ＳＩ301竪穴住居跡観察表 …… 228

明堂長根遺跡

第１表　遺物観察表(1)…… 367
第２表　遺物観察表(2)…… 368
第３表　遺物観察表(3)…… 369

図　版　目　次

柏木森遺跡

図版１　柏木森遺跡航空写真
図版２　柏木森遺跡調査前
　　柏木遺跡調査風景
図版３　柏木森遺跡北端調査区
　　柏木森遺跡南端調査区
図版４　遺跡基本層序
　　縄文時代早期末土器底部出土状態
図版５　Ⅵ ＳＫ(Ｔ)040Ｔピット
　　Ⅱ ＳＫ064土壙土器出土状態
図版６　Ⅱ ＳＫ001土壙土器出土状態
　　Ⅲ ＳＫ011土壙土器出土状態
図版７　調査区中央部土壙群・Ⅲ ＳＫ001土壙
図版８　Ⅲ ＳＫ002土壙・Ⅲ ＳＫ003土壙
図版９　Ⅲ ＳＫ005土壙・Ⅲ ＳＫ006土壙
図版10　Ⅲ ＳＫ008土壙・Ⅲ ＳＫ009土壙
図版11　Ⅲ ＳＫ012土壙・Ⅲ ＳＫ024土壙
図版12　Ⅲ ＳＫ031土壙・Ⅲ ＳＫ043土壙
図版13　第Ⅰ群土器(1)
図版14　第Ⅰ群土器(2)
図版15　第Ⅰ群土器(3)
図版16　第Ⅰ群土器(4)
図版17　第Ⅰ群土器(5)
図版18　第Ⅰ群土器(6)
図版19　第Ⅱ群，第Ⅲ群，第Ⅳ群土器
図版20　第Ⅳ群土器
図版21　第Ⅰ群土器陽画
図版22　第Ⅱ群，第Ⅳ群土器
図版23　第Ⅳ群土器(1)
図版24　第Ⅳ群土器(2)
図版25　第Ⅳ群土器(3)
図版26　第Ⅴ群土器
図版27　石器(1)
図版28　石器(2)

中の崎遺跡

図版１　中の崎遺跡航空写真
図版２　遺跡遠景　（上）　発掘前（西▶東）
　　（下）　発掘後（東▶西）
図版３　（上）　Ⅰ区近景（西▶東）
　　（下）　Ⅱ区近景（東▶西）
図版４　（上）　Ⅰ区機械排土状況（北東▶南西）
　　（下）　Ⅰ区土層状態（西▶東）
図版５　ＳＩ001竪穴住居跡　（上）　完掘状態
　　（南▶北）
　　（下）　ＳＤ006付属溝
　　（西▶東）
図版６　ＳＩ001竪穴住居跡　（左上）　カマド内土器
　　出土状態
　　（右上）　カマド完掘状態
　　（北▶南）
図版６　ＳＩ001竪穴住居跡　（左下）　ＲＭ１
　　（右下）　ＲＭ２
図版７　ＳＩ001竪穴住居跡　（左上）　ＲＭ４
　　（右上）　ＲＷ２
　　（左下）　ＲＷ１
　　（右下）　ＲＸ１
図版８　ＳＩ002竪穴住居跡　（上）　発掘中
　　（南▶北）
　　（下）　完掘状態
　　（北▶南）
図版９　（上）　ＳＩ002竪穴住居跡カマド（北▶南）
　　（下）　ＳＩ003竪穴住居跡（南▶北）
図版10　ＳＩ003竪穴住居跡　（上）　完掘状態
　　（南▶北）
　　（下）　ＳＤ004付属溝

図版10　ＳＩ003竪穴住居跡　（下）　ＳＤ004付属溝（西▶東）
図版11　ＳＩ003竪穴住居跡カマド　（左上）　発掘中（北▶南）
（右上）　完掘状態（南▶北）
（左下）　土器出土状態
（右下）　土器出土状態
図版12　ＳＩ008竪穴住居跡　（上）　発掘中（東▶西）
（下）　完掘状態（西▶東）
図版13　（上）　ＳＩ008竪穴住居跡カマド　（左）（西▶東）
（右）（南▶北）
（下）　ＳＩ009竪穴住居跡（南▶北）
図版14　ＳＩ009竪穴住居跡，ＳＤ005付属溝
（上）　完掘状態（南▶北）
（下）　溝内遺物出土状態
図版15　（上）　ＳＩ009竪穴住居跡カマド（北▶南）
（中）　ＳＤ005付属溝断面（北▶南）
（下）　ＳＤ005，006付属溝断面（南▶北）
図版16　ＳＩ012竪穴住居跡　（上）　炭化材出土状態（北▶南）
（下）　床面検出状態（北▶南）
図版17　ＳＩ012竪穴住居跡　（上）　完掘状態（北▶南）
（左下）　カマド発掘中（北▶南）
（右下）　カマド完掘後（北▶南）
図版18　（上）　ＳＫ016，017土壙（北▶南）
（下）　ＳＫ021土壙（北西▶南東）
図版19　（上）　ＳＫ024土壙（北▶南）
（下）　ＳＫ025，026土壙（北▶南）
図版20　ＳＫ027土壙　（上）　完掘状態（北▶南）
（中）　断面（南▶北）
（下）　断面（西▶東）
図版21　（上）　ＳＫ029，030土壙（北▶南）
（下）　ＳＫ032土壙（北▶南）
図版22　ＳＸ011合口甕棺　（上）　確認面
（下）　半截状態
図版23　（上）　ＳＸＦ035焼土遺構（南▶北）
図版23　（下）　ＳＤ015溝跡（北▶南）
図版24　Ｉ区遺構外遺物出土状態　（左上）　６－Ｓ
（右上）　13－Ｙ
（左下）　14－Ｗ
（右下）　15－Ｗ
図版25　ＳＩ101竪穴住居跡　（上）　完掘状態（東▶西）
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ２
図版26　ＳＩ102竪穴住居跡　（上）　完掘状態（東▶西）
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ２
図版27　ＳＩ102竪穴住居跡　（左上）　ＲＰ３
（右上）　ＲＰ４
（左下）　ＲＭ１，２，３
（右下）　土器出土状態
図版28　ＳＩ103竪穴住居跡　（上）　完掘状態（東▶西）
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ２
図版29　（上）　ＳＩ103竪穴住居跡　（左）　ＲＰ３
（右）　ＲＰ５
（下）　ＳＩ104竪穴住居跡　（東▶西）
図版30　ＳＩ104竪穴住居跡　（上）　遺物出土状態
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ２
図版31　ＳＩ104竪穴住居跡　（左上）　ＲＰ４
（右上）　ＲＰ５
（左下）　ＲＰ６
（右下）　ＲＰ７
図版32　ＳＩ104竪穴住居跡　（左上）　ＲＰ８
（右上）　ＲＰ15
（左下）　ＲＰ16，17，18，19
（右下）　ＲＰ20
図版33　ＳＩ106竪穴住居跡　（上）　完掘後（北▶南）
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ２
図版34　ＳＩ107竪穴住居跡　（上）炭化物出土状態（東▶西）
（下）　完掘後（東▶西）
図版35　ＳＩ107竪穴住居跡　（上）　ＲＰ１

図版35　ＳＩ107竪穴住居跡　（中）　ＲＰ２
（下）　ＲＷ１
図版36　ＳＩ108竪穴住居跡　（上）　完掘後（西▶東）
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ２
図版37　ＳＩ112竪穴住居跡　（上）　炭化物出土状態（西▶東）
（下）　完掘状態（西▶東）
図版38　ＳＩ112竪穴住居跡　（左上）　第１カマド（北▶南）
（右上）　第２カマド（北▶南）
（下）　ＲＰ３
図版39　ＳＩ113竪穴住居跡　（上）　炭化物出土状態（南▶北）
（下）　完掘状態（北▶南）
図版40　ＳＩ113竪穴住居跡　（左上）　カマド（北▶南）
（右上）　カマド完掘状態（北▶南）
（左下）　ＲＰ１
（右下）　ＲＰ62，63
図版41　ＳＩ117，117′竪穴住居跡　（上）　確認状態（南▶北）
（下）　完掘状態（東▶西）
図版42　（上）　ＳＫ110土壙（北東▶南西）
（下）　ＳＫ114，115土壙（西▶東）
図版43　（上）　ＳＫ116土壙（東▶西）
（下）　ＳＫ119土壙（西▶東）
図版44　（上）　ＳＫ131土壙（西▶東）
（下）　ＳＫ132土壙（西▶東）
図版45　（上）　ＳＫ133土壙（北▶南）
（下）　ＳＫ134土壙（北▶南）
図版46　（上）　ＳＫ140土壙（北▶南）
（下）　ＳＫ141土壙（北西▶南東）
図版47　（上）　ＳＫ147土壙（南▶北）
（下）　Ⅱ区ピット群（北▶南）
図版48　（上）　ＳＢ111掘立柱建物跡（南▶北）
（下）　ＳＢ136掘立柱建物跡（北▶南）
図版49　Ⅱ区遺構外遺物出土状態　（左上）　25－Ｆ
（右上）　27－Ｆ
（左下）　33－Ｆ
（右下）　石斧
図版50　ＳＩ301竪穴住居跡　（上）　完掘状態
図版50　ＳＩ301竪穴住居跡　（上）　（北▶南）
（左下）　カマド（北▶南）
（右下）　カマド内土器出土状態
図版51　ＳＩ001竪穴住居跡出土遺物(1)
図版52　ＳＩ001竪穴住居跡出土遺物(2)
図版53　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物
図版54　ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物(1)
図版55　ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物(2)
図版56　（上）　ＳＩ008竪穴住居跡出土遺物
（下）　ＳＩ009竪穴住居跡出土遺物
図版57　（上）　ＳＤ005溝跡出土遺物
（中）　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物(1)
（下）　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物(2)
図版58　（上）　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物(3)
（中）　ＳＩ018竪穴住居跡出土遺物
（下）　ＳＫ027土壙出土遺物
図版59　（上）　ＳＫ032土壙出土遺物
（右中）　ＳＫ033土壙出土遺物
（下）　合口甕棺
図版60　（上）　ＳＩ101竪穴住居跡出土遺物(1)
（中）　ＳＩ101竪穴住居跡出土遺物(2)
（下）　ＳＩ102竪穴住居跡出土遺物(1)
図版61　（上）　ＳＩ102竪穴住居跡出土遺物(2)
（下）　ＳＩ102竪穴住居跡出土遺物(3)
図版62　（上）　ＳＩ103竪穴住居跡出土遺物
（下）　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(1)
図版63　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(2)
図版64　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(3)
図版65　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(4)
図版66　（上）　ＳＩ104竪穴住居跡出土遺物(5)
（下）　ＳＩ106竪穴住居跡出土遺物
図版67　（上）　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(1)
（下）　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(2)
図版68　（上）　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(3)
（下）　ＳＩ107竪穴住居跡出土遺物(4)
図版69　（上）　ＳＩ108竪穴住居跡出土遺物(1)
（中）　ＳＩ108竪穴住居跡出土遺物(2)
（下）　ＳＩ108竪穴住居跡出土遺物(3)
図版70　（上）　ＳＩ112竪穴住居跡出土遺物(1)
（下）　ＳＩ112竪穴住居跡出土遺物(2)
図版71　（上）　ＳＩ112竪穴住居跡出土遺物(3)
（下）　ＳＩ113竪穴住居跡出土遺物(1)

図版72　（上）　ＳＩ113竪穴住居跡出土遺物(2)
（下）　ＳＩ117，117′竪穴住居跡出土遺物
図版73　（上）　ＳＫ118土壙出土遺物
（下）　ＳＫ131，135土壙出土遺物
図版74　ＳＩ301竪穴住居跡出土遺物(1)
図版75　（上）　ＳＩ301竪穴住居跡出土遺物(2)
（下）　遺構外出土土器(1)
図版76　遺構外出土土器(2)
図版77　遺構外出土土器(3)
図版78　（上）　遺構外出土土器(4)
（下）　遺構外出土土器(5)
図版79　（上）　遺構外出土土器(6)
図版79　（下）　遺構外出土土器(7)
図版80　遺構外出土土器(8)
図版81　（上）　遺構外出土石器(1)
（下）　遺構外出土石器(2)
図版82　（上）　遺構外出土石器(3)
（下）　出土鉄器(1)
図版83　（上）　出土鉄器(2)
（中）　出土鉄器(3)
（下）　出土鉄器(4)
図版84　発掘調査風景　（上）　Ｉ区
（下）　II区

明堂長根遺跡

図版１　遺　跡　1　遺跡遠景
2　遺跡全景
図版２　遺　跡　1　ＳＫ001，002土壙
2　ＳＫ002土壙
図版３　遺　跡　1　ＳＫ003土壙
2　ＳＫ003土壙
図版４　遺　跡　1　ＳＫ004土壙
2　ＳＫ004土壙
図版５　遺　跡　1　ＳＫ005土壙
2　ＳＫ006土壙
図版６　遺　跡　1　ＳＫ007土壙
2　ＳＫ008土壙
図版７　遺　跡　1　ＳＫ009，010土壙
2　ＳＫ011土壙
図版８　遺　跡　1　ＳＫ012土壙
2　ＳＫ013土壙
図版９　遺　跡　1　ＳＫ013土壙
2　ＳＫ015土壙
図版10　遺　跡　1　ＳＫ015土壙
2　ＳＫ016土壙
図版11　遺　跡　1　ＳＫ018土壙
2　ＳＫ018土壙
図版12　遺　跡　1　ＳＫ019土壙
2　ＳＫ020土壙
図版13　遺　跡　1　ＳＫ021土壙
2　ＳＫ022土壙
図版14　遺　跡　1　ＳＫ023土壙
2　ＳＫ023土壙
図版15　遺　跡　1　ＳＫ023，024土壙
2　ＳＫ024土壙
図版16　遺　跡　1　ＳＫ026土壙
2　ＳＫ026土壙
図版17　遺　跡　1　ＳＫ026土壙
2　ＳＫ026土壙
図版18　遺　跡　1　ＳＫ027土壙
2　ＳＫ027土壙
図版19　遺　跡　1　ＳＫ029土壙
2　ＳＫ029土壙
図版20　遺　跡　1　ＳＫ030土壙
2　ＳＫ031土壙
図版21　遺　跡　1　ＳＫ032土壙
2　ＳＫ030～032土壙
図版22　遺　跡　1　ＳＫ030～032土壙
2　ＳＫ033土壙
図版23　遺　跡　1　ＳＫ034土壙
2　ＳＫ034土壙
図版24　遺　跡　1　ＳＫ035土壙
2　ＳＫ036土壙
図版25　遺　跡　1　ＳＫ037土壙
2　ＳＫ038土壙
図版26　遺　跡　1　ＳＫ039土壙
2　ＳＫ040土壙

図版27　遺　　跡　1　ＳＤ001溝
2　ＳＤ001溝
3　ＳＤ002溝
4　ＳＤ001，002溝
図版28　遺　　跡　1　ＳＤ001溝
2　ＳＤ002，003溝
3　ＳＤ003溝
4　ＳＤ004溝
図版29　遺　　跡　1　ＳＤ004溝
2　ＳＤ004溝
3　ＳＤ005，006溝
4　ＳＤ007，008溝
図版30　遺　　跡　1　ＳＸ001
2　ＳＸ002
図版31　遺　　跡　1　ＳＸ003
2　ＳＸ004
図版32　遺　　跡　1　ＳＸ004
2　ＳＸ005
3　ＳＸ005
4　ＳＢ001掘立柱建物跡
図版33　遺　　跡　1　ＳＫ015，018～020土壙，ＳＢ001掘立柱建物跡
2　作業風景
図版34　遺　　物　1　ＳＫ001，005，012，015，018土壙
図版35　遺　　物　1　ＳＫ018，021，022土壙
図版36　遺　　物　1　ＳＫ023，029土壙，ＳＤ002溝，遺構外

Ⅰ はじめに

1．発掘調査に至るまで

秋田県の北東部，鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は，昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間，同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年４月の鹿角市・青森市間約81kmの第２次施行命令と同46年６月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第５次施行命令によって，その通過予定区域が知られ，これを受けて同47年11月27日に，鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があって，ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため，秋田県教育委員会では，文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき，昭和44年８月，鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで(註1)，幅４km，延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い，67遺跡を確認し，その成果を公表した。昭和48年８月には，鹿角市八幡平，尾去沢(註2)，花輪地区で，幅４km，延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して，46ヵ所の遺跡を確認した。

昭和51年２月12日になると，昭和48年８月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて，日本道路公団より鹿角市八幡平から同市十和田錦木に至る延長約21.1kmの路線の発表があり，測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では，日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により，昭和52年10月にこの路線上(註3)の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。昭和55年に新たに２遺跡が発見追加され，現在総計33遺跡となっている。

その後，遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ，最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年２月に遺跡の発掘調査依頼があり，秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区７遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平，花輪地区19遺跡の調査を行い，昭和56年度に８遺跡の調査を行い，３か年に及ぶ鹿角市内の路線内遺跡調査を全て完了している。

註１　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書　第20集　1970年

註２　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書　第24集　1972年

註３　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書（八幡平～十和田錦木）』秋田県文化財調査報告書　第56集　1978年

2．調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井清足	奈良国立文化財研究所所長
	芹沢長介	東北大学文学部教授
専門指導員	小林達雄	国学院大学文学部助教授
	林　謙作	北海道大学文学部助教授
	須藤　隆	東北大学文学部助教授
	藤沼邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	進藤秋輝	宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長
調査担当者	岩見誠夫	秋田県埋蔵文化財センター副所長 （猿ヶ平II，柏木森遺跡担当）
	桜田　隆	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （妻の神III，一本杉遺跡担当）
	小玉　準	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （乳牛平，明堂長根遺跡担当）
	橋本高史	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （妻の神Ⅰ，中の崎遺跡担当）
	小林　克	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （室田，案内III，柏木森遺跡担当）
調査補佐員	藤井安正，松岡忠仁，児玉悦郎，高橋　学，奈良義博	（以上岩見班）
	神田公男，児玉昭彦，安保　廣，池田洋一	（以上桜田班）
	畠山　圭，阿部明人，米田　哲，高橋　修	（以上小玉班）
	安保　徹，福本雅治，鈴木　功，鈴木秋良	（以上橋本班）
	関　直，阿部義行，花田孝夫	（以上小林班）
事務補助員	佐藤順子，金沢万理子	
調査協力機関	日本道路公団鹿角工事事務所	
	秋田県東北縦貫自動車道対策事務所	
	鹿角市建設部建設課高速道路対策室	
	鹿角市教育委員会	

II　遺跡の立地と環境

1．地形と地質

(1)　地形と地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地，盆地内の段丘地形，沖積低地の三つに区分される。これらについて秋田県（1973), 内藤（1966，1970）および日本道路公団の東北自動車道土性縦断図表（日本道路公団仙台建設局：昭和53年）等を参考にしてまとめると次のようになる。

山地：東側は花輪越以北で800～700 mと北にゆくほど高度を下げるが，以南では1000 m以上の標高で満壮年期のけわしい地形を示し，特に皮投岳（1122.4m), 五の宮嶽（1115.0m）など起伏量の大きい山塊が連なっている。

地質は主として新第三紀中新世の火山砕屑岩よりなるが，それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩も分布している。また，福士川上流には南部の谷内，湯瀬と同様に粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列は南部でほぼ南北に連なっているが，花輪越以北では北東方向にのびている。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか，貫入岩類や断層系の方向ともほぼ一致している。

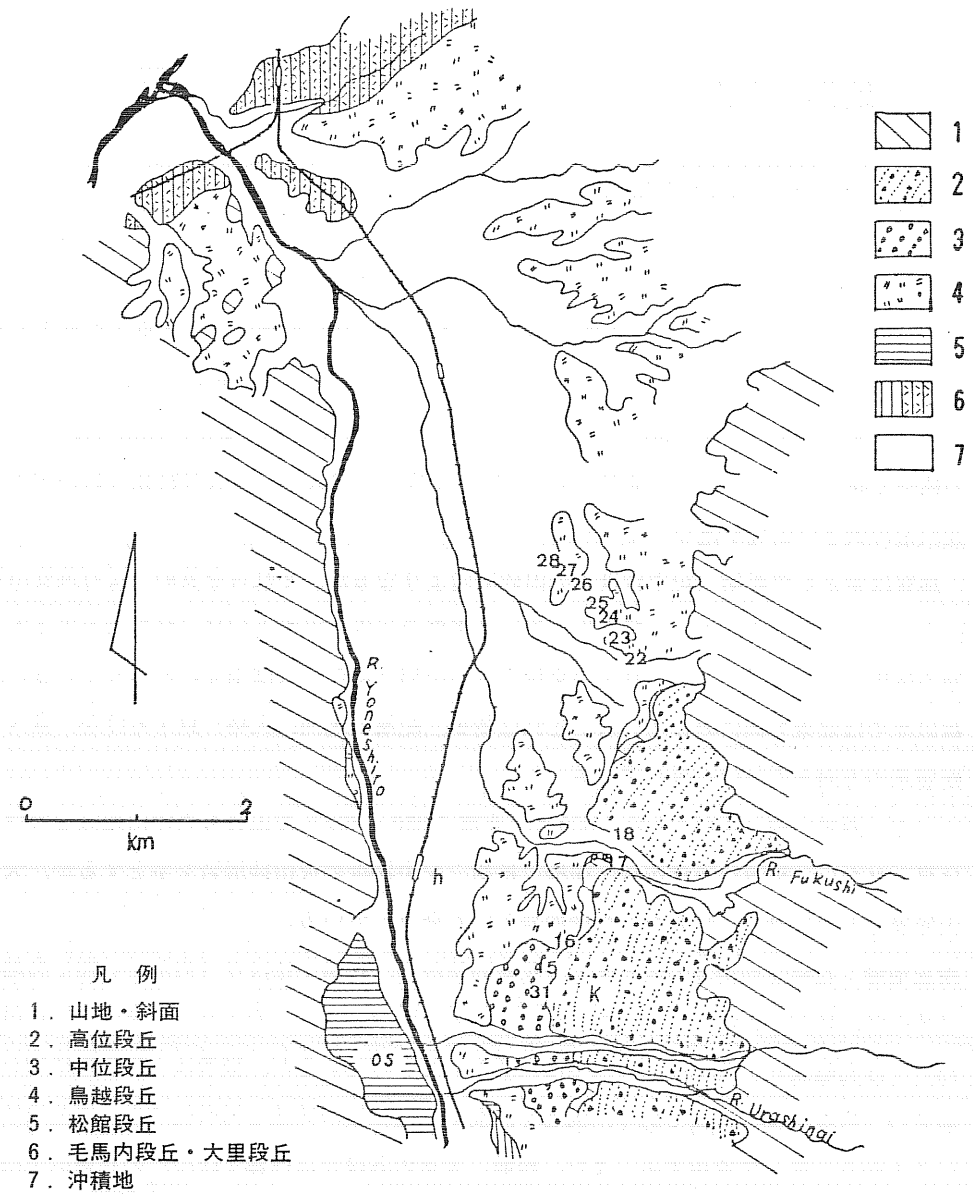
一方，西側山地は南部で400～600 m，北部で250～300 mで山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に新第三紀中新世の火山砕屑岩を主とするが，大葛層，大滝層などでは砂岩，泥岩などの砕屑岩が広く発達している。

段丘地形：花輪盆地南部の段丘面は，花輪高位段丘，花輪中位段丘（内藤，1970), 鳥越段丘（秋田県，1973), 松館段丘，大里段丘の5段に区別できる。このうち，鳥越段丘は秋田県（1973）では鳥越段丘，関上段丘の二つに区別されたものであるが，後者は火砕流堆積物からなる前者の二次堆積物の上面であり，両者を区別する段丘崖の発達も局所的であって連続性に乏しいことから一括して使用する。また，松館，大里の各段丘は内藤（1970)* の花輪低位段丘群とされたものである。

一方，花輪盆地の中～北部の段丘面は，高位段丘，鳥越段丘，毛馬内段丘，中間段丘などが見られる。次にそれぞれについて簡単に記載する。

高位段丘は，南部では東側山地の末端部からなだらかに斜面をもって扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平担面を残している。標高は1／2.5万地形図から，

＊以下，高位段丘，中位段丘と略称する。



凡　例

1．山地・斜面
2．高位段丘
3．中位段丘
4．鳥越段丘
5．松館段丘
6．毛馬内段丘・大里段丘
7．沖積地
（15～31は遺跡所在地，
h：花輪，K：葛岡，
OS：尾去）

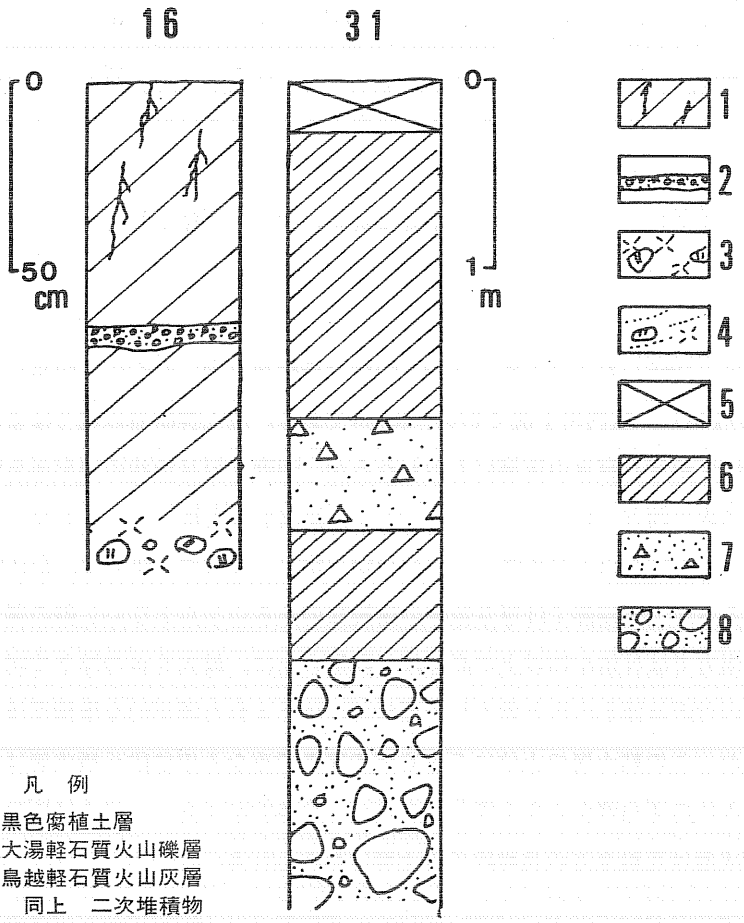
第1図　段丘地形図

浦志内川左岸の扇頂部で350 m，葛岡北東の末端部で240 mであり，平均こう配は約7.2%(4.1°)となる。また，歌内川流域でも 320 mから 250 mまでの高度差をもつ。一方，福士川左岸では350 m～250 mであるが，右岸では花輪スキー場北東の300 mから女森西方の200 mまでと明らかに低い。また，平均こう配も福士川以北では約4.4%(2.5°) と小さくなる。盆地の中～北部では南部ほど分布は広くなく，散在的で面の高度も230～240 mと低い。構成層は径数cmから50 cm前後までの亜角礫が雑然と混入した下淘汰礫層であり，地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み，礫はくさってマトリックスと大して変らないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のほかに，葛岡西方では火砕流堆積物の下位に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また，上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており，中に未風化の亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層がみられることもある。

中位段丘は上田（1965）および内藤（1970）の産土神断層以南にやや広く分布し，浦志内川下流で標高230～180 m，歌内川下流で270～200 mである。産土神断層以北ではまだ確認していない。末端部は鳥越軽石質火山灰層におおわれるが，明瞭に扇状地状の地形面を残しており，平均こう配は柏木森の西方で約6.0%(3.5°) である。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雑然と混入する礫層で，全体的に層理は不明瞭で塊状であるが，末端部では厚さ数cmの連続性のわるいシルトないし砂の薄層を含むこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の上に，最大6 mの厚さで泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川と歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお，この粘土層の上位に5～6 mの厚さで重なる中位段丘構成層はすでに記載したように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが，全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越段丘の下部にもみられる。

鳥越段丘は鳥越軽石質火山灰層（内藤，1966）の堆積面であり，大湯環状列石など多くの遺跡をのせて盆地内に最も広く分布する*。特に大湯川の西岸および小坂川の左岸，米代川右岸によく発達する。高度は，花輪東方で170～180 m，柴内から根市戸付近で150 m前後，腰廻から一本木にかけて 180 m前後と盆地の周辺部にむかって高度をあげるが，特に大湯川沿いでは風張付近を扇頂部とする扇状地様の形態を示す。全域にわたって灰白色～乳白色の火山灰中に白色の軽石が多量に含まれる層相を示すが，大湯川と小坂川の合流点に近いほど層理の明瞭な二次堆積物が発達する傾向がみられる。火砕流台地としての形態をよく示しており，段丘面は平坦で段丘崖は急崖をなすことが多い。なお，小枝指から申ヶ野にかけては部分的により古い高市軽石質火山灰層が見られることがあり，埋没段丘面の存在が指摘されている（内藤，1966)。

＊このことから藤原（1960）は本段丘面を遺跡面と呼んだ。



凡　例

1．黒色腐植土層
2．大湯軽石質火山礫層
3．鳥越軽石質火山灰層
4．　同上　二次堆積物
5．表土
6．粘土層
7．角礫まじり砂層
8．砂礫層
（31は土性縦断図による）

第２図　露頭柱状図

松館段丘は南部で米代川左岸に沿い尾去から松館，荒町にかけて広く分布している。標高は，160～170ｍで，夜明島川，黒沢川等の扇状地の開析された段丘とみられる。構成層は未確認である。盆地中部の東側に，草木川，佐比内沢，間瀬川等による扇状地が発達するが，これらは松館段丘と同時期の可能性がある。大里段丘は南部で米代川右岸沿いに大里付近まで分布する。標高は150～155ｍと低く，構成層は上部はくずれやすい河床性の礫層を主として，田泥質の砂礫層が重なっている。河床性の礫層の上には大湯軽石質火山礫層があり，さらに部分的に軽石質の二次堆積物がその上に見られたりすることから北部の毛馬内段丘に対比できるものと思われる。

毛馬内段丘は大湯川両岸と松の木以西の米代川沿いに発達する最低位の段丘で東能代付近まで連続して分布する。標高は毛馬内付近で110～120ｍ，松の木では112ｍである。構成層は大湯川沿いでは下部から大湯軽石質火山礫層，毛馬内軽石質火山灰層，不淘汰砂礫層の順に重なるが，米代川沿いでは毛馬内軽石質火山灰層が主となる。毛馬内軽石質火山灰層は米代川沿いでいくつかの遺跡を埋没させており，特に鷹巣盆地における胡桃館埋没遺跡（平安時代中～末期）はよく知られている（秋田県教委，1968，1969，1970，平山，市川，1966）。

ところで，この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山砕屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており，東西の山地の起伏量，山容のちがい，段丘の非対称的分布等は，断層の東側の山地が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており，注目に値する。一方，火山砕屑物層については内藤（1966，1970），中川，ほか（1972）等によりくわしく知られており，古い方から小坂軽石質火山灰層，高市軽石質火山灰層（^{14}C年代で25,850±1,360年前），鳥越軽石質火山灰層（12,000±250年前），中ヶ野軽石質火山灰層（8,600±250年前），大湯軽石質火山礫層（3,680±130年前），毛馬内軽石質火山灰層（1,280±90年前）に区分されている。このうち大湯軽石質火山礫層の^{14}C 年代値は同層の下位の炭質物についての値があり，同層の降下時期より古い年代値と考えられる。また，毛馬内軽石質火山灰層は前述のように埋没遺跡との関係から平安時代中～末期とみられており，大湯軽石質火山礫層の降下に引きつづいて流下した同一火山活動にともなう火砕流堆積物であるとの指摘もなされている（大池，1974，藤本，1980）。

(2) 地　　質

No.15　柏木森遺跡

標高195～205ｍで中位段丘上にある。高位段丘の段丘崖に近いことから中位段丘礫層は1

～２ｍとうすく，その下に高位段丘礫層がくるものとみられる。最上部は黒色腐植土層が20～40cmでみられるが中に大湯軽石質火山礫層をうすくはさんでいる。

No.16　中の崎遺跡

標高180～183ｍで鳥越段丘上にある。中位段丘とは異なり平坦な地形で，構成層は上部から120cmで黒色腐植土層があり，地上から65cmほどのところに径0.2～1.5cmの軽石を含む大湯軽石質火山礫層が約７～10cmの厚さでみられる。黒色腐植土層の下位は部分的に黄褐色の軽石と安山岩の角礫を含む火山灰層が見られることもある。この火山灰層は下位の鳥越軽石質火山灰層とは層相がやや異なっており，同質のものは中位段丘・高位段丘上でもみられる。鳥越軽石質火山灰層は径５～10cmの軽石を不規則に含んでおり，二次堆積物はみられない。

No.31　明堂長根遺跡

標高205～207ｍの中位段丘上にあり，試錐資料によれば地表から表土が30cm，粘土層が約1.5ｍ，角礫を含む砂層が60cm，粘土層が60cmのそれぞれの厚さでみられ，さらに下位は約3.5ｍの厚さで中位段丘礫層となっており，高位段丘礫層もその下にみられるとされている。これらのうち，粘土層にはさまれる礫まじり砂層は火山灰層とみられる。

参考文献

秋田県教育委員会（1968，1969，1970）『胡桃館埋没遺跡発掘調査報告（概報，第２次，第３次）』秋田県文化財調査報告書　14，19，22

秋田県（1973）『秋田県総合地質図幅』，「花輪」

藤本幸雄（1980）「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成（その１）大館，花輪盆地における火山灰層」，『大館工業高研究紀要』

藤原健蔵（1960）「米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物との関係」『東北地理』12，2，P.34～41

内藤博夫（1966）「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形」　『地理学評論』第39巻第７号　P.13～34

内藤博夫（1970）「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」　『地理学評論』第43巻P.594～606

中川久夫ほか　（1972）　「十和田火山発達史概要」　『東北大地質古生物研邦報』第73号Ｐ７～18

大池昭二（1972）　「十和田火山は生きている」　『国土と教育』第26号P.２～７

上田良一（1965）　「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」　『秋田大地下資源開発研究報告』第32号P.１～71

2．環境と周辺の遺跡

秋田県の北東隅に位置する鹿角は，東に八幡平を介して岩手県と境を接し，北には青森県八甲田山系を控え，年間平均気温花輪9.4℃，年間平均降水量月168㎜を測り，積雪量概して少なく，年間を通じて昼夜の温度隔差の大きい内陸型気候を示す地である。

奥羽山脈中に形成された地溝盆地である鹿角盆地は，八幡平から北流する米代川，十和田から南流する大湯川，小坂川の三本の河川流域に開けた沖積地と，複合扇状地及び東部，西部の両山岳地帯からなっている。盆地中央を流れる米代川，大湯川，小坂川の三本の河川には，東西の両山岳地から多くの小侵蝕谷を伝わって小河川が流れ込み，沖積面よりも70～80ｍ程高位にある標高200ｍ前後の山岳地裾野の段丘を開析している。そして，こうした小河川の間は，さらに細かな沢筋によって区切られる場合が多く，それらの沢筋によって分断された舌状の台地が，群となって開析谷と開析谷の間にいくつか連なって存在する。

鹿角盆地は多くの遺跡をその中に抱えている。それらの遺跡は前述の標高200ｍ前後の段丘面に立地し，その段丘が多くの小侵蝕谷によって開析されているため，遺跡は多くの小河川によって分断された個々の段丘に群在する。盆地内で特に遺跡の集中する箇所をあげれば，熊沢川と米代川の合流地点南東の長嶺地区，米代川に西流して注ぎ込む歌内川が開析する大里地区，同じく米代川支流である福士川周辺の産土神地区，米代川，大湯川，小坂川の合流地点南側の神田地区，同じく北側の瀬田石地区，小坂川に注ぎ込む荒川の周辺等がある。また，盆地中央部東側の風張台地も広範囲に遺跡が点在する。

鹿角では旧石器時代の遺跡は確認されておらず，調査が行われたり遺物が採集されたりして確認されているのは，全て縄文時代以降の遺跡である。

縄文時代早期の様相は，未だ明確に把握されている状態とは言い難い。三ヵ年にわたる東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で，大地平遺跡[4]*，上葛岡Ⅳ遺跡[13]，柏木森遺跡[15]等から，青森県八戸市是川や岩手県二戸市等で出土例があり赤御堂式と呼称される表裏縄文の土器が破片で確認されている。同様の土器は大湯付近からも採集されている。また，上葛岡Ⅳ遺跡[13]，猿ヶ平Ⅱ遺跡[21]，柏木森遺跡[15]からは，胎土に多量の繊維を含み複節の羽状縄文の施された所謂砲弾形の深鉢が出土しており，早期末～前期初頭に位置づけられている。上記の遺跡からは，縄文時代早期東北地方北部に通有のトランシェ様の石器も併せて出土している。他に極く少量ではあるが一本杉遺跡[33]からは貝殻文土器の破片，飛鳥平遺跡[8]からは青森県八戸市でも出土し，草創期の可能性も指摘されている爪形文類似の土器も破片で出土している。

縄文時代前期の遺跡としては，八幡平玉内にある清水向遺跡[54]があげられる。この遺跡は昭和29年武藤鉄城氏等によって調査され，県内で初めて縄文時代竪穴住居跡２棟を確認した遺跡と

＊数字は第３図の遺跡番号と一致する。

第1表　周辺遺跡一覧表　（第3図参照）

1　〈東北縦貫自動車道路線上の遺跡〉

番号	遺跡名	時代時期	遺構・遺物	備考
1	居熊井	縄文（後期）	縄文竪穴住居跡，土壙，土器捨場，縄文土器	東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ
2	湯瀬館	縄文　中世	縄文土器，掘立柱建物跡，礎石配列建物跡	〃　Ⅰ
3	上山田	縄文（前期）	縄文土器	〃　Ⅰ
4	大地平	縄文　弥生	縄文土器，弥生土器	〃　Ⅰ
5	堂の上	縄文（前期～晩期）	縄文土器	〃　Ⅰ
6	歌内	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，土壙，縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　Ⅱ
7	鳥居平	縄文	縄文竪穴住居跡，縄文土器	〃　Ⅲ
8	飛鳥平	縄文（早期，後期）　平安	縄文竪穴住居跡，縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　Ⅲ
9	北の林Ⅰ	縄文（中期，後期）　平安	縄文竪穴住居跡，土壙，平安竪穴住居跡，掘立柱建物跡	〃　Ⅲ
10	北の林Ⅱ	縄文（中期，後期）　平安	縄文竪穴住居跡，土壙，縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　Ⅳ
11	上葛岡Ⅰ	縄文	縄文竪穴住居跡，縄文土器	〃　Ⅳ
12	上葛岡Ⅲ	縄文	縄文土器	〃　Ⅰ
13	上葛岡Ⅳ	縄文	縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器，須恵器	〃　Ⅴ
14	駒林	縄文　平安	縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　Ⅴ
15	柏木森	縄文　平安	土壙，フラスコ状ピット，縄文土器(早期，後期，晩期)，土師器	〃　Ⅶ
16	中の崎	縄文　平安	縄文土器(後期，晩期)，平安竪穴住居跡，掘立柱建物跡，須恵器，土師器	〃　Ⅶ
17	孫右エ門館	縄文　平安	屋外炉，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器	〃　Ⅺ
18	案内Ⅰ	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器	〃　Ⅺ
19	案内Ⅱ	縄文	縄文竪穴住居跡，土壙，配石遺構，縄文土器	〃　Ⅴ
20	猿ケ平Ⅰ	縄文（中期～晩期，弥生）	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器，弥生土器	〃　Ⅴ
21	猿ケ平Ⅱ	縄文（早期～晩期）	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器	〃　Ⅵ
22	妻の神Ⅰ	縄文　平安	フラスコ状ピット，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器	〃　Ⅷ
23	妻の神Ⅱ	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，平安竪穴住居跡，中世建物跡	〃　Ⅺ
24	妻の神Ⅲ	縄文　平安　中世	縄文竪穴住居跡，中世竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土壙墓，柵列跡	〃　Ⅸ
25	乳牛平	縄文　平安　中世	縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　Ⅷ
26	下乳牛	縄文　平安	フラスコ状ピット，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器，須恵器	〃　Ⅺ
27	西町Ⅰ	縄文　弥生	縄文土器，弥生土器	〃　Ⅺ
28	西町Ⅱ	縄文	縄文土器	〃　Ⅺ
29	室田	中世？	な　し	〃　Ⅵ
31	明堂長根	縄文	土壙，フラスコ状ピット，縄文土器，溝状遺構	〃　Ⅶ
32	上葛岡Ⅱ	縄文	縄文竪穴住居跡，縄文土器	〃　Ⅳ
33	一本杉	縄文　平安　中世	縄文土器，平安竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土師器，須恵器，中世，陶磁器	〃　Ⅵ
34	案内Ⅲ	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器，須恵器	〃　Ⅵ
35	小豆沢	縄文　中世	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，平安竪穴住居跡，中世竪穴住居跡，中世竪穴土壙，堀跡	〃　Ⅳ

2 〈鹿角の中世城館〉

記号	城館名	残存状況	城主（伝）	記号	城館名	残存状況	城主（伝）	記号	城館名	残存状況	城主（伝）
A	谷内高館	やや良		S	尾去館	やや良	尾去越中（安保）	2L	柴内館		
B	谷内館	不良	谷内三郎（成田）一戸弾正左ェ門（武田）	T	下館			2M	万谷野館	不良	
C	谷内館			V	玉内館	不良	玉内大炊助（安保）	2N	高市館	不良	高市玄藩（成田）
D	長牛館	不良	秋元弾正左衛門，一戸摂津守義家，縫殿助友義，長牛弥四郎	W	上山館	不良		2P	上台館		
E	白懸館	やや良	白懸勘解由	X	茶臼館	不良		2Q	新斗米館	不良	新斗米左近（奈良）
F	長内小館			Y	花輪館	不良		2R			
G	三ケ田館	やや良	三ケ田左近（阿部）	2A	かいぬま館	やや良		2S	小平館	やや良	小平彦次郎（奈良）
H	長嶺館	やや良	長嶺下総（成田）	2B	高瀬館	やや良	高瀬土佐（秋元）	2T	小枝指館	不良	小枝指左馬之助（奈良）
I	長内古館	やや良		2C	孫右エ門館	不良		2U	一ツ森館	やや良	
J	長内館	やや良	長内刑部（成田）	2D	花輪古館	不良	（伝）花輪次郎（安保）	2W	丸館	やや良	奈良越後
K	下和志賀館	不良		2E	黒土館	やや良	黒土丹後（秋元）	2X	高屋館	やや良	高屋筑前（秋元）
L	田中館			2F	（無名館）			2Y	碁石館	不良	神田十郎（成田）
M	湯瀬館	消滅	湯瀬中務（成田）安信宮内	2G	（無名館）			3A	中草木館	不良	
N	小豆沢館	不良	小豆沢駿河（秋元）	2H	妻の神館			3B	関上館	不良	関神安房（成田）
O	石鳥谷館	やや良	石鳥谷九郎（安保）南部九郎正友	2I	乳牛館	不良	乳牛六郎（安保）	3C	毛馬内館		
P	大里館	不良	成田小次郎左衛門尉頼時，大里上総（安信）	2J	柴内館	不良	柴内弥次郎（安保）	3D	瀬田石館	やや良	瀬田石太郎左衛門（奈良）
Q	松館	やや良	松館越前（安保）	2K	西町館						

3 〈鹿角の周辺遺跡〉

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
36	大館	50	下葛岡A	64	東山A	78	餅野II	92	板橋I	106	小板野
37	三ケ田	51	尾去	65	東山C	79	長野	93	上ノ野III	107	中野袋B
38	長峰	52	東在家	66	赤坂A	80	餅野V	94	上ノ野II	108	白坂
39	新城15, 17, 18番地	53	尾去	67	日向屋敷I	81	花輪C	95	上ノ野I	109	瀬田石A，B
40	新城26，27番地	54	清水向	68	御休堂	82	花輪B	96	石野古墳	110	狐平
41	長畑	55	三光塚1号	69	天戸森	83	花輪A	97	曲谷地B	111	柏崎
42	天狗橋	56	三光塚2号	70	大曲	84	板橋II，III	98	枯草坂	112	寺ノ上B
43	二ツ森	57	六角平	71	陣場	85	戸羽の沢	99	曲谷地A	113	蟹沢
44	下モ和志賀	58	玉内	72	天戸森I	86	上ノ野IX	100	冠田	114	大湯環状列石
45	下鷲の巣	59	甘蕗	73	用野目	87	上ノ野VIII	101	平元館I	115	一本木平
46	後口田	60	下モ平	74	餅野IV	88	上ノ野VII	102	平元館II	116	八幡堂
47	石鳥谷	61	産土神A，B，C	75	万谷野	89	上ノ野VI	103	鳥野		
48	岩淵	62	赤坂B	76	餅野III	90	上ノ野V	104	申ケ野		
49	中ノ沢	63	東山C	77	餅野I	91	上ノ野IV	105	草木C		

して注目された。出土した土器は，前期後葉円筒下層ｄ式を中心として，円筒下層ａ式，円筒下層ｂ式等であり，また円筒下層ｄ式土器に伴って，山形県吹浦遺跡等に類例の求められる大木６式土器も出土している。また，東北縦貫自動車道関係の調査では，居熊井遺跡[1]，上山田遺跡[3]，堂の上遺跡[5]，小豆沢館遺跡[35]等から主に円筒下層ｄ式を中心とした前期後葉の土器の出土をみている。

縄文時代中期の遺跡は東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で数箇所調査されている。飛鳥平遺跡[8]，北ノ林Ｉ遺跡[9]，北ノ林II遺跡[10]では石組の複式炉をもった竪穴住居跡が検出され，大木９～10式土器を出土している。また歌内遺跡[6]では，フラスコ状土壙の壙底から中ノ平式土器を出土している。

後期は，鹿角における縄文時代各期を通じて，調査，発見例の最も多い時期である。東北縦貫自動車道関係の遺跡では，後期中葉の捨場と竪穴住居跡を確認した居熊井遺跡[1]，後期初頭の埋設土器を検出した飛鳥平遺跡[8]，後期中葉の石組の炉をもつ竪穴住居跡を検出した案内Ｉ遺跡[18]案内III遺跡[34]，猿ヶ平Ｉ遺跡[20]，猿ヶ平II遺跡[21]，後期後葉の竪穴住居跡を検出した案内II遺跡[19]等がある。さらに昭和43年には奥山潤氏等によって，十和田大湯の黒森山麓竪穴群遺跡が調査され，後期前葉の土器を伴った石組をもつ竪穴住居跡の検出が報告されている。

また，昭和26年，27年の両年に調査が行われ史跡指定された大湯環状列石[114]は，その後数回にわたって周辺の分布調査がなされ，現在の万座，野中堂の両列石の他にも付近数箇所に配石群の存在が確認されている。

晩期では，清水向遺跡[54]と同じ台地に立地する玉内遺跡[58]が知られ，晩期中葉の遺物とともに所謂日時計形の列石が確認されている。また，この玉内遺跡の立地する台地とちょうど米代川を狭んでの対岸には東在家遺跡[52]があり，晩期中葉までの遺物を多く出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では，柏木森遺跡[15]，明堂長根遺跡[31]から袋状土壙群が検出され，晩期初頭の遺物を多く出土している。

秋田県内における弥生時代の遺跡は現在までのところ縄文時代のそれと較べると，知られている遺跡数，その内容とも少なく且つ不明確な点が多い。鹿角はその中にあっては比較的該期様相の理解がすすんでいる地域である。

鹿角盆地北端の小坂町周辺では，奥山潤，安保彰両氏の活動により，内ノ岱遺跡，曙岱遺跡等から，天王山式類似の土器，後北Ｃ式土器が採集され報告されている。また鹿角市尾去沢からは田舎館式類似の土器が出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では，大地平遺跡[4]，駒林遺跡[14]から縄軸の絡縄体の回転施文された土器片，奥山潤氏等命名によるところの小坂Ｘ式土器が出土し，さらに猿ヶ平Ｉ遺跡[20]からは天王山式類似の土器が出土している。しかし，これらの弥生時代の土器は今のところ断片的な出土に限られており，伴出する遺跡や遺構等，未だ不

第３図　東北縦貫自動車道路線上及び周辺遺跡

明な点が多く残されている。

奈良，平安期の古代の遺跡も近年調査例を増して来ている。古くは昭和初年に木村善吉氏等によって調査され，その後，後藤守一氏等によって調査された菩提野竪穴群遺跡がある。この遺跡は計12ヵ所の竪穴群からなると想定されたが，その調査当初から覆土中に入る火山灰層が注目され，以来鹿角における該期の遺跡調査は，この火山灰層との関係解明を大きな視点の一つとして据えることになる。近年では大湯環状列石周辺の分布調査，鳥野遺跡[103]，源田平遺跡，小平遺跡[2S]等の調査で，該期竪穴住居跡が検出され，また，東北縦貫自動車道関係の調査では，歌内遺跡[6]，飛鳥平遺跡[8]，北ノ林Ⅰ遺跡[9]，北ノ林Ⅱ遺跡[10]，上葛岡Ⅳ遺跡[13]，駒林遺跡[14]，一本杉遺跡[33]，中ノ崎遺跡[16]，案内Ⅰ遺跡[18]，案内Ⅲ遺跡[34]，妻ノ神Ⅰ遺跡[22]，妻ノ神Ⅱ遺跡[23]，下乳牛遺跡[26]などで竪穴住居跡が検出されている。さらに御休堂遺跡[68]，高市向館遺跡でも同様の住居跡が検出されている。菩提野竪穴群から現在まで確認されている該期住居跡の総数は，144棟という膨大な数にのぼる。

他に，奈良，平安期の遺跡としては，十和田錦木字曲谷地にある枯草坂古墳，尾去沢字東在家にある三光塚古墳群[55,56]があげられる。いずれも終末期の小円墳であり，玉類，刀装具等を出土している。また十和田字室田にも古墳群があったと伝えられている。

中世鹿角は，鎌倉時代にこの地に移住したと伝えられる成田氏，安保氏，秋元氏，奈良氏の所謂鹿角四氏の支配する地域であった。これら四氏から出自する各々の庶流は，盆地内に所領を得て『鹿角由来集』『鹿角由来記』などに伝えられる鹿角四十二館にそれぞれ居を構えて割拠する。この状態は近世鹿角が南部領となるまで続く。

鹿角には，鹿角四十二館あるいは四十八館に該当するものを含めて計58ヵ所に及ぶ「館」跡が確認されている。これらの「館」跡は，舌状に張り出した台地を，1～数本の掘切をおこなって造りあげている多郭連続式のものが多い。すなわち，一ヵ所の「館」跡は数個の郭が連っている。また，郭自体が元来舌状台地であったため，「館」として使用される以前にも人間の居住域として選定される事が多く，郭上面の調査では時として縄文時代，平安時代の竪穴住居跡等が中世の遺構，遺物等とともに検出される。

現在までに発掘調査の行われているのは，小枝指七ツ館[2T]，長牛館[D]，御休堂遺跡[68]等があり，東北縦貫自動車道関係では，湯瀬館遺跡[2]と乳牛館の一部と考えられている妻ノ神Ⅰ[22]，同Ⅱ[23]，同Ⅲ[24]，乳牛平遺跡[25]が調査終了している。

柏　木　森　遺　跡

遺跡番号	No.15
所在地	鹿角市花輪字柏木森44番地他
調査期間	昭和56年7月20日～11月4日
発掘調査面積	13,500m²

1．遺跡の概観

遺跡は，国鉄花輪線陸中花輪駅南東1㎞，標高200ｍ前後の段丘上に位置する。

遺跡の位置する花輪盆地は，南北に大きく伸びた盆地であるが，ほぼその中央部で東西の両山岳地帯がせり出して，盆地が南北２つに分断された形状を呈する。南側の盆地は，八幡平から北流する熊沢川と岩手県側から西流する米代川との合流地点に開けた盆地であり，北側の盆地は，盆地内を北流する米代川と十和田から南流する大湯川，青森県側から南流する小坂川との合流地点に開けた盆地である。

遺跡は，二つの盆地のうち北側の盆地内に位置する。東側山岳地帯の裾野は標高200ｍ前後の段丘地帯となって南北に広がっており，遺跡はこの段丘上，南端にある。遺跡のある段丘の西側には花輪町の市街地が広がり，米代川は西側の山岳地帯に沿って流れている。

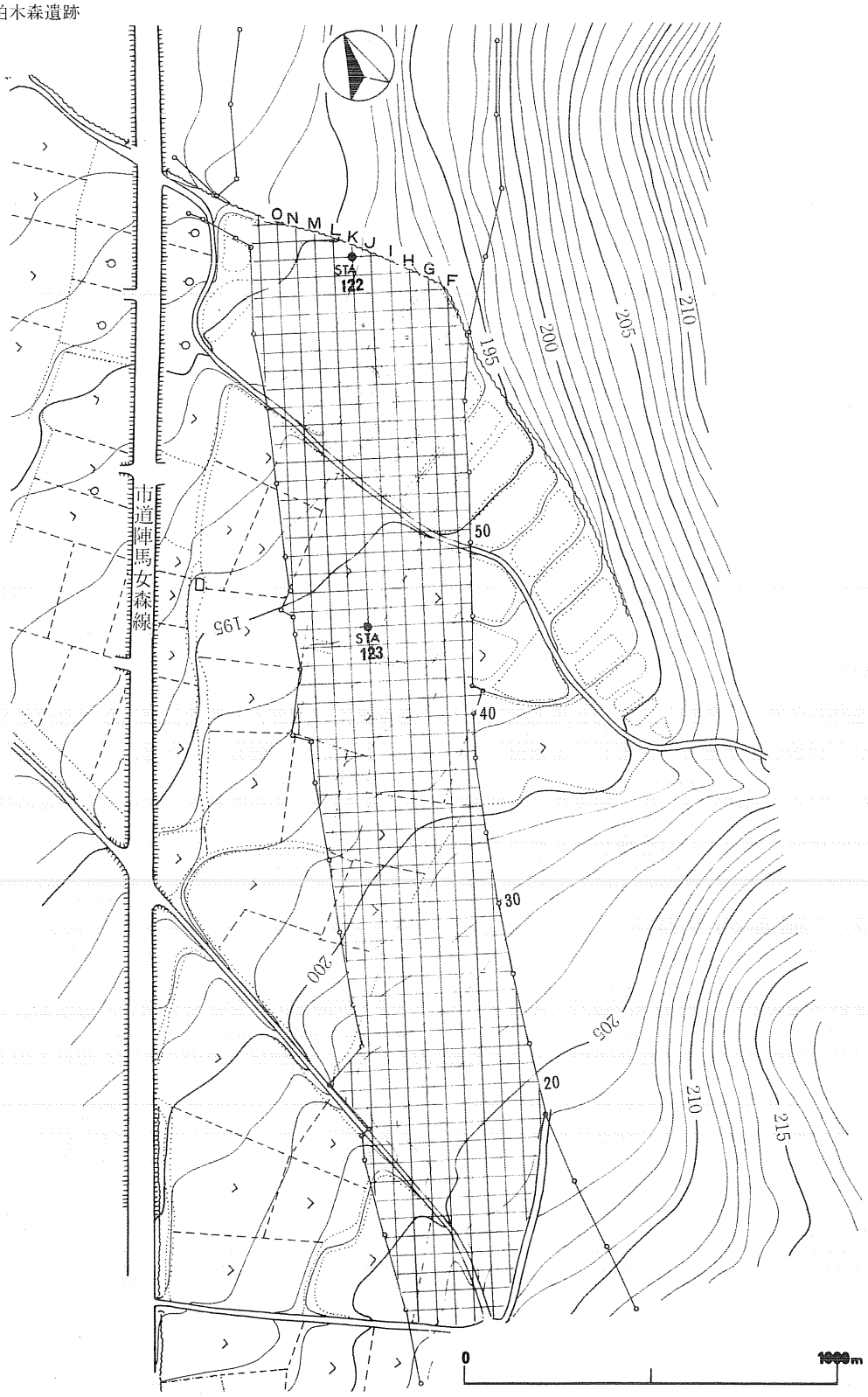
遺跡は東側山岳地帯の際近くにあり，調査区は路線に沿って南北に長い形で設定した。調査区部分にかかる遺跡の現況は，水田，畑地等の耕作地とアカシア等の雑木の生える荒地となっている。

遺跡の南側には隣接して，同じ東北縦貫自動車道路線内に位置する明堂長根遺跡（遺跡番号No.31，昭和56年度調査）があり，本遺跡とほぼ同様の性格をもつ遺跡として確認されている。また，路線内北側には，中ノ崎遺跡（遺跡番号No.16，昭和55，56年度調査）があり，平安時代の住居跡群を中心とした遺構が多く検出されている。

2．調査の方法

遺跡の調査区は，東側の山地が小さな沢によって僅かに開析される箇所を中心に選定された。すなわち南側は約５ｍの比高差のある明堂長根遺跡と接し，北側は東の山岳地から流れる沢を境とした内側約13,500㎡の区域である。調査区の幅は，日本道路公団設置の道路幅杭の間とした。本遺跡内においては，道路は比較的低い盛土工法によって作られている為，その幅は40～55ｍ程度である。

調査区内には，５ｍ×５ｍのグリットを設定した。グリットの基準となるラインは，日本道路公団の設置した道路中心杭ＳＴA123とＳＴA122を結ぶ線を南北の基線とし，基線に対して直交するように東西のラインをＳＴA123を起点として設定した。また，東西のラインには南からアラビア数字，南北のラインには東からアルファベットを付し，その組合せで各グリット東南隅の杭を，グリット呼称に用いた。



第１図　柏木森遺跡グリット配置図

調査面積が13,500m²と広大なものになる為，表土除去は重機を用いて行い，その後人力による粗掘作業を遺構確認面近くまで行うことを予定した。また調査中に出る排土は，調査区内の東側に沿って帯状に残し，重機により調査区外へ随時除去することにした。

調査区が，南北に300 mと長く設定された為，遺跡の基本層位が調査区内で異なることも予想され，層位の観察は重機による表土除去作業の前に，調査区を縦断するトレンチ壁面によって行った。

遺構等の実測にあたっては，各グリットの隅の杭を利用しての簡易遣り方測量により実測した。また，遺構の写真撮影は35mmのカメラを用い，モノクロ，リバーサルとも遺構確認時の状態，断面の状態，完掘の状態と同一の遺構について3回の撮影を原則とした。また，最終的に遺跡全体を航空写真測量し，遺構配置図を含めての地形図を作成している。

3．調査の経過

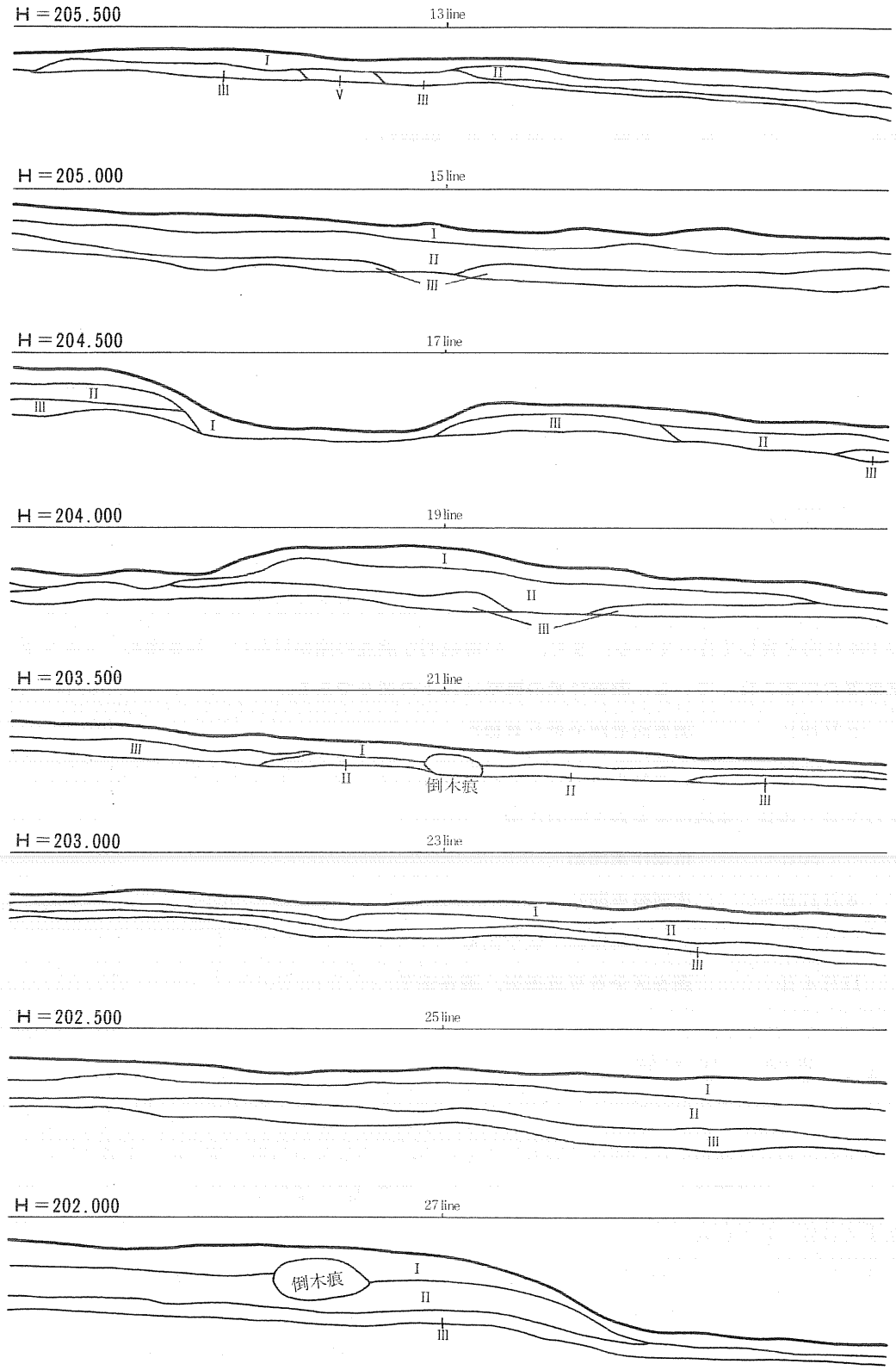
調査は，昭和56年7月20日から人員を導入しての継続的な調査を開始し，同年11月4日までの108日間を費して行っている。また，この継続的な調査の開始以前に，写真撮影，トレンチ試掘等の作業を行っている。調査経過の概略は以下の通りである。

6月16日	調査前遺跡全景写真撮影
26日	土層観察用トレンチ試掘
7月9日～18日	重機による表土除去作業
20日～	粗掘作業開始
8月17日～	遺構精査開始
10月22日	航空写真撮影，航空測量
11月4日	調査区全景写真撮影，調査完了

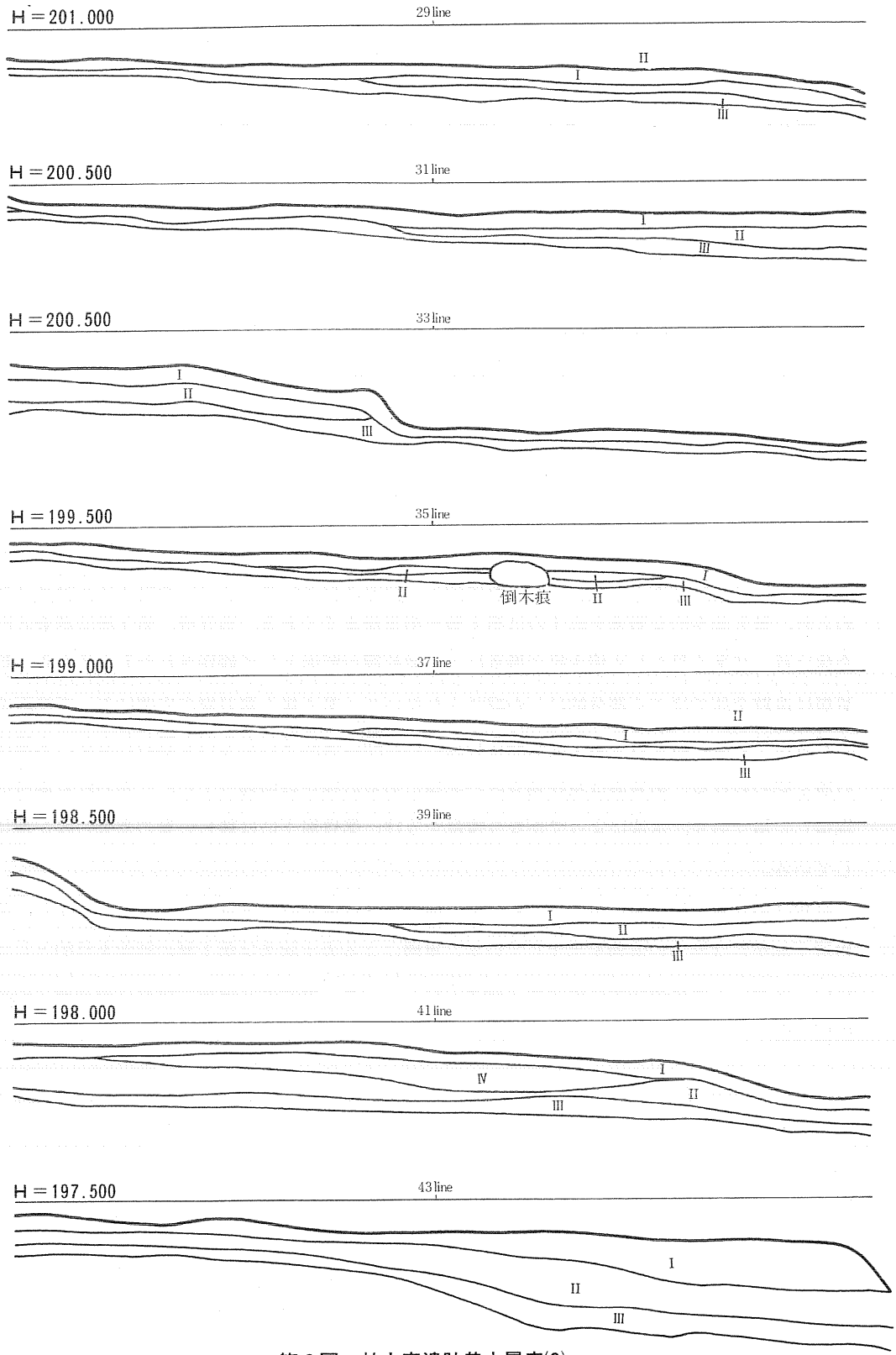
4．遺跡の基本層位

本遺跡は調査区面積が13,500m²と広大であるため，人力による粗掘作業以前に重機を用いての表土の除去が必要であった。したがって表土除去作業以前に遺跡地の基本層位を確認し，作業上の目安としている。

基本層位の観察には，調査区の中央を南北に縦断するトレンチを設けその断面によって行った。(第2図) 基本層位は以下に述べる通りである。



第２図　柏木森遺跡基本層序(1)



第２図　柏木森遺跡基本層序(2)

第Ⅰ層；　10ＹＲ2/1　黒色土，硬度強，粘性弱，小礫（５㎜前後）１％含む。
植物根多い，耕作土である。

第Ⅱ層；　7.5ＹＲ2/1　黒色土，硬度強，粘性強，浮石１％程含む。
遺物を多く包含する。

第Ⅲ層；　10ＹＲ3/4　暗褐色土，硬度強，粘性中，黄褐色土粒１％程含む。
小礫（２cm前後）１％程含む。

第Ⅳ層；　10ＹＲ2/1　黒色土，硬度強，粘性中，浮石５％混入，黄褐色土粒２％程混入
逆転層と思われる。

第Ⅴ層；　10ＹＲ5/6　黄褐色土，硬度強，粘性弱，逆転層と思われる。

第Ⅵ層；　7.5ＹＲ2/1　黒色土中に多量の浮石粒を混入する。

第Ⅶ層；　10ＹＲ2/1　黒色土，硬度やや強，粘性中，浮石５％程含む。
黄褐色土ブロック状に２％程含む。

トレンチの断面によって観察できた層は以上のⅦ層である。このうち，遺跡全体を通して認められ，最も基本的な層準を成すのは第Ⅰ層～第Ⅲ層までである。第Ⅳ層，第Ⅴ層は調査区内全体に亘って多く見られる倒木痕の攪乱による逆転層が断面として観察されたものである。第Ⅵ層は遺跡全体ではごく部分的にしか認められないが，第Ⅰ層と第Ⅱ層の中間にあって浮石を多く含んでいる。おそらく第Ⅰ層の耕作が行われた際に攪乱されたものと思われるが，大湯浮石層と認められる。第Ⅶ層は現在調査区の北端にある沢端が以前通っていたと思われる箇所に堆積した層であり，水流によってかなり攪乱をうけ，第Ⅶ層下には夥しい量の拳大の礫が堆積している。

遺物は第Ⅱ層～第Ⅲ層に包含される。第Ⅱ層中からは縄文時代晩期の遺物を多く出土し，第Ⅲ層下部からは早期の遺物を出土している。重機による表土除去は第Ⅰ層の剝除を目的として行い，人力による粗掘作業は第Ⅲ層下部まで行っている。最終的な遺構の確認は第Ⅲ層下の地山面で行った。

第３図　柏木森遺跡遺構配置図

5．遺構と遺物

遺構

調査区内で検出された遺構は，溝跡，道路跡，円形の土壙60基，Ｔピット１基，掘立柱建物跡１棟である。

溝跡は調査区の北側を横断している道路に沿った個所に検出されている。最大幅５ｍ，最も深い個所で深さ0.7ｍである。東側から西側にかけて傾斜している。調査区北端には現在灌漑用の水路があるが，この溝跡も古くは水路として利用されたものと思われる。(第４図）また調査区南端にも幅およそ0.8ｍ，深さ0.2ｍの小さな溝跡があるが，これも同様水路として用いられたものであろう。

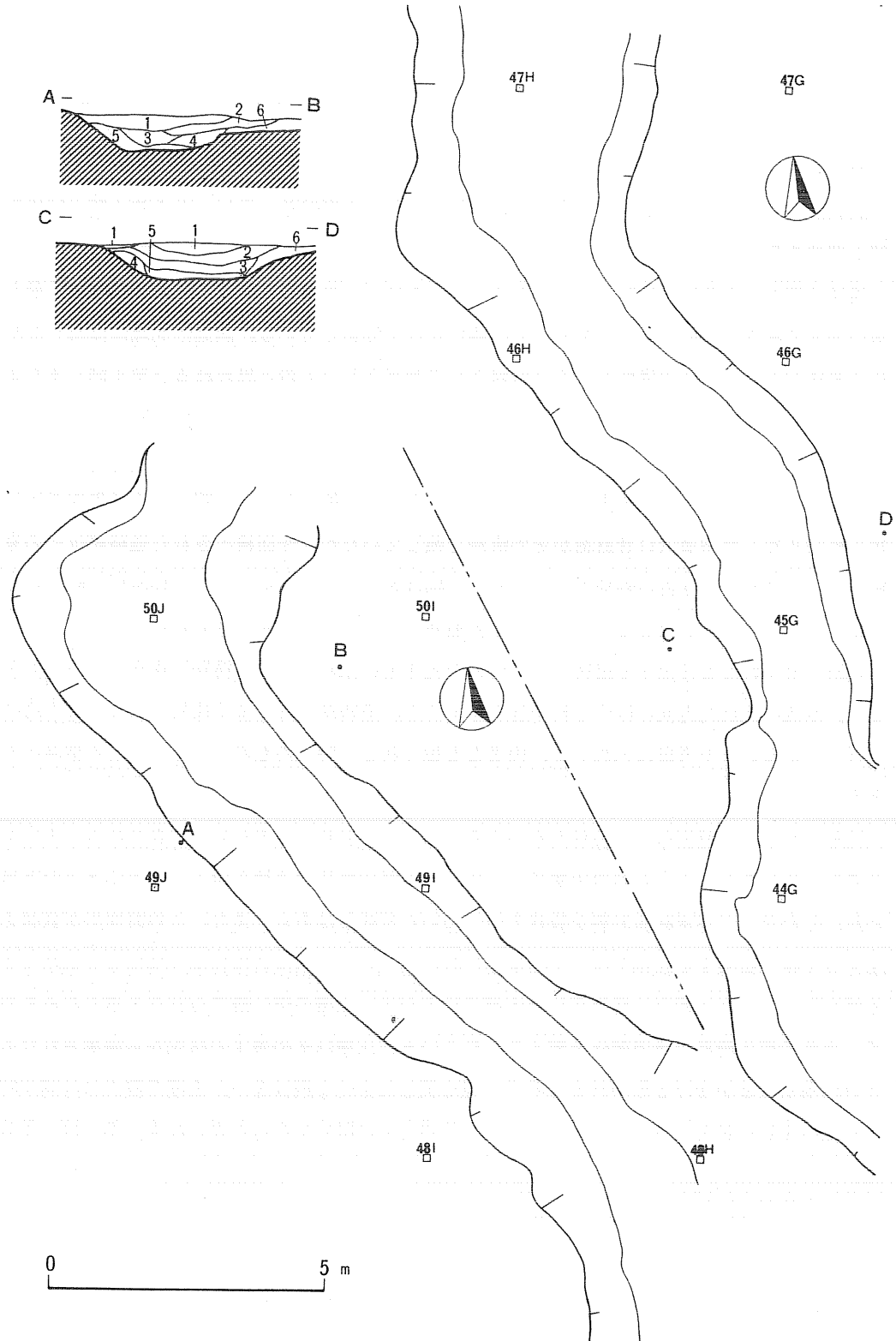
道路跡は，調査区の南側を南東―北西に斜めに走る形で検出された。調査以前に現在では使用されなくなった市道沢口甘蕗線がその痕跡を残していたが，今回検出された道路跡はその東側を併行して走るより古い時期のものである。幅はおよそ３～４ｍ，径５～10cm程の礫が夥しい量敷かれている。またところどころに車の轍跡と思われる浅い溝が認められる。

溝跡，道路跡とも伴出する遺物がなく時期決定するに至らないが，溝跡は現在の水田近くを走り，水流の流れた方向には今も提が存在すること，道路跡は近年まで使用されていた市道に併行して走ることを考慮に入れると，両者とも極く新しい時代のものではないかとの推測ができる。

円形の土壙は，断面形では袋状ともいえる末広がりの形状を呈するものが含まれる。末広がりの形状を呈さないような形の土壙であっても，実際の構築面は検出面よりも上にあったと思われ，したがって本来断面形態が袋状を呈していた可能性はある。また，この断面形が袋状を呈する土壙が密集する区域では，土壙覆土の断面にフロート状に黄褐色土の堆積層を観察できる例がある。これは新たに構築された土壙の排土が古い土壙の中に捨てられたと思われるもので，土壙の使用時期の新旧関係を教えてくれている。土壙はその覆土の状況から廃棄されたあと自然堆積にまかせたと思われるもので，埋め戻したような例はない。土壙の覆土には縄文時代晩期の土器を包含するものがあり，時期をその近くに限定できると思われる。(第６図～第16図）

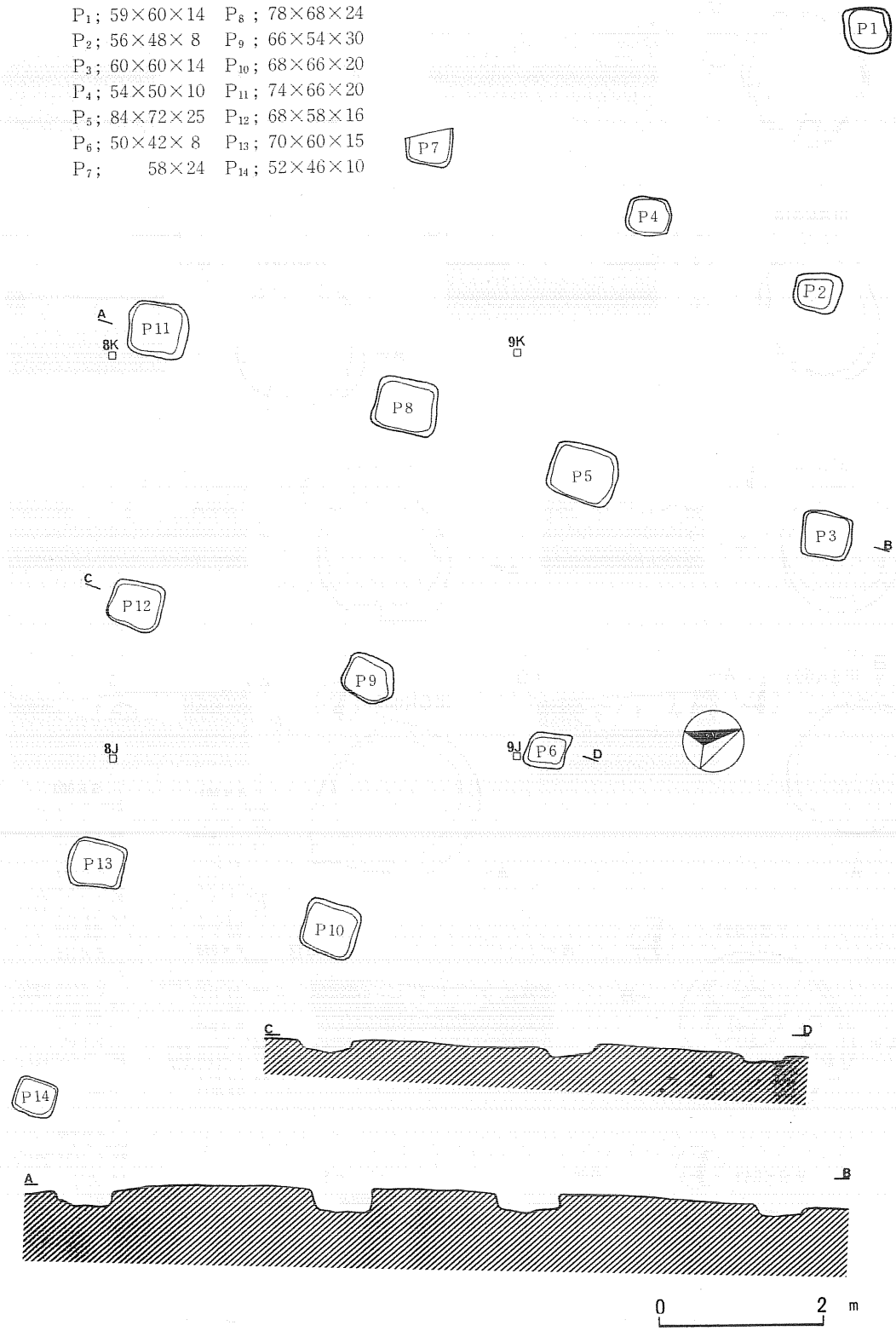
Ｔピットは長径160cm程，深さが80cm程の比較的規模の小さなものが１基確認されている。長軸の方向はＮ―75°―Ｅである。遺物がなく時期は不明である。(第17図）

掘立柱建物跡は調査区南端から検出されている。計14個の柱穴からなる。１個の柱穴は平面形が方形を呈し，１辺が50～70cm程で深さは10～20cm程である。柱穴間を結ぶ線はやや斜交する。遺物がなくやはり時期は不明である。(第５図）

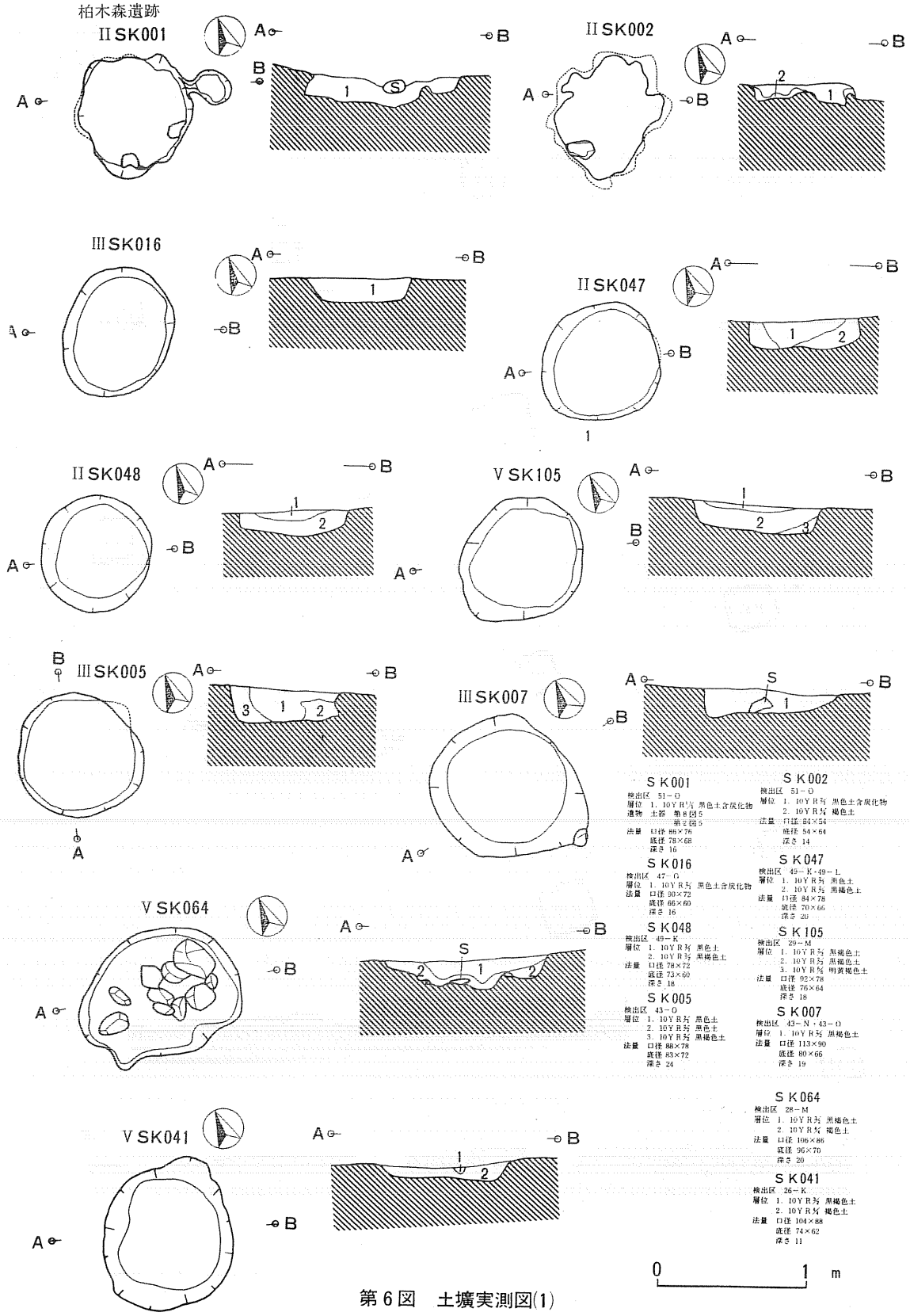


第４図　溝跡実測図

P_1; 59×60×14　P_8; 78×68×24
P_2; 56×48× 8　P_9; 66×54×30
P_3; 60×60×14　P_{10}; 68×66×20
P_4; 54×50×10　P_{11}; 74×66×20
P_5; 84×72×25　P_{12}; 68×58×16
P_6; 50×42× 8　P_{13}; 70×60×15
P_7; 58×24　P_{14}; 52×46×10



第5図　掘立柱建物跡実測図



S K001
検出区　51－O
層位　1. 10YR 1/3 黒色土含炭化物
遺物　土器　第8図5
　　第2図5
法量　口径 86×76
　　底径 78×68
　　深さ 16

S K002
検出区　51－O
層位　1. 10YR 2/3 黒色土含炭化物
　　2. 10YR 5/4 褐色土
法量　口径 84×54
　　底径 54×64
　　深さ 14

S K016
検出区　47－G
層位　1. 10YR 2/3 黒色土含炭化物
法量　口径 90×72
　　底径 66×60
　　深さ 16

S K047
検出区　49－K・49－L
層位　1. 10YR 2/3 黒色土
　　2. 10YR 2/3 黒褐色土
法量　口径 84×78
　　底径 70×66
　　深さ 20

S K048
検出区　49－K
層位　1. 10YR 2/3 黒色土
　　2. 10YR 3/2 黒褐色土
法量　口径 78×72
　　底径 73×60
　　深さ 18

S K105
検出区　29－M
層位　1. 10YR 2/3 黒褐色土
　　2. 10YR 2/3 黒褐色土
　　3. 10YR 5/6 明黄褐色土
法量　口径 92×78
　　底径 76×64
　　深さ 18

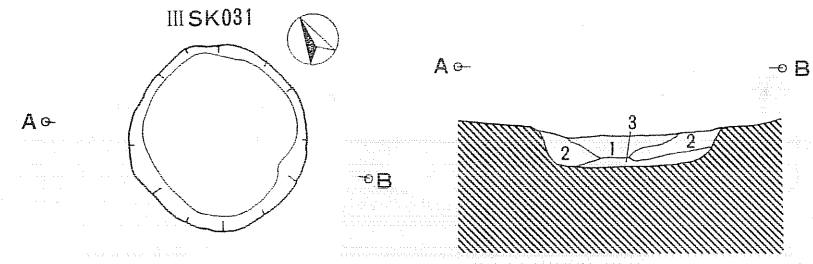
S K005
検出区　43－O
層位　1. 10YR 2/3 黒色土
　　2. 10YR 2/3 黒色土
　　3. 10YR 2/3 黒褐色土
法量　口径 88×78
　　底径 83×72
　　深さ 24

S K007
検出区　43－N・43－O
層位　1. 10YR 2/3 黒褐色土
法量　口径 113×90
　　底径 80×66
　　深さ 19

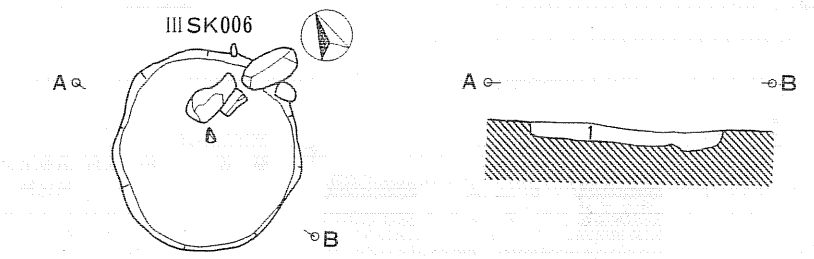
S K064
検出区　28－M
層位　1. 10YR 2/3 黒褐色土
　　2. 10YR 5/4 褐色土
法量　口径 106×86
　　底径 96×70
　　深さ 20

S K041
検出区　26－K
層位　1. 10YR 2/3 黒褐色土
　　2. 10YR 5/4 褐色土
法量　口径 104×88
　　底径 74×62
　　深さ 11

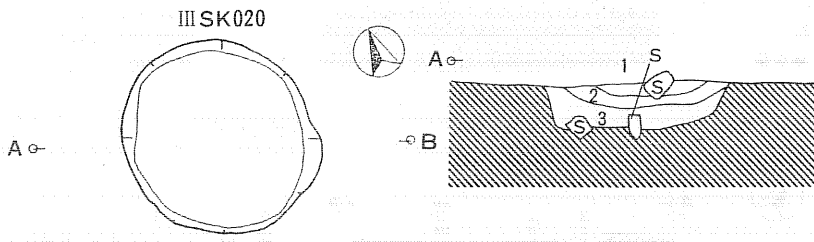
第6図　土壙実測図(1)



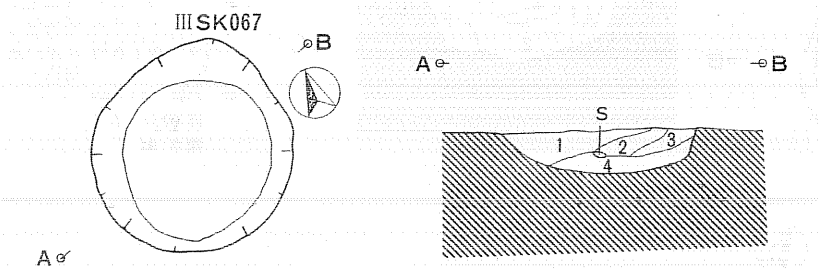
検出区　45－K
層　位　1．10YR3/2 黒褐色土
　　2．10YR3/1 黒色土
　　3．10YR1.7/1 黒色土
法　量　口径 100×92
　　底径 88×76
　　深さ 16



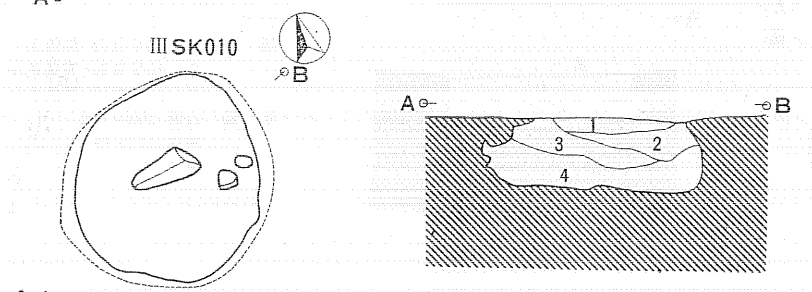
検出区　44－O
層　位　1．10YR3/1 黒色土
法　量　口径 106×96
　　底径 100×90
　　深さ 10



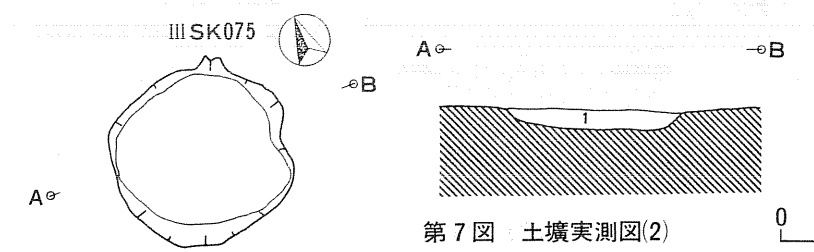
検出区　48－M
層　位　1．10YR3/2 黒褐色土
　　2．10YR3/1 黒色土含炭化物
　　3．10YR3/2 黒褐色土
遺　物　土器 第8図13・15
法　量　口径 106×102
　　底径 94×88
　　深さ 24



検出区　41－K
層　位　1．10YR3/1 黒色土含炭化物
　　2．10YR4/4 褐色土
　　3．10YR1.7/1 黒色土
　　4．10YR3/2 黒褐色土含炭化物
法　量　口径 114×106
　　底径 84×78
　　深さ 23



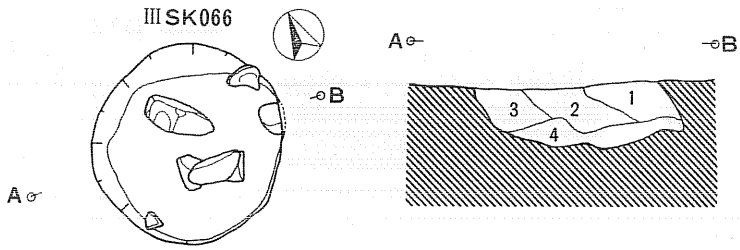
検出区　44－N
層　位　1．10YR3/2 黒褐色土
　　2．10YR3/2 黒褐色土
　　3．10YR3/4 黒褐色土
　　4．10YR3/1 黒褐色土
法　量　口径 116×96
　　底径 120×98
　　深さ 48



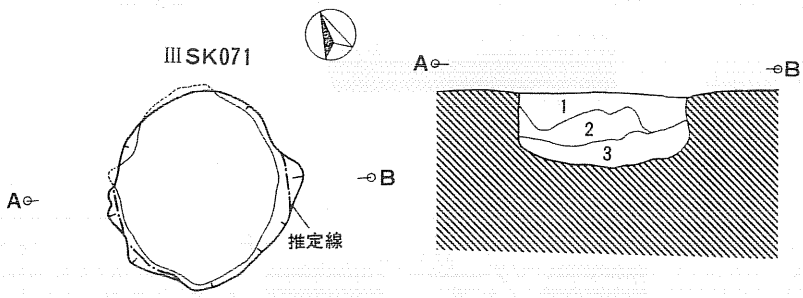
検出区　41－L
層　位　1．10YR1.7/1 黒色土
法　量　口径 100×88
　　底径 96×76
　　深さ 10

0　1 m

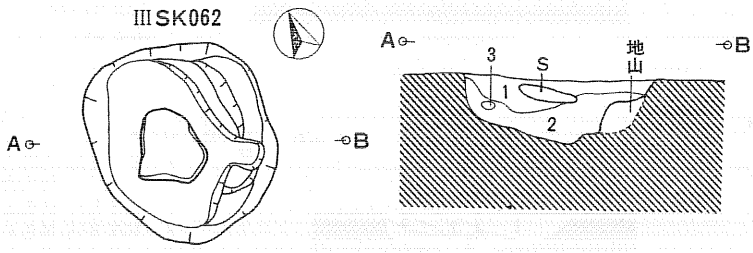
第7図　土壙実測図(2)



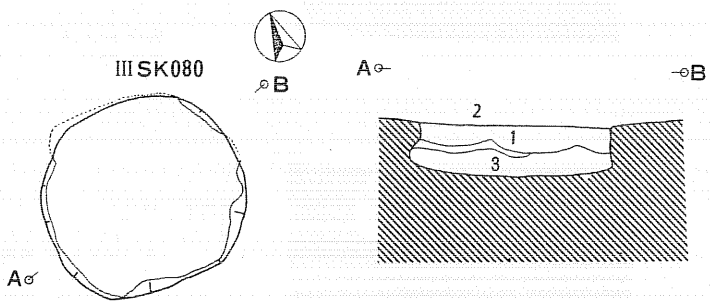
検出区　41－K・42－K
層　位　1．10YR 2/1 黒色土
　　2．10YR 1/1 黒色土
　　3．10YR 1/1 黒色土
　　4．10YR 5/2 黒褐色土
法　量　口径 106×88
　　底径 94×90
　　深さ 34



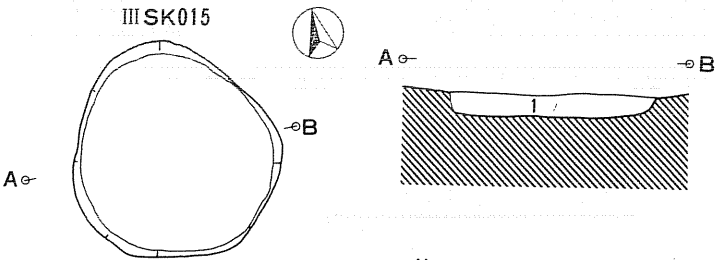
検出区　41－J
層　位　1．10YR 2/1 黒色土含炭化物
　　2．10YR 5/3 にぶい黄褐色土
　　3．10YR 1/1 黒色土
法　量　口径 104×100
　　底径 106×84
　　深さ 40



検出区　42－F
層　位　1．10YR 2/2 黒褐色土
　　2．10YR 3/3 暗褐色土
　　3．10YR 5/3 にぶい黄褐色土
法　量　口径 110×92
　　底径 94×60
　　深さ 34



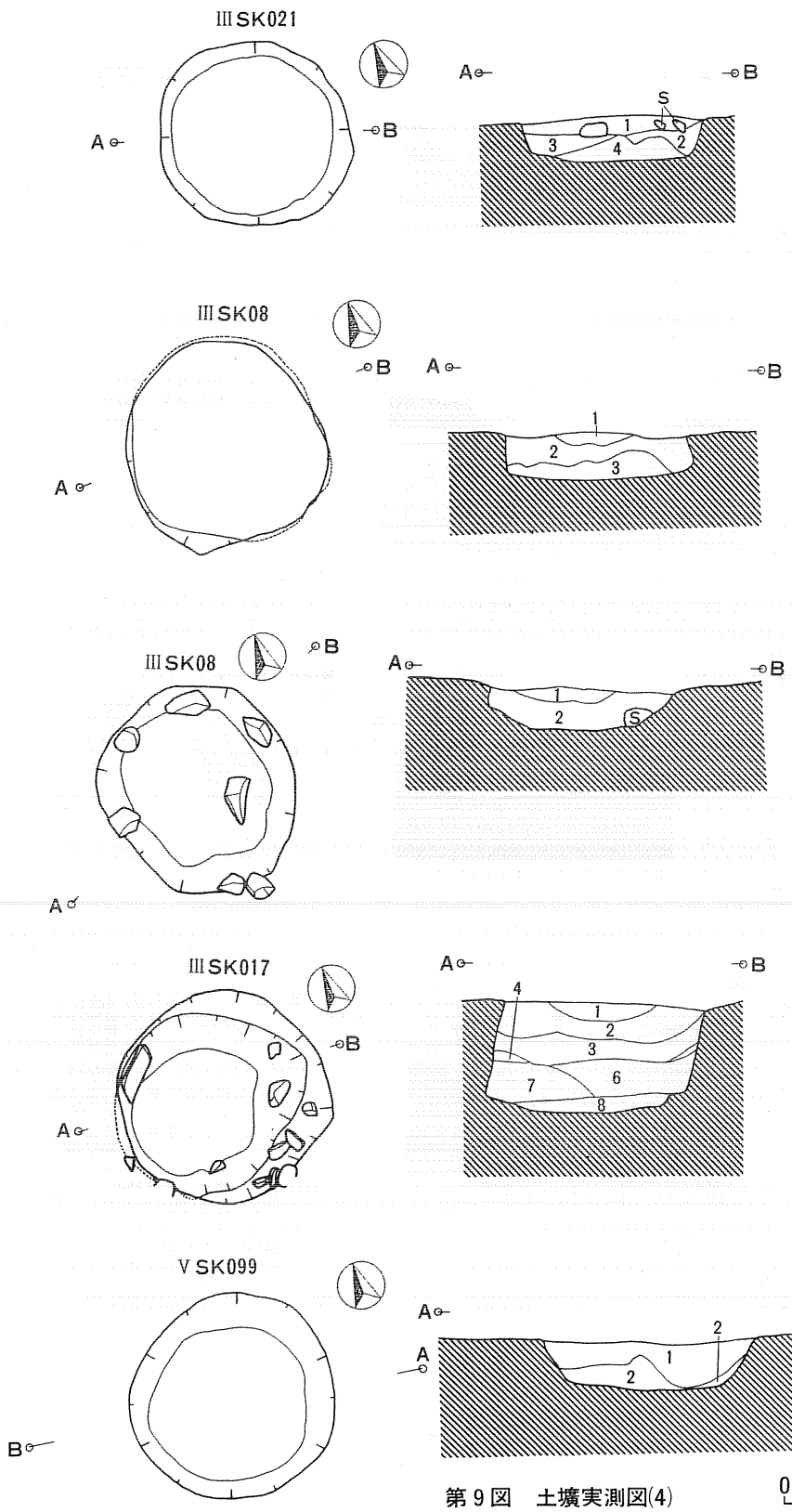
検出区　41－O
層　位　1．10YR 2/1 黒色土
　　2．10YR 2/2 黒褐色土
　　3．10YR 1/1 黒色土
法　量　口径 108×106
　　底径 112×98
　　深さ 26



検出区　48－O
層　位　1．10YR 2/1 黒色土
法　量　口径 114×108
　　底径 104×100
　　深さ 12

0　1 m

第8図　土壙実測図(3)



検出区　46－N
層　位　1．10YR4/4 褐色土
　　2．10YR3/2 黒褐色土
　　3．10YR3/3 暗褐色土
　　4．10YR2/1 黒色土
法　量　口径 112×104
　　底径 92×91
　　深さ 26

検出区　42-N・43-N・42-O・43-O
層　位　1．10YR3/3 黒褐色土
　　2．10YR2/1 黒色土
　　3．10YR3/2 黒褐色土
法　量　口径 122×108
　　底径 114×106
　　深さ 28

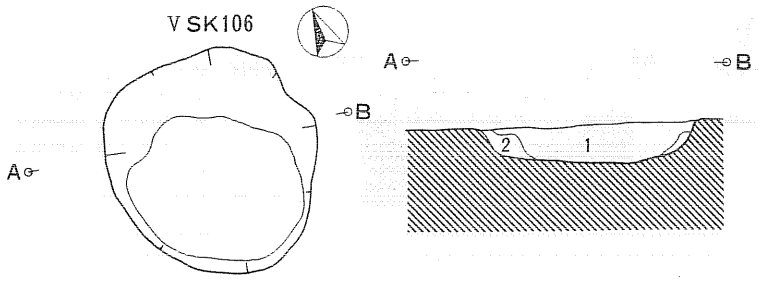
検出区　43－L・44－L
層　位　1．1CYR3/2 黒褐色土
　　2．10YR1/1 黒色土
法　量　口径 120×114
　　底径 90×80
　　深さ 24

検出区　45-N 46-N・45-O・46-O
層　位　1．10YR5/8 黄褐色土
　　2．10YR3/4 暗褐色土
　　3．10YR3/4 黒色土
　　4．10YR4/4 褐色土
　　5．4層と同じ
　　6．10YR2/1 黒褐色土
　　7．10YR1/1 黒色土
　　8．10YR1/1 黒色土
法　量　口径 122×114
　　底径 78×68
　　深さ 62

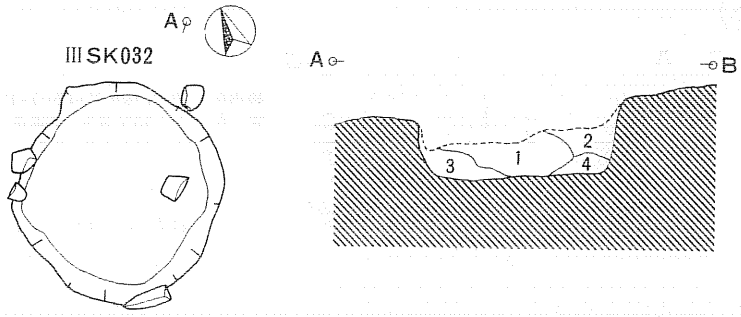
検出区　29－J
層　位　1．10YR3/2 黒褐色土
　　2．10YR4/4 褐色土
法　量　口径 118×112
　　底径 90×86
　　深さ 26

第9図　土壙実測図(4)

0　1 m

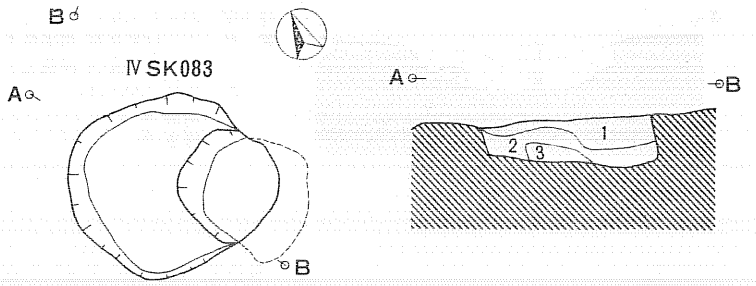


検出区　29－M
層　位　1．10YR 2/2 黒褐色土
　　2．10YR 5/8 黄褐色土
法　量　口径 128×104
　　底径 94×74
　　深さ 10

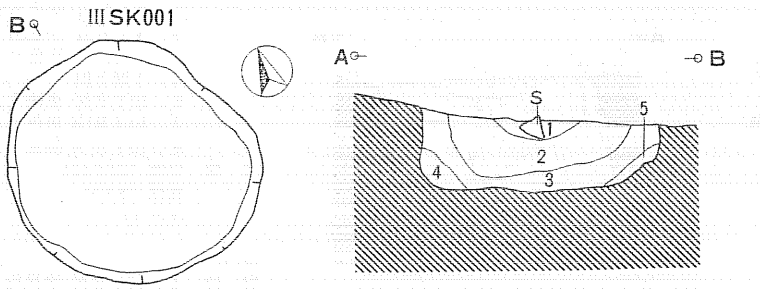


検出区　43－K・43－L
層　位　1．10YR 3/3 暗褐色土
　　2．10YR 2/1 黒色土
　　3．10YR 3/3 黒褐色土
　　4．10YR 3/2 黒褐色土
法　量　口径 118×84
　　底径 100×96
　　深さ 18

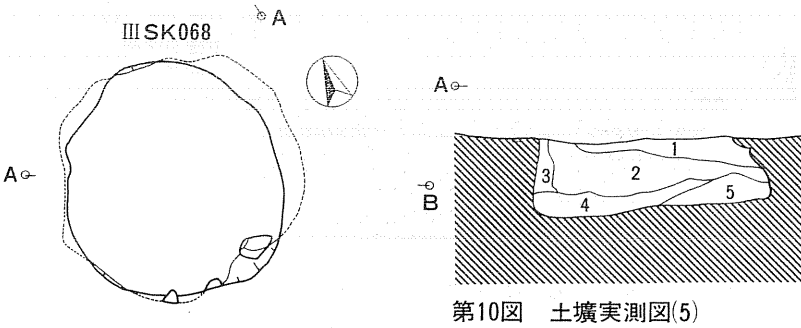
　　口径 118×94



検出区　31－K
層　位　1．10YR 2/1 黒色土
　　2．10YR 2/2 黒褐色土
　　3．7.5YR 5/6 明褐色土
法　量　口径 110×92
　　底径 86×82
　　深さ 26



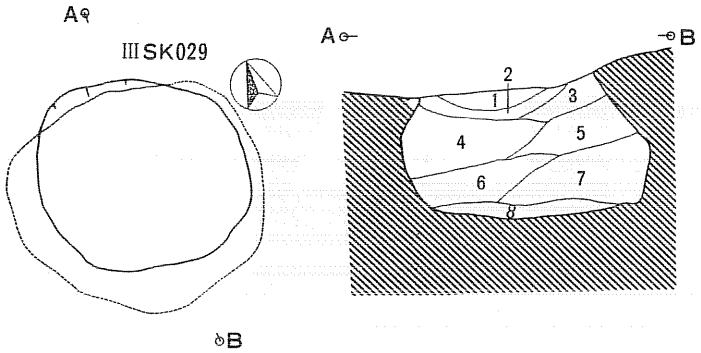
検出区　41－K
層　位　1．10YR 2/1 黒色土
　　2．10YR 3/3 暗褐色土
　　炭化物
　　3．10YR 3/2 黒褐色土
　　炭化物
　　4．10YR 2/1 黒色土含
　　炭化物
　　5．10YR 1/7 黒色土含
　　炭化物
法　量　口径 130×110
　　底径 132×110
　　深さ 36



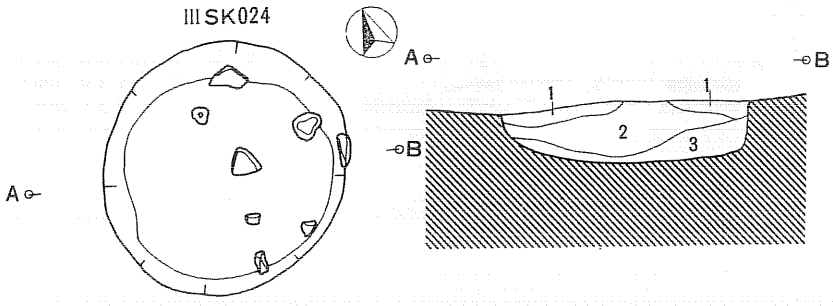
検出区　44－O
層　位　1．10YR 2/1 黒色土
　　2．10YR 1/7 黒色土
　　3．10YR 2/1 黒色土
　　4．10YR 4/4 褐色土
　　5．10YR 3/1 黒褐色土
法　量　口径 132×118
　　底径 128×106
　　深さ 36

0　1 m

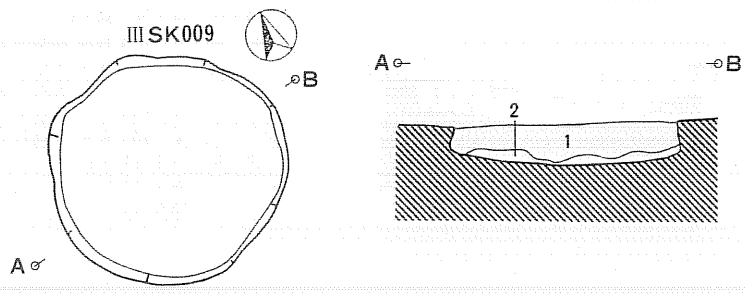
第10図　土壙実測図(5)



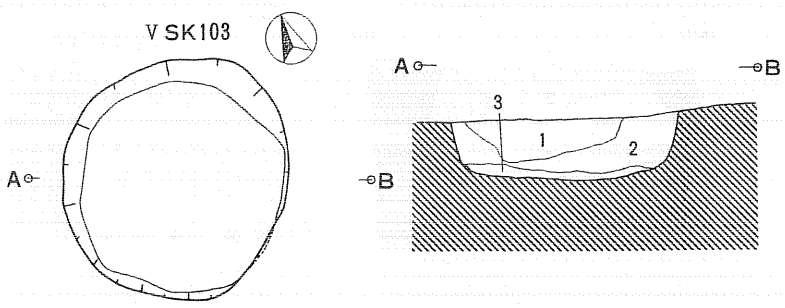
検出区　48－J
層　位　1．10YR3/1 黒色土
　　2．10YR3/2 黒褐色土
　　3．10YR3/2 黒褐色土
　　4．10YR3/2 黒褐色土
　　5．10YR3/1 黒色土
　　6．10YR3/1 黒色土
　　7．10YR2/1 黒色土
　　8．10YR3/3 暗褐色土
法　量　口径 118×100
　　底径 140×118
　　深さ 68



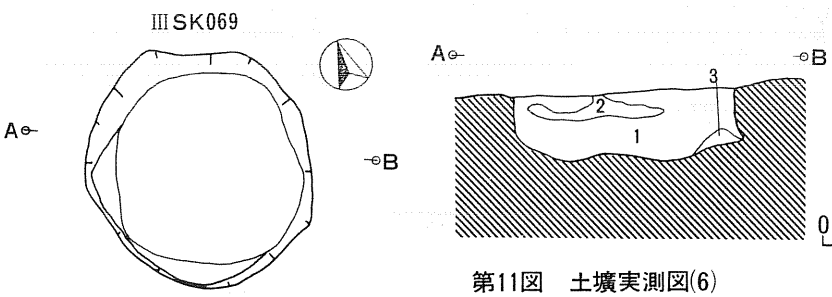
検出区　46－M
層位　1.10YR3/1 黒色土
　　2.10YR3/4 褐色土
　　3.10YR1/7 黒色土
遺物　土器　第3図9
法量　口径 138×128
　　底径 112×110
　　深さ 32



検出区　44－N
層　位　1．10YR3/3 暗褐色土
　　2．10YR3/1 黒色土
遺　物　土器　第3図12
法　量　口径 128×122
　　底径 120×112
　　深さ 22



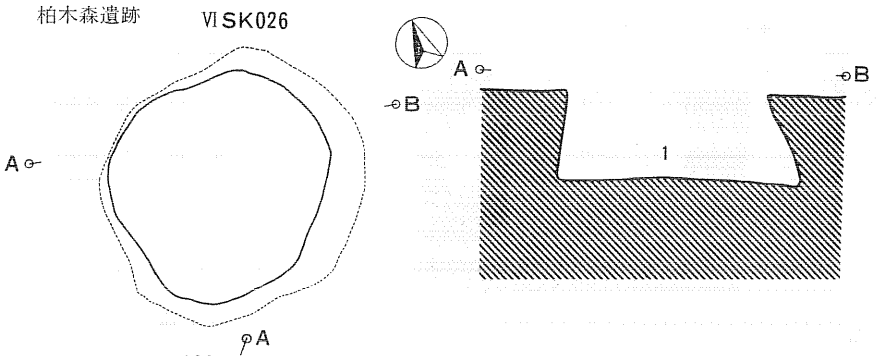
検出区　29－L
層　位　1．10YR3/2 黒褐色土
　　2．10YR3/1 黒色土
　　3．10YR2/2 黒褐色土
法　量　口径 132×120
　　底径 112×106
　　深さ 32



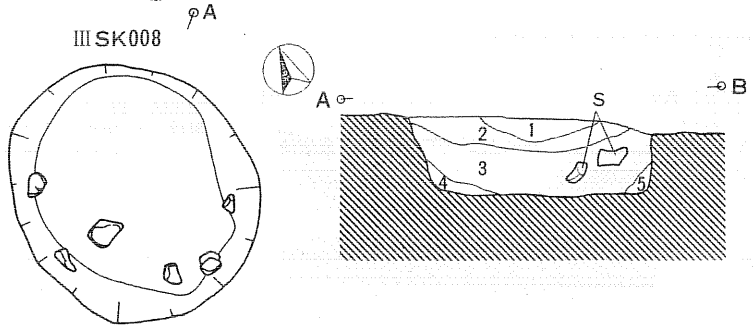
検出区　41－K
層　位　1．10YR3/1 黒色土
　　2．10YR3/2 黒褐色土
　　3．10YR7/6 明黄褐色土
法　量　口径 130×116
　　底径 108×94
　　深さ 38

0　1　m

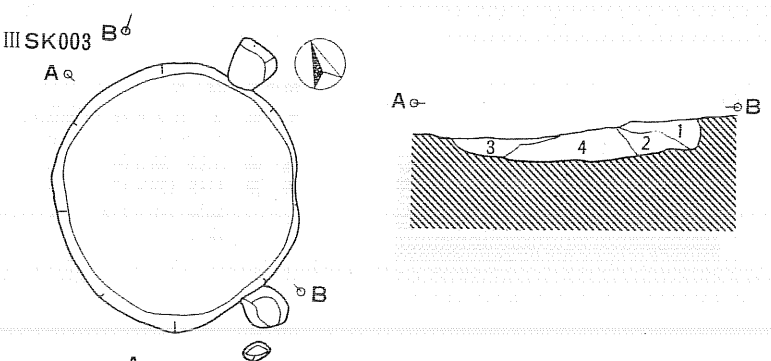
第11図　土壙実測図(6)



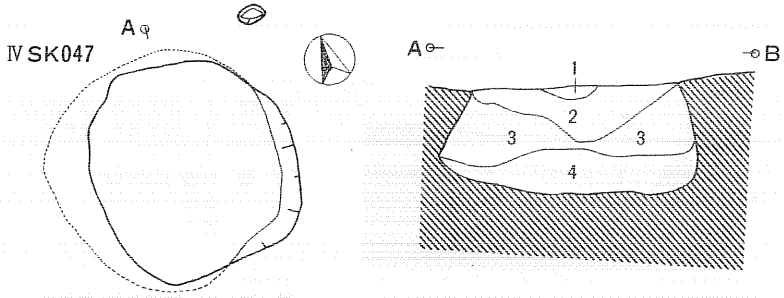
検出区　39－H・39－I
層位　1．7.5YR1/7 黒色土
　　含炭化物
法量　口径 124×112
　　底径 148×134
　　深さ 46



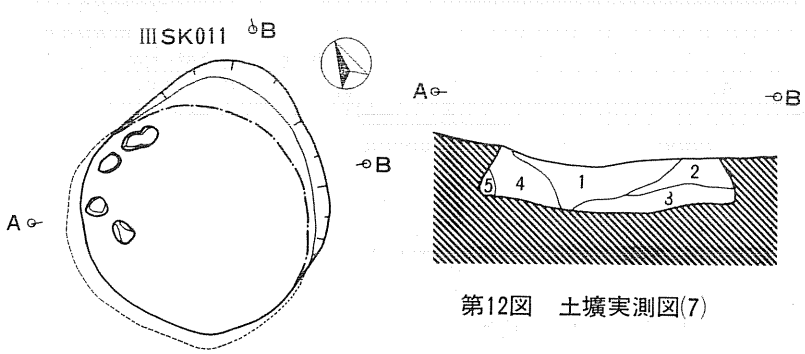
検出区　43－N・44－N
層　位　1．10YR4/6 褐色土
　　2．10YR3/2 黒褐色土
　　3．10YR2/1 黒色土
　　4．10YR3/2 黒褐色土
　　5．10YR2/1 黒色土
遺　物　土器　第3図5
法　量　口径 142×122
　　底径 128×90
　　深さ 42



検出区　44－N・44－O
層　位　1．10YR3/4 暗褐色土
　　2．10YR3/2 黒色土
　　含炭化物
　　3．10YR2/1 黒色土
　　4．10YR3/3 暗褐色土
法　量　口径 142×126
　　底径 124×120
　　深さ 18



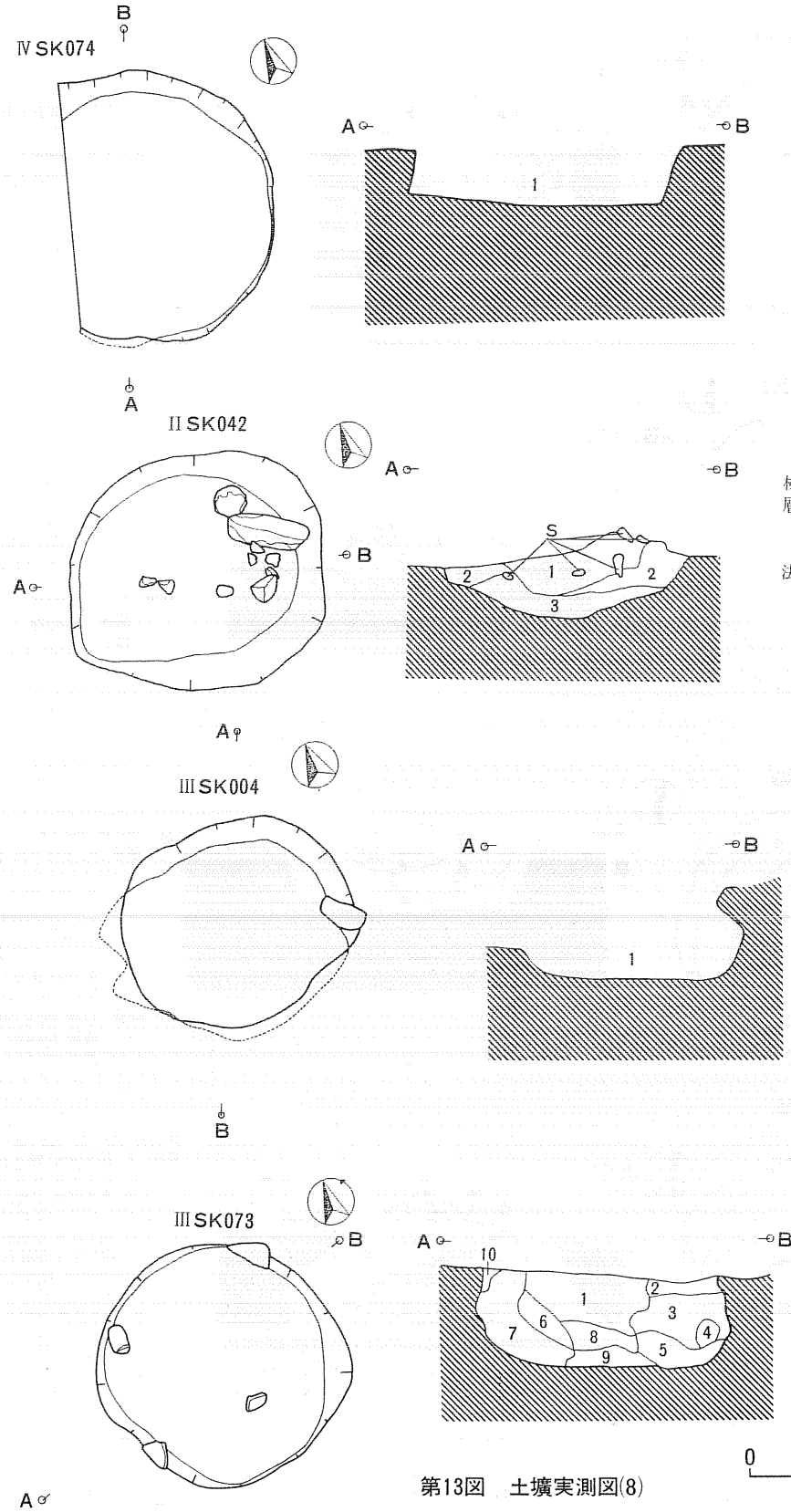
検出区　37－I
層　位　1．10YR2/1 黒色土
　　含炭化物
　　2．10YR3/2 黒褐色土
　　含炭化物
　　3．10YR3/2 黒褐色土
　　含炭化物
　　4．10YR3/3 黒褐色土
　　含炭化物
法　量　口径 122×106
　　底径 126×122
　　深さ 58



検出区　44－N
層　位　1．10YR3/2 黒褐色土
　　2．10YR2/1 黒色土
　　3．10YR1/7 黒色土
　　4．10YR2/1 黒色土
　　5．10YR2/1 黒色土
遺　物　土器　第2図5
　　第1図5

0　1 m

第12図　土壙実測図(7)



検出区　31－N
層　位　1．10YR1/7 黒色土
法　量　口径 160×118
底径 148×116
深さ 34

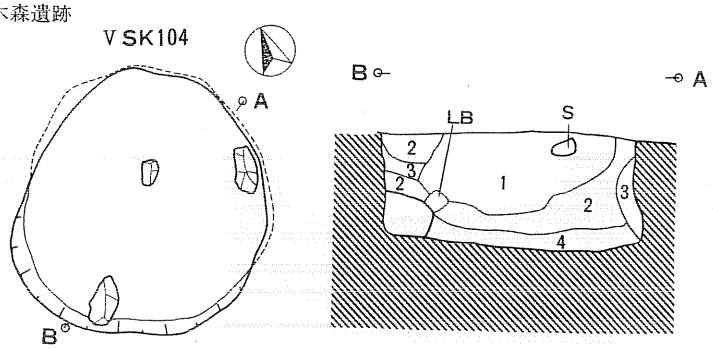
検出区　49－M
層　位　1．10YR5/6 黄褐色土
2．10YR3/2 黒褐色土
3．10YR3/3 黒褐色土
法　量　口径 164×144
底径 115×102
深さ 42

検出区　42－J・42－K
43－J・43－K
覆土　1．10YR3/1 10YR3/1
YR3/2
黒色土～黒褐色土
遺物　土器　第7図21・30
第8図2
法量　口径 138×118
底径 144×110
深さ 52

検出区　41－K
層位　1．10YR3/2 黒褐色
土含炭化物
2．10YR1/7 黒色土
3．10YR3/1 黒色土
4．10YR3/4 褐色土
5．10YR1/7 黒色土
6．10YR1/7 黒色土
7．10YR3/1 黒色土
8．10YR3/1 黒色土
含炭化物
9．10YR3/1 黒色土
含炭化物
10．10YR5/3 にぶい
黄褐色土
法量　口径 148×136
底径 136×124
深さ 54

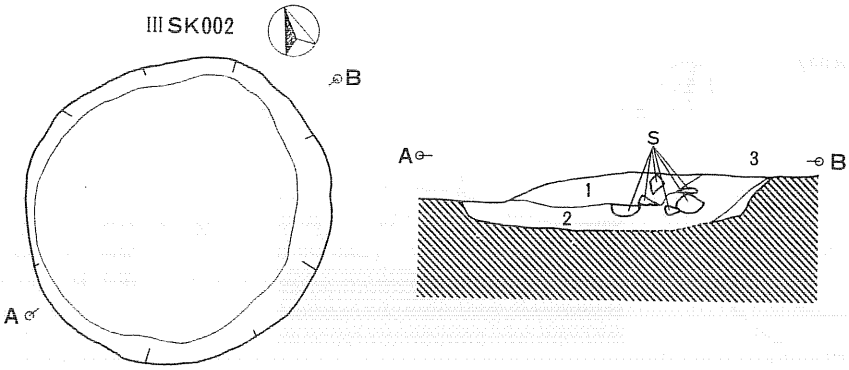
第13図　土壙実測図(8)

VSK104



検出区　29－L・29－M
層位　1．10YR2/2 黒褐色土含炭化物
　　2．10YR2/1 黒色土含炭化物
　　3．10YR2/2 黒褐色土
　　4．10YR2/2 黒褐色含炭化物
　　LB．明黄褐色土
法量　口径 142×122
　　底径 136×130
　　深さ 62

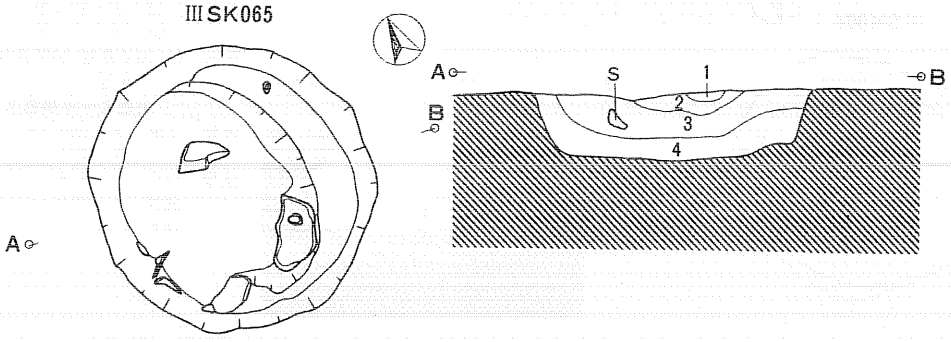
IIISK002



検出区　44－O・4　5

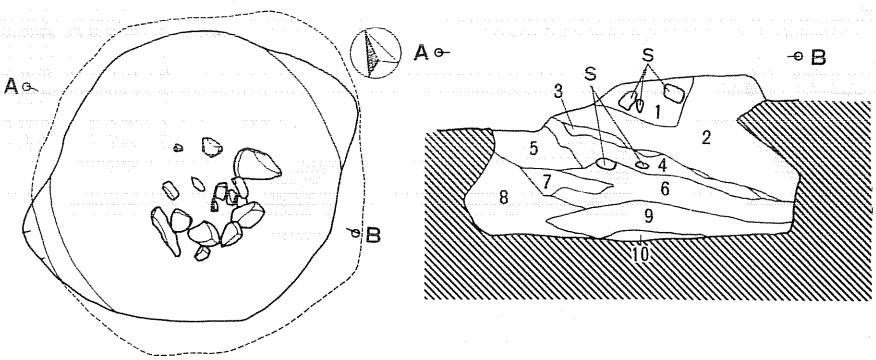
検出区　44－O・45－O
層位　1．10YR6/6 明黄褐色土
　　2．10YR2/2 黒褐色土
　　3．10YR5/8 黄褐色土
法量　口径 166×156
　　底径 148×138
　　深さ 30

IIISK065



検出区　42－K
層位　1．10YR4/3 にぶい黄褐色土
　　2．10YR1 7/1 黒色土含炭化物
　　3．10YR2/1 黒色土含炭化物
　　4．10YR1 7/1 黒色土
遺物　土器　第7図17
法量　口径 152×130
　　底径 104×82
　　深さ 35

IISK045

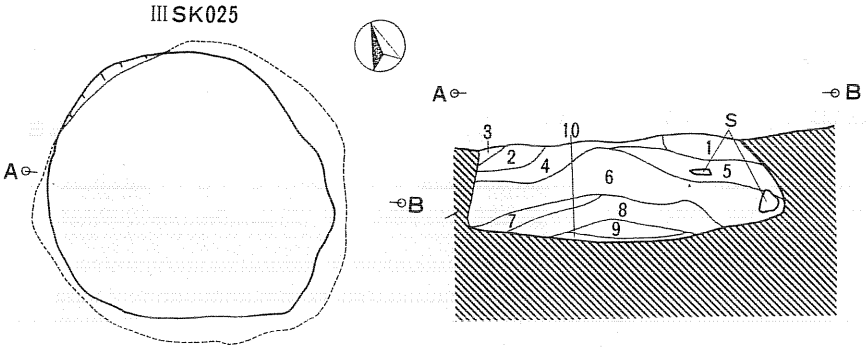


検出区　49－L・49－M
層位　1．10YR4/4 褐色土
　　2．10YR2/2 黒褐色土
　　3．5YR4/8 赤褐色土含炭化物
　　4．10YR2/3 暗褐色土
　　5．10YR2/2 黒褐色土
　　6．10YR3/4 暗褐色土
　　7．10YR1 7/1 黒色土
　　8．10YR2/3 暗褐色土
　　9．10YR4/4 褐色土
　　10．10YR2/2 黒褐色土
遺物　土器　第8図
　　28・29・31・33
法量　口径 188×146
　　底径 190×176
　　深さ 86

第14図　土壙実測図(9)

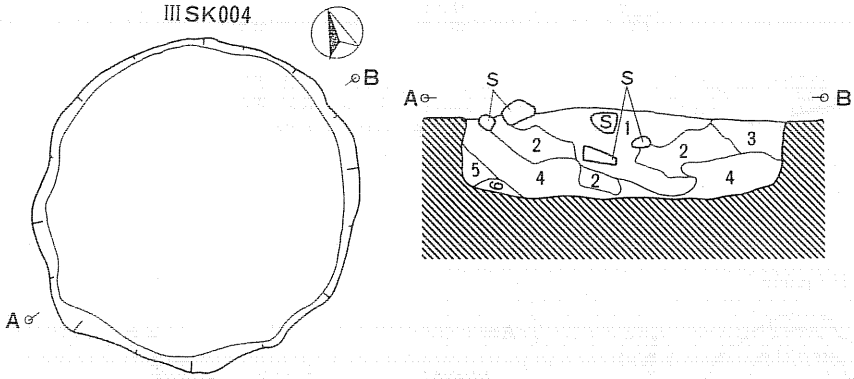
0　1　m

III SK025



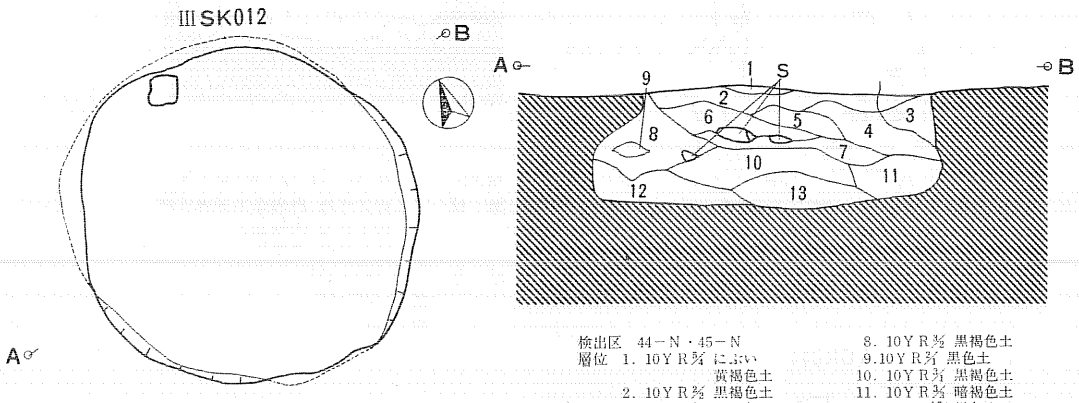
検出区　46－M・46－N
層位　1. 10YR3/4 黒色土
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 10YR4/4 にぶい黄褐色土
4. 10YR5/6 黄褐色土
5. 10YR4/4 褐色土
6. 10YR5/6 明黄褐色土
7. 10YR3/4 暗褐色土
8. 10YR2/1 黒色土
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
10. 10YR1/7 黒色土
法量　口径 152×140
底径 170×154
深さ 54

III SK004



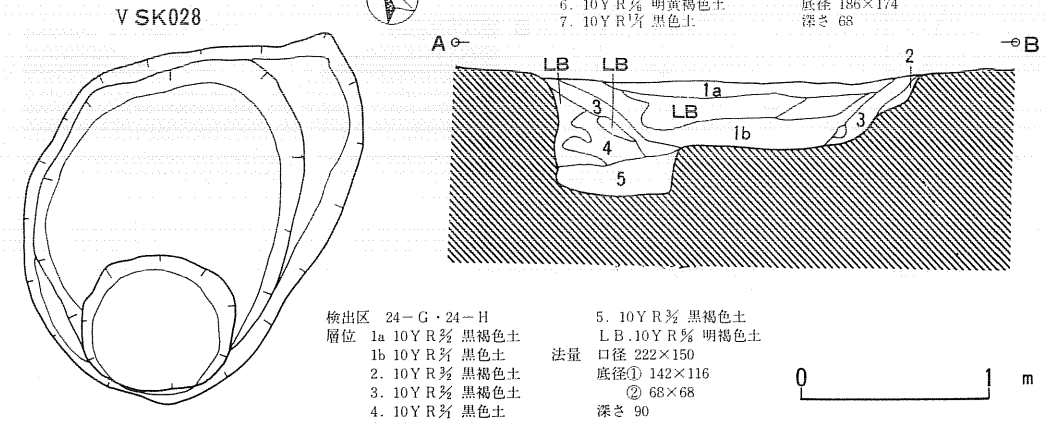
検出区　44－N
層位　1. 10YR5/6 明黄褐色土
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 10YR3/3 暗褐色土
4. 10YR2/1 黒色土
5. 10YR3/4 暗褐色土
6. 10YR3/2 黒褐色土
法量　口径 178×168
底径 168×152
深さ 64

III SK012



検出区　44－N・45－N
層位　1. 10YR3/4 にぶい黄褐色土
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 10YR5/6 黄褐色土
4. 10YR3/2 黒褐色土
5. 10YR3/4 褐色土
6. 10YR5/6 明黄褐色土
7. 10YR1/7 黒色土
8. 10YR3/2 黒褐色土
9. 10YR2/1 黒色土
10. 10YR2/1 黒褐色土
11. 10YR3/4 暗褐色土
12. 10YR1/7 黒色土
13. 10YR2/1 黒褐色土
法量　口径 192×178
底径 186×174
深さ 68

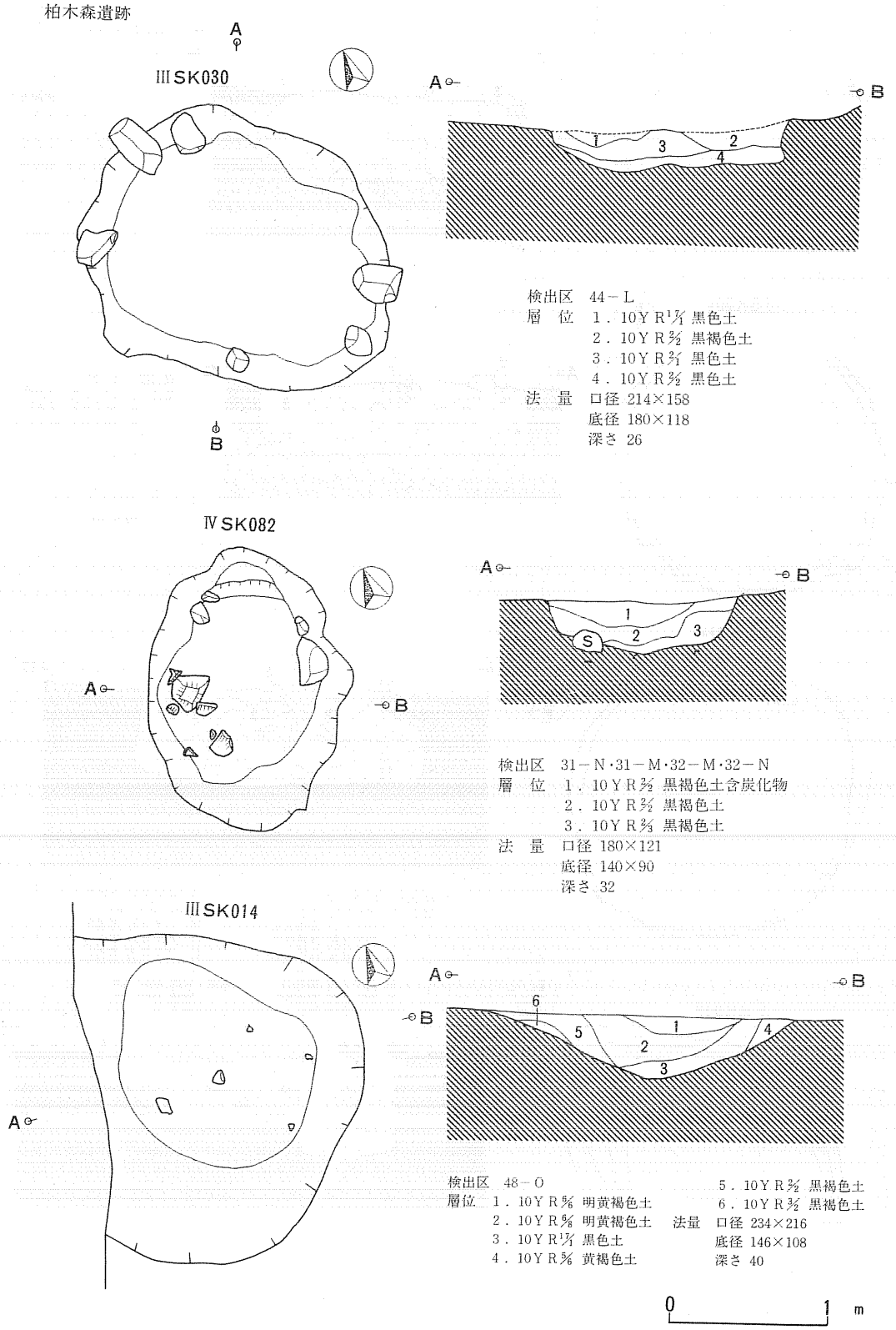
V SK028



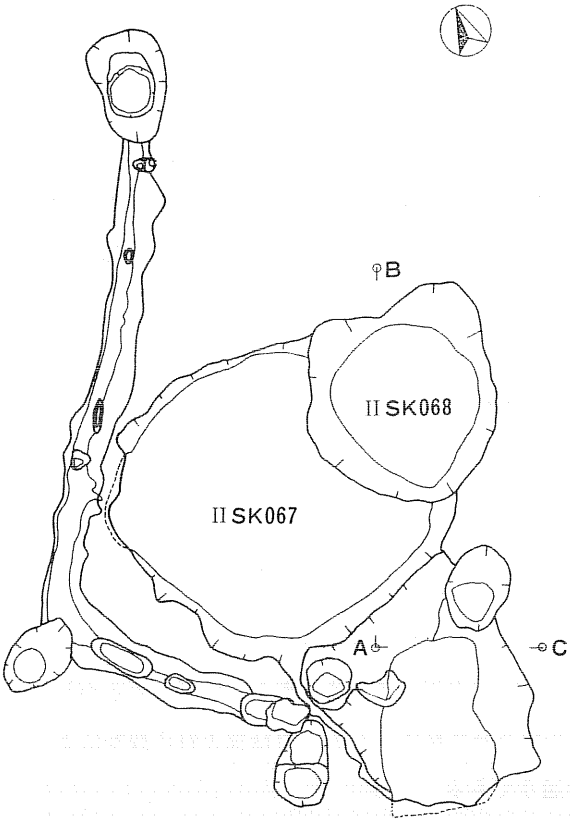
検出区　24－G・24－H
層位　1a 10YR3/3 黒褐色土
1b 10YR2/1 黒色土
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 10YR3/3 黒褐色土
4. 10YR2/1 黒色土
5. 10YR3/2 黒褐色土
LB. 10YR5/6 明褐色土
法量　口径 222×150
底径① 142×116
② 68×68
深さ 90

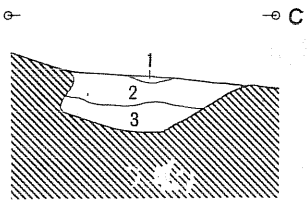
0　1 m

第15図　土壙実測図(10)

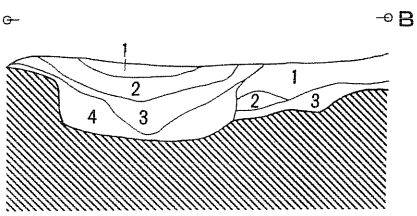


第16図　土壙実測図(11)



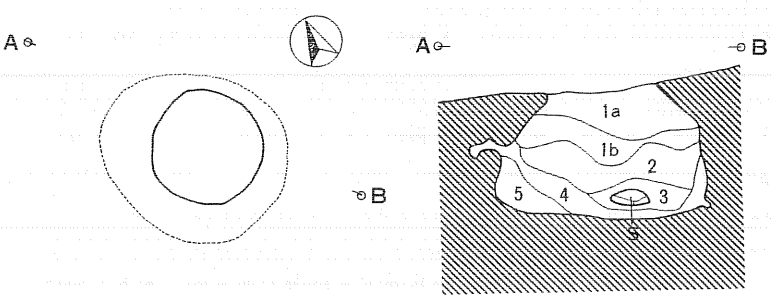


検出区　53－N
層位　1．7.5YR 5/6 明褐色土
　　2．10YR 3/2 黒褐色土
　　3．10YR 3/4 暗褐色土
法量　口径 136×96
　　底径 102×50
　　深さ 30

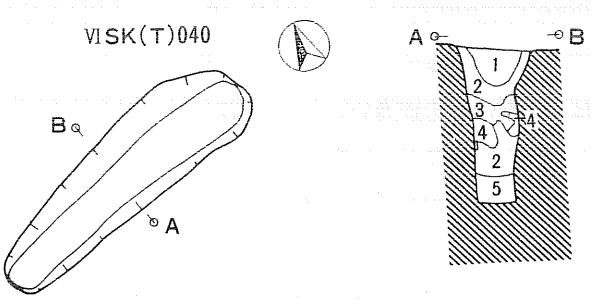


検出区　53－N
層位　1．7.5YR 5/6 明褐色土
　　2．5YR 5/8 明赤褐色土
　　3．10YR 3/3 黒褐色土
　　4．10YR 2/1 黒色土
法量　口径 184×160
　　底径 172×148
　　深さ 40

検出区　53－N
層位　1．10YR 3/3 黒褐色土
　　2．10YR 5/4 にぶい黄橙色土
　　3．10YR 1/1 黒色土
法量　口径 118×98
　　底径 88×66
　　深さ 23



検出区　21－K
層位　1a.10YR 3/2 黒褐色土炭化物
　　1b.10YR 3/2 黒褐色土炭化物
　　2．10YR 3/2 黒褐色土炭化物
　　3．10YR 3/2 黒褐色土炭化物
　　4．10YR 3/2 黒褐色土炭化物
　　5．10YR 3/3 黒褐色土炭化物
法量　口径 62×58
　　底径 100×88
　　深さ 72



検出区　16－EG
層位　1．10YR 3/1 黒色土
　　2．10YR 3/2 黒褐色土
　　3.10YR 3/3 黒褐色土
　　4．10YR 5/6 黄褐色土
　　5．10YR 3/2 黒褐色土
法量　口径 160×42
　　底径 156×20
　　深さ 82

0　1 m

第17図　土壙実測図(12)

出土遺物

《土器》

土器は時期的に大きく縄文時代の土器片と平安時代の土師器片とに分けられる。縄文時代の土器片には，縄文時代早期末～前期初頭の時期，縄文時代中期，縄文時代後期前葉～中葉，縄文時代後期末葉～晩期初頭のものが含まれる。

第Ⅰ群土器，縄文時代早期末～前期初頭のものを本群とする。

第Ⅰ類土器（第18図１～13，第19図１～10，第20図１～12，第21図１～７）

表裏縄文の土器である。表面を右側，裏面を左側に置いて図示する。縄文原体は大半がＬＲを用いている。ＲＬが用いられているのは，第18図１，第19図５，６，８，第20図６，７，８の７点であり，他は全てＬＲのものである。口縁部資料，胴部資料に分けて記述する。

《口縁部資料》（第18図）

原体の回転方向は，ａ横位，ｂ縦位，ｃ斜位（左上―右下），ｄ斜位（右上―左下）の４つが基本となり，そのうちのいずれか１つ乃至２つの組合せで施文される。口縁部資料の観察によれば，表面及び裏面での原体回転方向は以下の通りである。

表面	裏面
ａ横位……７，10，11，12	ａ横位……12
ｂ縦位……なし	ｂ縦位……７，10，11
Ｃ斜位（左上―右下）…３	Ｃ斜位（左上―右下）…１，５，13
ｄ斜位（右上―左下）…１，２，４，５，８，９，13	ｄ斜位（右上―左下）…３，８，９
ａ＋ｃ or ｄ……６，８	ａ＋ｃ or ｄ……６

また口縁部の断面形状は，口縁上端がやや外反するのが共通する特徴であるが，大きく分けると，

上端が丸味を帯び平縁となるもの……１～９

上端が丸味を帯び，10㎜前後の間隔で刻目をもつもの……10～13

の２種類がある。後者では刻目の方向は右→左のものが多い。

その他口縁部の特徴としては，5, 11のように口縁直下に竹管状工具の背面を用いて浅い沈線をめぐらすものがあり，11の沈線は17㎜程の間隔で押し引きされたものである。

《胴部資料》（第19図，第20図，第21図１～７）

第19図１～10の資料は，第18図９の口縁部資料とともに同一個体である。表面に地文として

第18図　出土遺物・第Ⅰ群土器(1)

ＬＲ原体が，横位乃至右上一左下の方向で回転施文された後，同一原体の圧痕による文様が施される。比較的圧痕の明瞭に観察できる第19図３の資料によれば，ＬＲ原体１条に連弧状に垂下するように他のＬＲ原体１条を絡ませ，その圧痕で文様を表出させている。土器全体の文様の復元はできないが，以上の基本的なパターンが繰り返されて器面に何段か施されている。胴部での原体の回転方向は一定していない。

第１類土器は胎土に細砂粒が混入されるが，焼成は良好で堅緻な仕上りとなっている。

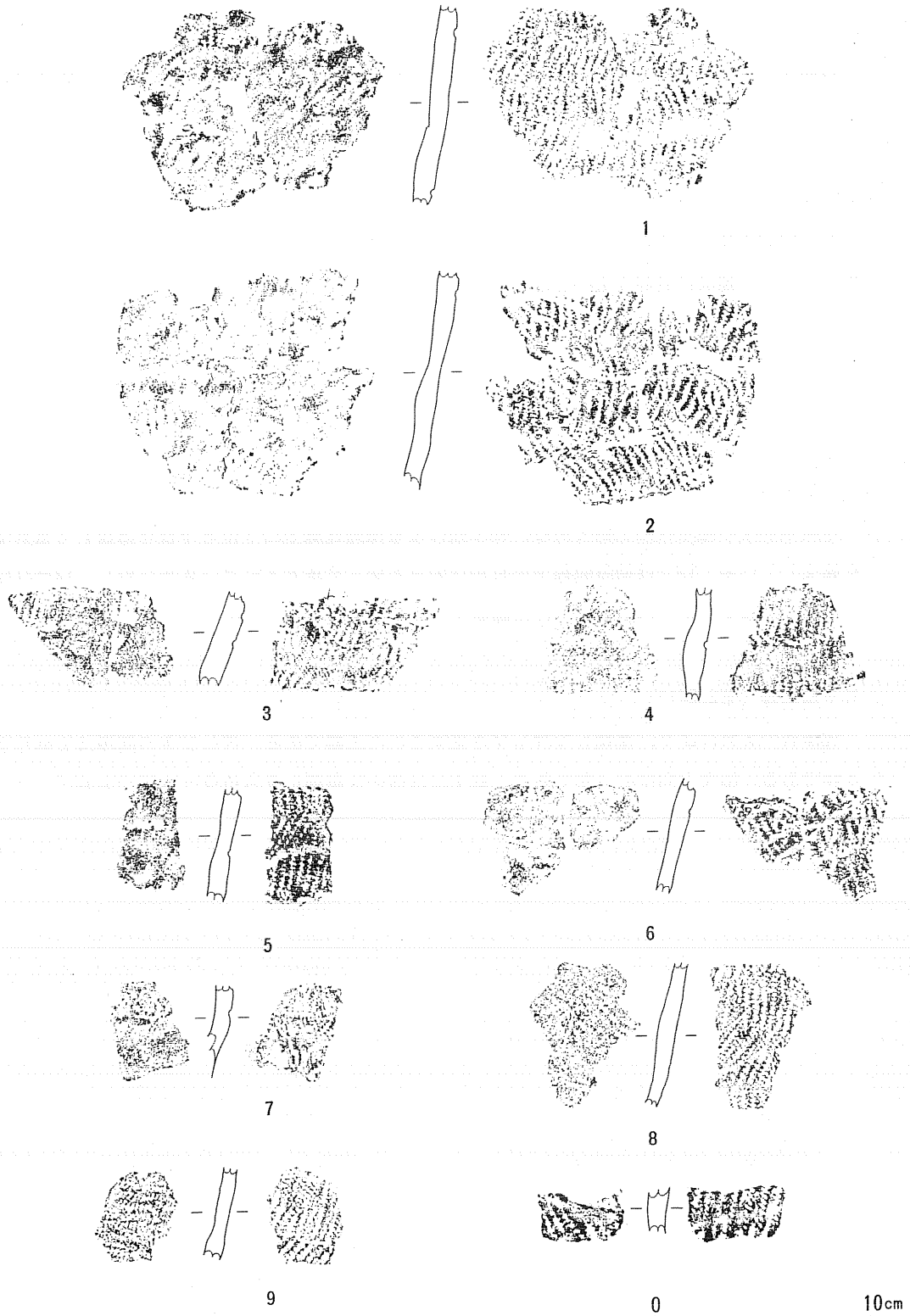
第２類土器（第22図１～17）

連続刺突文，ループ文，コンパス文によって文様構成される土器である。第22図１～17は同一個体である。口縁部及び胴部には４条づつの連続刺突文帯がめぐる。連続刺突文は１段の撚りの縄文原体の先端（１段→２段の際に折り曲げられる側）を器面に押し付けて施文している。施文方向は左→右である。刺突文の施文にさきだち，刺突列が最終的に条をなして施文されるように先端の鋭い工具により４条の刻線を施文し，刺突文はその上から施されている。

ループ文は１段撚りの縄文原体ＲとＬの２種類を用いて施文している。１段→２段の際に折り曲げられる側と逆側の先端を，Ｒの施文列では器面に対して左に折り曲げ，Ｌの施文列では右に折り曲げて施文している。施文方向は同じく右→左である。コンパス文は，幅10㎜程の半截竹管状の工具を用い，左→右の方向で施文している。全体では緩い波状口縁を呈し（波頂部は左右対称ではなく右側による），やや開き気味に立ち上り胴部が膨らむ器形を呈すると思われる。胎土はかなり砂質の土を用い製作されているが，焼成は比較的良好に行われ堅緻な仕上りになっている。

第３類土器（第22図18～28，第23図１～６）

複節の斜縄文を施した土器である。第22図18～28，第23図１～６とも同一個体である。使用されているのは，ＬＲＬの原体である。原体は口縁部近くでは正確に構位に回転されるが，底部に近づくにしたがい回転方向にずれが生じる。また第22図18～21，23，25等に顕著であるが原体の１方の先端を２条のＲの原体で縛っているため，その圧痕も器面に表われている。器形は平縁の深鉢形をとると思われるが，底部近くの資料から判断すれば底部は鈍角の尖底になると思われる。器壁には多量の繊維を混入させるが，焼成は良好で堅い。



第19図　出土遺物・第Ⅰ群土器(2)

第４類土器（第23図７）

器面全体にＬＲの斜縄文を施した土器である。原体の回転方向は一定していない。胎土は砂粒を多く含むが繊維は含まない。

第５類土器（第23図８，９，10）

羽状縄文を施した土器である。原体はＬＲとＲＬのものを結束して用いている。胎土中には繊維を含み，焼成は良好なものとなっている。

第６類土器（第23図11，12）

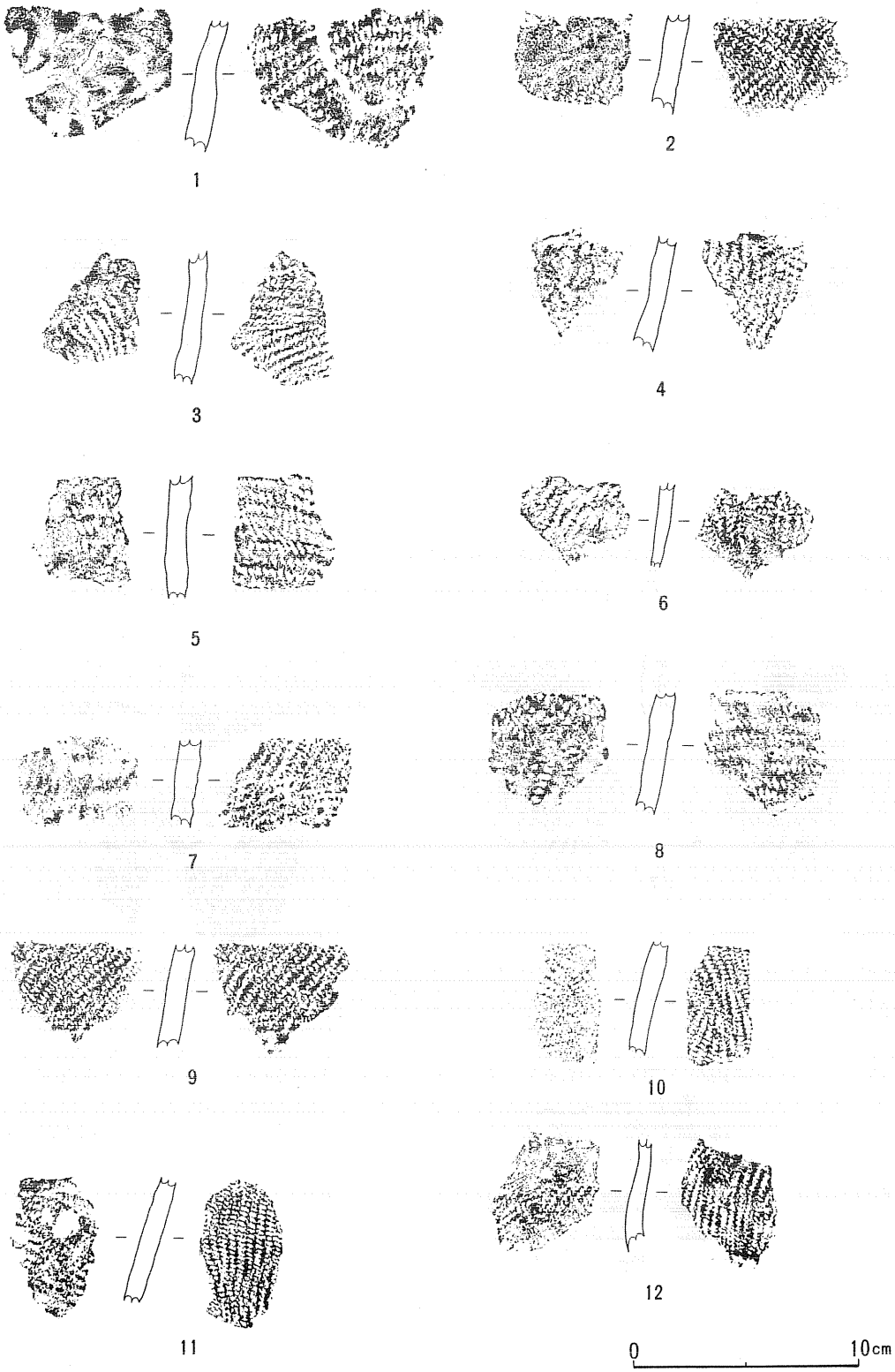
組紐の回転圧痕されたものである。

第７類土器（第23図13，14）

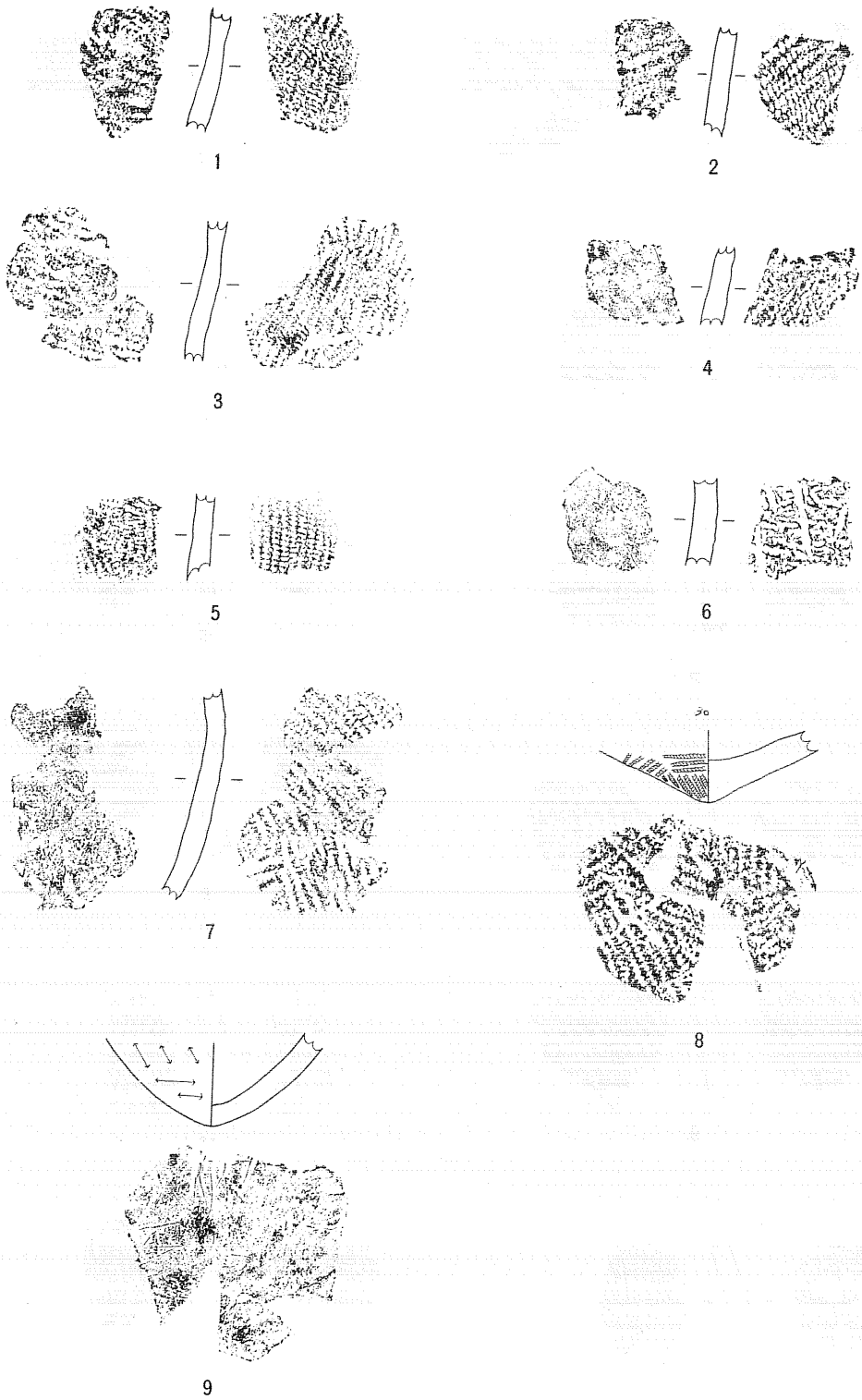
連続瓜形文の施された土器である。粘土紐による微隆起線上に上位と下位と連続して瓜形文を施文している。13では微隆起線上の瓜形は向きを変えて施文されているのに対し，14では同一の方向に施文されている。胎土には繊維を含まず焼成は良好である。

第８類土器（第23図15）

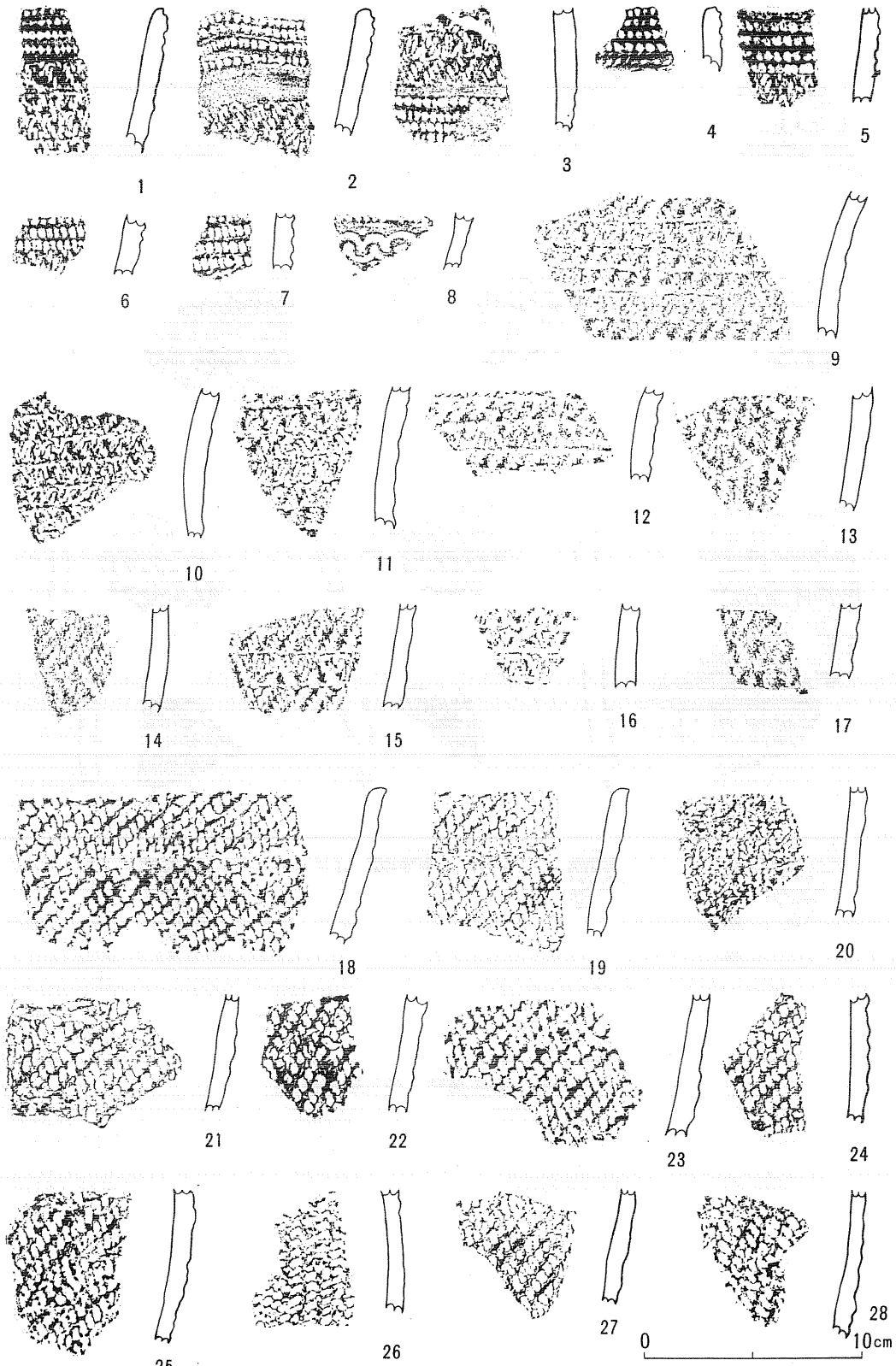
角棒状の工具により，連続して押しびき施文された土器である。押しびきの間隔は２㎜乃至３㎜である。施文方向は右→左である。胎土には僅かに繊維を含み焼成は良好である。



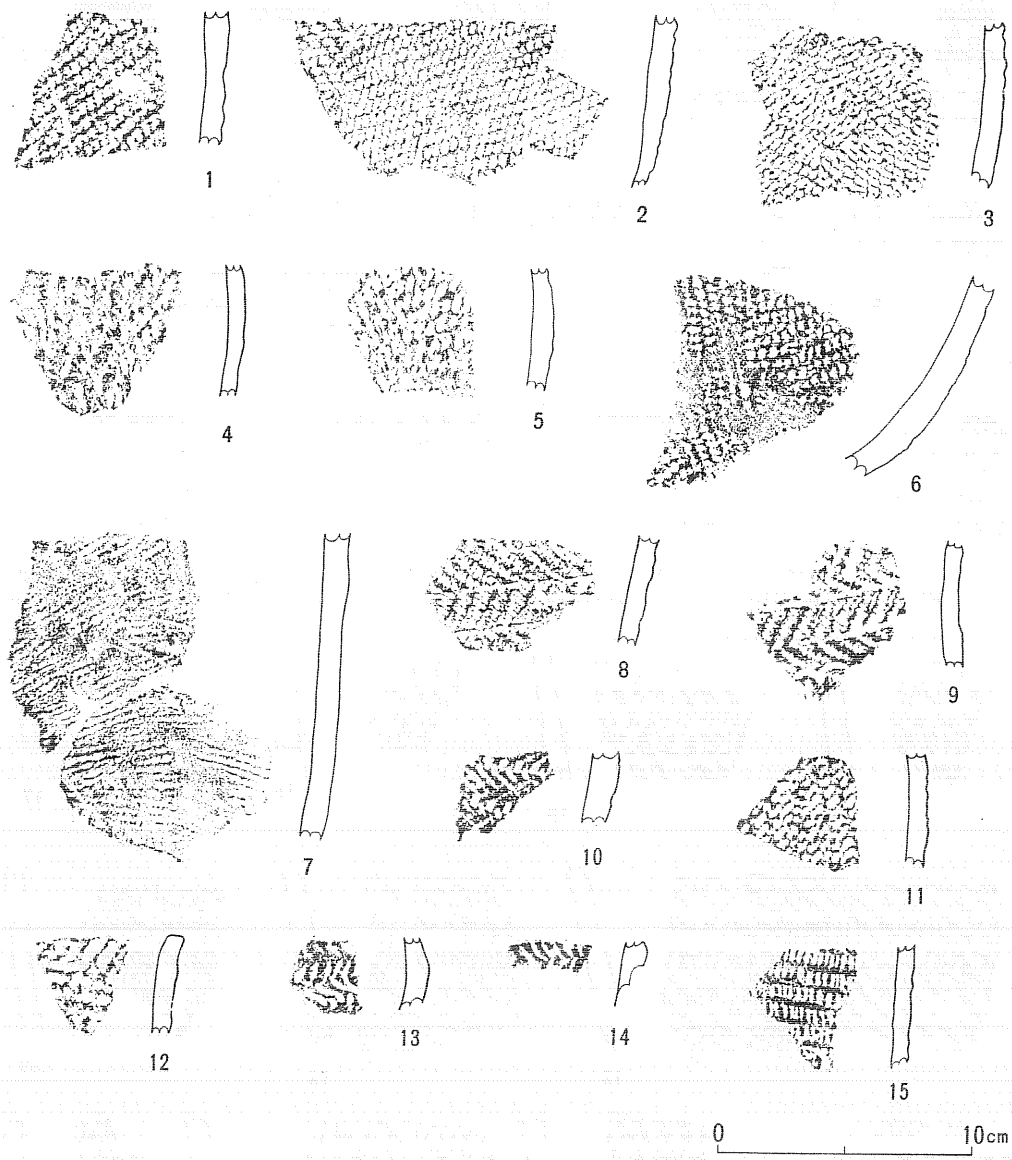
第20図　出土遺物・第Ⅰ群土器(3)



第21図　出土遺物・第Ⅰ群土器(4)



第22図　出土遺物・第Ⅰ群土器(5)



第23図　出土遺物・第Ⅰ群土器(6)

第Ⅱ群土器　縄文時代中期のものを本群の土器とする。（第24図１～３，第26図１）

４片とも同一個体である。弁状突起には粘土紐の隆帯を貼付している。地文としての縄文はＲＬを用い，突起下部ではその上に半截竹管による沈線文が描かれる。胎土中には細砂粒が若干量混入し，焼成は良好である。

第Ⅲ群土器　縄文時代後期前葉～中葉のものを本群とする。

第１類土器（第24図４）

隆帯と沈線文による文様構成をとる土器である。口縁は波状口縁を呈し，口唇に沿って隆帯が張り巡らされ，隆帯上にはＬＲ縄文が施される。また，波頂部から隆帯を垂下させている。隆帯で区画された中には沈線文が地文上に描かれる。胎土には細砂粒が含まれ焼成は良好である。内面は二次火熱のためか斑状に剝落している。

第２類土器（第24図５～17）

磨消縄文手法のとられる土器である。沈線によって直線的な構図を描き，沈線による区画に沿って地文の縄文を磨消している。地文として用いられる縄文はＬＲが多い。胎土中には僅かに砂粒を含み，焼成は概して良好である。

第３類土器（第24図18～20）

無文の土器である。口縁端が大きく肥厚する。器面の無文調整は丹念なミガキによってなされている。20は山形の大きな突起となるものである。胎土は比較的精選されており焼成も良好である。

第Ⅳ群土器　縄文時代後期末葉～晩期初頭のものを本群とする。

第１類土器（第24図21～32，第25図１～11）

磨消縄文手法により，入組文及び連弧文等の描かれるものである。入組文の入組部分で沈線が三叉状に変化するものである。また口縁部には所謂魚尾状の突起や，山形の突起を持つものもあり，突起下の空間にも三叉文が入れられる例もある。また第25図11は，器面に獣面状の突起を作出したものである。

第26図２は，台付の鉢形土器である。口縁には上端に刺突のある突起，刻みのある突起，山形の突起の三種類の突起が付けられる。突起下には突起を囲むように沈線の連弧文が描かれ，体上半の文様帯内では上下を区画する沈線から，互いちがいに向き合う弧線が描かれている。地文としてはＬの無節の縄文が用いられている。

第２類土器（第25図12～19，第26図３～６）

口縁部が無文化され，三叉状陰刻を基調とする模様が施される土器である。12のように玉抱きの三叉文の形状をとる場合もある。

第26図３は，口縁部と胴部の境に屈曲部をもつ鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し，波頂部間を連続する弧状沈線が連結する。屈曲部には短沈線列がめぐる。胴部の文様帯には磨消縄文手法による入組文が描かれる。地文として用いられている縄文はＬＲである。

第26図５は，口縁部からゆるい曲線を描いており る鉢形土器である。口縁部の文様帯には弧状沈線と三叉状沈線が描かれる。文様帯の下限は２条の平行沈線で画される。胴部以下にはＬＲの縄文が回転施文される。第26図６は台付の鉢形土器である。口縁部には４単位の突起が付され突起間もまた小波状を呈する。口縁部と胴部の境には屈曲部があり，口縁部文様帯と胴部文様帯を画しているが，両文様帯ともに三叉状沈線が描かれる。胴部文様帯の下限は３条の平行沈線で画される。また台部との境にも２条の平行沈線がめぐる。台部の文様帯は３段に分けられる。上段の文様帯には枝線をもつゆるい波状沈線が描かれる。中段の文様帯には楕円形と円形の透し彫りが交互に配され，その間を波状沈線が連絡する。また，この区画の内部を三叉状の透し彫りが充塡する。下段の文様帯には三叉状の沈線が施される。地文として用いられているのはＬＲの縄文である。

第26図６は浅鉢形の土器である。器形から推して台部の付く可能性もある。口縁部文様帯は欠失しており不明であるが，体部上半の文様帯には三叉状の沈線が円形の刺突を中心として配される。文様帯の下限は２条の平行沈線が画する。胴部以下にはＬの無節の縄文が回転施文される。

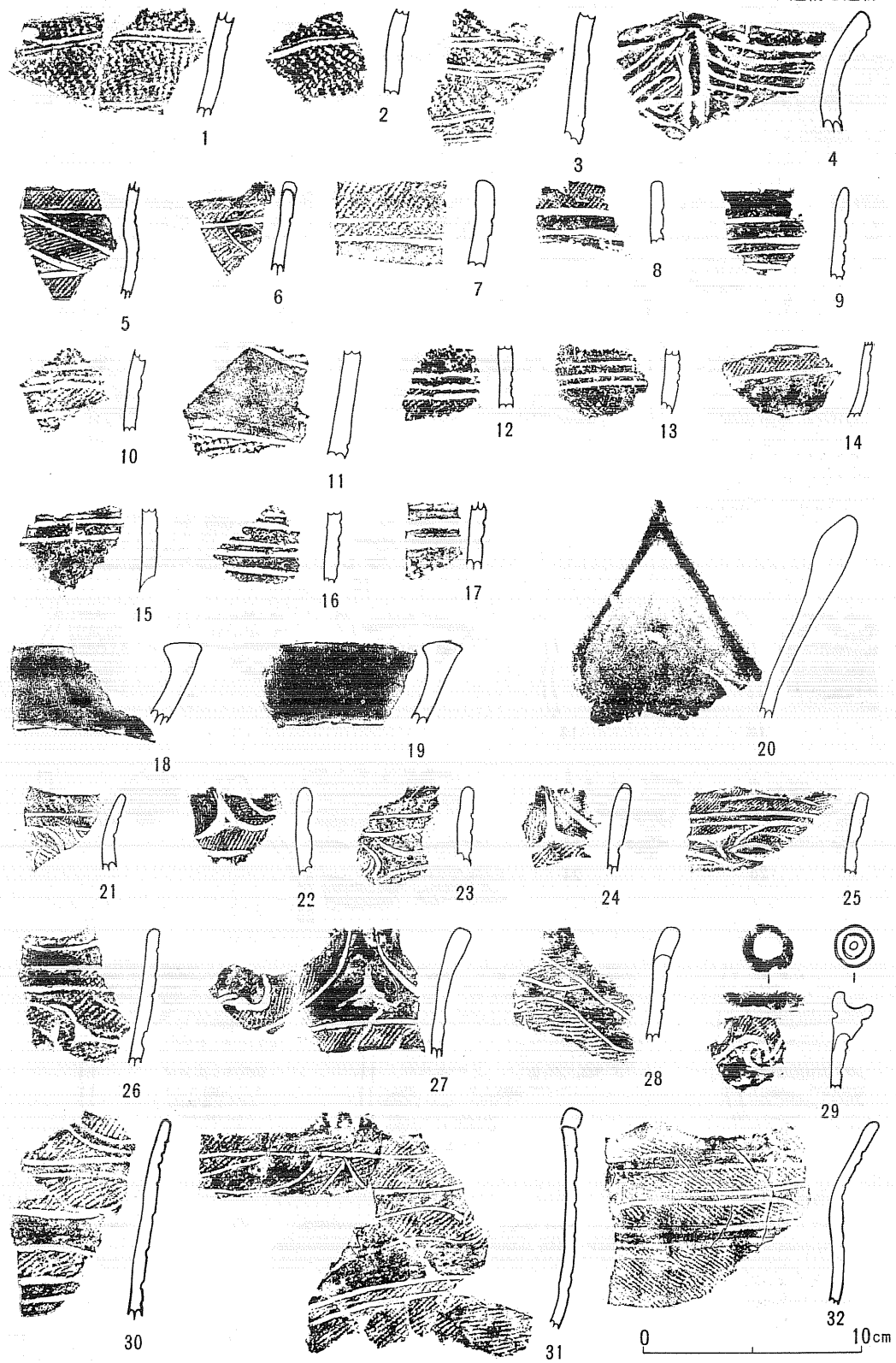
第２類土器の胎土は概して精選されており，器面も文様帯を中心に非常によく研磨されている。焼成も良好で堅緻な焼き上がりになっている。

第３類土器（第25図20～24）

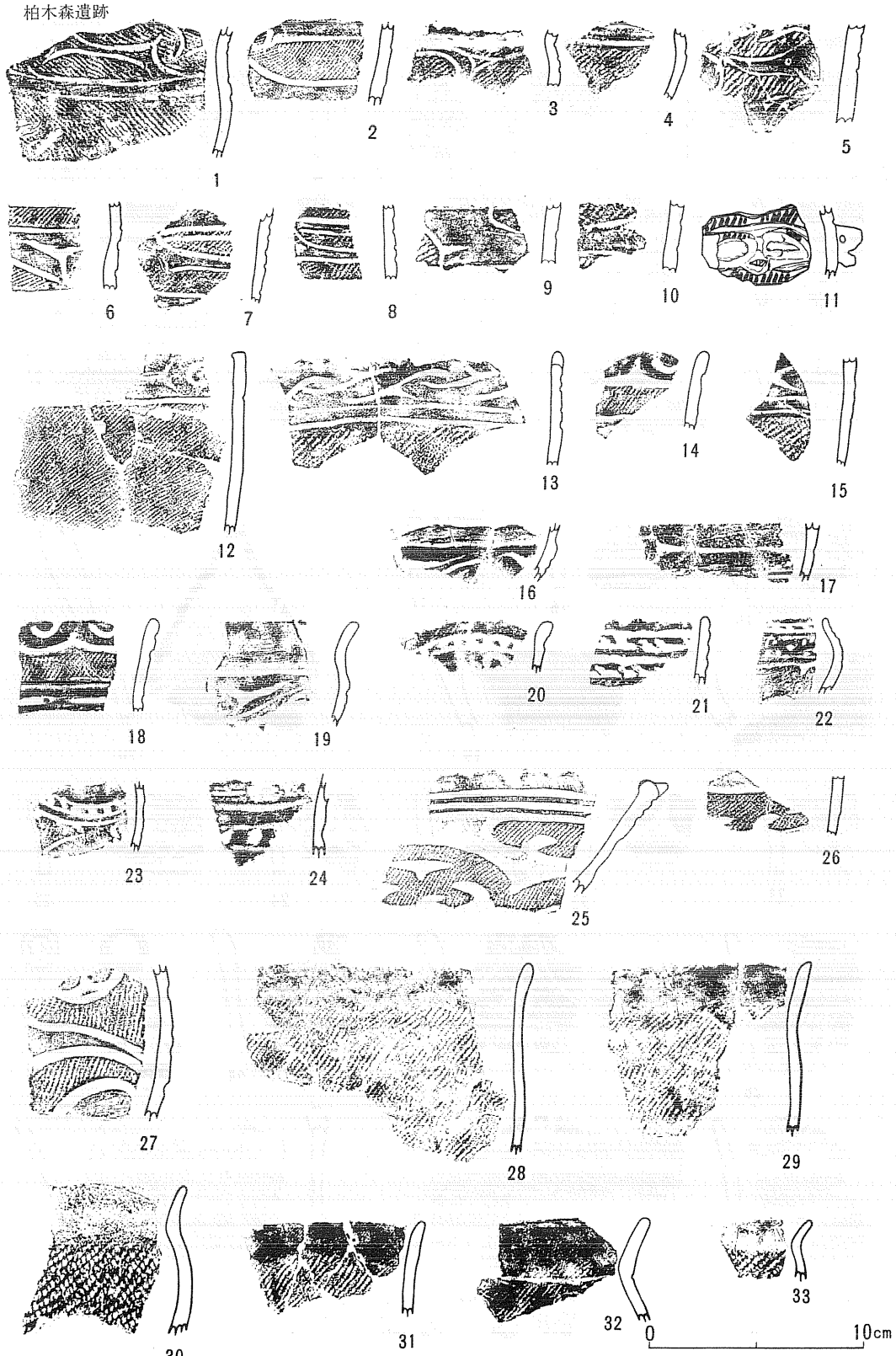
羊歯状文及び羊歯状文の変化した截痕列の施された土器である。明確に羊歯状文と言い得るのは22のみであり，他のものはかなり大きめの截痕列と化している。第２類土器同様胎土は精選されたものが用いられ，焼成も良好である。

第４類土器（第25図25～27）

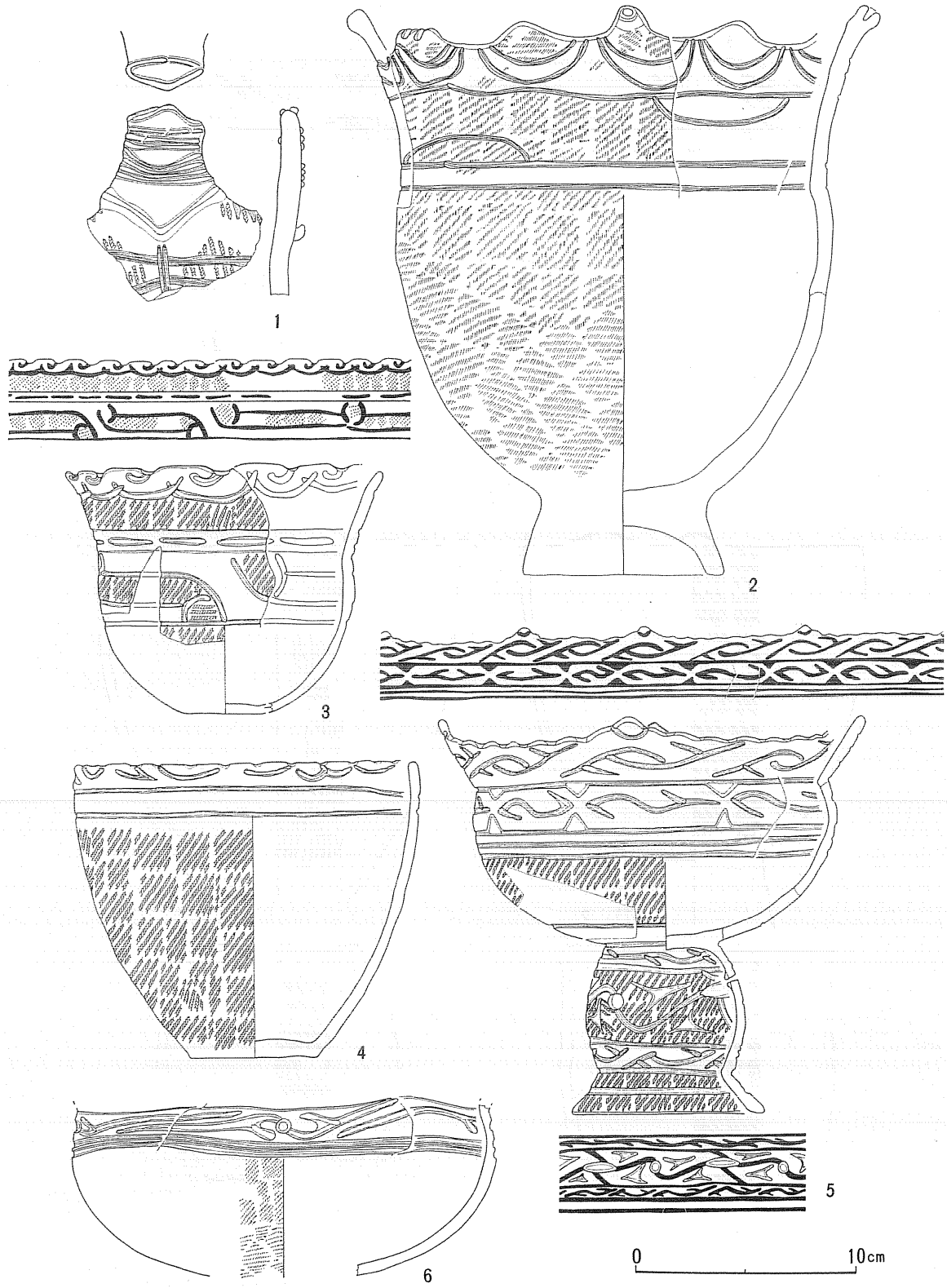
体部の磨消縄文の発達したものである。25は浅鉢形の土器である。口縁に所謂２個１対のＢ突起が付され，体部文様帯の上限は３条の平行沈線によって画される。27はかなり太い沈線によって磨消部分を区画したものである。地文に用いられるのは25～27ともＬＲ縄文である。



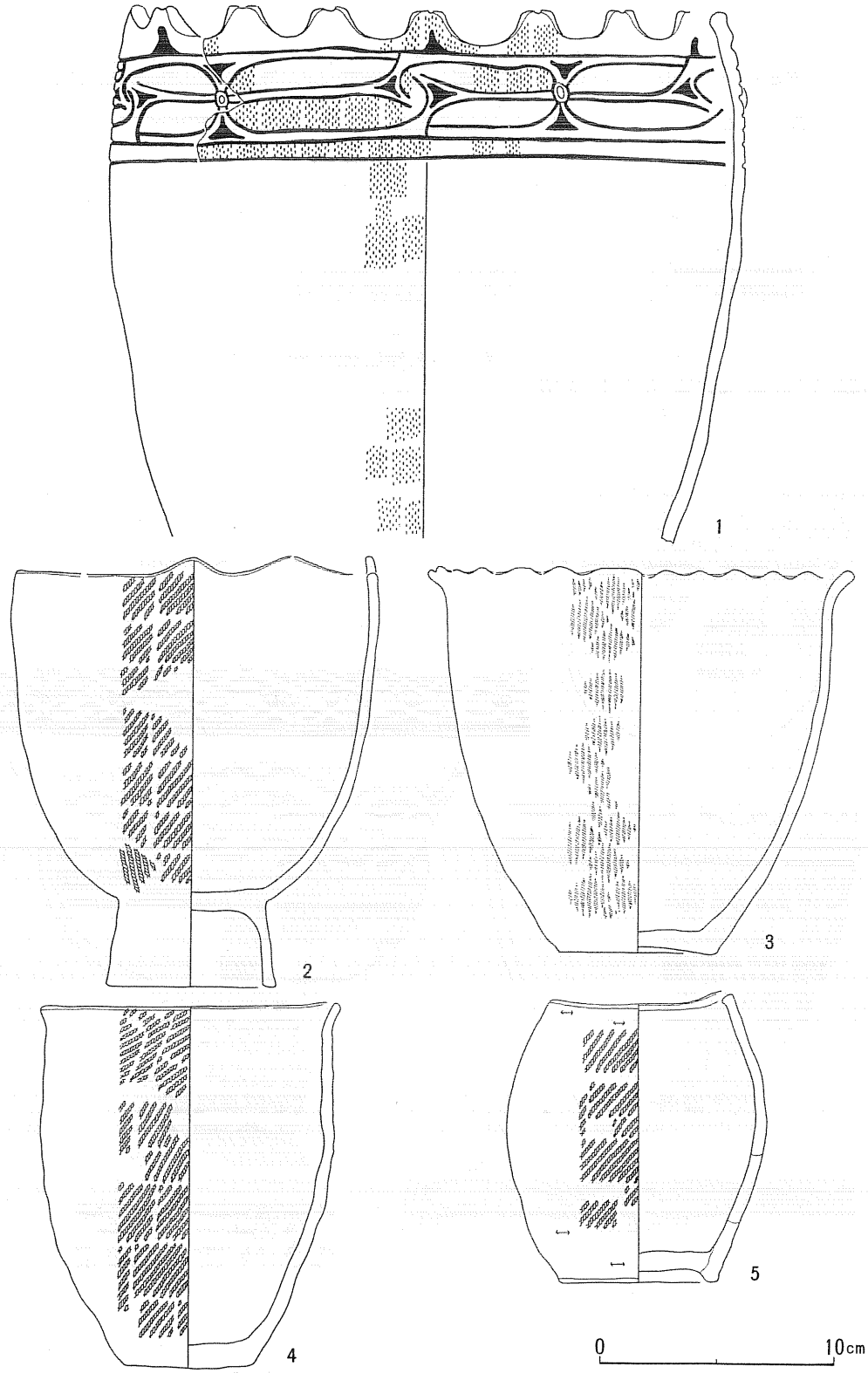
第24図　出土遺物・第II群，III群，IV群土器



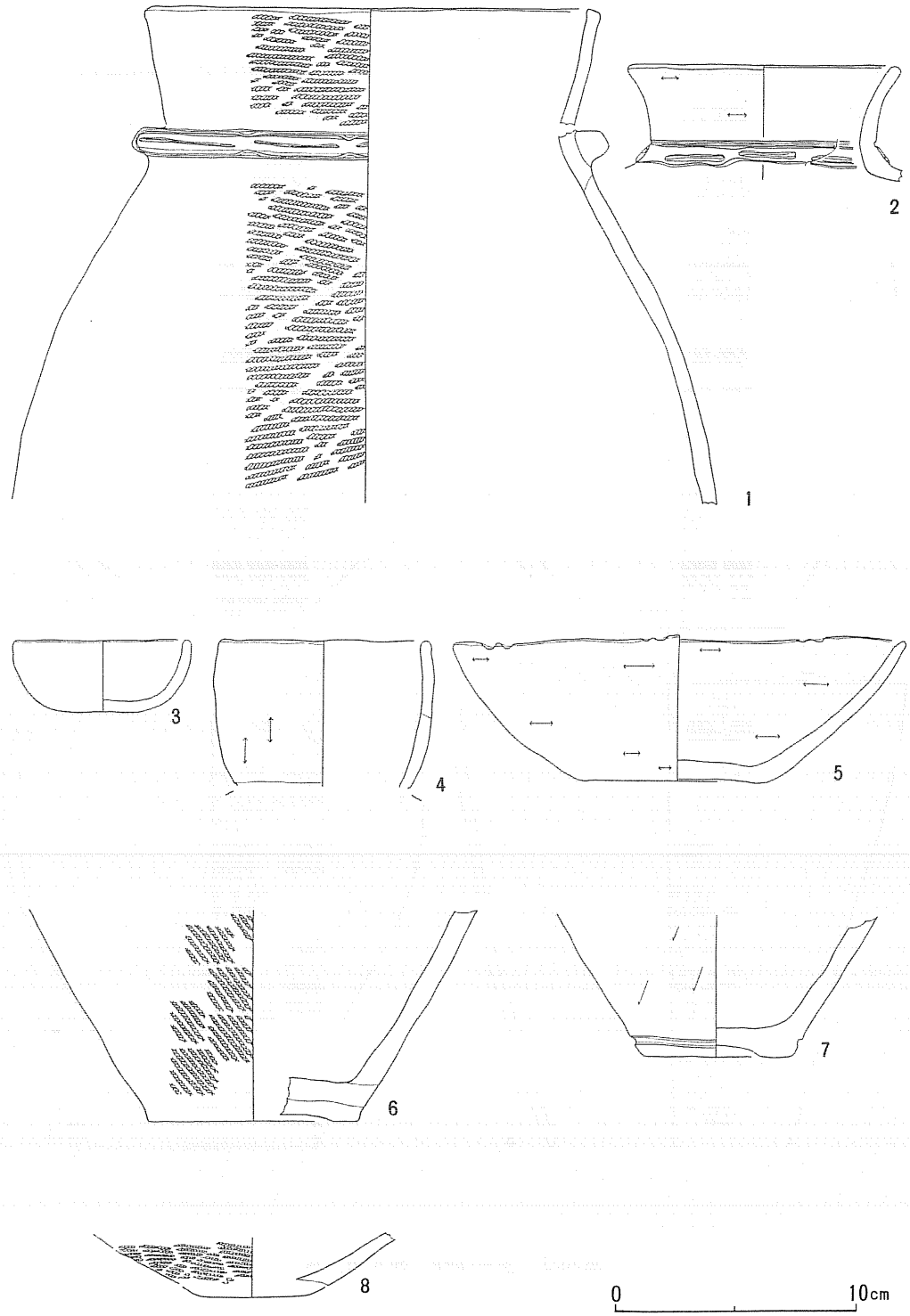
第25図　出土遺物・第Ⅳ群土器



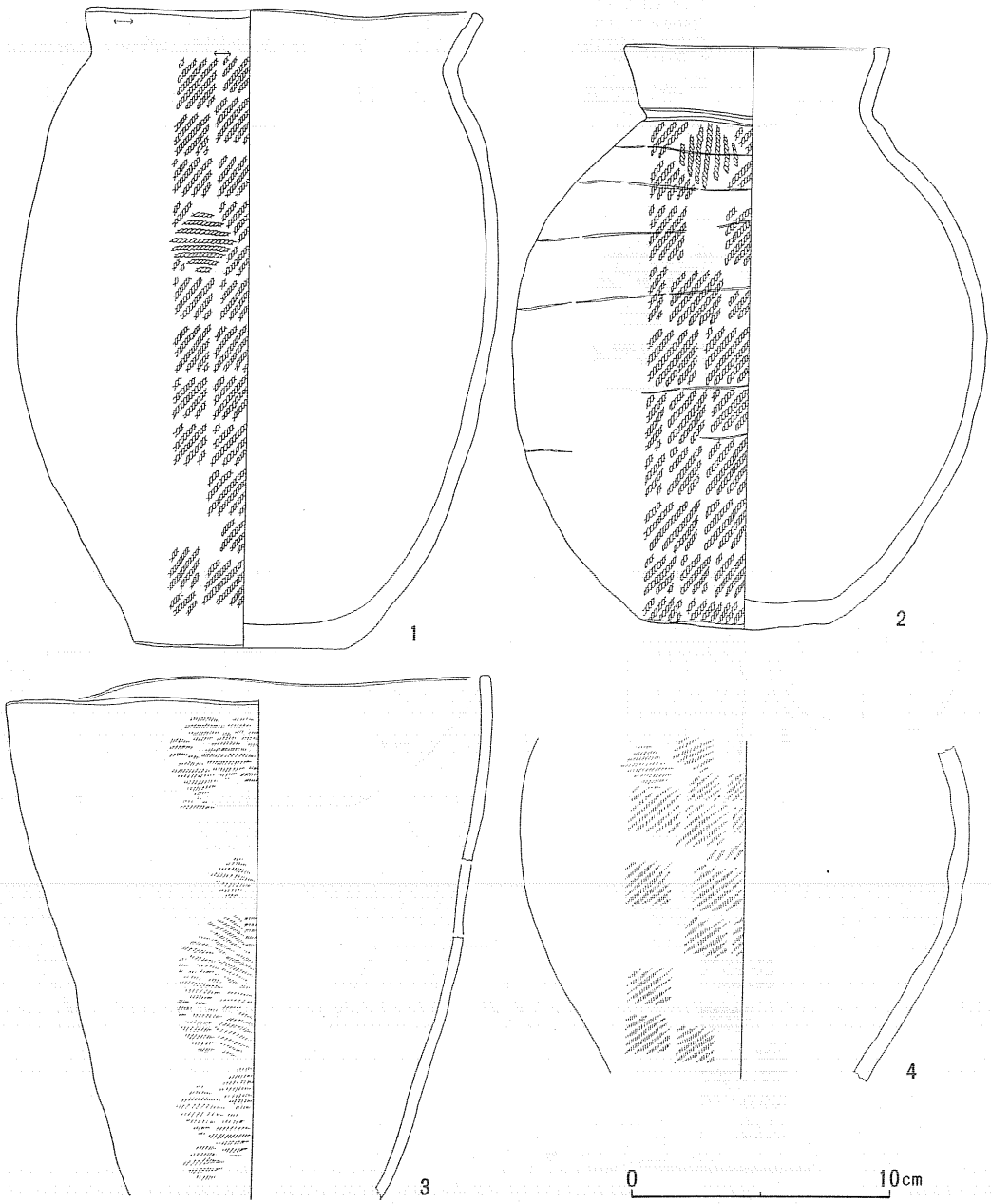
第26図　出土遺物・第II群，Ⅳ群土器



第27図　出土遺物・第Ⅳ群土器



第28図　出土遺物・第Ⅳ群土器



第29図　出土遺物・第Ⅳ群土器

第５類土器（第27図２～５，第29図１～４，第25図28～33）

文様をもたず，縄文だけの施された土器である。器形は台付の鉢形，鉢形，壺形等がある。縄文はＬＲが多いが，第27図３，第29図３，４ではＬの無節の縄文が施されている。また第25図28～33のように口縁部が無文化されるものもある。胎土は砂粒を多く含む。

第６類土器（第28図１，２）

頸部に所謂メガネ状の突起をもった土器である。器形はやや広口の壺形をとる。頸部の突帯上には間隔をおいて沈線がひかれる。第28図１では口縁部と体部にＬＲの縄文が施される。胎土は砂粒を多く含む。

第７類土器（第28図３，４，５）

器面が無文研磨された土器である。第28図４は縦方向，第28図３，５は横方向に研磨されている。第28図５は口唇部に刻目をもつ。胎土は精選されており，焼成も良好である。

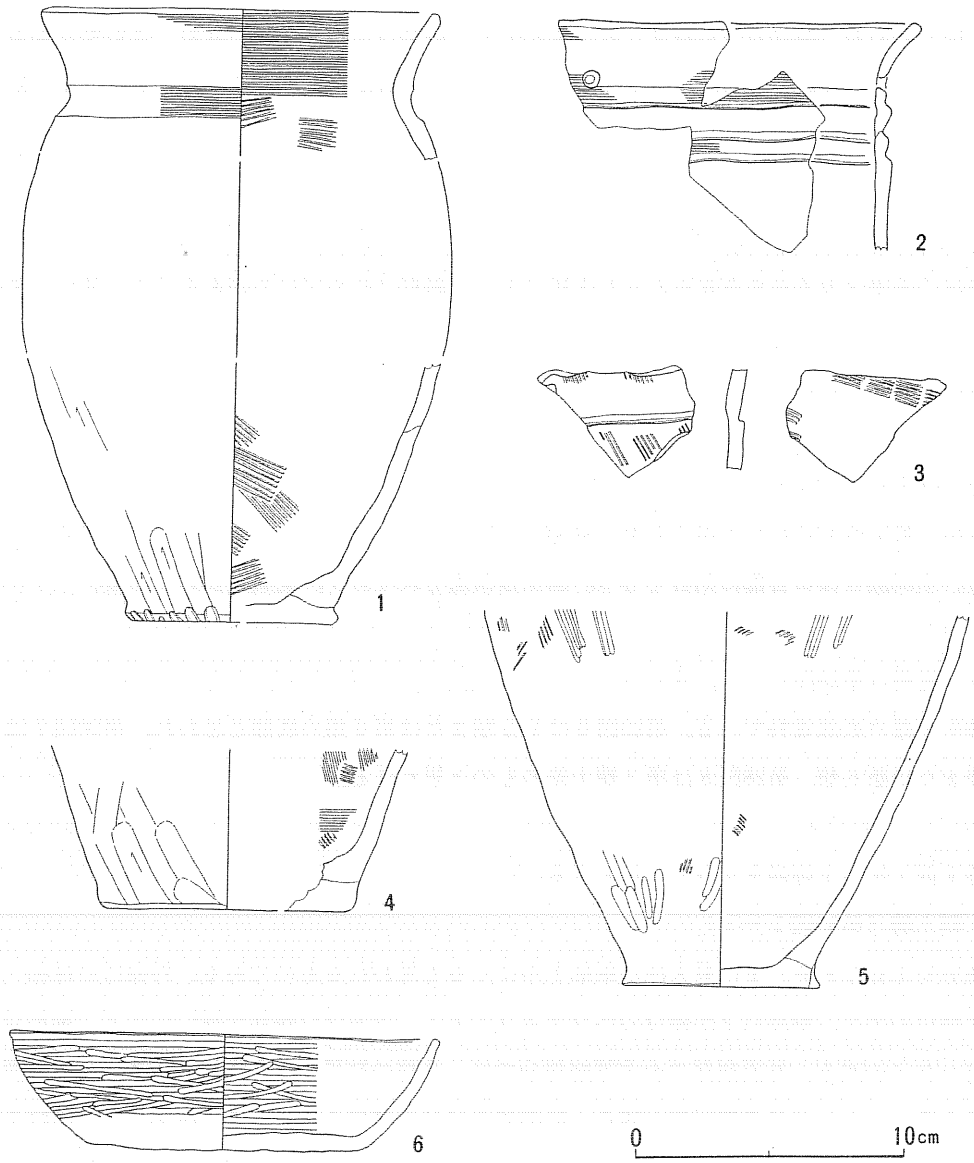
底部資料（第28図６，７，８）

鉢形土器の底部資料である。第28図６は第５類または第６類の底部と思われ，第28図７は第２類または第６類，第28図８は第２類土器のものと思われる。

第Ⅴ群土器　土師器を本群の土器とする。

第１類土器（第30図１～５）

甕形の土器である。１は最大径が胴部上半にくると思われるものである。外面は口縁部～頸部が横位のナデ，胴部以下が縦位のヘラケズリである。内面は口縁部が横位のナデ，胴部以下にはハケメが残る。外面頸部のナデ調整部分では，調整の結果２本の隆線が残る。また外面底部近くではヘラ状工具の押圧痕が残る。底部底面には木葉痕を残す。２は頸部に３つの段をもつ甕形土器，口縁部～頸部の破片である。外面は横位のナデにより調整されるが，体部以下にはミガキが施される。内面は口縁部が横位のナデ，頸部以下にはミガキが施される。また口縁部は１個所穿孔されている。３は内外面ともにハケメを残す甕形土器頸部の破片である。外面に１段屈曲部を残す。又は外面ヘラケズリ，内面ハケメの残る甕形土器の底部である。５は内外面ともハケメを施した後ミガキ調整を行っている。底部は意図的に張り出させたと思われ，底面も丹念なミガキ調整が行われている。第１類土器は胎土中に砂粒を若干量混入している。



第30図　出土遺物・第Ⅴ群土器

第２類土器（第30図６）

坏形の土器である。外面は主に横位のミガキ，底部及び底部近くではケズリののちナデ調整を行っている。内面は横位のミガキを施し，後に黒色処理を行っている。胎土はよく精選された粘土を用い焼成も良好である。

《石器》

出土した石器は，表採，遺構外，遺構内のもの合わせて71点である。フレイクが大半を占めるが，トランシェ様石器と見做すことの出来るもの４点，磨製石斧２点が含まれる。

トランシェ様石器

第31図１は，最大長36㎜，刃部の幅27㎜，刃部角57°，本体の厚さ11㎜である。両面とも丁寧な調整加工が施されている。

第31図２は，縦長の剥片を用いたものである。最大長75㎜，刃部の幅39㎜，刃部角79°，本体の厚さ16㎜である。両側縁から表裏両面に調整剥離が施されるが，片面の刃部に近い部分では素材剥片の主要剥離面が残る。刃部は素材剥片の最も古い面が用いられる。また，基部には打面として母岩の自然面がそのまま残る。

第31図３は，横長の剥片を用いたものである。最大長70㎜，刃部の幅45㎜，刃部角44°，本体の厚さ14㎜である。素材の主要剥離面には刃部を除いて殆ど調整剥離は施されていない。表面の調整剥離は両側縁に加えられ，刃部及び基部では素材剥片の剥離面がそのまま残る。

第31図４は，基部及び刃部とも折損したものである。現存する部分での最大長65㎜，刃部の推定幅40㎜程，本体の厚さ22㎜である。素材剥片の主要剥離面側には，右側縁からの調整剥離が施されるが，左側縁からの調整剥離はない。表面には全体に両側縁からの加工が施されている。刃部は素材の主要剥離面側からの強い力で欠損したと思われる。基部も同じく主要剥離面側からの力が加えられているが，欠損したとするよりも基部の整形のため加撃したようにも見える。

第31図５は，かなり肉厚の横長の剥片を用いている。この図では素材剥片の主要剥離面側を左において図示している。最大長100㎜，刃部幅61㎜，刃部角54°である。素材剥片の主要剥離面では専ら側縁の整形のための剥離が行われるのみである。表面では左側縁からの調整剥離が施されるが，刃部及び右側縁は調整が行われていない。

第31図６は，ヘラ状石器乃至はトランシェ様石器の基部と思われるものである。両面に調整剥離が施されている。現存する部分で最大長46㎜，幅32㎜，最大厚25㎜である。

調整加工及び使用痕のある剥片

第31図７は打面として自然面を残している。現存部分での長さ42㎜，幅50㎜，厚さ13㎜である。

第31図８は，表面左側縁が刃部として用いられている剥片である。最大長95㎜，最大幅57㎜厚さ22㎜である。表面及び主要剥離面には全く調整剥離が施されていない。

第32図１は，素材剥片の表面，左側縁に調整を加えた剥片である。また，右側縁下部にも僅かながら調整が認められる。調整は刃部を作出するような細いものではなく，粗い整形を施した程度である。刃部としては右側縁上部を用いている。主要剥離面側には何の加工も施されない。

第32図２は，素材剥片の表面，左側縁及び下縁に刃部作出のための調整剥離を加えた剥片である。右側縁は母岩の自然面をそのまま残す。主要剥離面側には何の加工も施されない。

第32図３は，構長の剥片を用い，素材剥片表面，図では左上の縁辺に刃部作出しの調整を施したものである。表面及び主要剥離面側からの剥離によって素材剥片の打面は剥除されている。

第32図４は，素材剥片の両側縁に刃部作出の調整剥離を施している。調整は主に主要剥離面側に行われる。素材剥片の先端は階段状剥離をなしている。

第32図５は，両側縁を刃部として用いた剥片である。調整剥離は全く施されていない。

第32図６は，素材剥片の両側縁，弧状に張り出した表面左側縁と，同じく弧状に内湾した石側縁部分を刃部として用いている。若干左側縁上部に調整剥離が施される。

磨製石斧

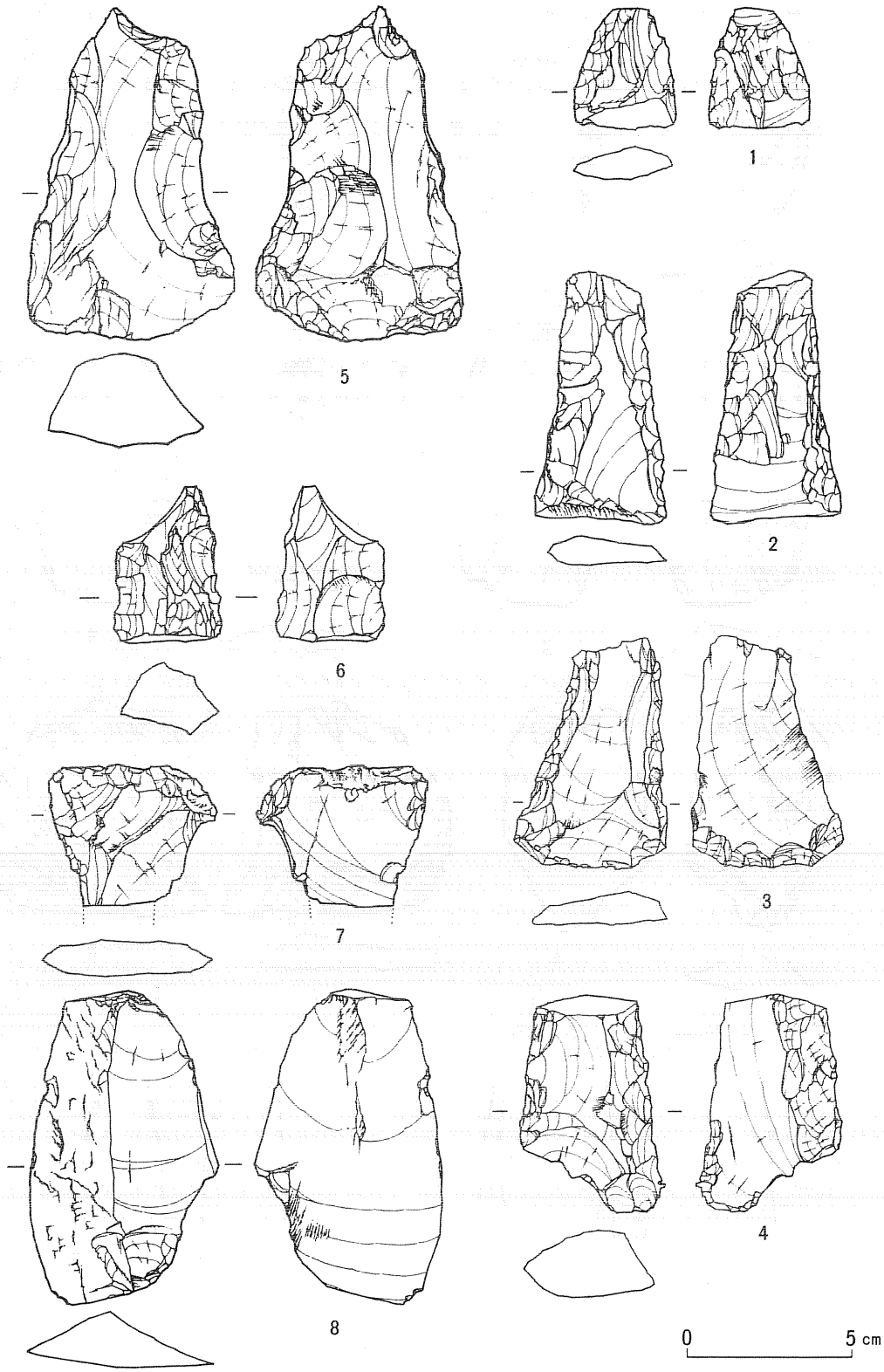
第32図７は，刃部と基部の幅が殆ど差のない平面形が短冊形の磨製石斧である。刃部は緩い弧を描き，刃部を正面に見た場合も直線とならず緩く湾曲する。側縁部の陵線は不明瞭で，断面形は隋円形を呈する。

第32図８は，基部の尖る撥形の磨製石斧である。刃部は比較的強い弧を描き，正面に見た場合直線をなす。側縁は陵線が比較的明瞭に残る。

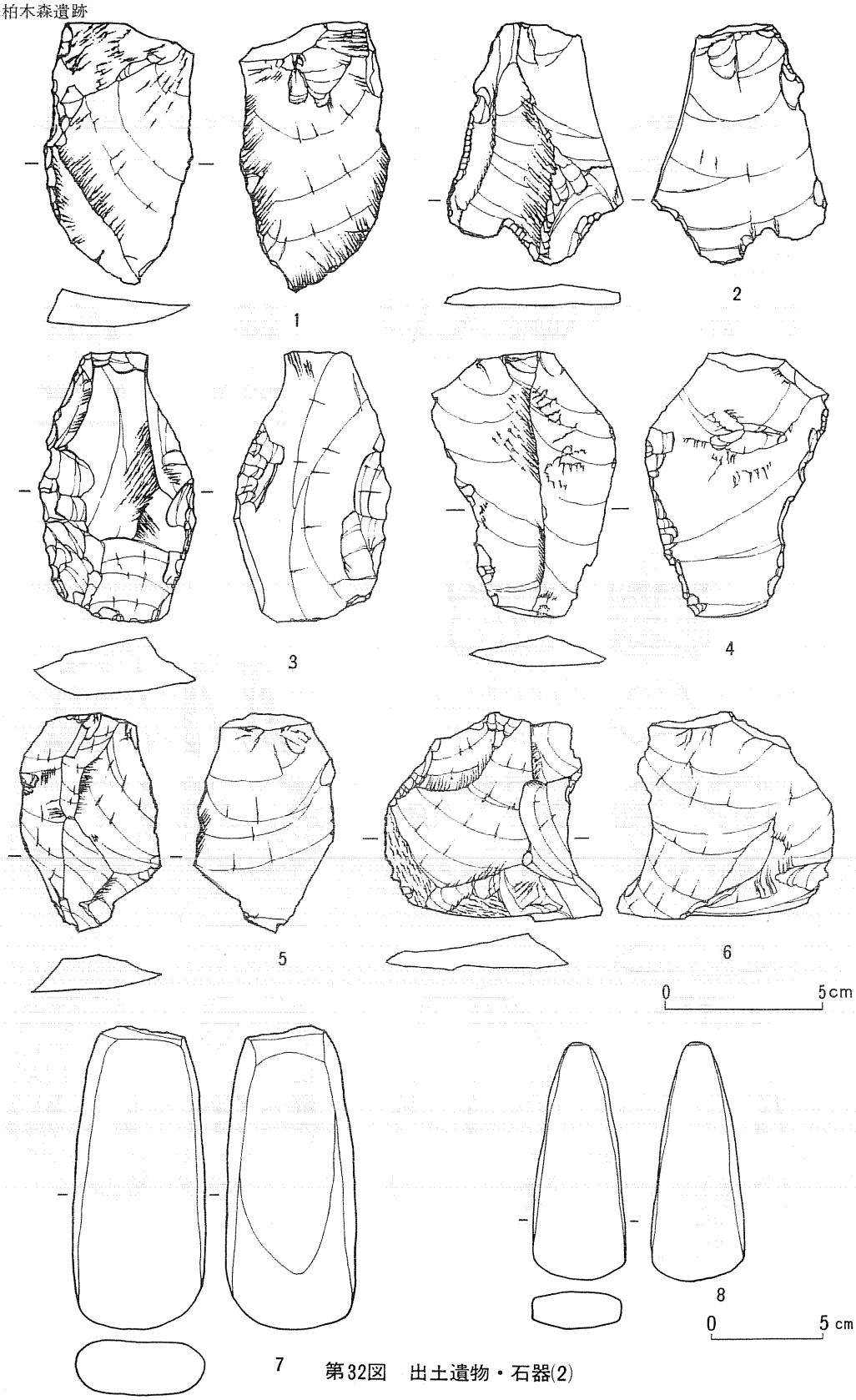
第１表　石器石質・出土地点一覧表

番号	石　質	出土地点	番号	石　質	出土地点
31—1	頁　岩	表　採	32—1	頁　岩	表　採
31—2	頁　岩	表　採	32—2	頁　岩	34 — I
31—3	頁　岩	30 — H	32—3	頁　岩	表　採
31—4	頁　岩	31 — F	32—4	頁　岩	80 — H
31—5	頁　岩	表　採	32—5	頁　岩	51 — L
31—6	頁　岩	44 — L	32—6	硬質泥岩	31 — N
31—7	頁　岩	表　採	32—7	花崗岩	34 — G
31—8	頁　岩	60 — J	32—8	流紋岩	59 — J

※表採としたものは重機による表土除去の際出土したものである。



第31図　出土遺物・石器(1)



第32図　出土遺物・石器(2)

6．まとめ

今回柏木森遺跡は，のべ108日間にわたっておよそ13,500m²を調査している。検出した遺構は，溝跡，道路跡，円形土壙，Tピット，掘立柱建物跡であり，遺物は縄文時代早期末葉～前期初頭，中期，後期前葉～中葉，晩期初頭，古代の各時期のものを出土している。広大な調査面積に比較して，検出遺構，出土遺物とも調査以前に予想した程の成果を挙げ得なかったが，2，3の検討すべき問題を提示することは出来たと思われる。ここでは，調査期間，整理期間を通して気付いたそれら若干の問題を整理してまとめにかえたい。

1）土壙について

本遺跡からは前述のように縄文時代各期，平安時代の遺物が出土している。このうち縄文時代晩期の遺物によって時期の特定が可能な遺構は60基に及ぶ土壙である。

検出された土壙は，その形態がおよそ円形である。径はおよそ70cmから200cmの範囲内に収まる。断面形は，検出面での開口部よりも壙底部がやや広くなる末広がりのものと，略方形のものとの二種があるが，構築面は検出面よりもかなり上位にあったと思われ，本来の断面形状は詳らかではない。覆土はおよそ自然堆積の状態を呈する。土壙内からの出土遺物は少なく，まれに完形または完形に近い土器を出土することがある。

以上のような形態をもつ土壙は調査区内に群をなして存在する。1群は調査区の中央部にあり，他の1群は調査区の北側を東西に横断する農道の南側に位置する。後者はまた2～3群に分けることも可能である。各群は各々10基前後の土壙からなっている。群在する土壙群は，群内で土壙どおしの新旧関係が認められる場合があり，土壙覆土内に黄褐色土のレンズ状堆積の認められるものを旧，認められないものを新として把えることができる。

土壙の廃絶が自然に任せたことをもって墓壙であることを否定し，即ち貯蔵穴とすることはできないが，仮に貯蔵穴とした場合遺跡全体をどのように復元することができるだろうか。

貯蔵に供された食料としては，植物性の食料が考えられており，主にドングリ・クリ等の出土例が多い。これらの堅果類は春には発芽してしまうことからその貯蔵は1冬に限られる。また採集時期も秋の1時期に限られている。採集時期が限られていることは，その時期に大量の堅果類の貯蔵の必要が生じることを意味する。おそらく冬期間の食料とされるものであるから，それは膨大な量にのぼったと思われる。これらの堅果類が，その採集地から居住地である集落へいちどきに運ばれ貯蔵された場合もあろうが，採集地近辺に仮に貯蔵し，後に居住地である集落へ運ばれた場合もあろうと思われる。居住地と採集地の距離が離れている場合，この様な

方策は容易にとられたと思われる。本遺跡に構築された土壙は，そのような仮の貯蔵を目的として構築された貯蔵穴ではないかと考えたい。

2．遺物

第Ⅰ群　第1類～第3類土器について

第1群土器は大まかに縄文時代早期末葉～前期初頭に時期比定し得る土器をあてている。細かくは第1類～第8類まで分類しているが，ここでは比較的資料の纏っている第1類～第3類の土器について特徴を要約し，型式的な内容を吟味してみたい。

第1類土器

①平縁（小波状を含む）の深鉢形の器形を呈する。（底部形状は不明）

②砂粒を混入させるが，植物性繊維の混入はない。

③口唇部がやや外反し，刻目を施す場合もある。

④器表面には斜行縄文が施され，原体の側面圧痕による文様が施される場合もある。

⑤裏面には器表面と同じ原体を用いて斜行縄文が施される。

第2類土器

①器形は緩い波頂部をもち，胴部に僅かにカーブをもつ深鉢形を呈する（底部形状は不明）。

②胎土には砂粒を混入させるが，植物性繊維の混入はない。

③口縁部～体部にかけて原体先端による刺突列，ループ文，コンパス文等の文様帯が重なり合う。

第3類土器

①器形は平縁の深鉢状を呈し，底部形状は鈍角の尖底を呈する。

②胎土には多量の植物性繊維を混入する。

③器表面には原体先端を縛った複節の斜縄文が施される。

以上が本遺跡出土第Ⅰ群土器中第1類～第3類の大まかな特徴を列記したものである。

東北地方北部での縄文時代早期後半から前期初頭にかけての土器編年は，青森県内の出土資料をもとにおおむね以下のように理解されている。

（日ケ久保式）赤御堂式⇨早稲田5類⇨長七谷地第Ⅲ群⇨早稲田6類C⇨早稲田6類a b⇨表館式
〈尾鮫式〉

この日ケ久保式から表館式に至る編年は，従来赤御堂式→早稲田５類→早稲田６類→表館式という大まかな型式変化の把握がされていた。しかし，早稲田６類の内容が細分される可能性を含むものであったため，長七谷地貝塚の調査によって指摘された第Ⅲ群土器の位置づけと，それによって分離された早稲田６類の細分型式が設定され，より細かに型式の変化が辿れるようになったものである。長七谷地貝塚の報告の中では各々の型式について細かな分析がなされているが，その推移を１．施文上の特徴　２．器形　３．胎土の３つの点に焦点を絞り大まかに見た場合以下の表のように要約できる。

第２表　縄文時代早期末～前期初頭土器編年（青森県内）

	１．施文上の特徴	２．器　　形	３．胎　土
（日ケ久保式） 赤 御 堂 式	単節の表裏縄文 一部に条痕文	尖底深鉢	繊維含まず
	↓		
早稲田５類 《長七合地第Ⅰ群ｂ類》	特殊原体（０段多条，附加条）による縄文	平底深鉢	繊維混入
	↓		
長七合地第Ⅲ群	０段多条の羽状縄文 横走縄文	丸底深鉢	繊維混入
	↓		
早稲田６類Ｃ	単節・複節 ０段多条の斜縄文	丸底・尖底の深鉢	繊維混入
	↓		
早稲田６類a.b 《尾鮫式》	類竹管の押しびき文	尖底深鉢	繊維混入
	↓		
表　館　式	ループ文・コンパス文	平底深鉢，汲状口縁	不　明

	鹿角地域内出土土器	備考
赤御堂式	a b	a. b. 柏木森遺跡第Ⅰ群 第1類土器
長七谷地第Ⅲ群	c d	c. d. 案内Ⅱ遺跡出土 R { L / Lの0段多条原体 / L } ○羽状縄文 ○繊維を含む
早稲田6類c	e f g	e. 柏木森遺跡第Ⅰ群 第3類土器 f. 柏木森遺跡第Ⅰ群 第5類土器 g. 上葛岡Ⅳ遺跡出土 ○RLR, LRL結束第1種羽状縄文 ○繊維を含む
早稲田6類a・b	h	h. 柏木森遺跡第Ⅰ群 第8類土器
表館式	i j	i. j. 柏木森遺跡第Ⅰ群 第2類土器

第33図　鹿角地域内早期末～前期初頭出土土器

このような縄文時代早期後半～前期初頭の型式変化の中に，本遺跡出土の第Ⅰ群第1類土器，第2類土器，第3類土器を位置づけるとするならば，第Ⅰ類土器は赤御堂式，第2類土器は表館式，第3類土器は早稲田6類Cにそれぞれ相当させ得る。また本遺跡出土の資料では極く僅かしか認められないが，第8類とした押しびき文の施された土器は早稲田6類のａｂに相当させることができ，第5類とした羽状縄文の施された土器は第3類と同様早稲田6類Cにあてることができると思われる。

秋田県内での該期の資料は未だ出土例が少なく，青森県内の編年に充当させるにも甚だ不充分な状況であるが，比較的調査が綿密に行われている鹿角地域内で（日ケ久保式）赤御堂式から表館式に至る型式に出土資料を対比させれば第33図のようになる。このうち，赤御堂式に相当し得る資料は鹿角地域内で比較的多く出土しており，本遺跡の他に大地平遺跡，上葛岡Ⅳ遺跡，猿ケ平Ⅱ遺跡等でも出土している。大地平遺跡出土資料の中には表裏縄文の他に条痕文を一部に施す資料も含まれ，青森県内の資料と共通する特徴をもつ。また赤御堂式土器の地域性として岩手県内の相当型式（崎山弁天資料）には胎土に繊維を含むことが指摘されているが，鹿角地域内の出土資料が繊維を含まないことも青森県内の資料と共通するところである。この他，表館式に相当する資料は妻の神Ⅱ遺跡からも出土している。

第Ⅱ群土器について

本遺跡出土の第Ⅱ群土器は，縄文時代中期のものをあてた。この同一個体4片の土器は弁状突起をもつこと，粘土紐の貼付文，沈線による所謂肋骨文と呼ばれる文様の施されることから円筒上層ｄ式に比定することが可能である。

第Ⅲ群土器について

本遺跡出土の第Ⅲ群土器は，縄文時代前葉～中葉までのものを含む。

第1類土器は出土片数が1片のみであるが，波状口縁を呈し粘土紐の貼付による隆帯と，その区画内に充填される沈線文によって特徴づけられる土器である。県内での類似の土器は，鹿角市飛鳥平遺跡，同市北ノ林Ⅱ遺跡，大館市鳶ケ長根遺跡等で出土している。これらの遺跡から出土している土器は口縁部に粘土紐隆帯による文様帯があり，体部以下の文様帯とが画然としていることが共通する特徴である。青森県内でも近年同様の資料の増加からその位置づけが問題となり，従来の十腰内Ⅰ式の範疇から分離して前十腰内Ⅰ式として独立させて位置づける見方がされるようになってきている。同じように大館市鳶ケ長根遺跡の報告でも前十腰内Ⅰ式として縄文時代後期前葉に位置づけている。しかしながらその型式的な内容，さらには地域性，系統上の問題等未だ瞭然とはされず，今後明らかにすべき点は多い。

第２類土器は，沈線文と磨消縄文による模様の描かれることを特徴とする。広い意味では十腰内Ｉ式の中に把えられると思われるが，曲線的なモチーフが認められず，沈線が著しく平行線化していることから十腰内Ｉ式の中でもより新しい部分を占める土器群かとも思われる。

第３類土器は器面が無文調整されることを特徴とする。また，口唇部がかなり肥厚していることも特徴である。十腰内II式に比定することができる。

第Ⅳ群土器について

第Ⅳ群土器は，縄文時代晩期初頭の土器である。

第１類土器は東北地方北部の後期末葉からの系統上に位置づけられる入組文系の土器である。

特徴として口縁部によく発達した魚尾状の突起，体部文様帯内に磨消縄文手法をもって描かれる入組文，弧状の区画文をあげることができる。この段階では三叉文の未だ未発達なものも含まれるが，魚尾状の突起の下部空間に三叉文が充塡される場合や，入組文の入組部分に三叉文が生じる場合がある。

第２類土器になると，三叉文が独立した陰刻文として施されるようになる。三叉文の施される文様帯も口縁部に限定され，無文調整されるようになる。以上のことから第１類土器を大洞B_1式，第２類土器を大洞B_2式に比定することが可能である。

第３類土器は羊歯文をメルクマールとする大洞ＢＣ式に比定が可能である。

第４類土器は所謂雲形文として内部の文様の発達したものである。口縁部の文様帯は２～３条の平行沈線と化している。大洞C_1式に比定することができる。

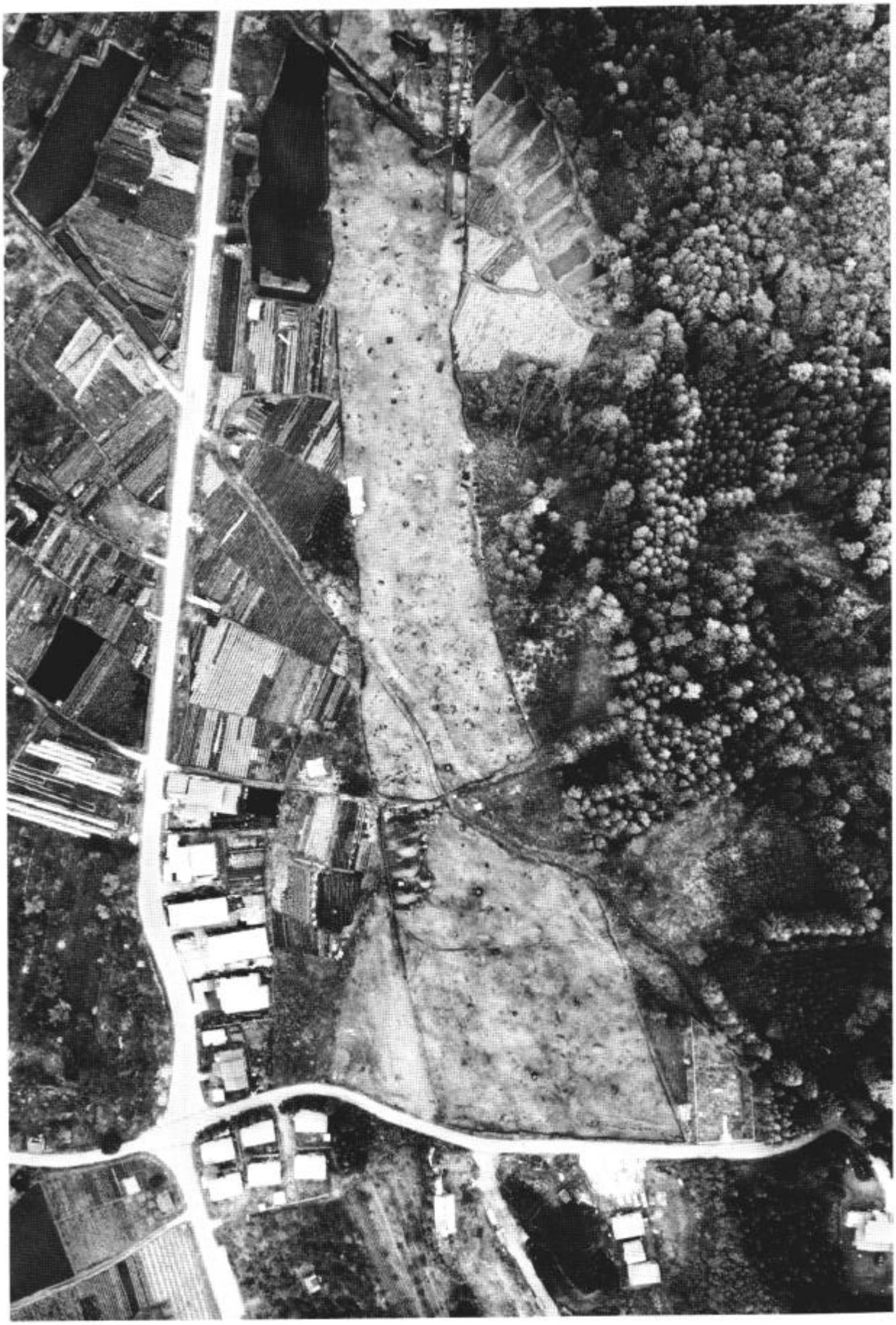
第５類～第７類土器は，晩期の諸型式に伴った土器として理解できる土器群である。類別毎の型式比定はできないが，第27図２のような台付の鉢形土器は比較的古い時期に伴ったものであろうし，第６類の頸部にメガネ状の突帯文を付した土器はより新しい時期に伴ったものと考えられる。

第Ⅴ群土器について

第１類の甕形の土器は頸部に段差が大きな屈曲部をもち，口頸部の比較的長いことを特徴とする。また器面調整にハケメを残すことも特徴である。第２類とした坏形土器は，器面調整はミガキによって行われ，内面が黒色処理されることを特徴とする。このような特徴をもった土師器は比較的古い様相を示すものであり，鳥野遺跡の出土資料が本遺跡出土の資料に近い。鳥野遺跡の報告では８世紀の後半に位置づけている。

発掘調査参加者

安保　富蔵	成田　惣太	松岡　武男	浅石　三郎	小田鳥政美	松岡　徳良
黒沢　　猛	川又　繁治	金沢　　武	田中慶太郎	菊地　信広	稲垣　弘定
浅石　松蔵	阿部　行夫	工藤　幸作	工藤　与八	井上　政治	奥村　一三
梅戸正次郎	川又　秀也	川又　武司	三ケ田昌人		
安保テイ子	津江　ミナ	成田　キヌ	井上　ミヲ	畠山　スエ	畠山千代美
工藤　イネ	津江　良子	川村千鶴子	佐藤　シミ	阿部　チエ	佐藤アヤ子
阿部　テル	畠山　トヨ	似鳥　キサ	柳沢　テル	柳沢　敏江	金田一實津子
石井ヨシエ	関　　キワ	川又　ヨリ	松岡　テイ	石川　リサ	金沢　ミキ
小田鳥カチ	倍償　正子	川村　ツエ	川又　澄江	安保　幸子	豊田　与里
浅石恵留子	相川　金子	川又　ヤエ	兎沢キヨエ	中西　リチ	相川　リヨ
賀川　政子	石鳥谷妙子	柳沢　ヤス	三ケ田孝子	兎沢　キヌ	田中ヨシエ
木村サチ子	佐藤　ツマ	木村　敬子	木村　テル	作山　ミエ	苗代沢ノブ
津江　和子	金沢ハルエ	小田鳥礼子	畠山　陽子	阿部　シガ	小田鳥キク
斉藤キヨエ	浅石　タミ	浅石　ナツ	井上トミエ	工藤　スミ	工藤　キヌ
工藤　イツ	阿部　シマ	佐藤　キエ	松岡トキヨ	高畑　サキ	阿部　シモ
三上　美子	三上　トヨ	安保　　柳	柳沢　ヤス	奥村　初江	



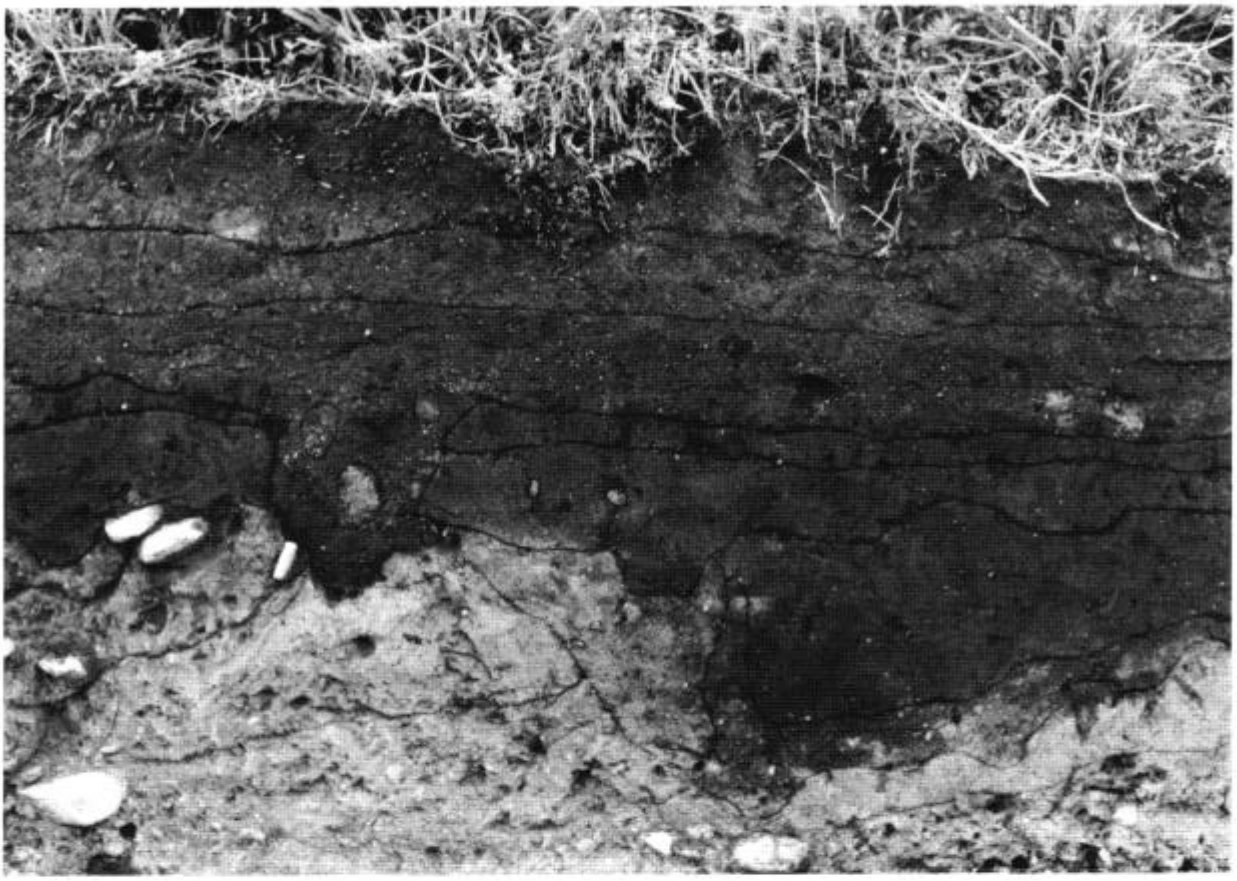
図版 1　　柏木森遺跡航空写真

柏木森遺跡調査前

図版 2　　柏木森遺跡調査風景

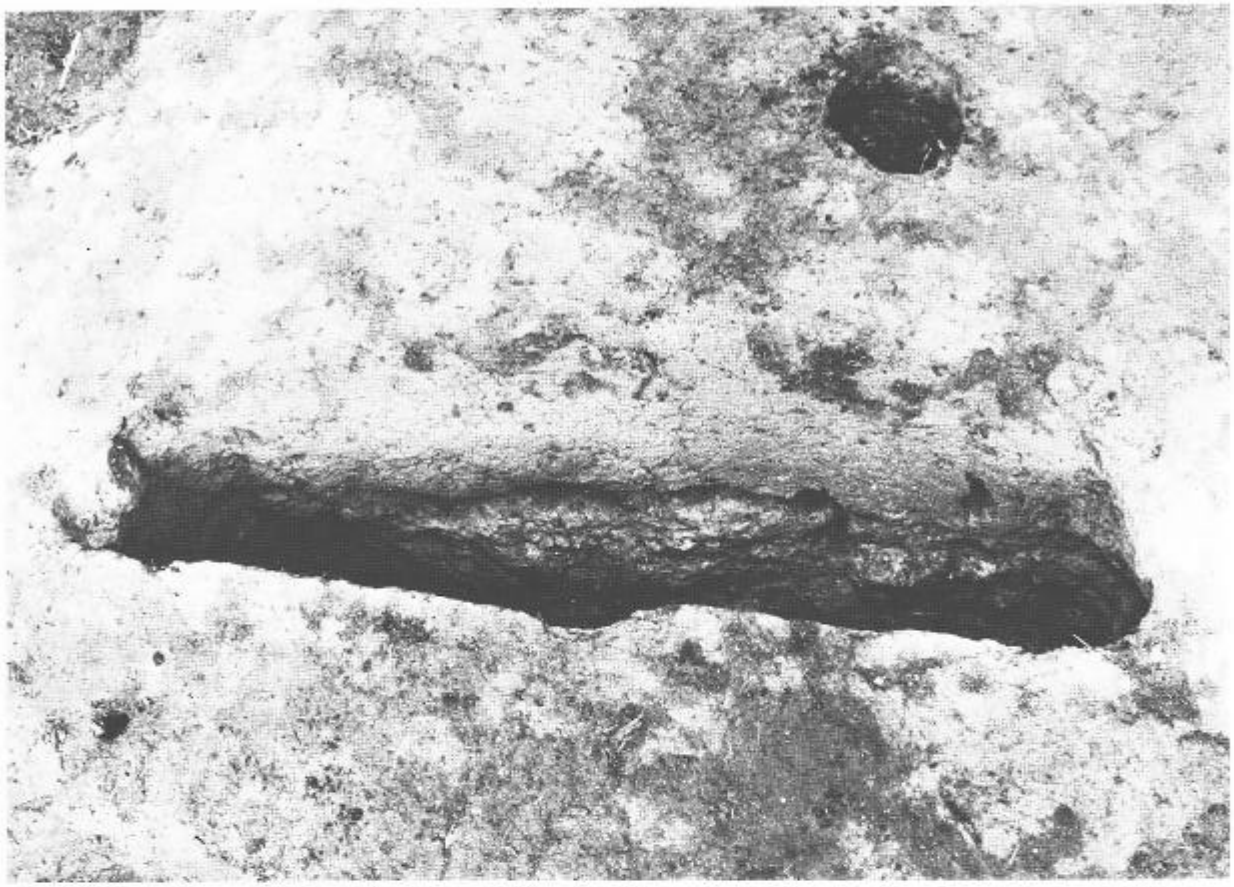
柏木森遺跡北端調査区

図版 3　　柏木森遺跡南端調査区



遺跡基本層序

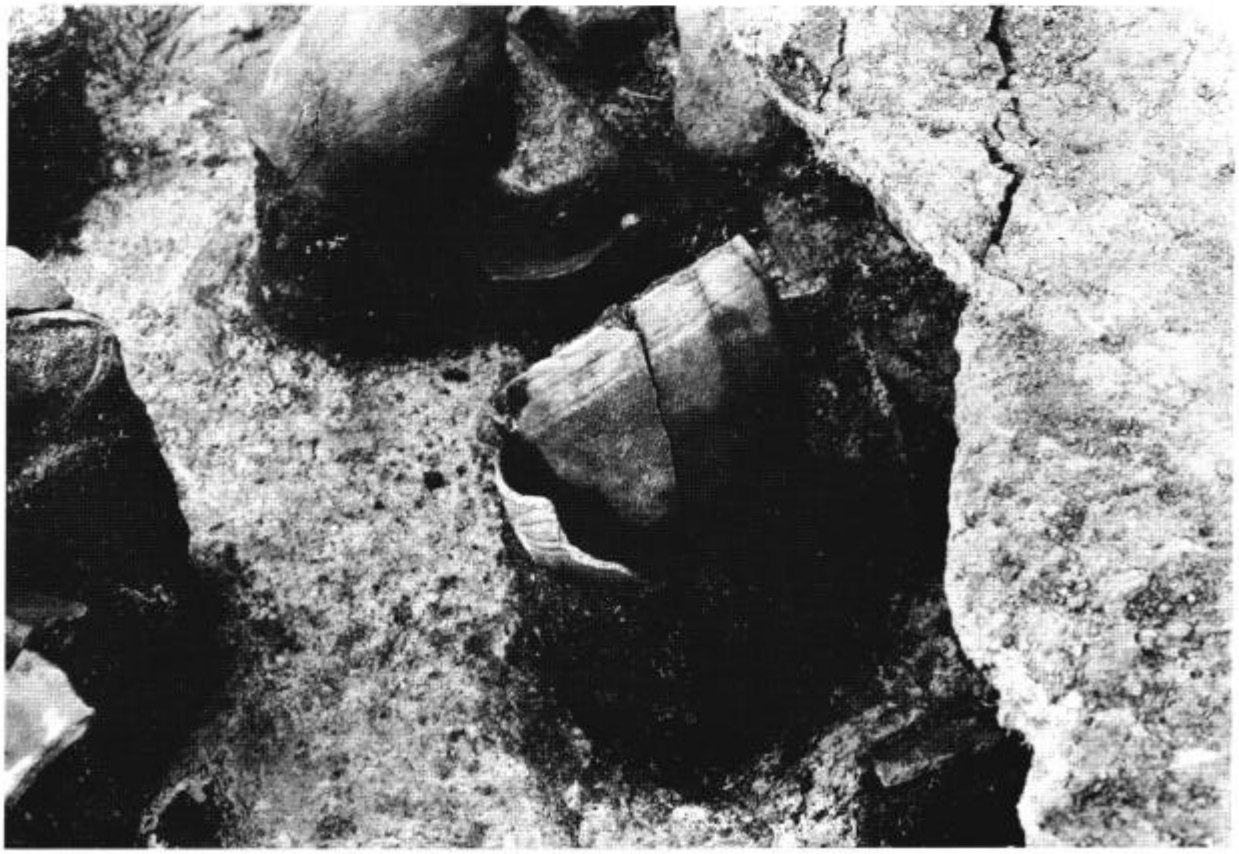
図版 4　　縄文時代早期末土器底部出土状態



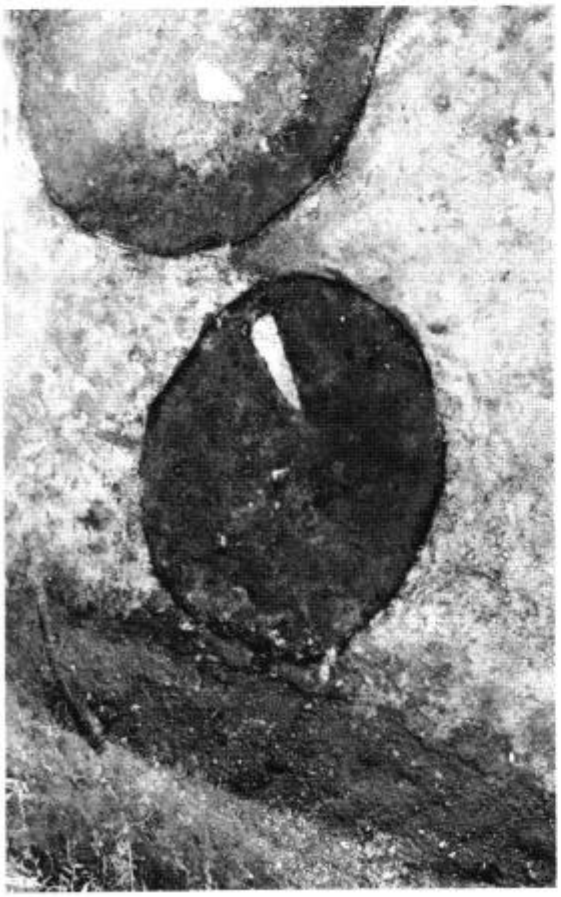
Ⅵ S K （T） 040

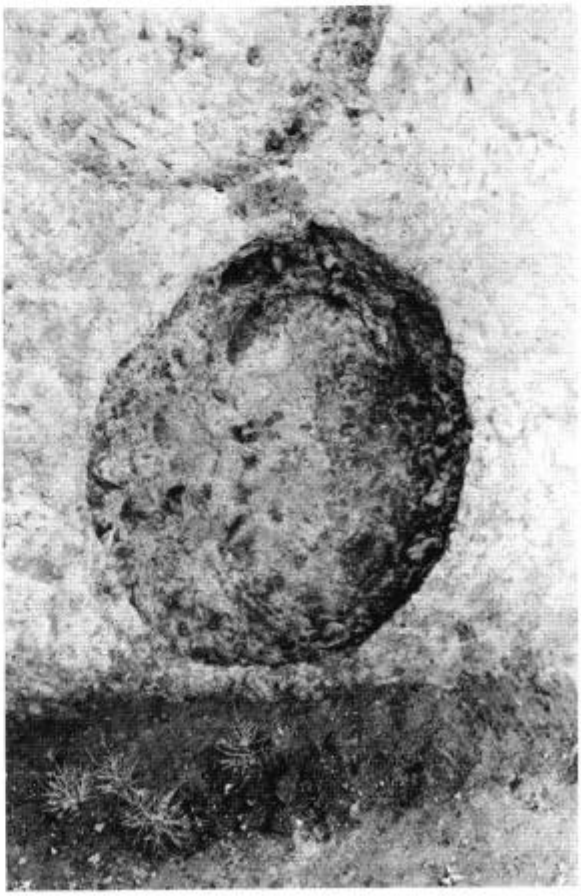
図版 5　　Ⅱ S K 064 土器出土状態

ⅡＳＫ 001 土器出土状態

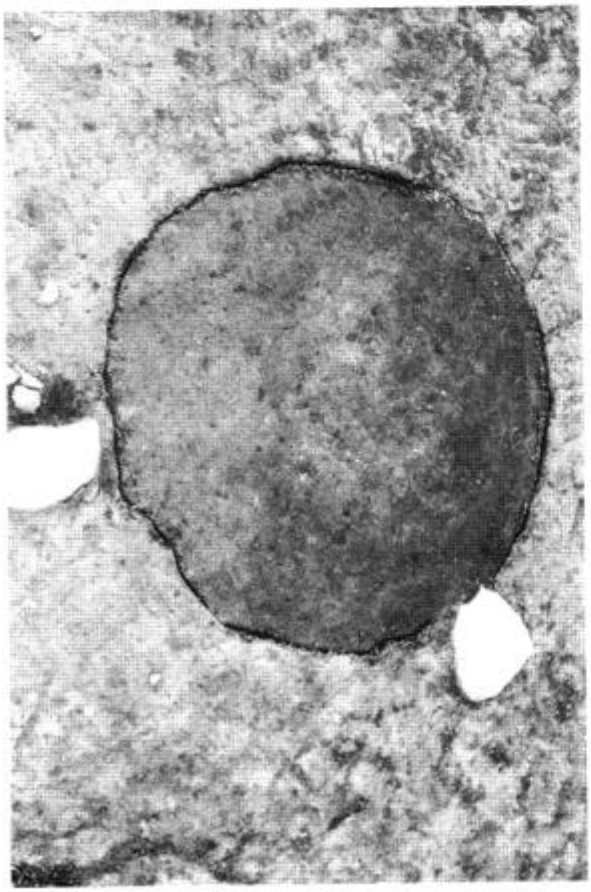


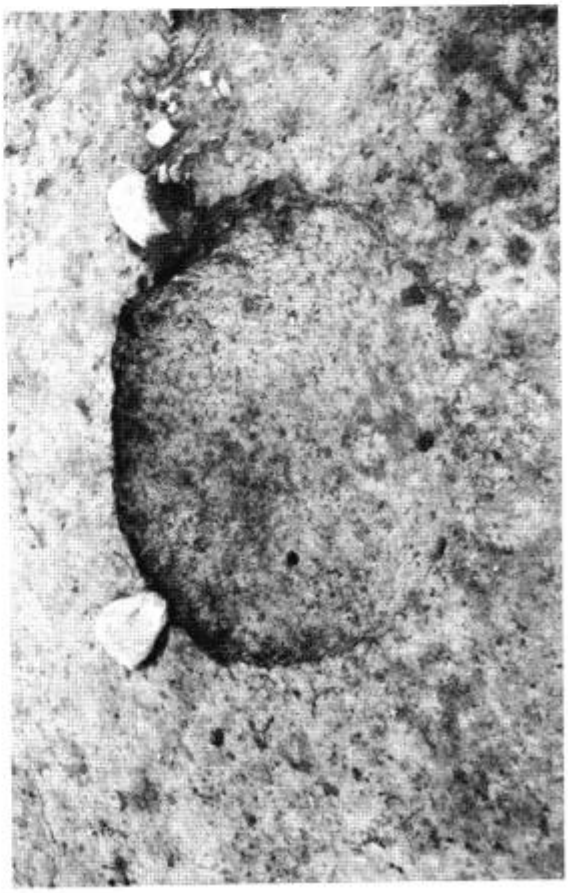
図版 6　　ⅢＳＫ 011 土器出土状態



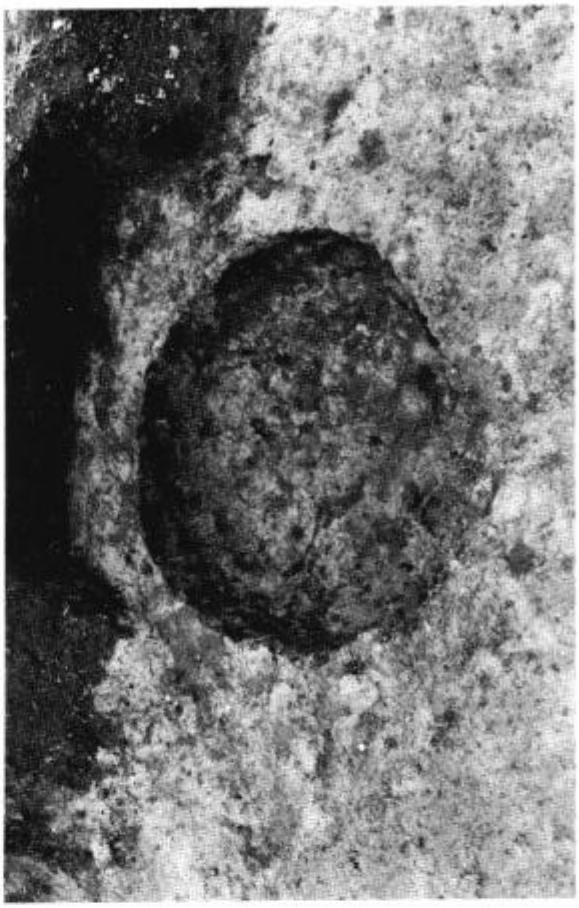


図版 7　　上：調査区中央部土壙群　　下：ⅢＳＫ 001

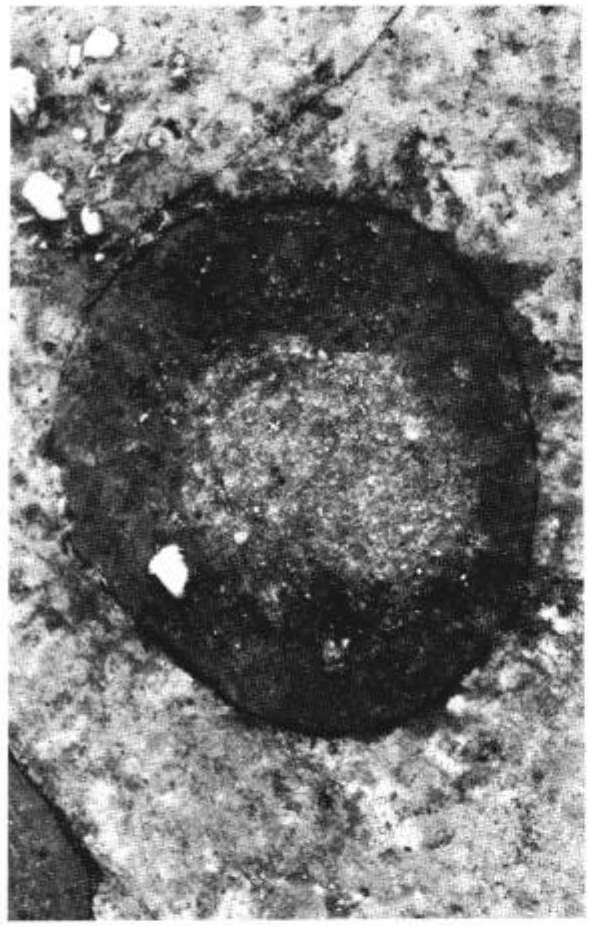


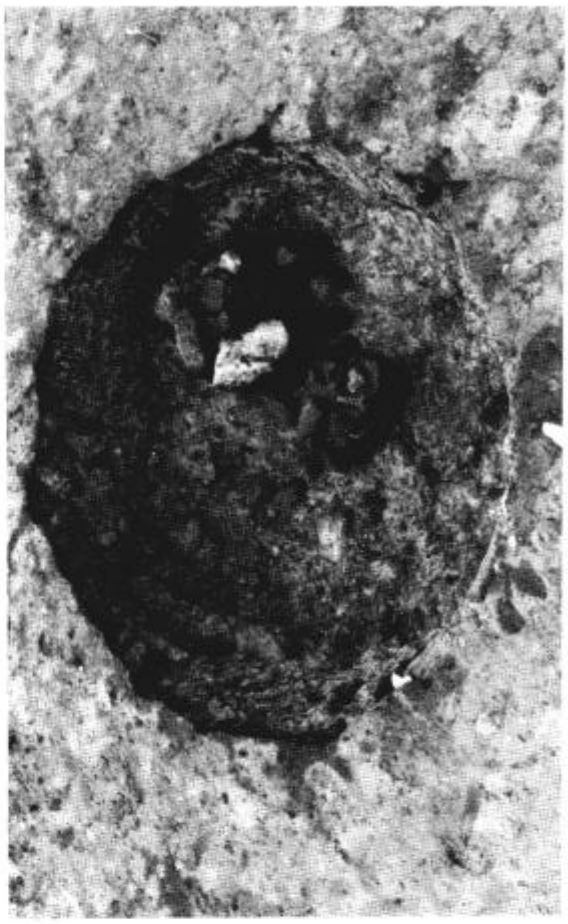


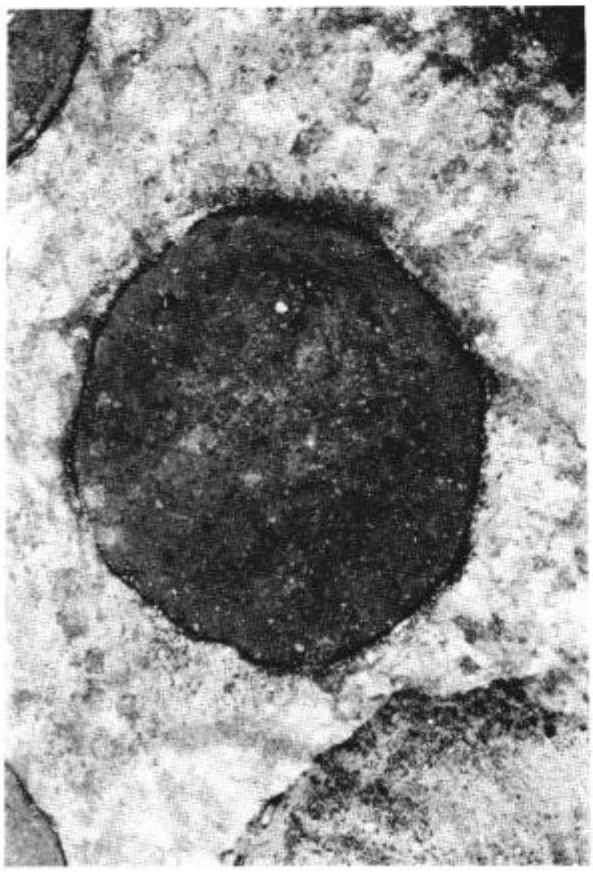
図版 8　　上：ⅢＳＫ 002　　下：ⅢＳＫ 003



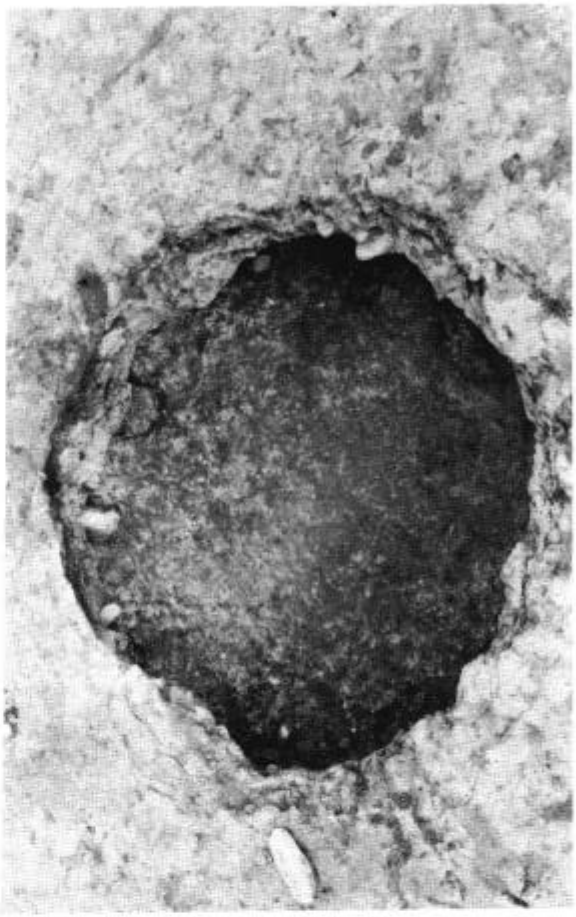
図版 9　　上：III S K 005　　下：III S K 006

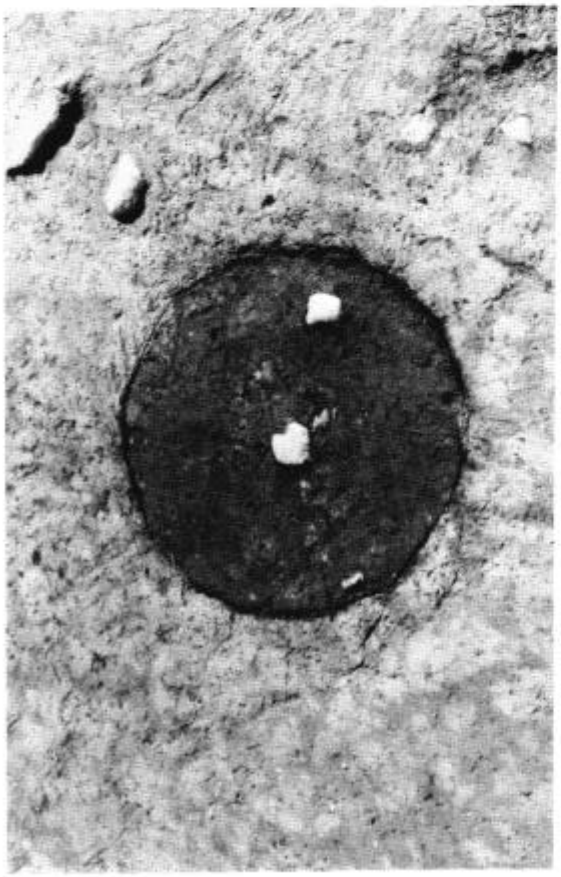




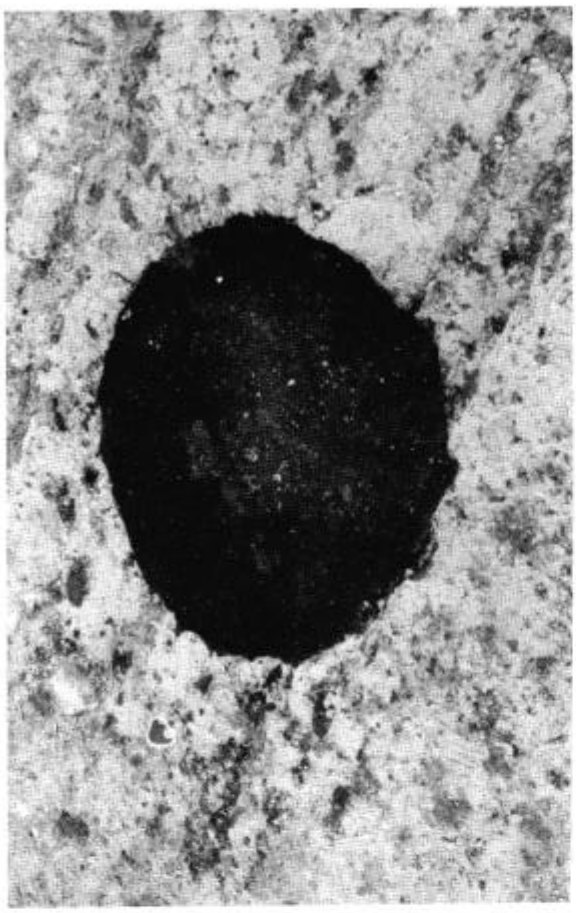


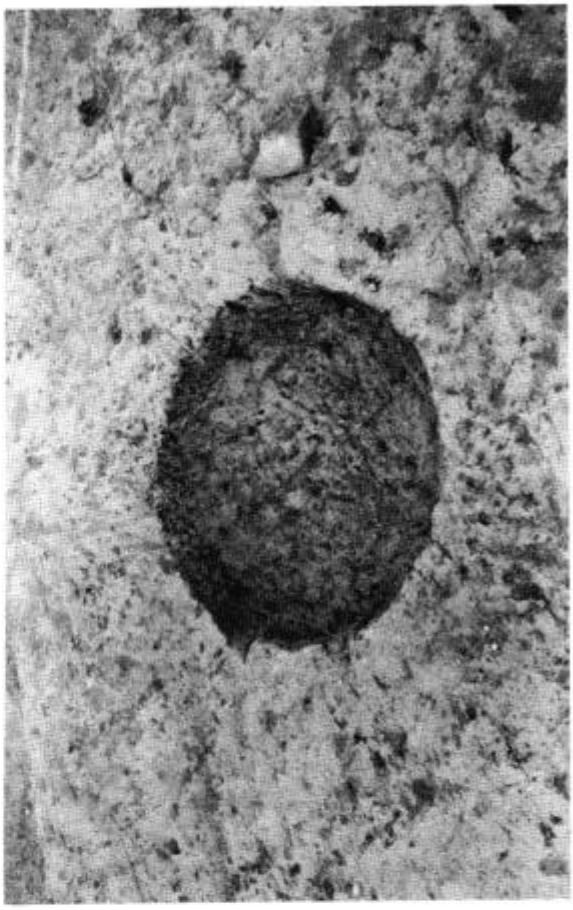
図版10　　上：ⅢＳＫ008　　下：ⅢＳＫ009

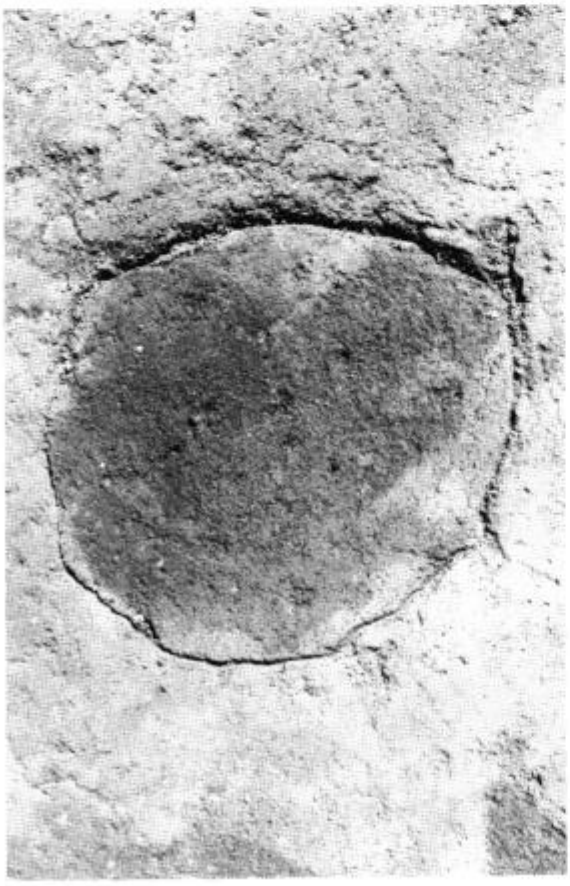




図版11　　上：ⅢＳＫ012　　下：ⅢＳＫ024

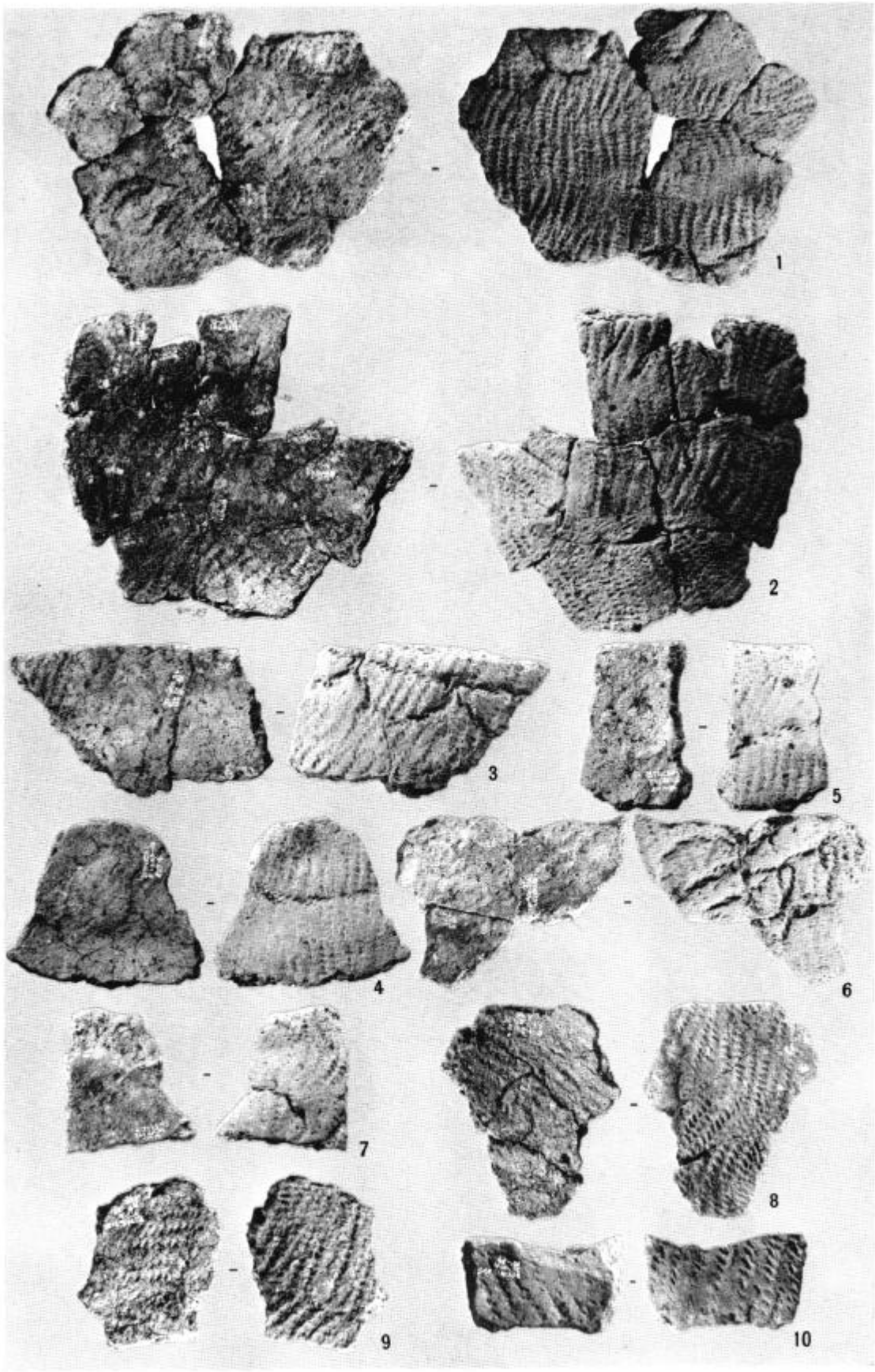




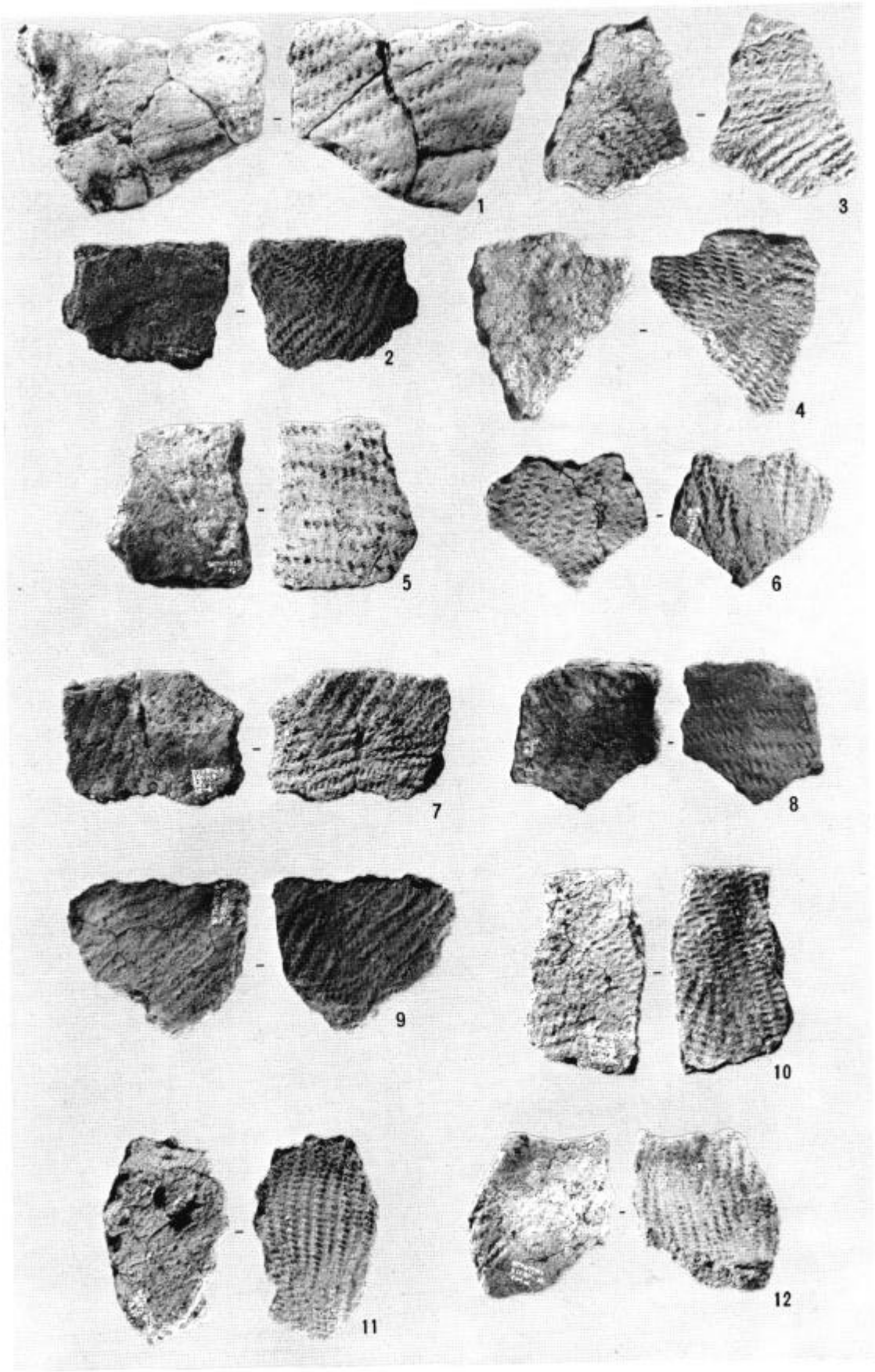


図版12　　上：ⅢＳＫ031　　下：ⅢＳＫ043

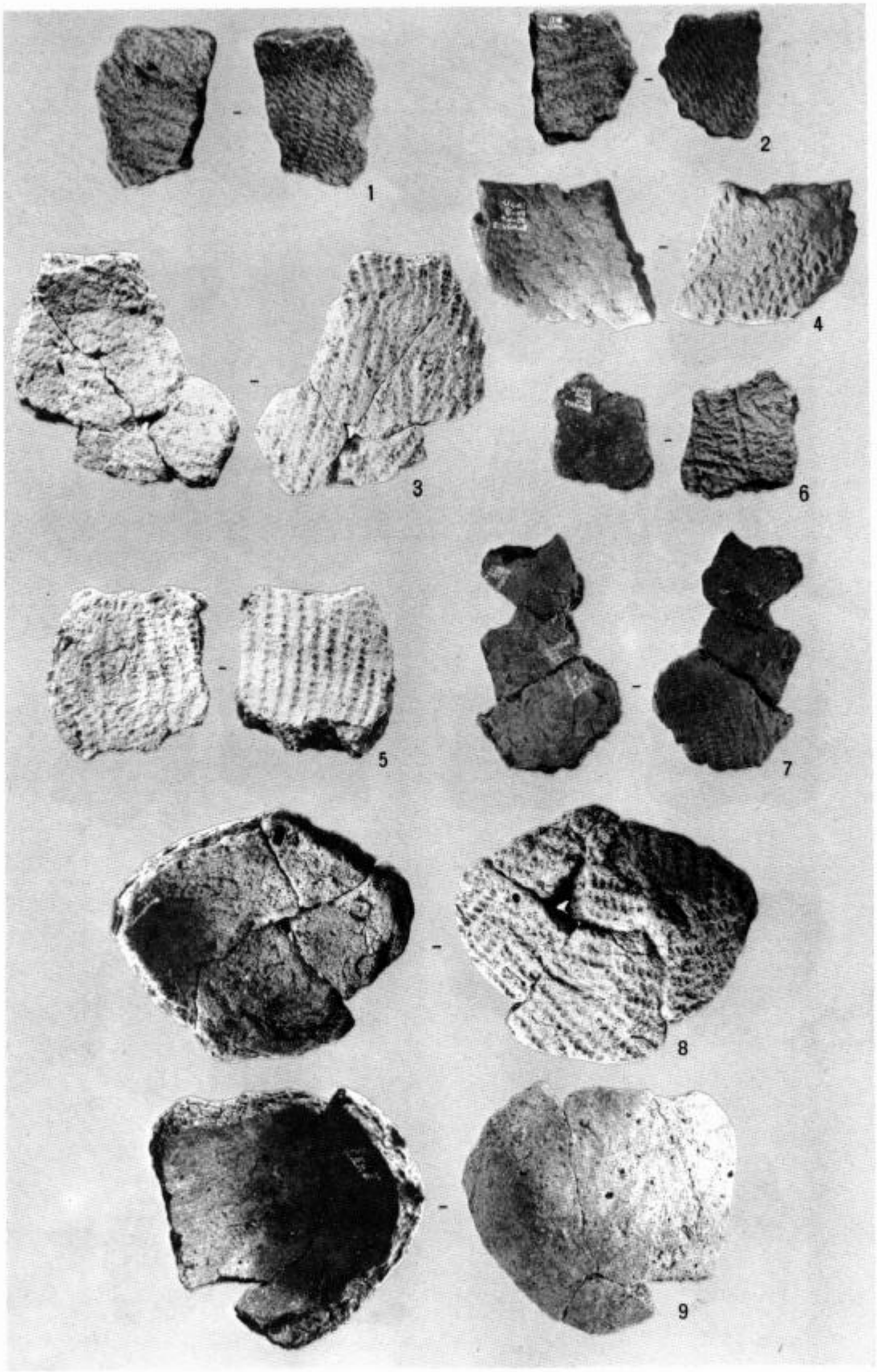
図版13　　第１群土器（１）



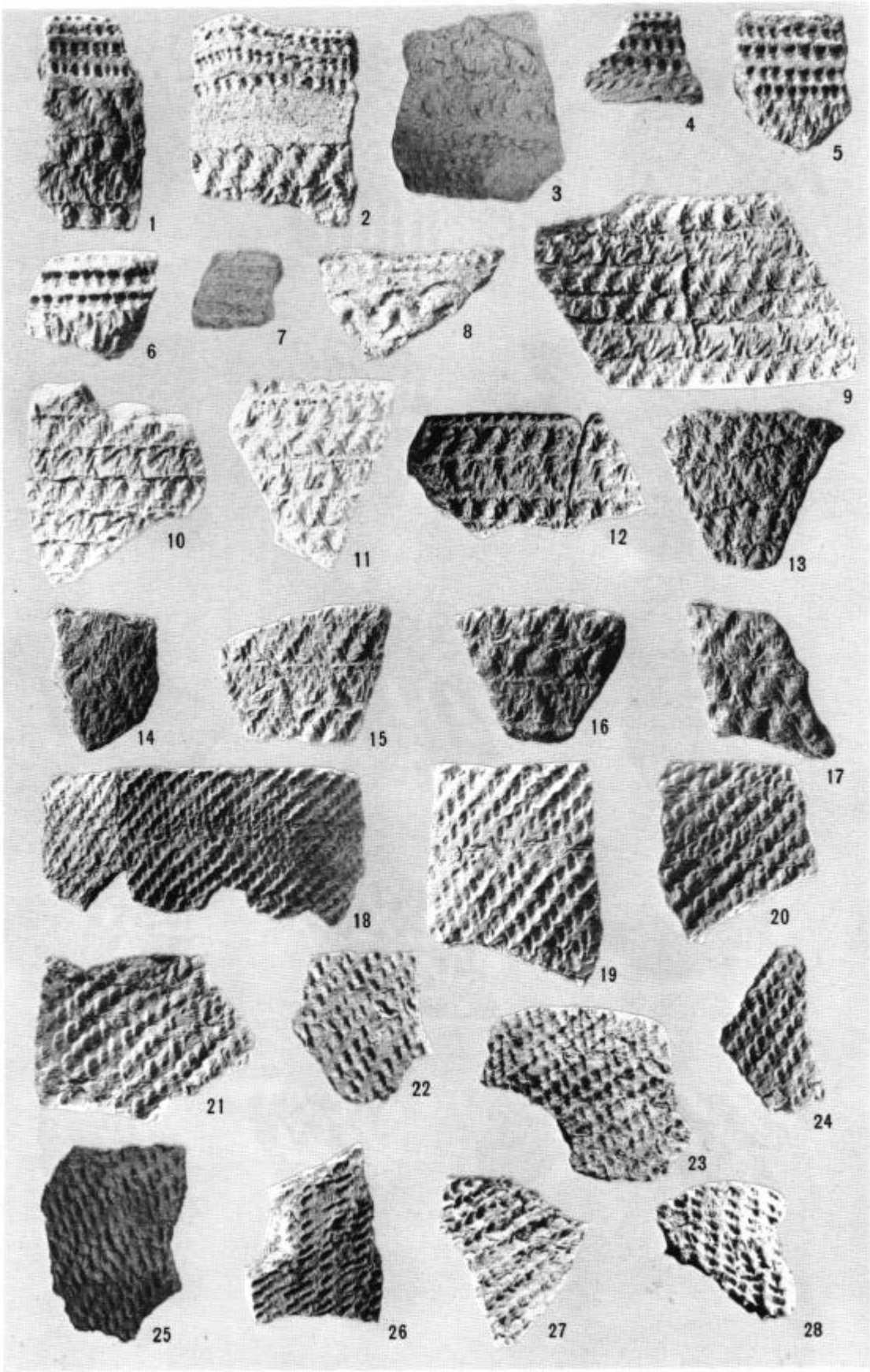
図版14　　第Ⅰ群土器(2)



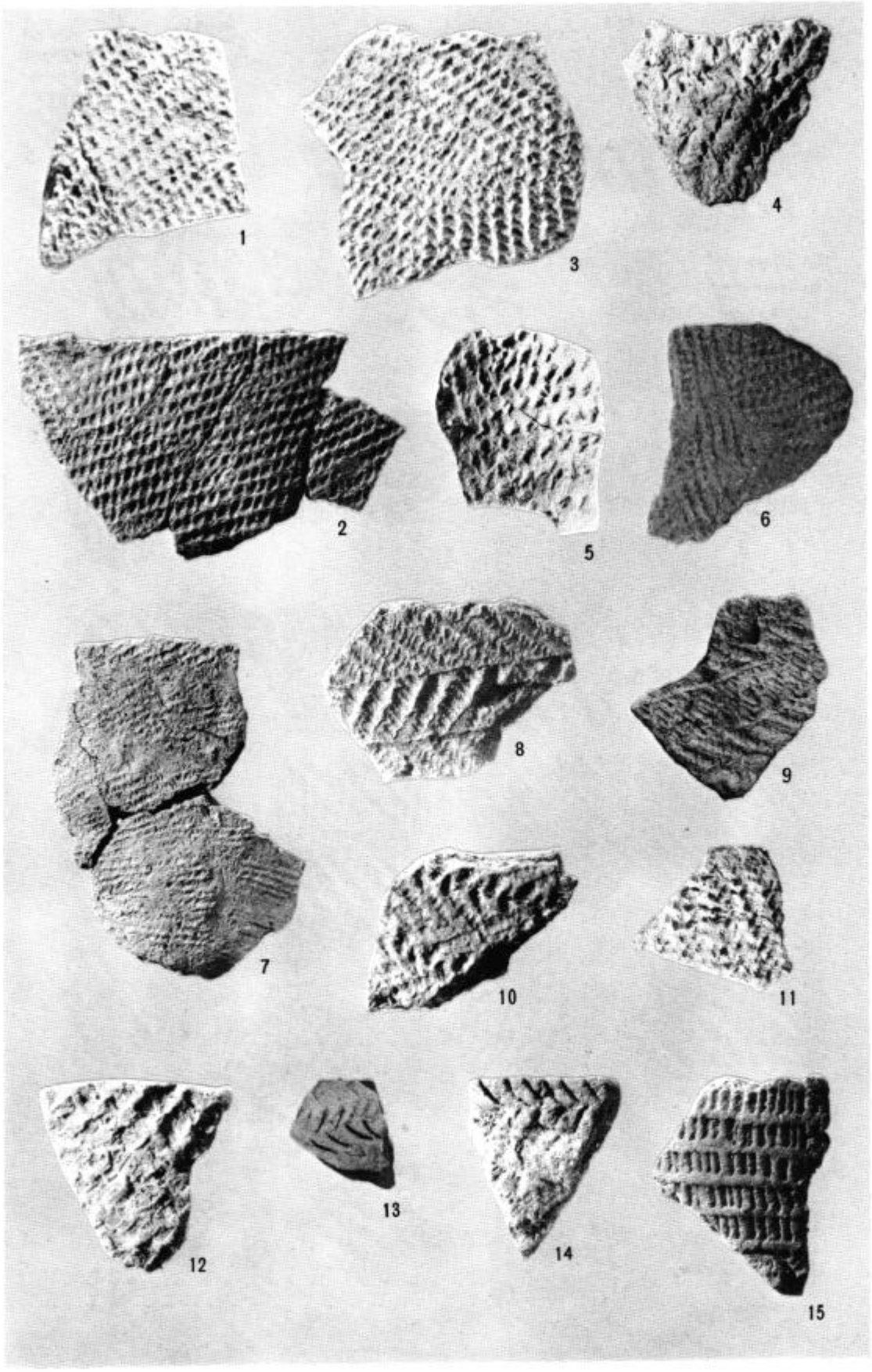
図版15　　第Ⅰ群土器(3)



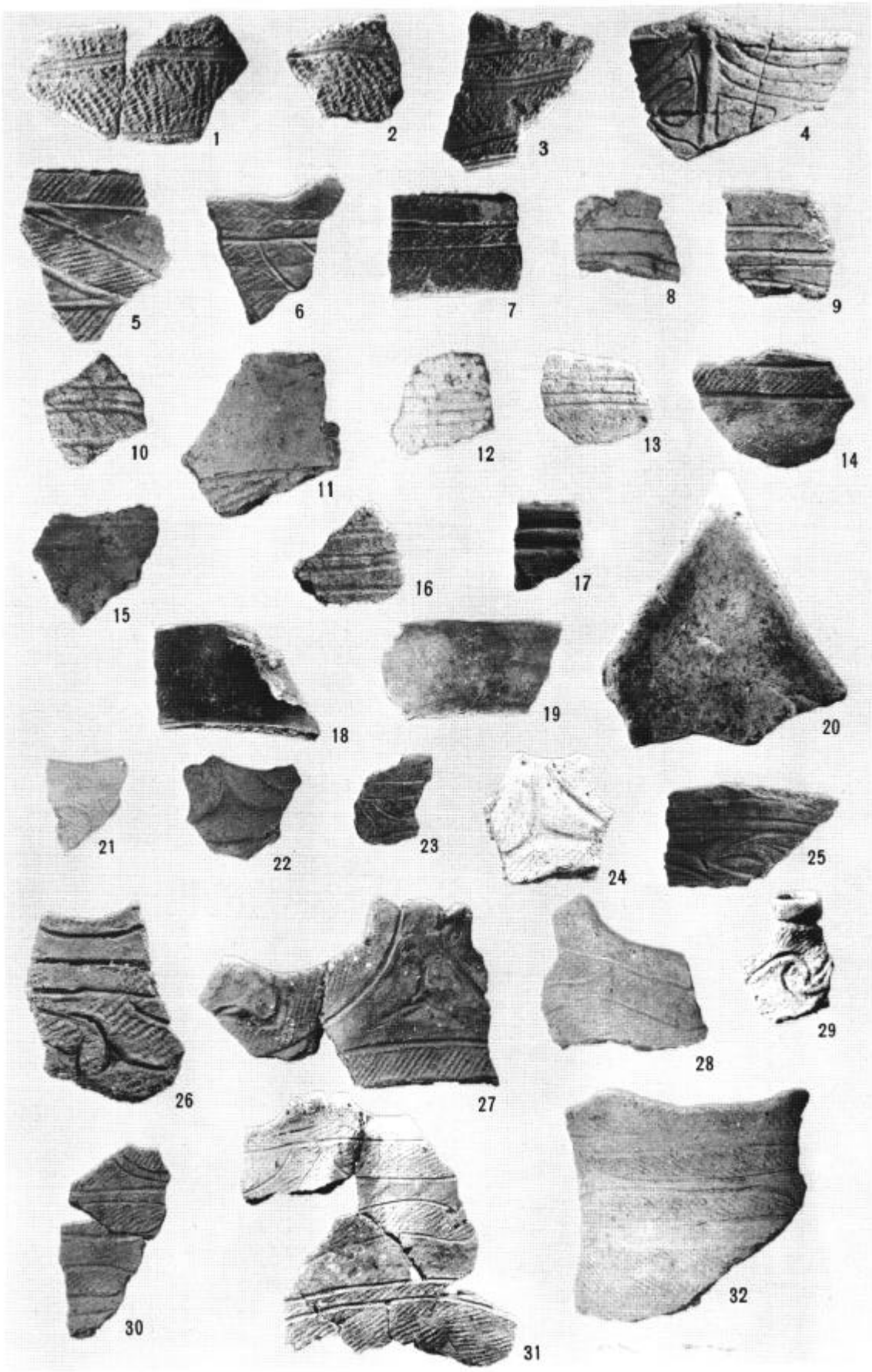
図版16　　第Ⅰ群土器(4)



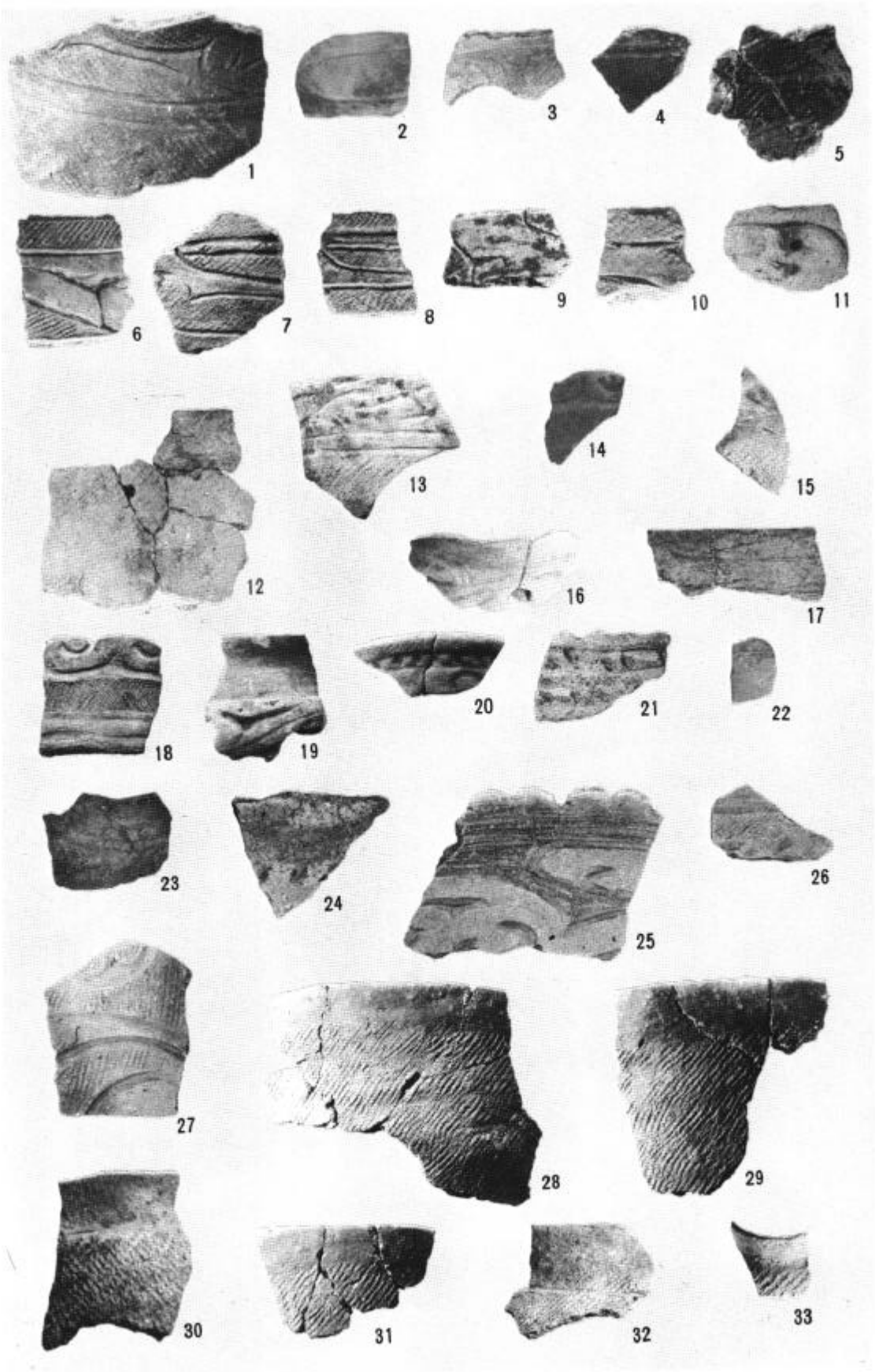
図版17　　第Ⅰ群土器(5)



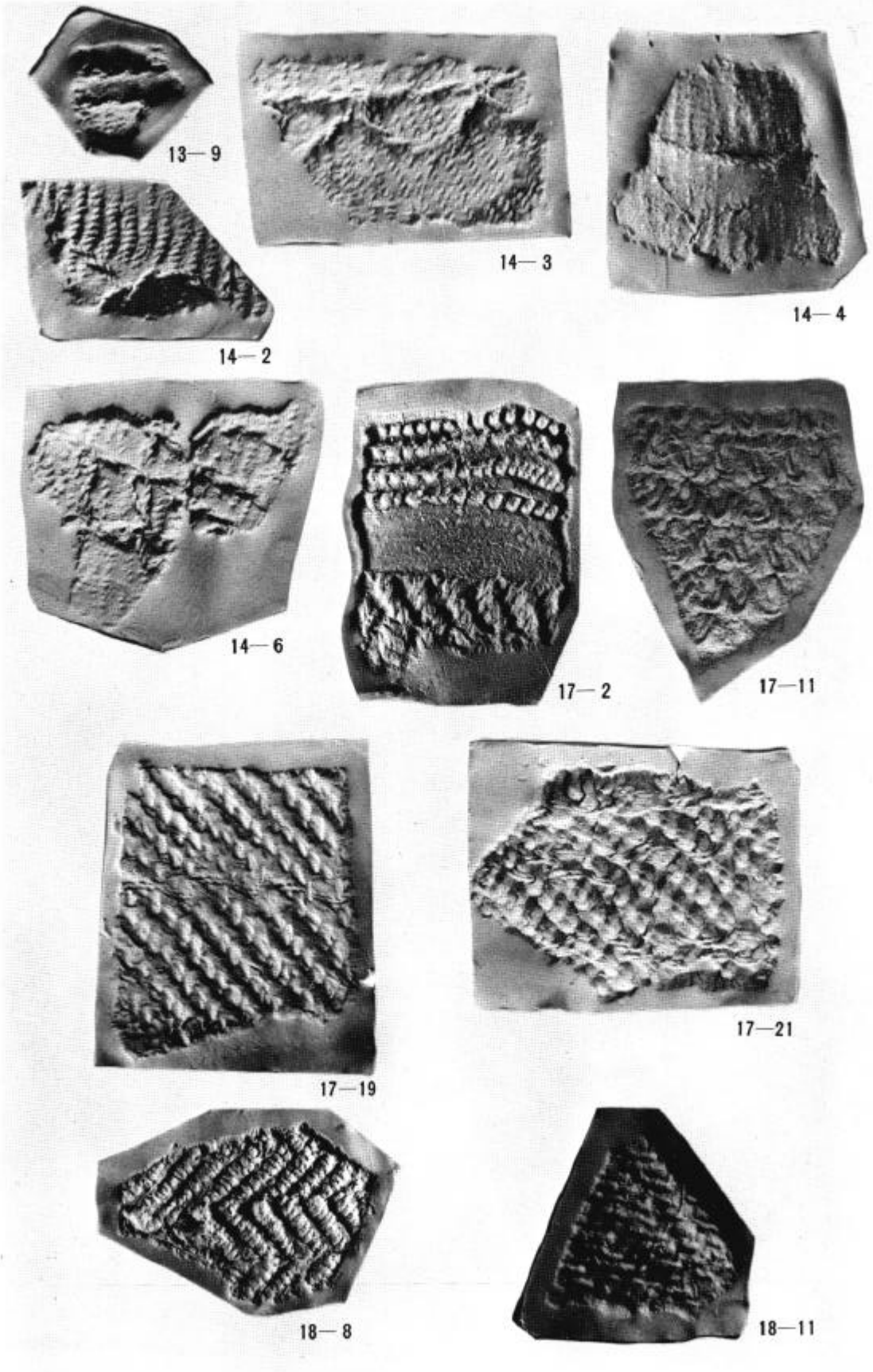
図版18　　第Ⅰ群土器(6)



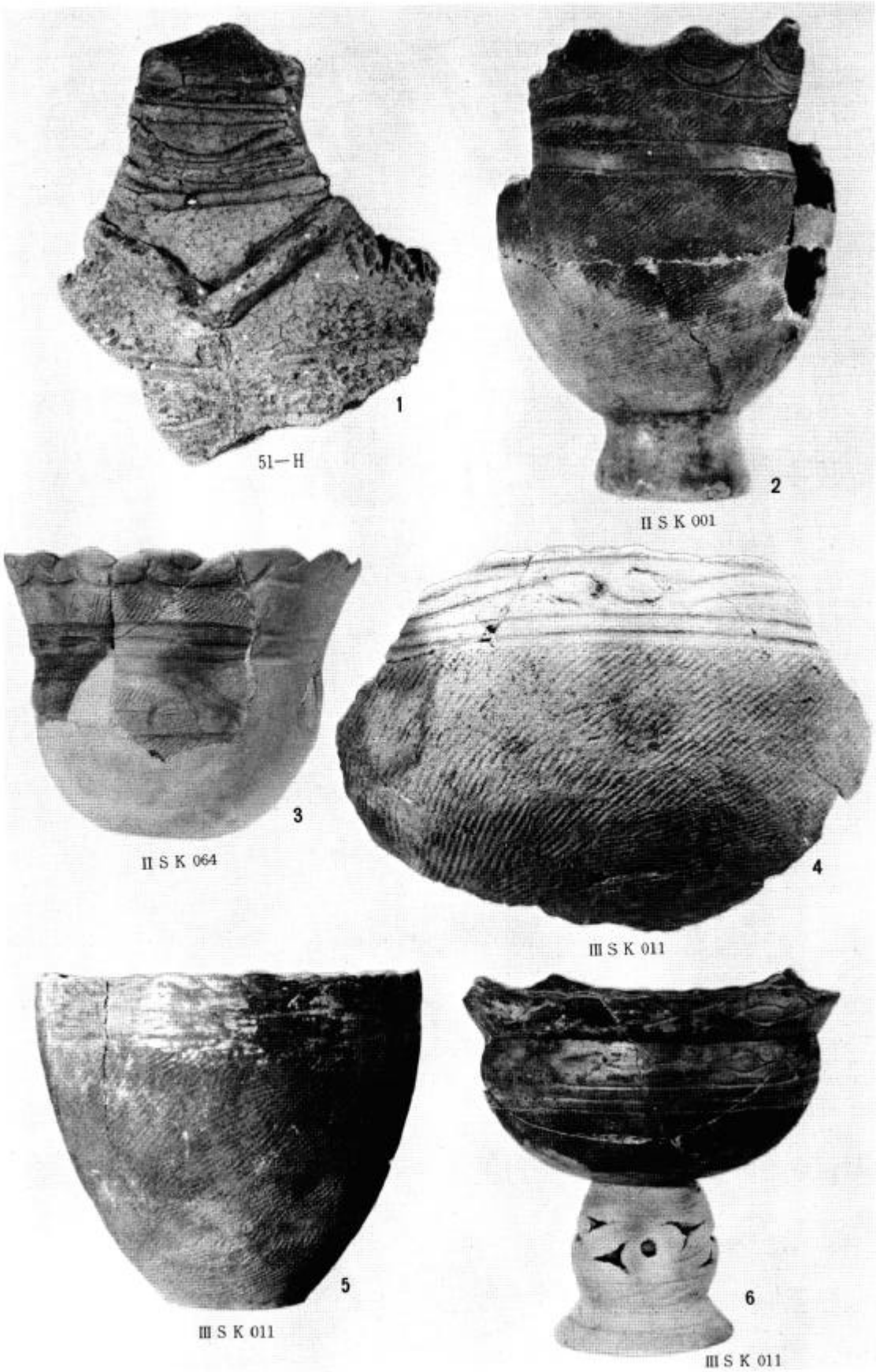
図版19　　第II群，III群，IV群土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

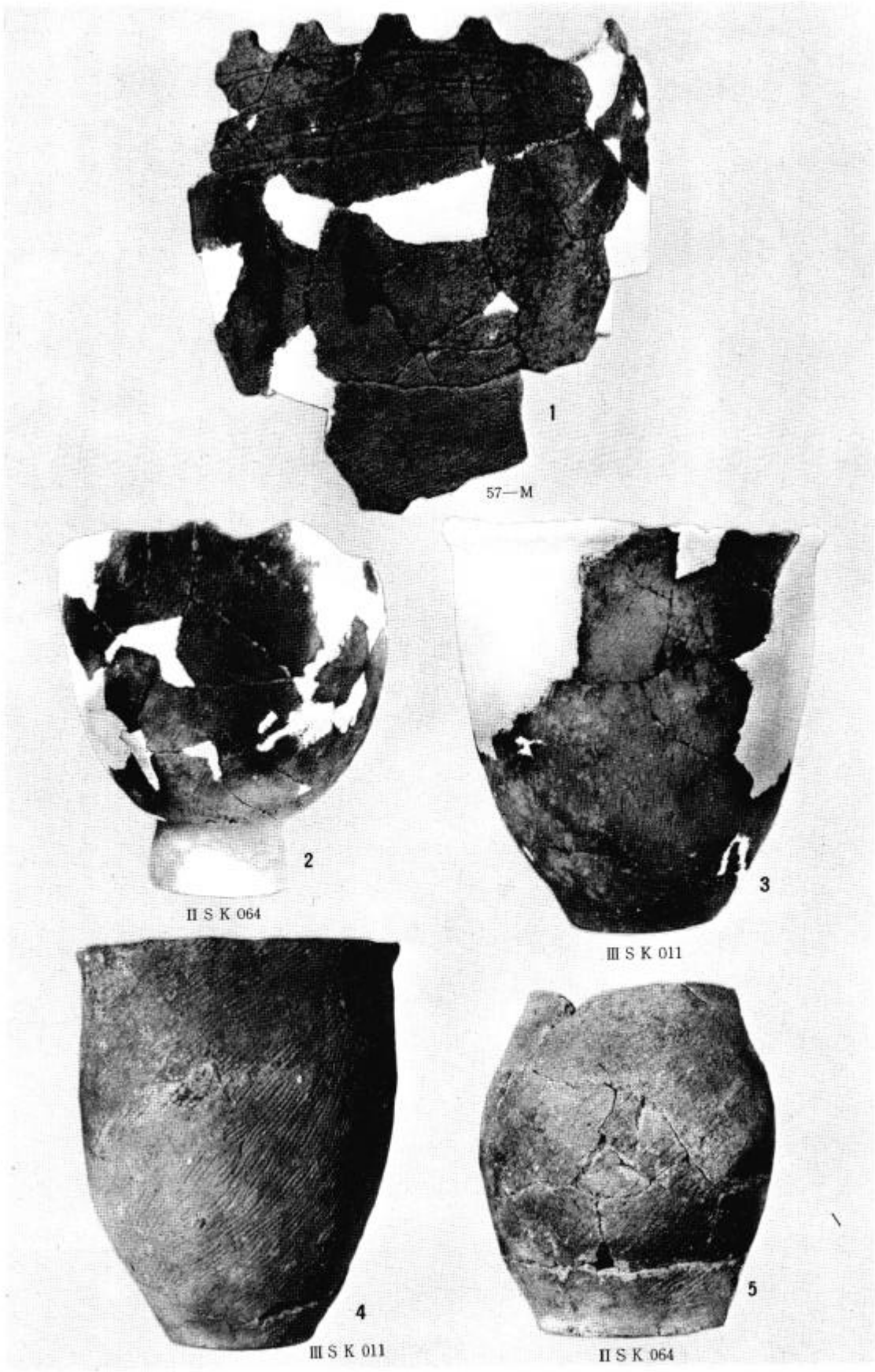
図版20　　第Ⅳ群土器



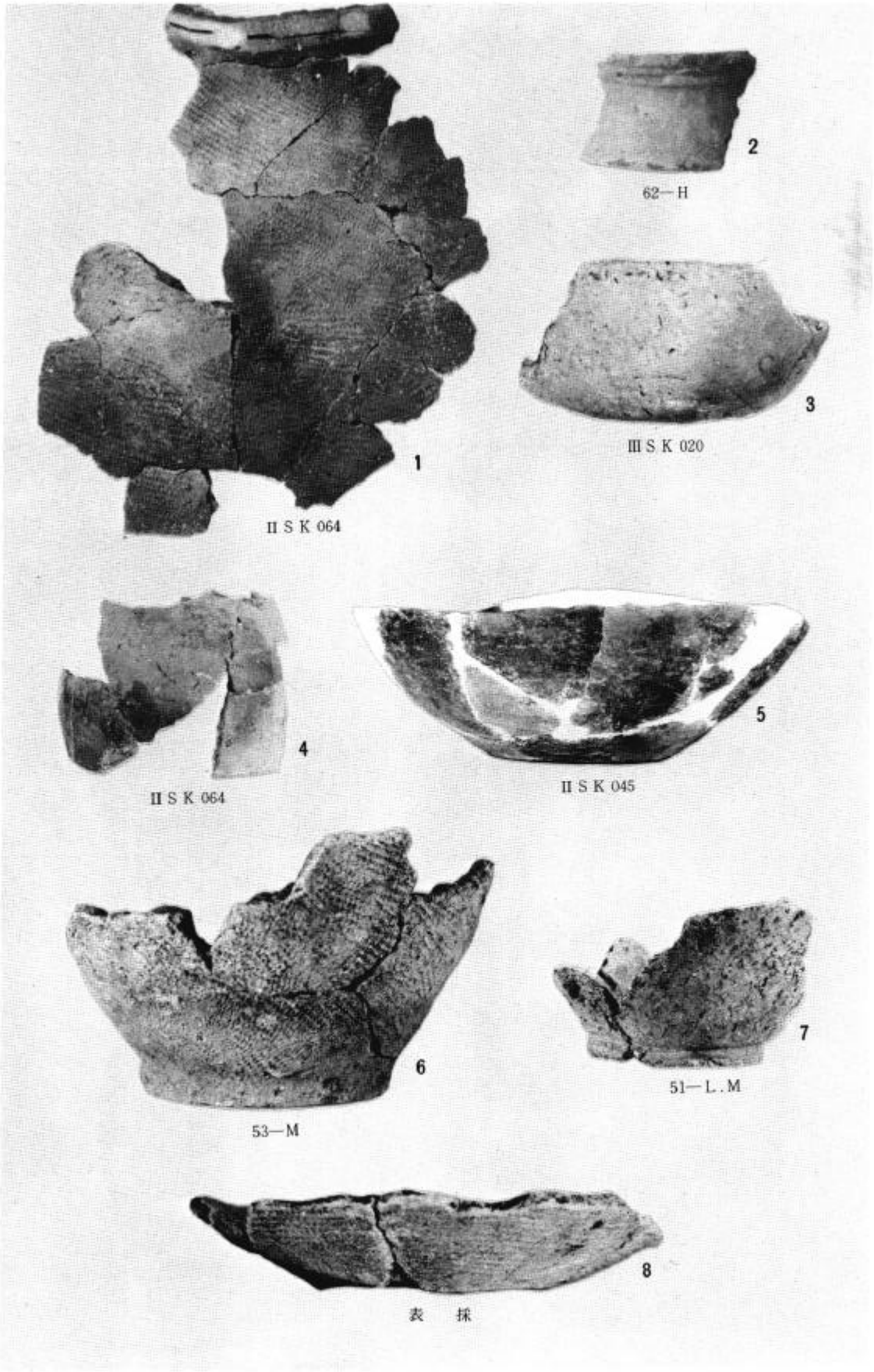
図版21　　第Ⅰ群土器原体陽画



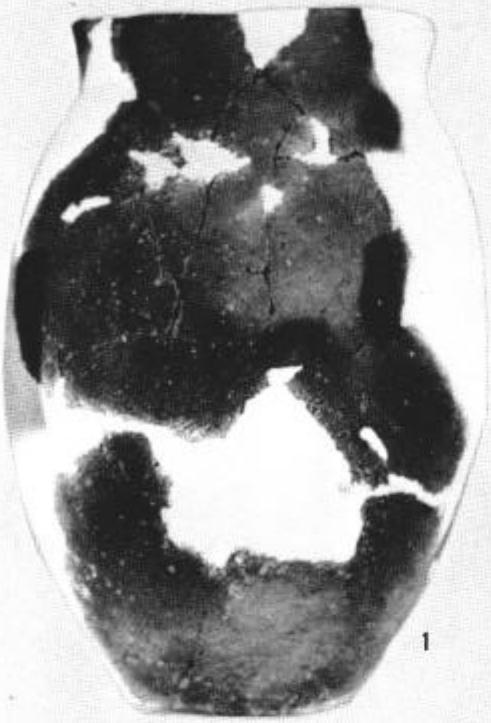
図版22　　第II群，第IV群土器



図版23　　第Ⅳ群土器(1)



図版24　　第Ⅳ群土器(2)

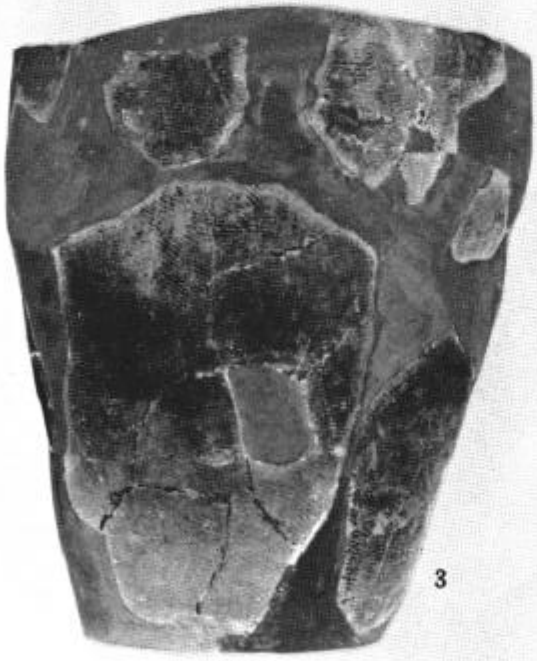


1

Ⅲ S K 008

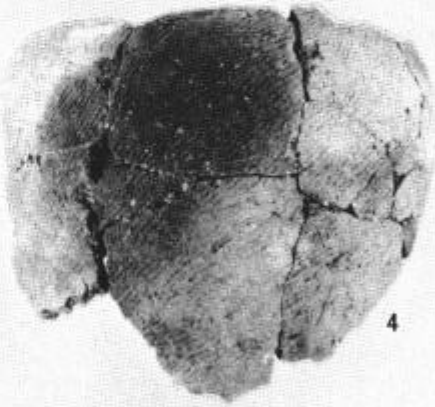
2

Ⅲ S K 024



3

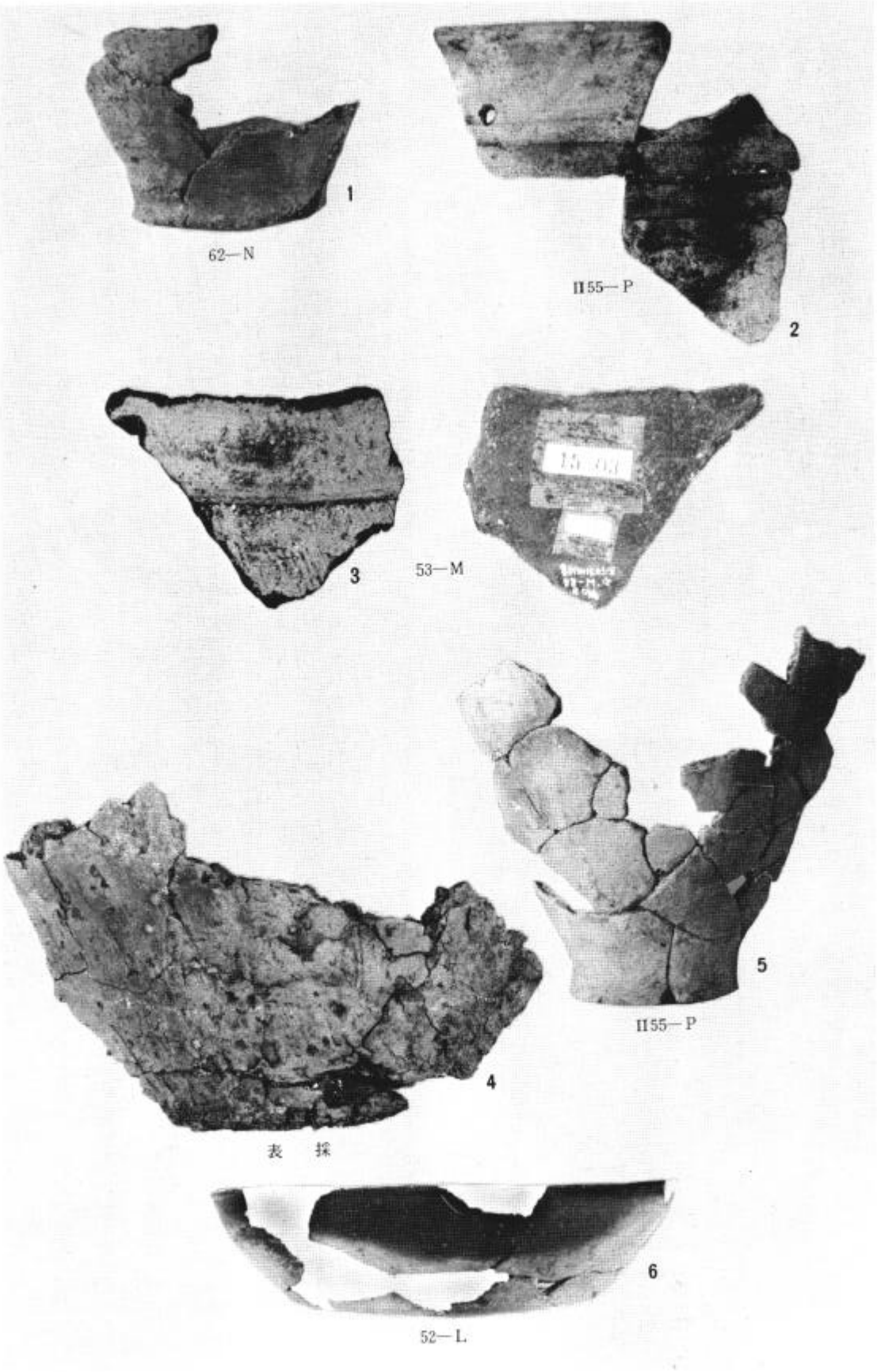
Ⅱ S K 001



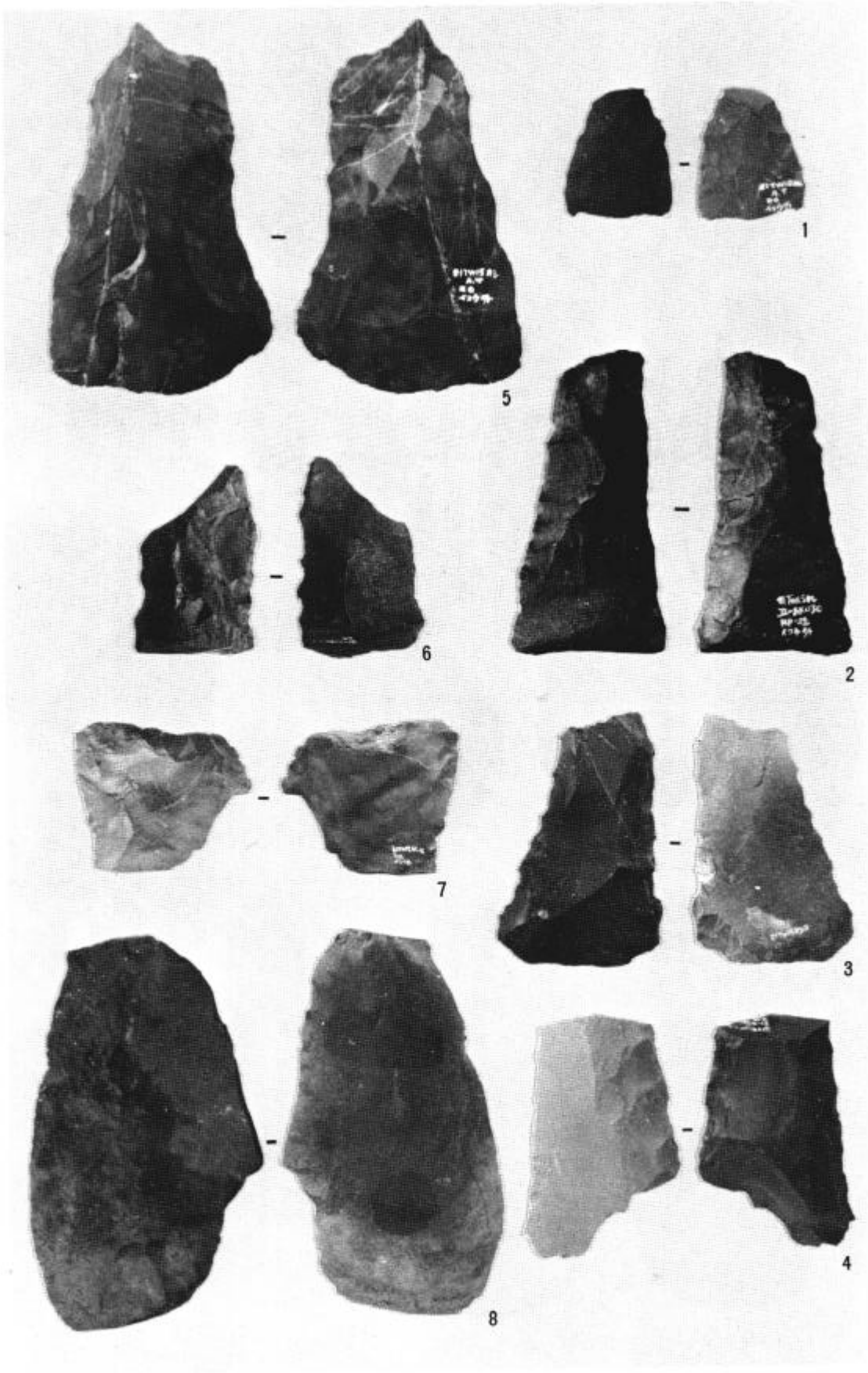
4

49—M

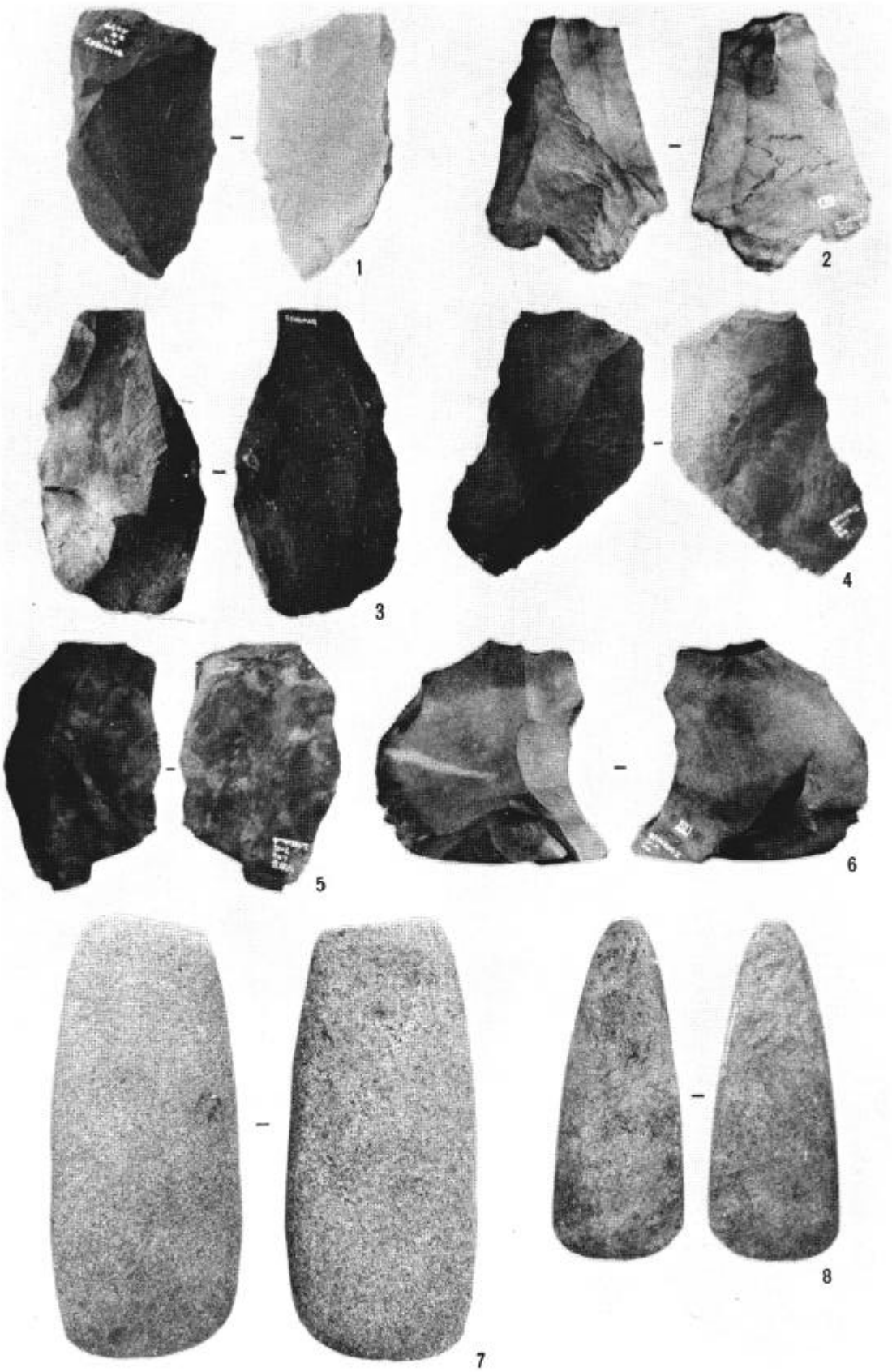
図版25　　第Ⅳ群土器(3)



図版26　　第Ⅴ群土器



図版27　　石　　器(1)



図版28　　石　　器(2)

中の崎遺跡

遺跡番号	No.16
所在地	鹿角市花輪字中の崎95番地他
調査期間	昭和55年8月22日～12月12日
	昭和56年5月25日～11月14日
発掘調査予定面積	12,920m²
発掘調査面積	19,158m²

1．遺跡の概観

(1) 遺跡の立地と環境

中の崎遺跡は，秋田県鹿角市花輪字中の崎95番地他に所在する。

遺跡は岩手県に源を発する米代川流域の鹿角盆地内東側にあり，国鉄花輪線陸中花輪駅の東南東約1.6kmに位置する。

遺跡は大きく分けて３つの台地からなり，南からⅠ～Ⅲ区とした（第２図)。Ⅰ区は遺跡南側にありほとんど平坦面である。Ⅱ区は中央部にあり，西側に段々低く３段の台地を形成している。Ⅲ区は北側にあり，Ⅱ区から北西部にのびた舌状台地で調査対象はその付根部分である。遺跡は鳥越軽石火山灰層の堆積面である鳥越段丘面上にあり，調査対象面積は18,457㎡である。

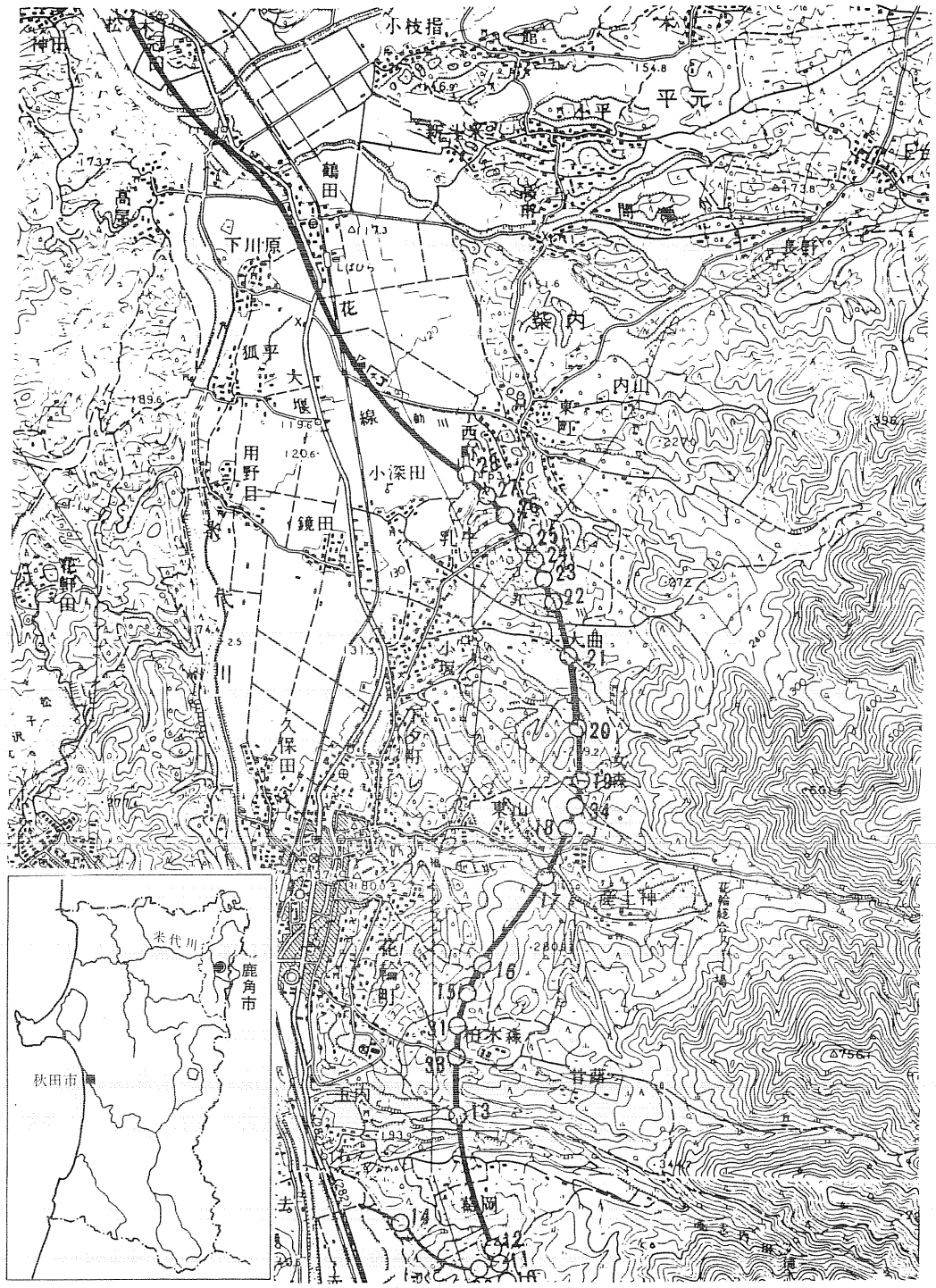
(2) 遺構の分布

中の崎遺跡は比較的平坦な鳥越段丘面上にあり，北側及びⅡ区西側が急崖となっている。Ⅰ～Ⅲ区とも遺構の分布はまばらで，それほど集中している箇所はない。Ⅱ区中央部東側に土壙が集中する箇所がみられる程度である。

(3) 遺物の出土状態

遺構内の遺物は，平安時代の竪穴住居跡出土のものが多い。特にⅠ区検出のものは，ＳＩ018竪穴住居跡を除いて，多数の遺物が出土した。Ⅱ区の竪穴住居跡出土の量にはバラツキがみられ，ＳＩ102, 104, 107, 108, 112竪穴住居跡からは多数の遺物が出土するものの，その他の竪穴住居跡からの出土は少ない。Ⅲ区のＳＩ301竪穴住居跡からも遺物は多く出土しており，Ⅰ～Ⅲ区ともかまどを持つ竪穴住居跡は例外なく多くの遺物を出土することがわかる。また，坏の出土比率も全出土遺物の17%前後と比較的高い。ＳＩ104竪穴住居跡から堝とともに，多数の完形の坏が出土した。また，土壙はⅠ，Ⅱ区から32基検出されているが，遺物の出土量は極めて少ない。

遺構外出土遺物は，あまり多い方ではないが，縄文時代前・中・後・晩期，弥生時代，平安時代のものが出土しており，Ⅰ区では縄文時代晩期後葉の土器が，完形一個を含め数ヵ所からまとまって出土した。概して言うと，Ⅰ区は晩期のものが，Ⅱ区は後期のものが多く出土する。



16：中の崎遺跡

第１図　遺跡位置図

2．調査の方法

中の崎遺跡はサービス＝エリアのため面積が広く，そのため調査は２か年継続して行われた。55年度は南側のＩ区から調査にはいったが，Ⅱ区は山林のためＩ区のみに５ｍ×５ｍのグリッドを組み調査にはいった。グリッドの南北基線は日本道路公団の付設したＳＴＡ125＋00とＳＴＡ125＋40を結ぶ線とした。南北基線はアルファベットとし，西に行くにつれ進むものとした。調査区域の幅が広くＡ～Ｚでは足りず，その西側についてはＡ̄，Ｂ̄……として区別した（西←……Ｂ̄，Ａ̄，Ｚ，Ｙ……Ｎ，Ｍ，Ｌ……→東）。南北基線は算用数字とし北へ行くにつれ進むものとした（北←……12，11，10……→南）。各グリッドの名称はこれら基線の直交する東南隅の座標の算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼ぶことにした（15－Ｋ，14－Ｌ……）。

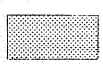
56年度調査はⅢ区より行ったが，Ⅱ区内はまだ整備されておらず，既調査区であるＩ区からⅡ区内を通してⅢ区へグリッドのラインで見通すことは不可能だった。このため見通せるところを利用して，セオドライトと横河ヒューレット＝パッカード社光波測距測角儀モデル3810Ａを使いⅢ区内に仮基準杭を２本打ちこみ，これらの杭を使ってＩ区の基線をそのまま利用し，Ⅲ区内にグリッドを組んだ。

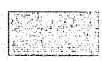
Ⅱ区調査開始時にはＩ区の基準杭が工事のため消滅していたのでⅢ区から南へ返す形で業者に委託して杭打ちを行った。

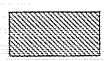
遺構はグリッドの基線をもとに，間尺もしくは１ｍのメッシュを組んで実測した。実測の縮尺は原則としてＳ＝1/20で，カマド等必要なものはＳ＝1/10で行った。また地形実測図は，航空測量と現場にて行ったＳ＝1/200の平板測量により作成した。

報告書使用の挿図は現場作成のもの及び整理期間中作成のものをもとに，遺構実測図のうち竪穴住居跡，堀跡については任意の縮尺，土壙はＳ＝1/40とし，遺物実測図はＳ＝1/2及び1/3にできるかぎり統一した。遺物の写真図版については遺物実測図と同じく1/2，1/3とした。

遺構実測図中に使用したスクリーン＝トーンは次のとおりである。

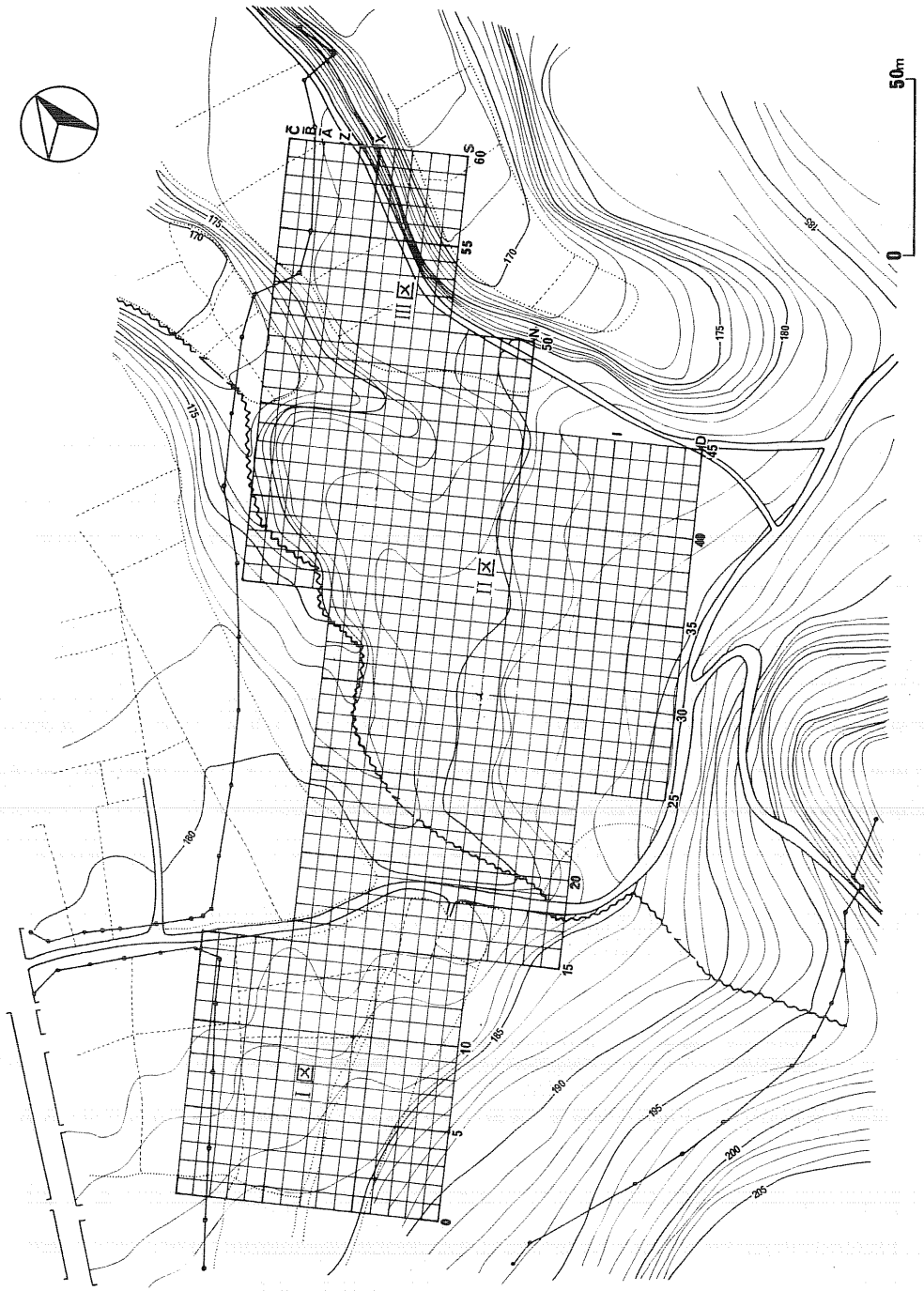

焼土


炭化物


地山

遺構・遺物記号は，平城京発掘調査で実施しているものを参考に縦貫自動車道関係遺跡発掘担当者が協議して定めたものを使用した。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
ＳＡ	棚列・柱列	ＳＫ	土壙	ＳＸ(F)	焼土遺構	ＲＱ	石製品
ＳＢ	建物跡	ＳＫ(F)	フラスコ状ピット	ＳＸ(R)	捨場	ＲＴ	貝製品
ＳＣ	廊	ＳＫ(I)	竪穴状遺構	ＳＸ(S)	配石（集石・立石・組石・ストンサークル）	ＲＵ	人骨
ＳＤ	溝・堀・濠	ＳＫ(P)	ピット	ＳＸ(U)	土器埋設遺構	ＲＶ	紙・布製品
ＳＥ	井戸跡	ＳＫ(S)	土壙墓	ＲＣ	炭化物	ＲＷ	木・竹製品
ＳＦ	築地・土塁	ＳＫ(T)	トラップピット	ＲＭ	金属製品	ＲＹ	その他
ＳＧ	苑池	ＳＬ	河川	ＲＮ	自然遺物		
ＳＨ	広場	ＳＭ	道路・橋・階段	ＲＯ	骨角製品		
ＳＩ	住居跡	ＳＸ	その他	ＲＰ	土製品		


50m
0
III区
II区
I区
S
N
D
I
60
55
50
45
40
35
30
25
20
15
10
5
0
175
170
180
185
190
195
200
205

第2図　グリッド配置図

3．調査経過

中の崎遺跡の発掘調査は，サービス＝エリア区域内で面積の広いこともあって，昭和55年8月22日～12月12日，昭和56年5月25日～11月14日の2か年にわたって調査が行われた。発掘予定面積は12,920m²である。

中の崎遺跡は大きく3つの台地からなっており，それらを南から順にⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区と呼ぶことにした（第2図）。昭和55年度はこのうちⅠ区を調査することにした。

鳥居平遺跡を終了した昭和55年8月22日から，器材搬入を行い，発掘調査にはいった。数本のトレンチを入れて土層を観察したところ，Sライン以西で10ライン以南においての表土が深いことがわかり，9月14～16日の間，機械による表土剝ぎを行った。

16日に方形の竪穴住居跡を検出，SI001，002とした。遺構番号は検出順に001～付すこととし，精査の結果遺構でないとわかったものはそのまま欠番とした。18日にはⅠ区南側を東西に横切る農道に接してSI003を検出した。SI003は現在使用中の農道に遺構北側がかかっており，農道を付け替える必要が出てきた。そこで10月2日に道路を北側に付け替え，SI003の北側を精査したところ，遺構は既に道路により破壊されていた。また，これと前後してⅠ区の農道北側部分を精査したところ，表土がたいへん浅く，遺物も少なく遺構はまったく確認されなかった。

以後は，標準層位第Ⅴ層の火山灰層の上面・下面で面的精査を行い，竪穴住居跡，土壙，溝等を検出した。しかし，遺構が確認される箇所は表土も薄く，火山灰層との新旧関係をつかむのは難しかった。SI001，002が火山灰層より新しいことが確認されたにすぎない。遺構はⅠ区北西部に集中していたため，ここに遣り方を組んだ（基準高：H＝181.200m）。13日に9－Sグリッドから土師器の合口甕棺が出土し，これをSX011とした。周辺を精査したところ，小ピットが検出されたものの合口甕棺と関連ある遺構は検出できなかった。

29日からは，Ⅱ区の大部分が山林のため枝払いなどの整備を始めた。

30日に，遺構確認面である標準層位第Ⅷ層上面まで掘り下げがほぼ終了したので，S＝1/200の遺構分布図を作成した。11月11日から，さらに標準層位第Ⅸ層上面まで，トレンチによる掘り下げを行った。その結果，遺構は確認されなかったが，第Ⅷ層中から縄文時代前期の土器片数点が出土した。

11月下旬からは，検出済の住居跡，土壙，溝等の実測を急いだが，降雪のため思うようにはかどらず，12月12日，Ⅰ区の調査を終了した。Ⅰ区の発掘面積は4,386m²であった。

昭和56年度は当所妻の神Ⅰ遺跡の調査を行わなければならず，5月25日から調査にはいったものの，作業員を二分しての調査であった。

適当なプレハブ建設用地がないため，遺跡の北端のⅢ区を先行調査し，終了後，そこを建設用地とすることにし，５月25日からⅡ区のトレンチ掘りとⅢ区の表土剝ぎにはいった。６月８日に方形の竪穴住居跡を検出，ＳＩ301とした。Ⅲ区から検出された遺構はこれのみであり，20日にⅢ区の調査を終了した。Ⅲ区の発掘面積は1,962㎡であった。

Ⅱ区は面積が広く，また試掘の結果表土部分がある程度の厚さをもつことがわかったので，表土は機械で剝ぐことにし，機械排土の終了した７月６日からⅡ区の精査にはいった。14日～17日にⅡ区に業者による杭打ちの設定を行った。グリッドの基線は昨年調査分のものをそのまま使用した。平行して調査していた妻の神Ⅰ遺跡の調査が急がれるため，表土剝ぎの途中ではあったが，25日から一旦，中の崎遺跡の調査を中断した。

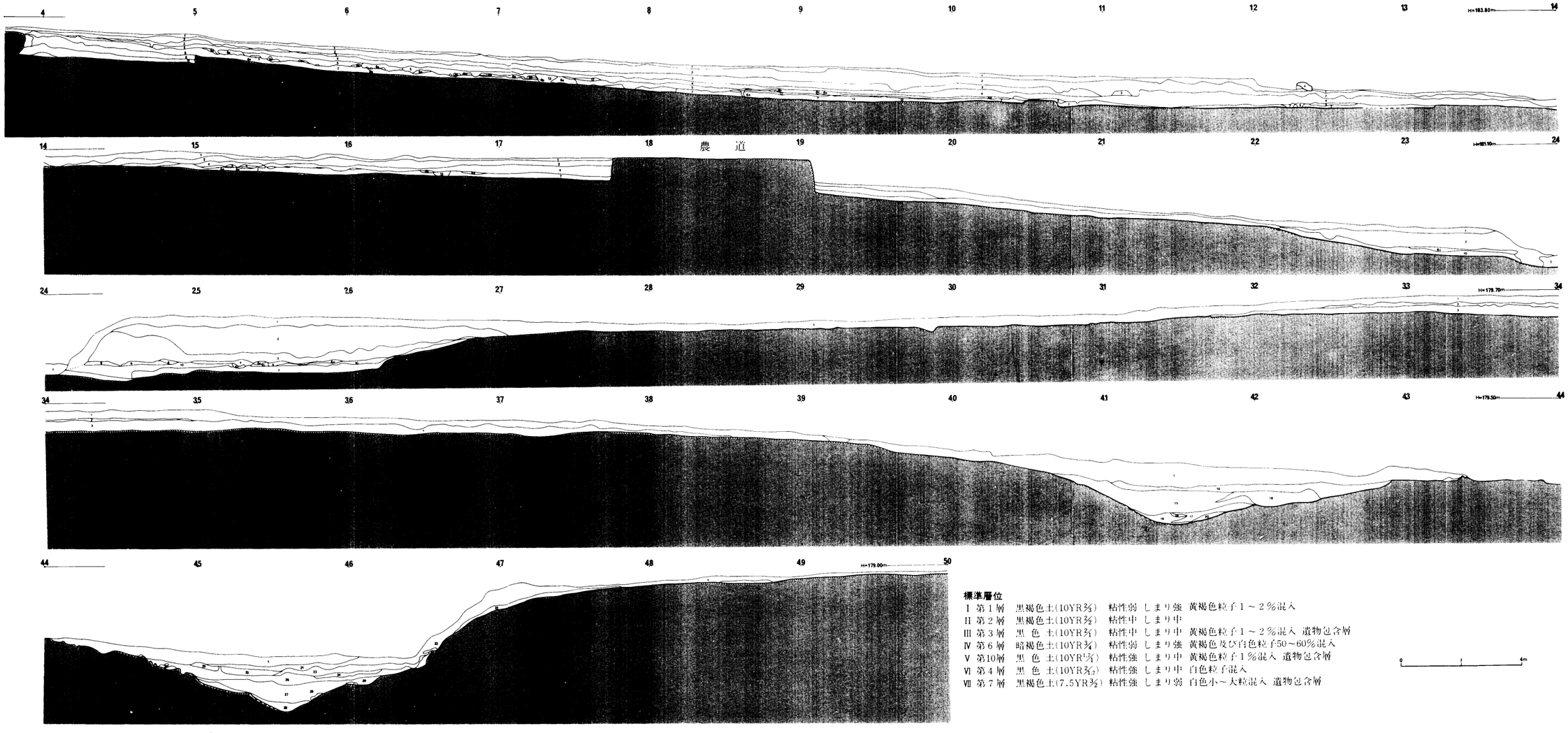
妻の神Ⅰ遺跡を終了し，８月17日から，全員で中の崎遺跡の調査を再開した。24日Ⅱ区北側から方形の住居跡プランを確認，ＳＩ101とした。混乱を防ぐためⅡ区の遺構番号は101からとし，検出順に番号をふった。その後は地山の一つ上の層である暗褐色土上面で遺構確認に努め，住居跡，土壙等を検出していった。

９月１日から小玉班の補佐員，作業員が応援に参加する。この後は，さらに掘り下げ地山面で精査面積を広げ，住居跡をほぼ掘り終えた10月22日に航空測量を行った。遺構の最終確認面である地山面からは，ピットが数基確認されたのみで，縄文時代の遺物もほとんど出土しなかった。

地山面まで掘り下げをほぼ終了した11月９～14日の間，平板測量による地形図を作成，対岸の水晶山頂から遺跡全景を撮影し，中の崎遺跡の発掘調査を終了した。Ⅱ区の発掘面積は，12,810㎡であり，この結果中の崎遺跡の発掘総面積は19,158㎡となった。

SI 018
SK024
SD019
SI 012
SK035
SK017
SK016
SD015
SI 014
SK025
SK026
SK031
SK032
SX036
SK028
SK033
SK030
SI 002
SX011
SK029
SI 034
SI 009
SK010
SI 008
SD005
SI 001
SD006
STA 25+20
SK027
SD004
SK021
STA126+00
SK143
SI 107
SI 102
SP104
SK147
SD148
SK141
SX139
SX138
SI 117
SK116
SK115
SX128
SI 111
SK114
SB115
SK119
SK132
SX127
SI 112
SB136
SX130
SK135
SK133
SX125
SB149
SI 113
SX137
SX123
SK131
SB120
SX121
SX129
SK140
SX122
SX124
SK134
SK146
SK110
SK116
SI 103
SI 101
SK105
SI 106
SI 108
STA127+00
SI 301
0
20
40 m

第 3 図　遺構配置図


4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
H=183.80m
14
14
15
16
17
18
農 道
19
20
21
22
23
H=181.10m
24
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
H=179.70m
34
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
H=179.50m
44
44
45
46
47
48
49
H=179.00m
50
標準層位
Ⅰ 第1層 黒褐色土(10YR3/3) 粘性弱 しまり強 黄褐色粒子1～2%混入
Ⅱ 第2層 黒褐色土(10YR3/2) 粘性中 しまり中
Ⅲ 第3層 黒 色 土(10YR2/1) 粘性中 しまり中 黄褐色粒子1～2%混入 遺物包含層
Ⅳ 第6層 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱 しまり強 黄褐色及び白色粒子50～60%混入
Ⅴ 第10層 黒 色 土(10YR1/2) 粘性強 しまり中 黄褐色粒子1%混入 遺物包含層
Ⅵ 第4層 黒 色 土(10YR3/2) 粘性強 しまり中 白色粒子混入
Ⅶ 第7層 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強 しまり弱 白色小～大粒混入 遺物包含層
0
2
4m

第4図 Sライン断面図

4．遺跡の層位

遺跡は約20,000m²の広範な地域にわたっており，Ⅰ～Ⅲ区ではそれぞれ基本層序には差異がみられる。

Ⅰ区においては，1～7層がほぼ基本層序といえる。ただし，竪穴住居跡を検出した北西部では削平がひどく，1層の次が地山という箇所も多くみられた。

Ⅱ区においては，2本の沢目がみられ，その箇所はかなり低くなっている。それ以外の平坦な台地面においても，Ⅰ区ほどの厚い堆積は認められず，大湯浮石層も欠如しているところが多く，あるところでも土壌化が進み，しっかりした層とはなっていない。

Ⅲ区においては，表土が薄く，直下が地山という状態であった。

遺跡のほぼ中央を通るSラインにおける断面の土層註記は以下のとおりである（第4図）。

第1層	黒褐色土	10YR3/2	表土。ローム中粒混入。
第2層	黒褐色土	10YR2/3	黄褐色小粒混入。4層に比してしまりよし。3層と同程度のしまり。
第3層	黒色土	10YR2/1	炭化物極小粒，黄褐色小粒混入。粘性ややあり。
第4層	黒色土	10YR2/1.7	炭化物極小粒，黄褐色小粒混入。粘性ややあり。遺物包含層。
第5層	褐色土	10YR4/4	平安時代竪穴住居跡確認面だがこの面で確認できないものも多い。テフラ混入。
第6層	明黄褐色土	10YR7/6	大湯浮石層。6aはアシュ部分主体，6bはパミス部分主体，6cは黒色土化著しい。
第7層	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色小～中粒混入。粘性強。しまり悪し。遺物包含層。
第8層	黒褐色土	7.5YR3/2	黄褐色大粒を主に下部に混入。粘性強。しまり悪し。
第9層	暗褐色土	10YR3/4	地山への漸移層。
第10層	黒色土	10YR1.7/1	粘性強。しまり中。黄褐色粒子1％混入。遺物包含層。
第11層	黄褐色土	10YR5/8	地山。鳥越段丘。
第12層	黒褐色土	7.5YR2/1.5	
第13層	黒褐色土	10YR2.5/2	4，5，6a層の混入層。かく乱。
第14層	黒褐色土	10YR3/2	しまり大。粘性弱。
第15層	黒色土	10YR1.7/1	しまり大。粘性弱。
第16層	黒褐色土	10YR3/2	しまり大。粘性弱。
第17層	黒色土	10YR1.7/1	しまり大。粘性弱。
第18層	黒色土	10YR1.75/1	しまり大。粘性中。
第19層	黒色土	10YR2/1.5	しまり大。粘性強。
第20層	黒色土	10YR2/1	しまり大。粘性強。砂粒が底面に堆積している。
第21層	黒色土	10YR2/1	しまり大。粘性弱。
第22層	暗褐色土	10YR3/4	しまり大。粘性弱。
第23層	黒褐色土	10YR3/2	しまり中。粘性弱。
第24層	黒色土	10YR2.5/1	しまり大。粘性弱。
第25層	暗褐色土	10YR3/3	しまり大。粘性弱。
第26層	黒色土	10YR2/1	しまり大。粘性中。
第27層	黒色土	10YR1.5/1	しまり中。粘性中。
第28層	黒色土	10YR1.75/1	しまり小。粘性強。
第29層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	大湯浮石の二次堆積か？

5．遺構と遺物

(1) 遺　構

① Ⅰ区の遺構

a．竪穴住居跡

ＳＩ001竪穴住居跡

第　1　表	挿図番号	第5～9図	図版番号	図版5～7・51・52
遺構名	ＳＩ001	検出地区	14―Ｓ，14―Ｔ，15―Ｓ，15―Ｔ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	658cm	614cm	624cm	631cm
	壁高	58.8～67.8cm	61.6～75.8cm	60.5～65.0cm	54.0～67.4cm
	壁溝幅	25.0～38.0cm	26.0～35.0cm	22.0cm	26.0～37.0cm
	壁溝深	17.3～27.6cm	19.3～29.2cm	19.7～24.1cm	17.2～26.1cm

形態	方形	面積	41.1m²	主軸方向	N21°E
かまど	位置	南西壁西寄り		構築素材	芯部石組

プラン確認　標準層位のⅣ層で一部壁が検出されたが，極めて不明確だったため，地山上面まで掘り下げて確認した。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。

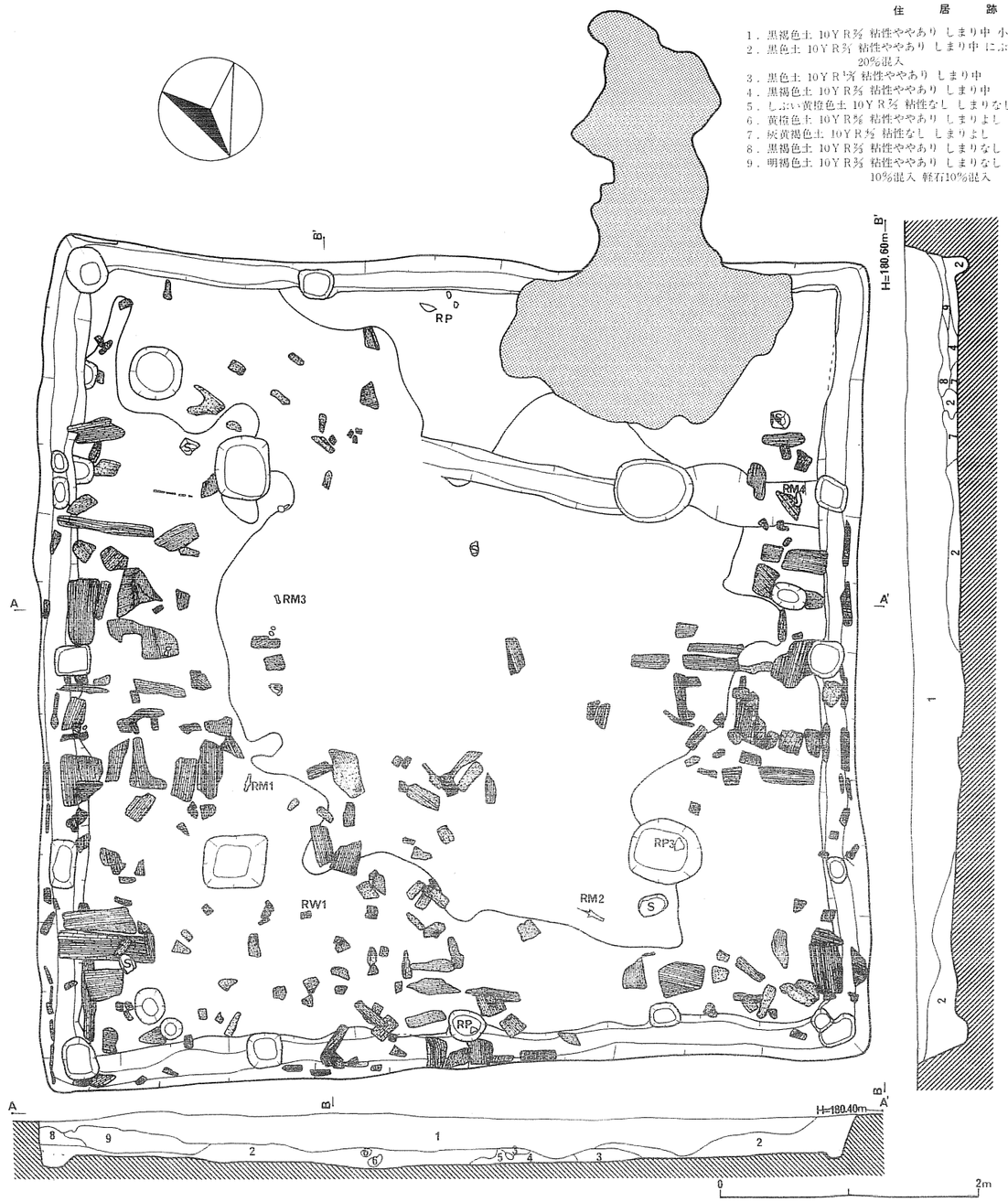
床面　平坦で堅固である。

壁溝　ほぼ全周している。

柱穴，ピット　西側隅を除く三隅と東壁側に2個，西壁側に2個，南壁側に1個，北壁側に3個及び対角線上に4個の計15個の住穴が確認された。他に2個のピットが確認された。

かまど　扁平な石を芯材として構築されたものである。煙道部に天井部の芯材として用いられたと思われる石が崩落している。構築土に大湯浮石の混入がみられるので，大湯浮石より新しい時期に構築されたものであろう。

遺物とその出土状態　当竪穴住居跡からの遺物出土量は，中の崎遺跡においては最大量である。坏，甕ともに出土量は多く，その比率は約1：3である。坏はいずれも回転糸切りである。甕は小型～大型のものまであり，ロクロを使用したものが多い。口縁部は反りがあるがそれほ



第５図　SI001竪穴住居跡

土　色　説　明

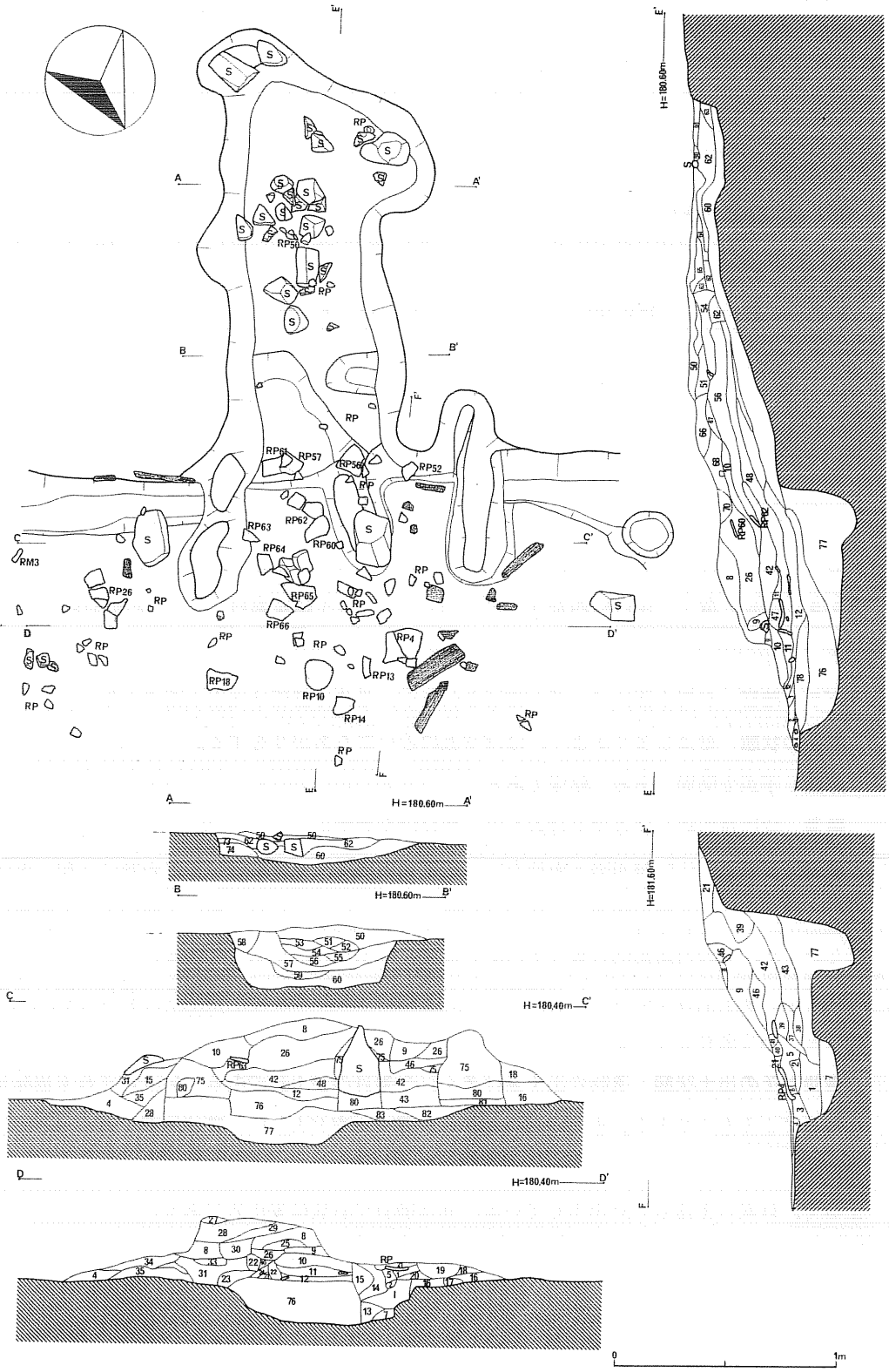
住　居　跡

1．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 小粒の軽石10%混入
2．黒色土 10ＹＲ2/1 粘性ややあり しまり中 にぶい黄橙色土(10ＹＲ7/3) 20%混入
3．黒色土 10ＹＲ1/2 粘性ややあり しまり中
4．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中
5．しぶい黄橙色土 10ＹＲ6/3 粘性なし しまりなし 浮石層
6．黄橙色土 10ＹＲ8/6 粘性ややあり しまりよし
7．灰黄褐色土 10ＹＲ4/2 粘性なし しまりよし
8．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまりなし
9．明褐色土 10ＹＲ5/6 粘性ややあり しまりなし しぶい黄橙色土(10ＹＲ7/3) 10%混入 軽石10%混入

カ　マ　ド

1．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性なし しまりなし 砂質 灰・浮石混入
2．明褐色土 7.5ＹＲ5/6 粘性あり しまり中 粘土 わずかに炭化物混入
3．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性ややあり しまり中 わずかに炭化物混入
4．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性なし しまり中 炭化材混入
5．暗褐色土 10ＹＲ3/4 粘性ややあり しまり中
6．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまりなし
7．暗褐色土 10ＹＲ3/4 粘性なし しまりなし 砂質 灰・浮石混入
8．黒色土 10ＹＲ3/1 粘性なし しまりよし(粒状山のパミス５%混入 わずかに浮石含む)
9．にぶい黄橙色土 10ＹＲ6/3 浮石
10．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性ややあり しまりよし 焼土 炭化物５%混入
11．10' 10より黒みがわずかに強い
12．褐色土 7.5ＹＲ4/6 粘性あり しまり中 焼土20%混入 粘土質
13．褐色土 7.5ＹＲ4/3 粘性ややあり しまり中 粘土質
14．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性ややあり しまり中 焼土５%混入
15．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 炭化物10%焼土５%混入
16．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 焼土５%混入
17．明褐色土 7.5ＹＲ5/6 粘性あり しまりよし 粘土質
18．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中
19．黒褐色土 10ＹＲ3/2 褐色土(10ＹＲ4/6)混入
20．褐色土 10ＹＲ4/4 黒褐色土(10ＹＲ3/2)混入
21．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性あり しまり中
22．赤褐色土 5ＹＲ4/4 粘性なし しまりよし 粘土が焼けて固ったもの
23．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性なし しまりよし
24．褐色土 7.5ＹＲ4/3 粘性ややあり しまり中 にぶい橙色土(7.5ＹＲ7/4)20%混入
25．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 明黄褐色土(10ＹＲ6/6)20%混入
26．褐色土 7.5ＹＲ4/4 2･9の浮石の混入
27．にぶい褐色土 7.5ＹＲ5/4 粘性なし しまりよし 浮石
28．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 わずかに明黄褐色土(10ＹＲ7/6)混入
29．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 明黄褐色土(10ＹＲ7/6)30%混入
30．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 明黄褐色土(10ＹＲ7/6)40%混入
31．橙色土 7.5ＹＲ6/6 粘性なし しまり中 焼土30%混入
32．31' 焼土量が多い(40%)
33．明褐色土 7.5ＹＲ5/6 粘性あり しまり中 粘土質
34．赤褐色土 5ＹＲ4/6 粘性なし しまりあり
35．褐色土 10ＹＲ4/4 粘性ややあり しまりなし
36．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性ややあり しまりなし
37．黒褐色土 7.5ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 焼土
38．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中
39．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまりなし 焼土 炭化物混入
40．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性ややあり しまり中 焼土
41．黒褐色土 7.5ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 粘土質
42．褐色土 7.5ＹＲ4/4 粘性あり しまりよし 粘土質(カマドの天井)
43．黒褐色土 7.5ＹＲ3/2 粘性ややあり しまりよし 焼土・炭化物混入
43' 43に比較して混入粒子大きい
44．黒褐色土 7.5ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中
45．43' 焼土・炭化物やや少ない
46．黒褐色土 7.5ＹＲ3/2 褐色土(7.5ＹＲ4/6)混入
47．褐色土 10ＹＲ4/4 粘性あり しまり中 粘土質
48．明褐色土 10ＹＲ5/6 粘性ややあり しまりなし

50．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性なし しまりあり 浮石５%混入
51．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性なし しまりあり 浮石30%混入
52．にぶい黄橙色土 10ＹＲ6/3 粘性あり しまり中 粘土
53．暗褐色土 10ＹＲ3/4 粘性ややあり しまり中 焼土・炭化物10%混入
54．暗褐色土 10ＹＲ3/4 粘性ややあり しまり中 粘土質 わずかに焼土混入
55．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性なし しまり中 焼土・炭化物10%混入
56．55' 色がわずかに明るい
57．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 焼土５%混入
58．にぶい黄橙色土 10ＹＲ6/3 粘性あり しまり中 粘土
59．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中
60．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 パミス５%混入
61．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性あり しまりよし 粘土質
62．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまりよし 焼土・小石ともに５%混入
63．明褐色土 10ＹＲ5/6 粘性ややあり しまりよし 粘土質
64．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまりよし 浮石５%混入
65．褐色土 10ＹＲ4/4 粘性ややあり しまりよし 焼土・浮石10%混入
66．明褐色土 10ＹＲ5/6 粘性ややあり しまり中
67．66' しまりなし やや暗い色
68．褐色土 10ＹＲ4/4 粘性ややあり しまり中 焼土わずかに混入 浮石ブロック混入
69．褐色土 10ＹＲ4/4 粘性ややあり しまり中 焼土10%混入
70．明黄褐色土 10ＹＲ6/6 粘性ややあり しまり中 粘土質
71．明褐色土 7.5ＹＲ5/6 粘性ややあり しまり中 粘土質
72．黒色土 10ＹＲ2/1 粘性ややあり しまり中 褐色土(7.5ＹＲ4/6)20%混入
73．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性ややあり しまり中 浮石20%混入
74．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性なし しまり中 浮石10%混入
75．暗褐色土 7.5ＹＲ3/4 粘性あり しまり中 粘土質
76．明黄褐色土 10ＹＲ6/6 粘性なし しまりよし 粘土が焼けたもの パミス混入
77．明褐色土 10ＹＲ5/6 粘性なし しまりなし
78．暗灰黄色土 2.5ＹＲ4/2 粘性なし しまりよし 粘土が焼けて固ったもの 植物繊りを含む
79．明褐色土 7.5ＹＲ5/6 ?
80．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性なし しまり中 炭化物・焼土10%混入
81．黒褐色土 10ＹＲ3/2 粘性あり しまりよし
82．褐色土 7.5ＹＲ4/6 焼土
83．黒色土 10ＹＲ2/1 粘性ややあり しまり中



第6図　SI001竪穴住居跡カマド

ど大きく外反するものは少ない。砂底の土器も３点出土している。12は鞴の羽口で全体的に火熱を受け，特に上部が著しい。また上部にガラス質のものが付着している。また鉄器も出土している（第134図）。

ＳＩ002 竪穴住居跡

第　2　表	挿図番号	第10～12図	図版番号	図版８・９・53
遺構名	ＳＩ002	検出地区	13―Ｖ，13―Ｗ，14―Ｖ，14―Ｗ	

		東　側　壁	西　側　壁	南　側　壁	北　側　壁
法量	壁　長	531cm	496cm	494cm	500cm
	壁　高	35.7～44.1cm	40.2～48.8cm	38.4～46.7cm	35.6～45.8cm
	壁溝幅	15.0～26.0cm	21.0～29.0cm	10.0～26.0cm	17.0～26.0cm
	壁溝深	5.7～11.1cm	2.7～14.0cm	1.7～ 5.5cm	6.0～ 6.2cm

形　態	方　形	面　積	27.2m²	主軸方向	Ｎ34°Ｅ
かまど	位　置	南西壁西寄り		構築素材	芯部石組

プラン確認　Ⅳ層上面にて一部が確認されたが，最終確認面は地山上面である。

壁面の状態　壁はしまりがよく，ほぼ垂直に近い立ちあがりをする。

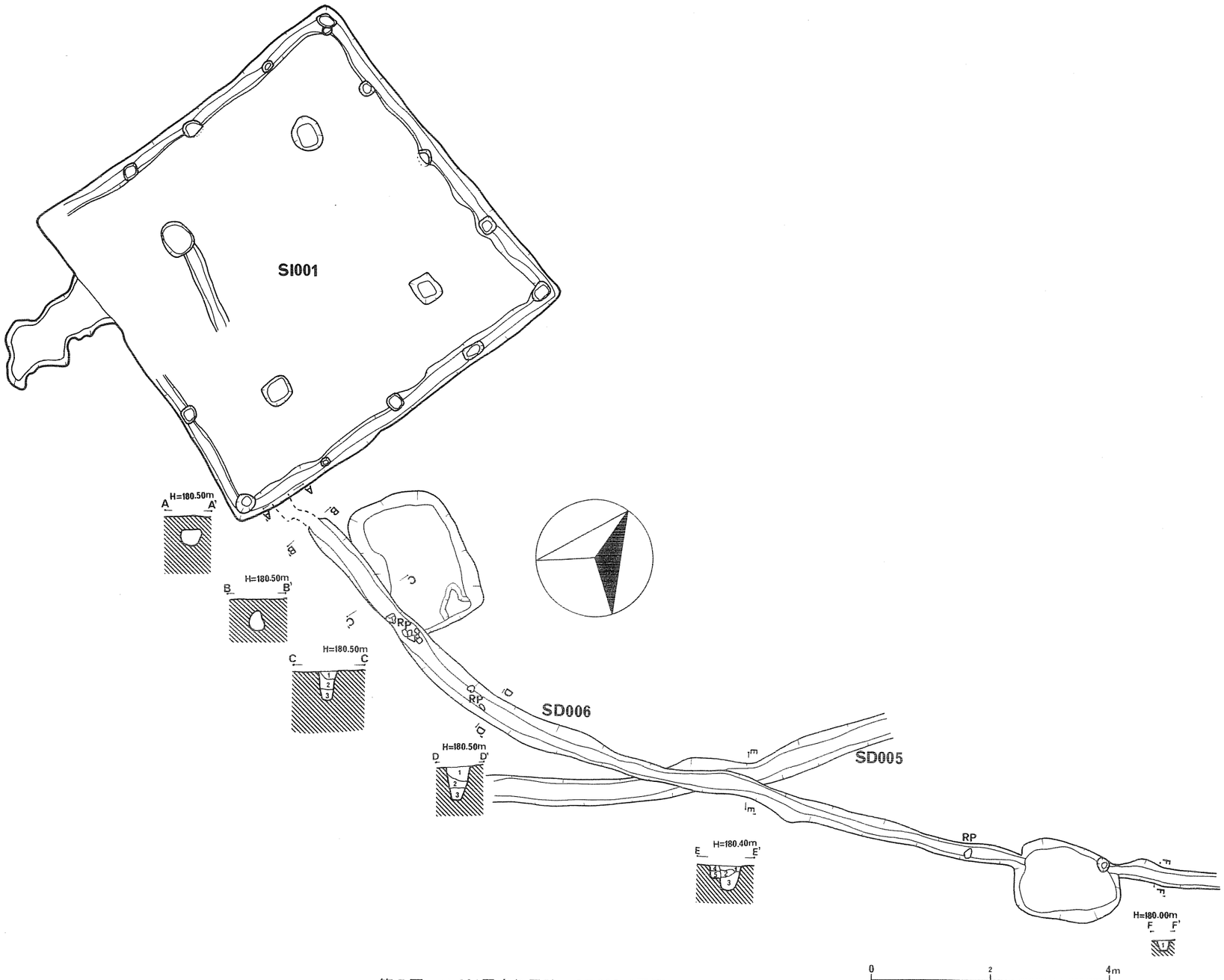
床面　平坦で堅固である。貼床である。

壁溝　住居跡四隅及びカマド付近を除いてほぼ全周する。

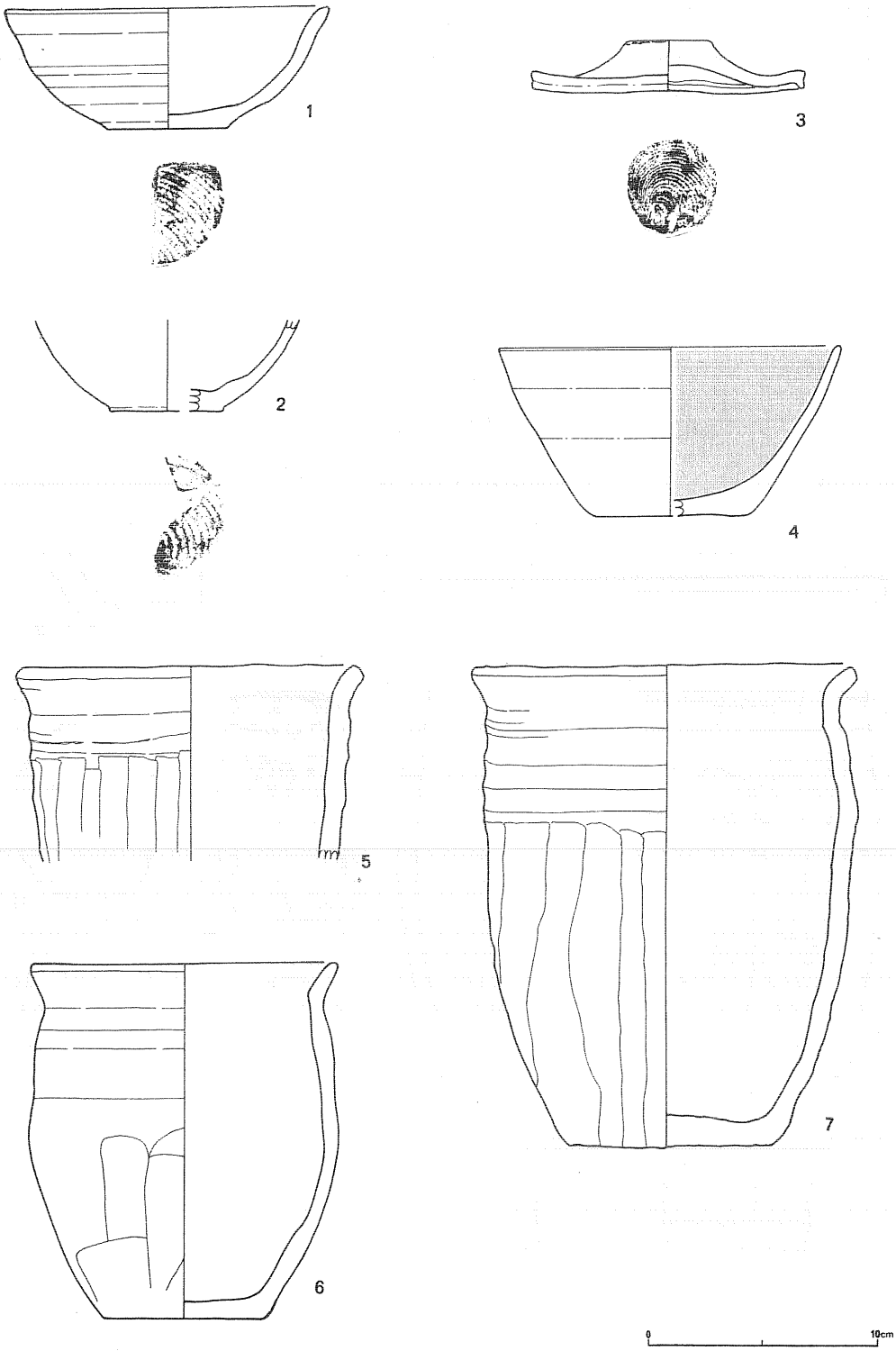
柱穴，ピット　住居跡四隅と南壁を除く三壁の中間部，及び南壁かまど両側に２個，南壁東側に１個，住居跡北側の床面に２個の計12個の住穴が検出された。他に３個のピットが確認されているが，その内南側隅のピット内からは多量の土器片が出土している。

かまど　扁平な石を芯材として構築されたものである。天井部，袖部共に芯材の石が構築当時に近い形で遺存している。

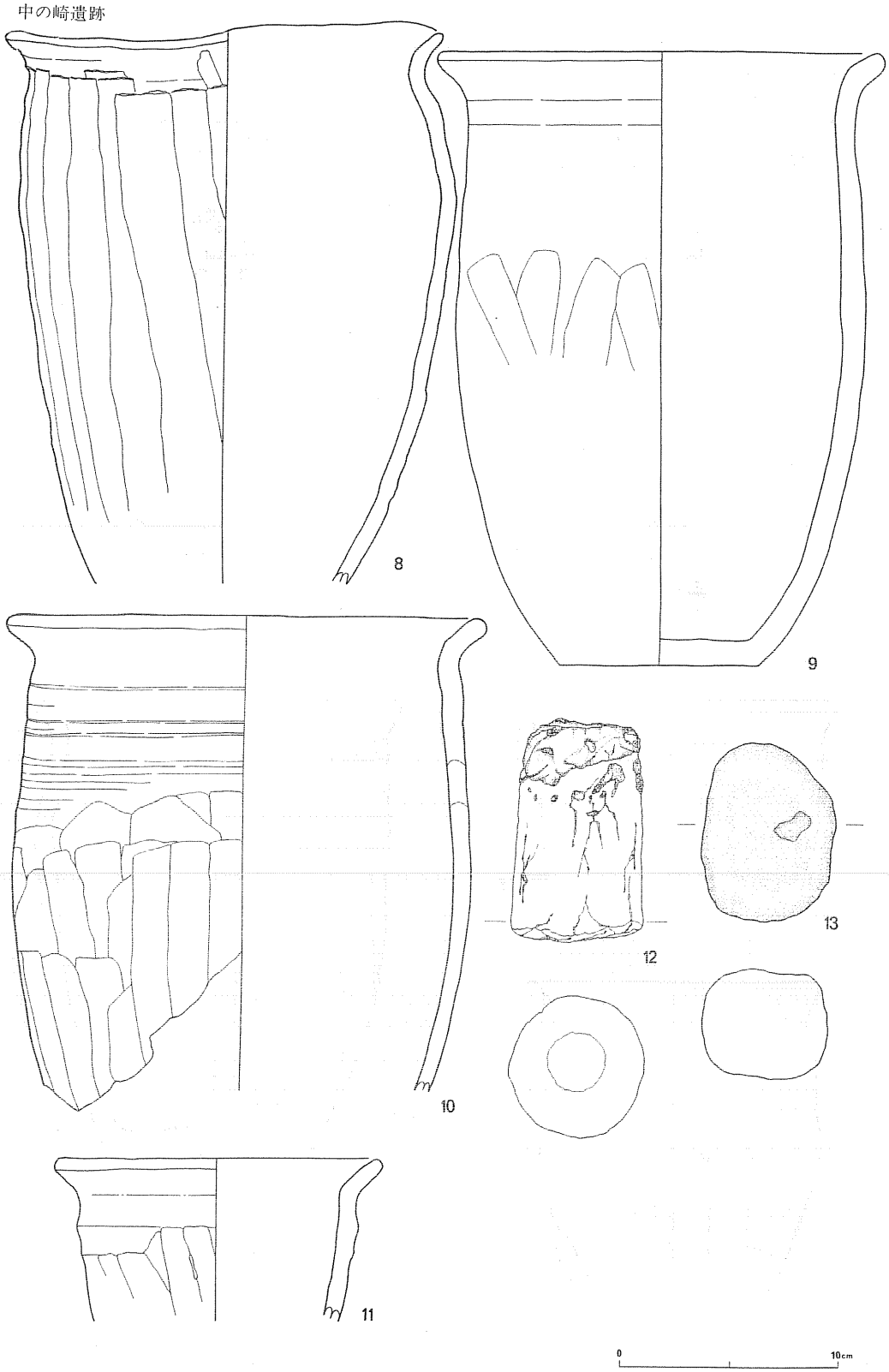
遺物とその出土状態　遺物の出土量は多く，３番目の出土量である。坏はいずれも固転糸切り技法によるものである。またいわゆる赤焼土器の比率が大きい。甕は頸部が短く，若干の反りのあるものが出土している。またロクロを使用している物も多い。第12図８は木葉痕のある土器で，砂底の土器も３点出土している。９は磨石で石質は安山岩である。



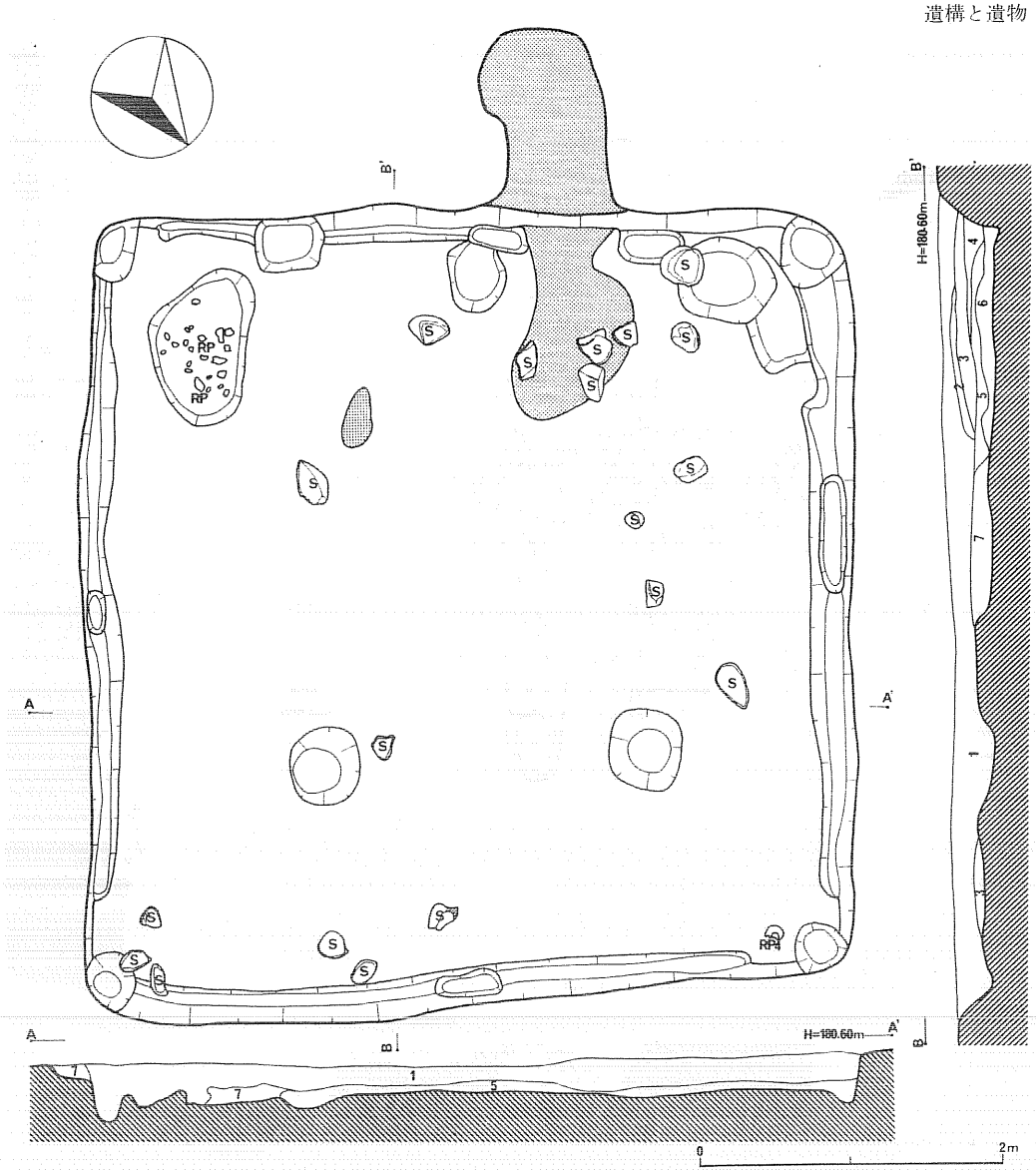
第７図　SI001竪穴住居跡，SD006付属溝



第８図　SI001竪穴住居跡出土遺物(1)



第９図　SI001竪穴住居跡出土遺物(2)



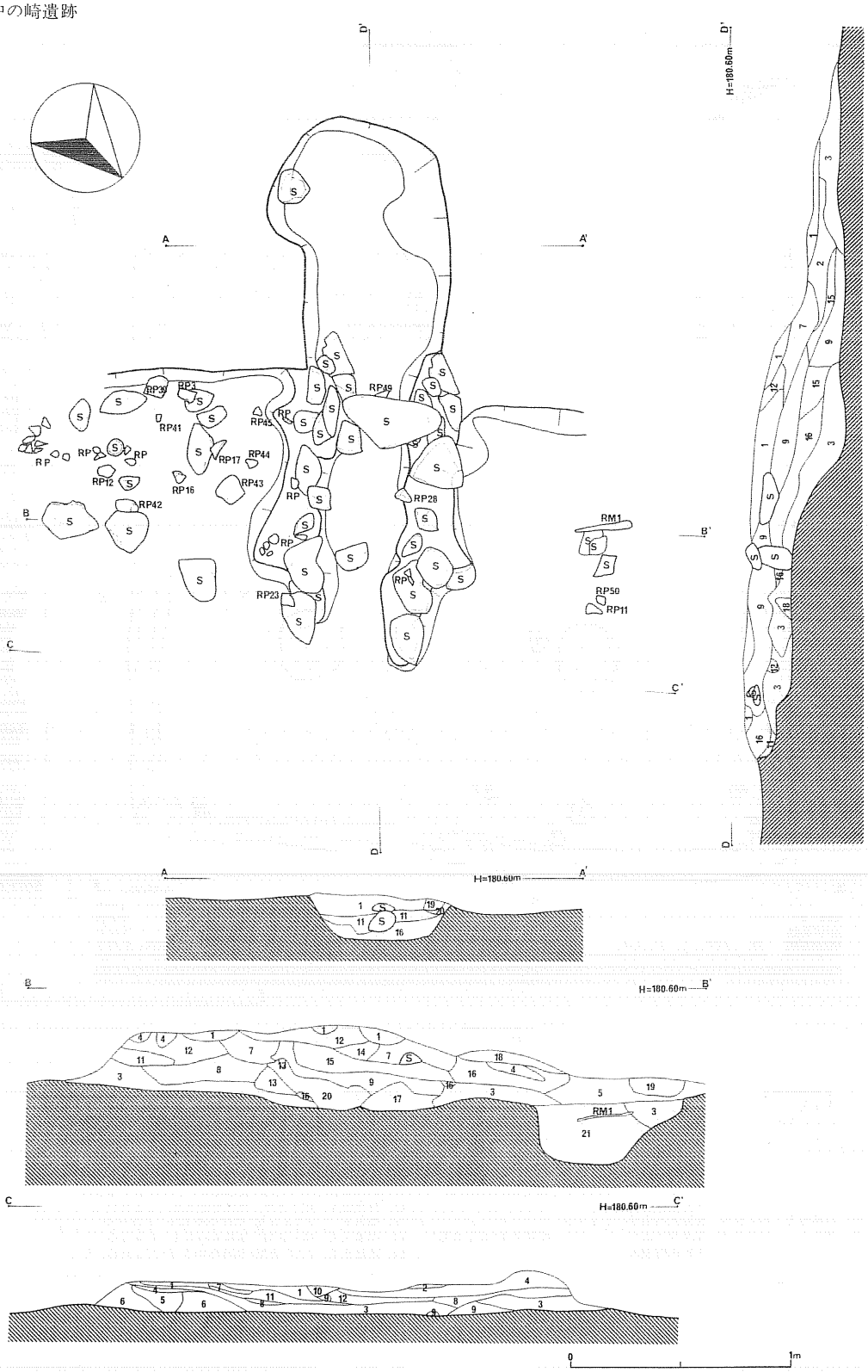
第10図　SI002竪穴住居跡

住居跡の埋土

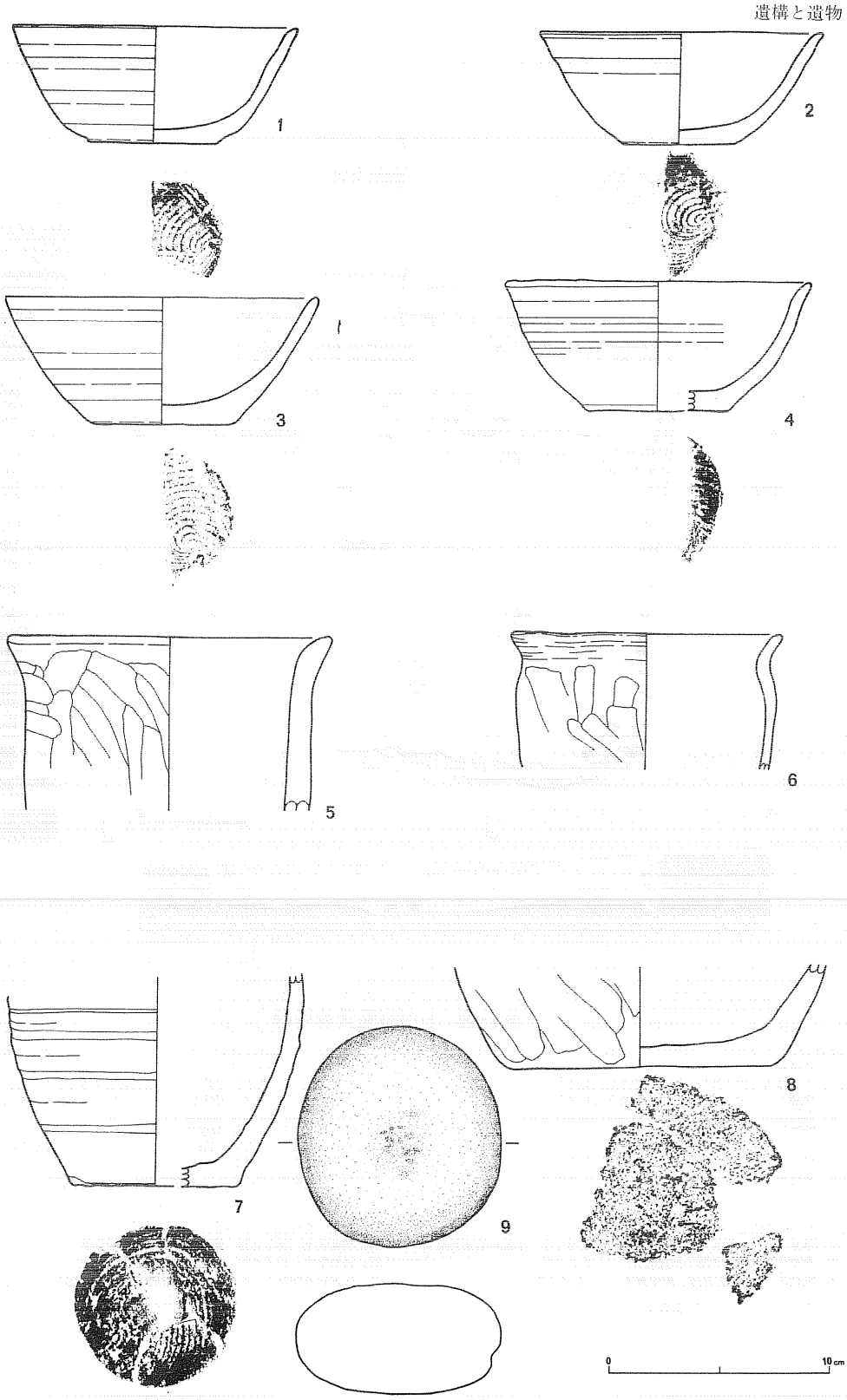
1．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり　しまり中　中粒の軽石30%混入
2．にぶい黄橙色土　10YR7/4　粘性なし　しまりなし
3．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり　しまり中　暗褐色(7.5YR3/4)大粒10%混入
4．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中
5．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中　黄橙色(10YR8/6)大粒5%混入
6．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中
7．黒色土　10YR1/2　粘性ややあり　しまり中　暗褐色土(10YR3/3)大粒40%混入)

カマドの埋土

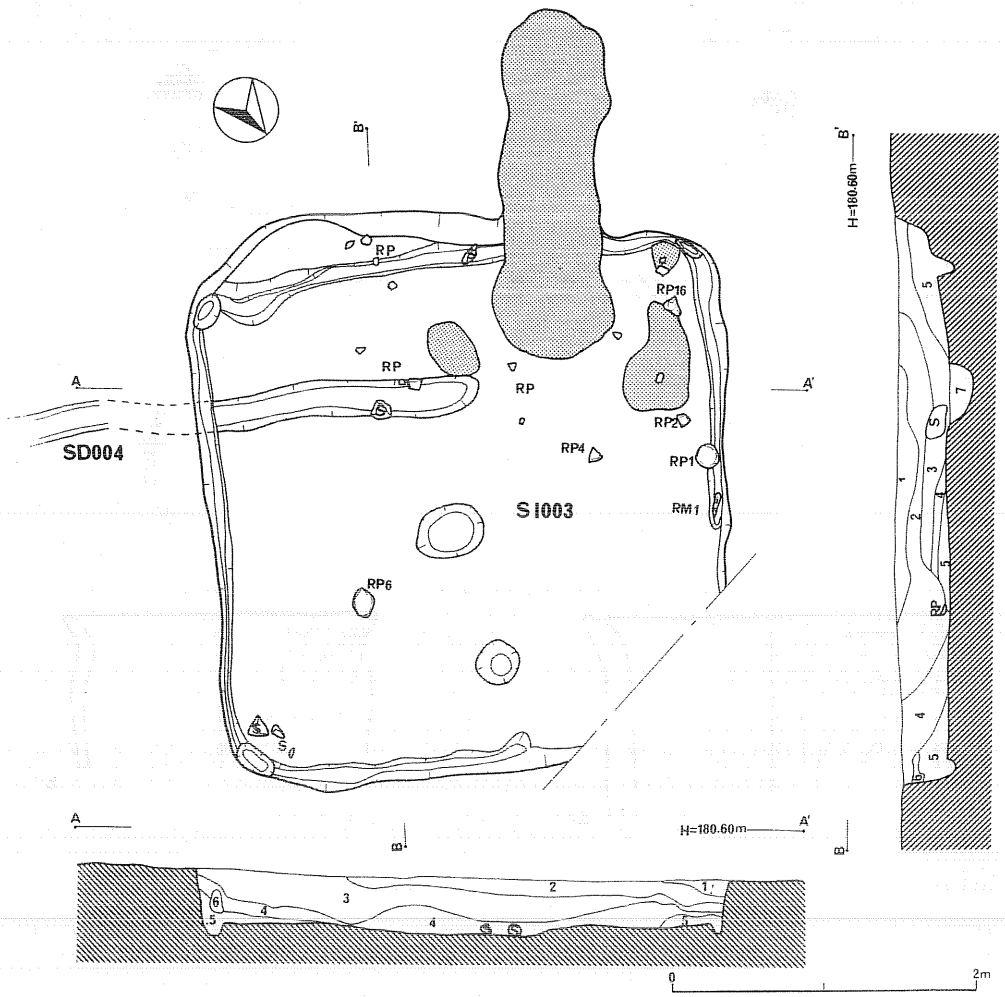
1．褐色土　7.5YR4/4　粘性あり　しまりなし
2．赤褐色土　5YR4/6　粘性ややあり　しまり中
3．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　明黄褐色(10YR6/6)極大粘混入　浮石30%混入
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　粘性ややあり　しまり中
5．黒色土　10YR1/2　粘性ややあり　しまり中　浮石極小粒30%混入
6．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中
7．赤褐色土　5YR4/6　粘性ややあり　しまり中
8．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中　明黄褐色(10YR6/6)混入
9．暗赤褐色土　5YR4/6　粘性ややあり　しまり中
10．黄褐色土　10YR5/6　粘性あり　しまりなし
11．黒褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中
12．褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり　しまり中
13．明褐色土　10YR5/6　粘性ややあり　しまり中
14．明褐色土　7.5YR5/6　粘性ややあり　しまり中
15．にぶい赤褐色土　5YR4/4　粘性ややあり　しまり中
16．褐色土　7.5YR3/4　粘性ややあり　しまり中　浮石極大粒5%混入
17．明黄褐色土　10YR7/6　粘性ややあり　しまり中
18．褐色土　10YR4/4　粘性ややあり　しまり中
19．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性ややあり　しまり中　赤褐色(5YR4/6)明黄褐色(10YR7/6)ブロック状に混入
20．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中　浮石極大粒80%混入



第11図　SI002竪穴住居跡カマド



第12図　SI002竪穴住居跡出土遺物



第13図　SI003竪穴住居跡

住居跡の埋土

1．黒褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまりよし
2．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまりなし
3．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまりなし
4．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまりなし　白色極小粒20～30%混入
5．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまりなし
6．黒色土　10YR1.7/1　粘性あり　しまりなし
7．黒褐色土　10YR3/2　粘性あり　しまりなし

カマドの埋土

1．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　小粒の石20%混入
2．黒褐色土　10YR3/3　粘性あり　しまり弱
3．褐色土　7.5YR4/6　粘性あり　しまり弱
4．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中
5．暗褐色土　7.5YR3/4　粘性あり　しまり中
6．にぶい赤褐色土　5YR4/4　粘性ややあり　しまり中
7．褐色土　7.5YR4/6　粘性ややあり　しまり中　小粒の石30%混入
8．赤褐色土　5YR4/6　粘性あり　しまり中
9．褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり　しまり中
10．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　大粒の石80%混入
10'．浮石がやや少ない（その他同じ）
11．褐色土　7.5YR4/4　粘性なし　しまり弱　浮石層
12．黒褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまり弱　極少粒の石50%混入
13．黒褐色土　7.5YR3/2　粘性まやあり　しまり中　や
14．黒褐色土　7.5YR3/2　粘性ややあり　しまり中
15．黒色土　7.5YR1/2　粘性ややあり　しまり中　小粒の石10%混入
16．極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性ややあり　しまり中
17．にぶい褐色土　7.5YR5/4　粘性ややあり　しまり中
18．赤褐色土　5YR4/6　粘性なし　しまり中
19．褐色土　7.5YR4/3　粘性ややあり　しまり中
20．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性あり　しまり中
21．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中
22．黒褐色土　10YR3/1　粘性ややあり　しまり中
23．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性あり　しまり中
24．暗褐色土　2.5YR3/4　粘性ややあり　しまり中　赤褐色土（5YR4/6）30%混入
25．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性ややあり　しまり中
26．明褐色土　7.5YR5/6　粘性ややあり　しまり中　小粒20%赤褐色土
27．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　小粒20%赤褐色土（5YR4/6）30%混入

ＳＩ003竪穴住居跡

第３表	挿図番号	第13～17図	図版番号	図版９～11・54・55
遺構名	ＳＩ003	検出地区	15―Ｕ，16―Ｕ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	325cm	(224)cm	338cm	(222)cm
	壁高	42.4～47.1cm	35.3～43.6cm	44.0～53.8cm	36.0～44.9cm
	壁溝幅	7.0～15.0cm	8.0～15.0cm	10.0～28.0cm	10.0～19.0cm
	壁溝深	6.9～15.0cm	6.1～ 8.5cm	5.0～ 8.0cm	8.2～15.7cm

形態	方形	面積	12.4㎡	主軸方向	N52°E
かまど	位置	南西壁西寄り		構築素材	芯部石組

プラン確認　上面は削平されており，表土下直下が地山で，その地山上面にて検出された。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。北側隅は農道下だったので，道路をつけ替えて掘り下げたが，遺構は既に破壊されていた。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　南壁を除く三方は壁沿いに壁溝が走るが南壁のかまど東側は壁より離れて壁溝が走っている。

かまど燃焼部東側付近より排水溝と思われるＳＤ004が東へ走っている。

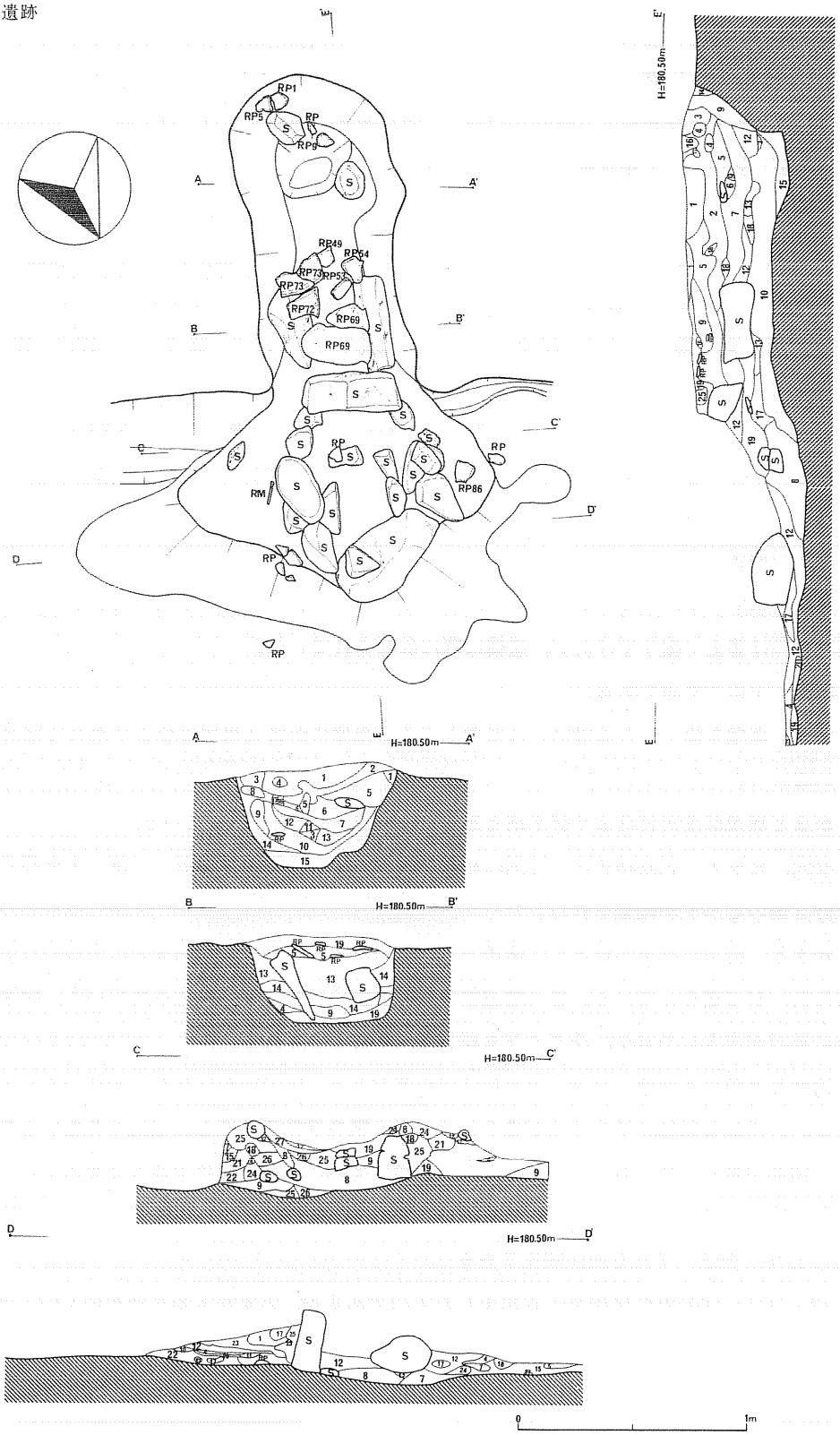
柱穴，ピット　北側隅を除く三隅に確認される。他に住居跡中央部に１個，中央部北側に１個計２個のピットが確認された。

かまど　扁平な石を芯材として構築されたものである。天井部，袖部共に芯材の石が構築当時に近い形で遺存している。また煙道部は土師器甕の破片により強化されている。構築土の一部に浮石が混入しており，浮石よりも新しい住居跡と思われる。

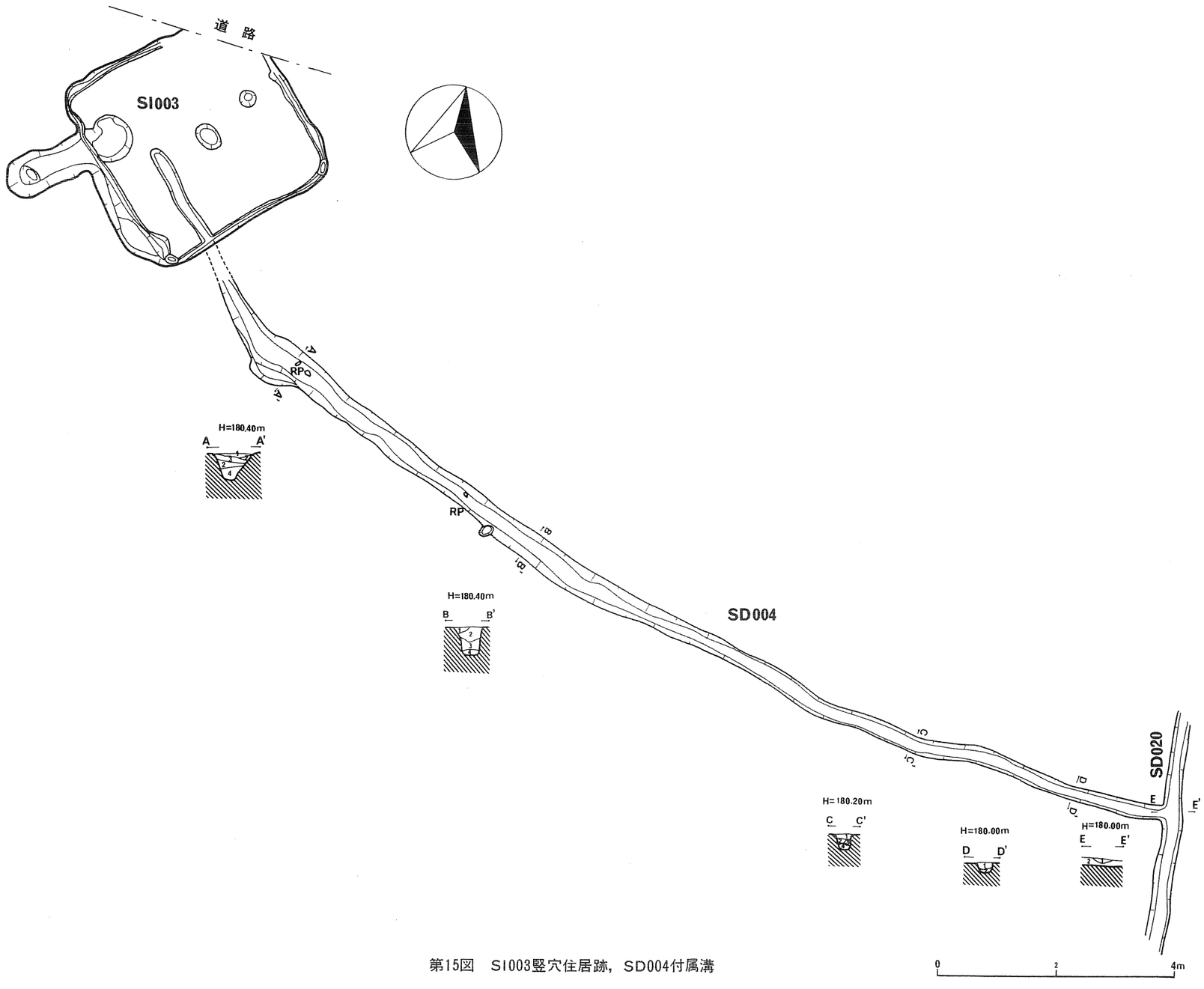
遺物とその出土状態　遺物の出土量は中程度である。坏の完形はなく，破片のみの出土であるが，いずれも回転糸切り技法が施されている。甕の口縁部はほとんど反りのないものもあるが，頸部が短く反りぐあいの比較的大きいものが多い。また砂底の土器も２点出土している。

第17図11～17は付属溝であるＳＤ004から出土したものである。坏は回転糸切り技法が施されており，甕はいずれも底部破片である。

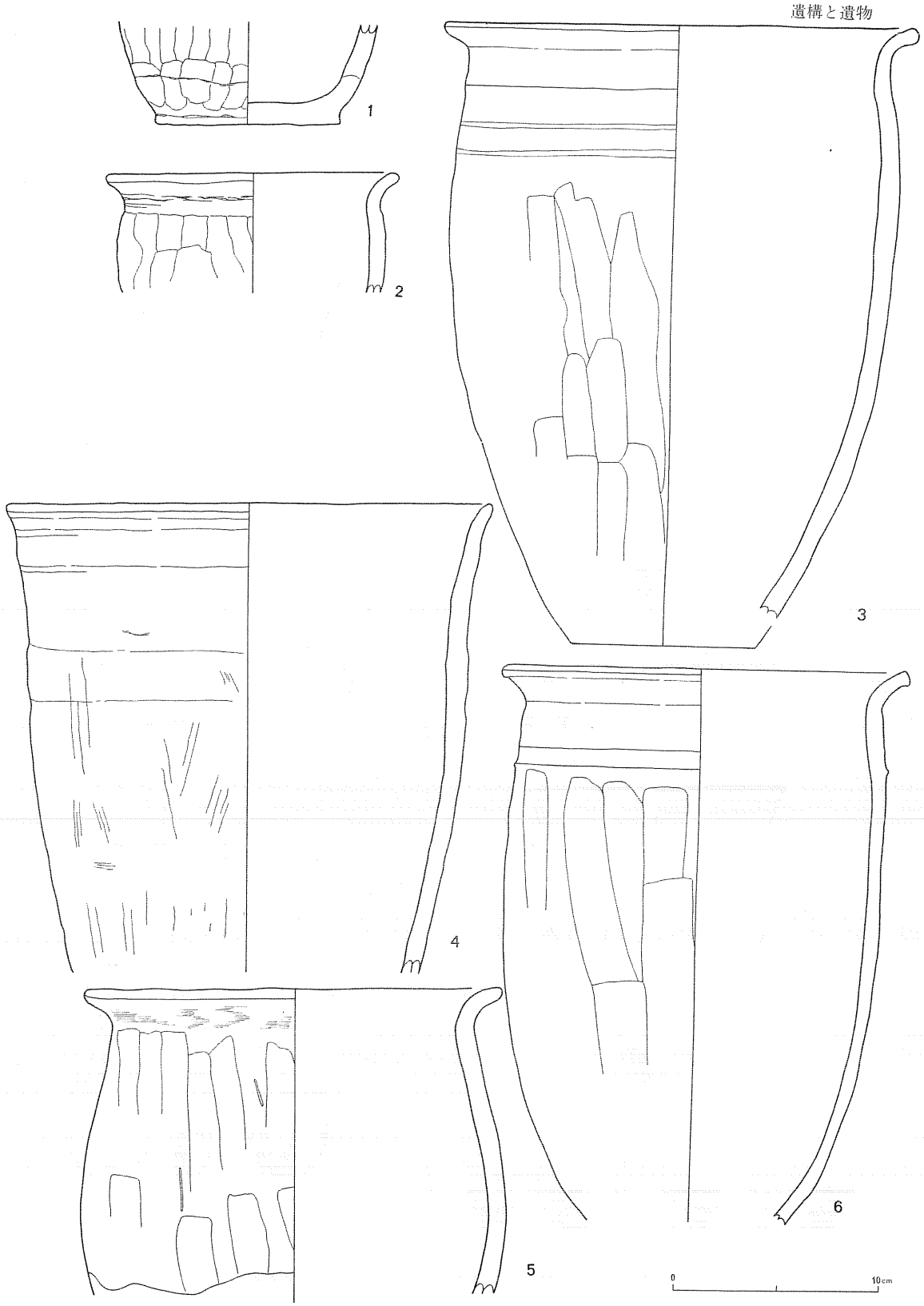
18～21はＳＩ003竪穴住居跡から出土したものであるが，いずれも縄文時代のものと思われる。21は掻器で，石質は頁岩である。



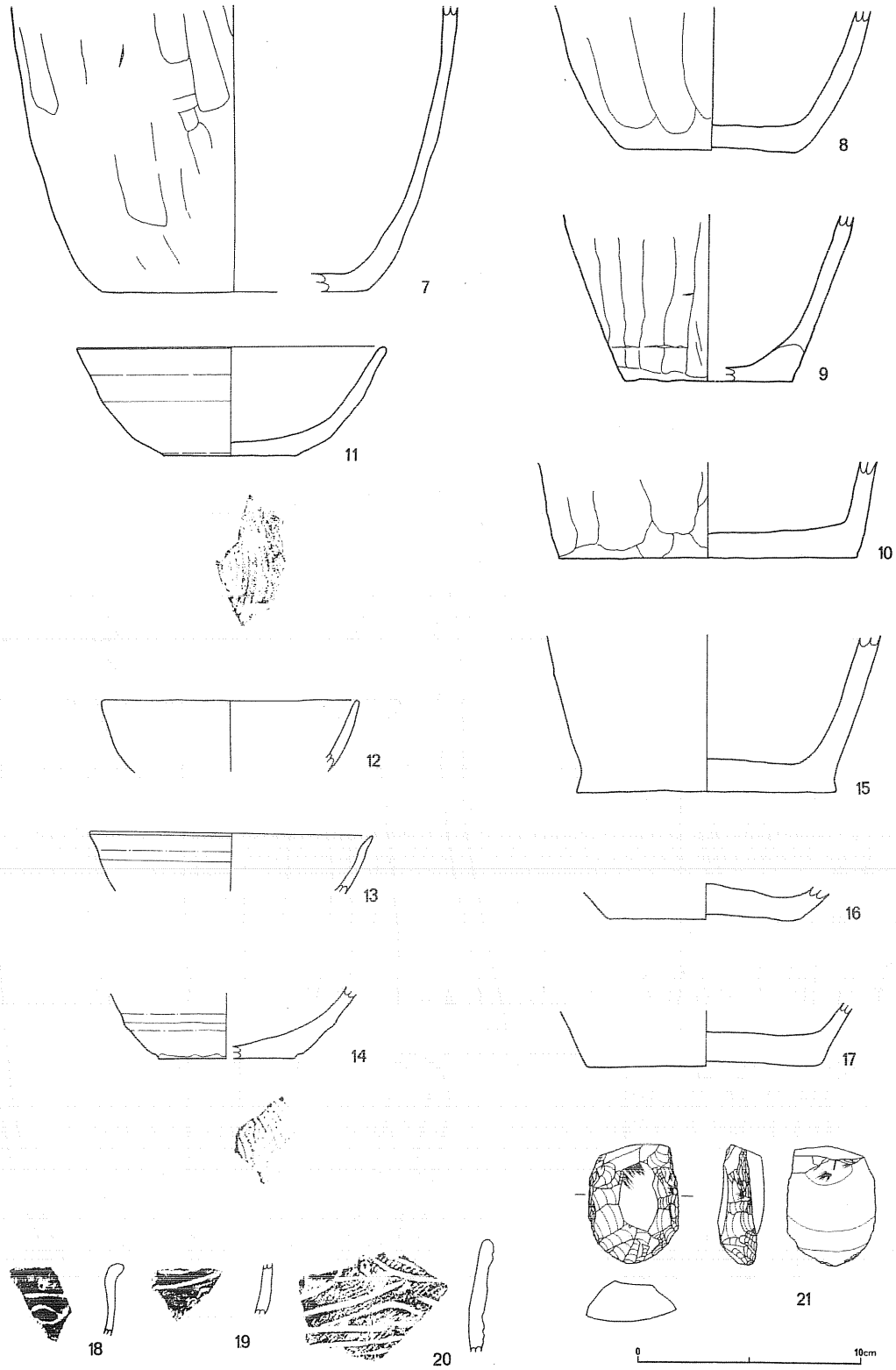
第14図　SI003竪穴住居跡カマド



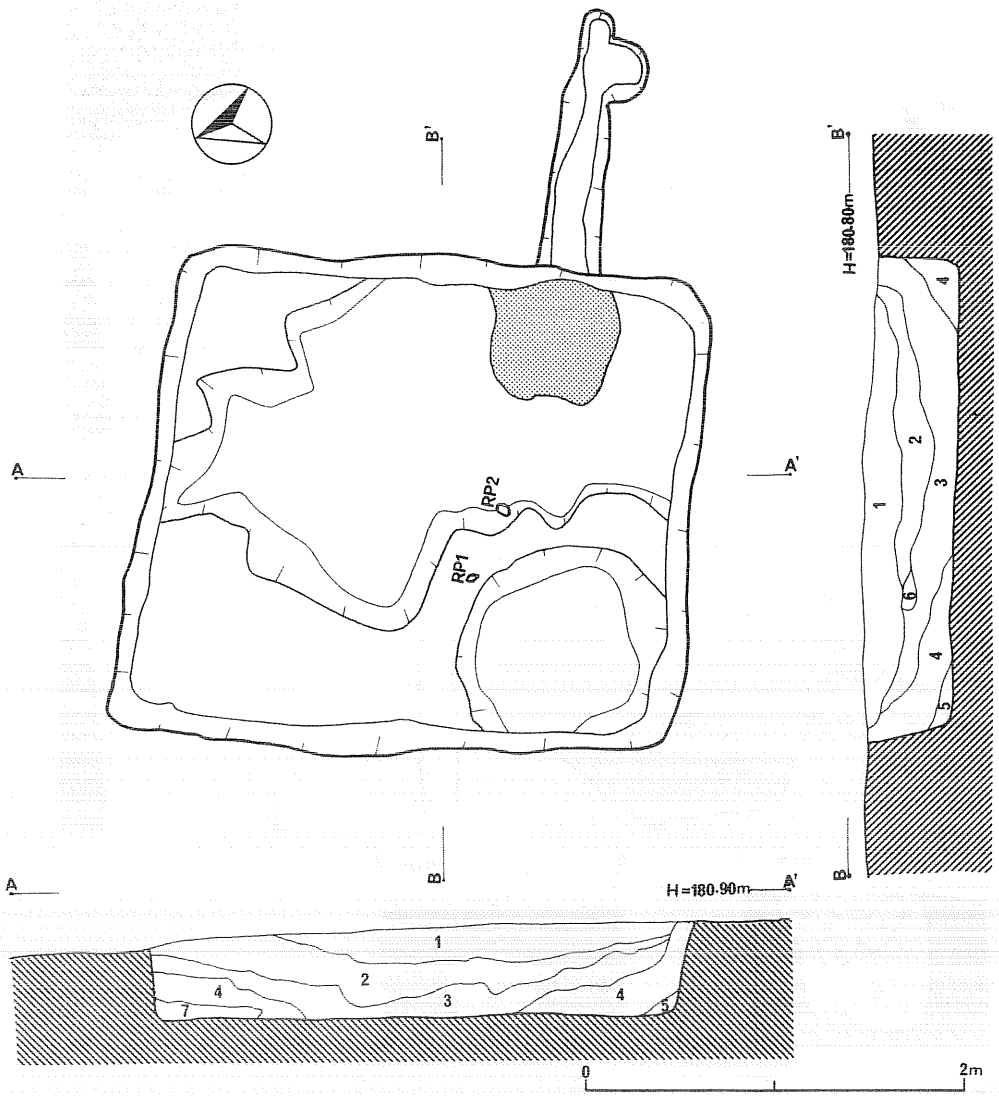
第15図　SI003竪穴住居跡，SD004付属溝



第16図　SI003竪穴住居跡出土遺物(1)



第17図　SI003竪穴住居跡出土遺物(2)



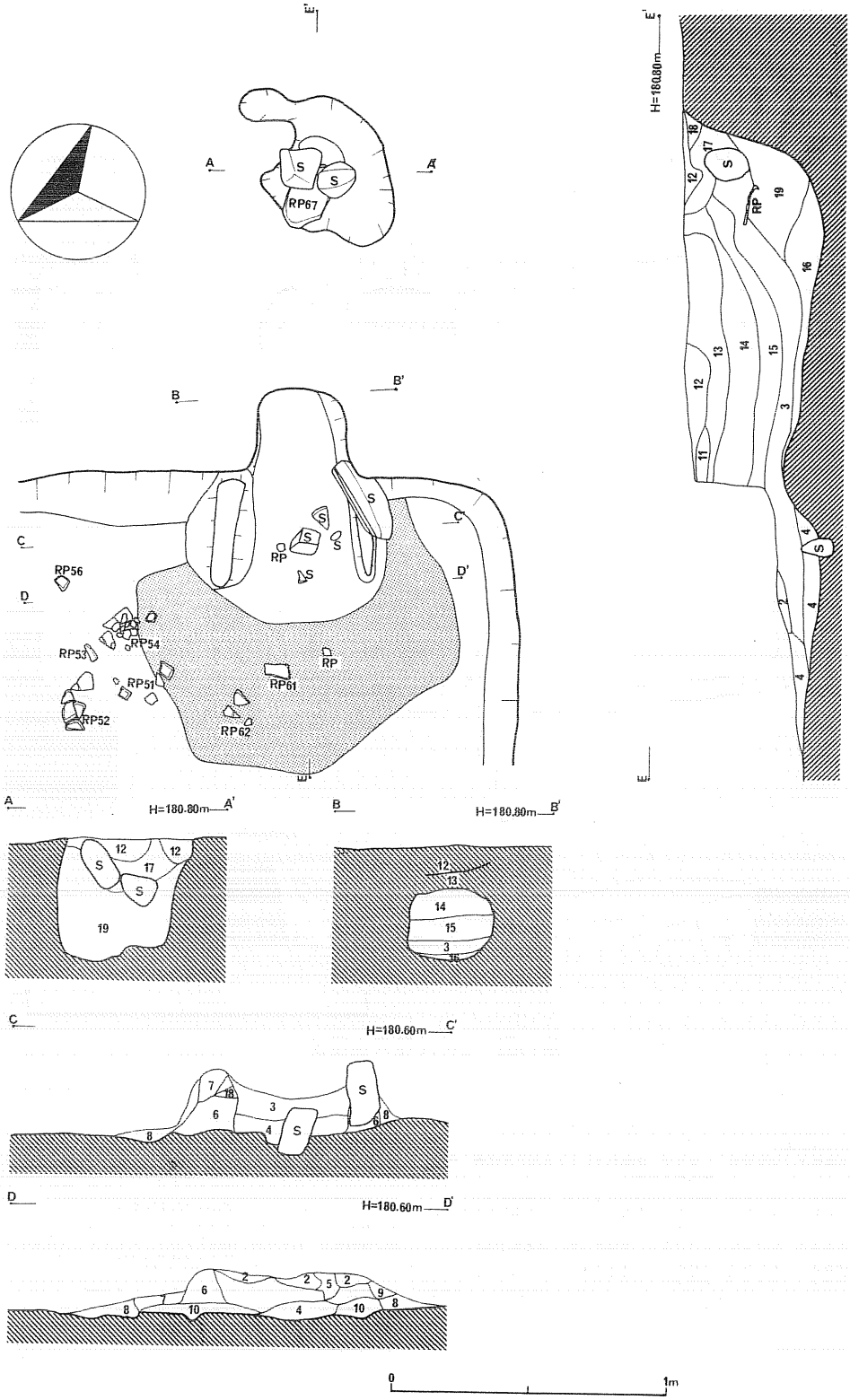
第18図　SI008竪穴住居跡

住居跡の埋土

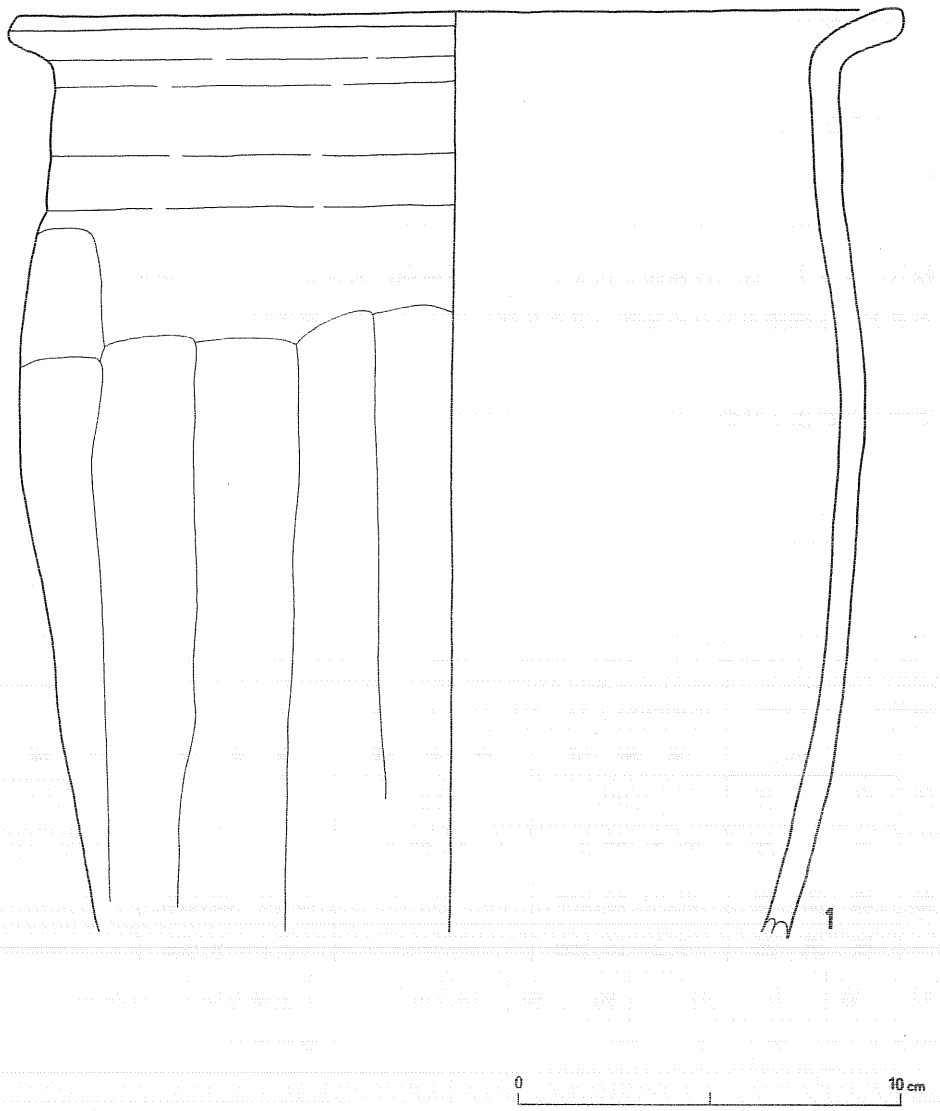
1．黒褐色土　10YR2/2　しまり中　赤褐色土(5YR4/6)炭化物　白色極小粒1%混入
2．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中　火山性かる石混入
3．黒褐色土　10YR3/2　しまり中　黄褐色ブロック　火山性極小粒を含む　極小粒は自然堆積したとは思われにくい
4．黒褐色土　10YR2/1.5　しまりなし　黄褐色小粒　白色粒子混入
5．黒色土　10YR1/2　粘性あり　しまりなし
6．黒色土　10YR1/2　粘性あり　しまりなし
7．あさぎ色土　2.5YR7/4　粘性あり　しまりなし　黒褐色土(10YR2/1.5)混入

カマドの埋土

1．褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり　しまり中　焼土　わずかに炭化物混入　粘土質
2．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　浮石10%混入
3．褐色土　7.5YR5/6　粘性あり　しまり中　焼土混入　粘土質
4．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまり弱　炭化物混入　粘土質
5．褐色土　7.5YR5/6　粘性ややあり　しまり中　粘土質
6．褐色土　10YR5/4　粘性ややあり　しまり中　粘土質(袖)
7．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性ややあり　しまり中　粘土質(袖流入)
8．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり　しまり中　黄橙色(7.5YR7/8)ブロック状混入40%
9．褐色土　7.5YR5/3　粘性ややあり　しまり弱
10．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中　明黄褐色(10YR7/6)ブロック状混入15%
11．浮石層
12．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり　しまり中
13．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中
14．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり　しまり中
15．暗褐色土　7.5YR3/4　粘性なし　しまり弱　焼土　炭化物混入　浮石混入（4と同じ）
16．黒褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまり中
17．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり　しまり中　黄褐色ブロック状30%混入
18．褐色土　7.5YR4/4　粘性あり　しまり中　粘土質



第19図　SI008竪穴住居跡カマド



第20図　SI008竪穴住居跡出土遺物

第 4 表	挿図番号	第18～20図	図版番号	図版12・13・56
遺構名	SI008	検出地区	10—W，10—X，11—W，11—X	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	254cm	250cm	282cm	295cm
	壁高	37.5～38.0cm	53.2～57.3cm	38.9～58.4cm	43.9～49.6cm

形態	方形	面積	7.8m²	主軸方向	N45°W
かまど	位置	南東壁南寄り		構築素材	芯部石組

ＳＩ008 竪穴住居跡

プラン確認　地山上面にて検出した。この箇所は表土が薄く，すぐ地山である。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。

床面　貼床面はほぼ平坦で堅固であるが若干の凹凸がみられる。

柱穴，ピット　柱穴は確認されなかった。西側隅に大きなピットが１個確認されている。

かまど　上部削平のため袖部の遺存状態は不良である。煙道部はトンネル状になっている。燃焼部において支脚と思われる石が検出されている。

遺物とその出土状態　遺物の出土量は中程度であるが，完形もしくは完形に近いものは第20図１のもの１点のみである。坏も数点出土しているが，底部は出土していない。甕の口縁部は頸部が短く，反りのあるものが多い。砂底の土器も１点出土している。

ＳＩ009 竪穴住居跡

第５表	挿図番号	第21～24図	図版番号	図版13・15・56
遺構名	ＳＩ009	検出地区	11―Ｓ，11―Ｔ，12―Ｓ，12―Ｔ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	450cm	412cm	441cm	435cm
	壁高	20.7～27.6cm	24.5～27.3cm	21.1～24.1cm	9.3～21.0cm
	壁溝幅	17.0～40.0cm	―――	26.0～38.0cm	―――
	壁溝深	7.2～10.1cm	―――	2.1～ 8.9cm	―――

形態	方形	面積	19.7m²	主軸方向	N28°E
かまど	位置	不明		構築素材	

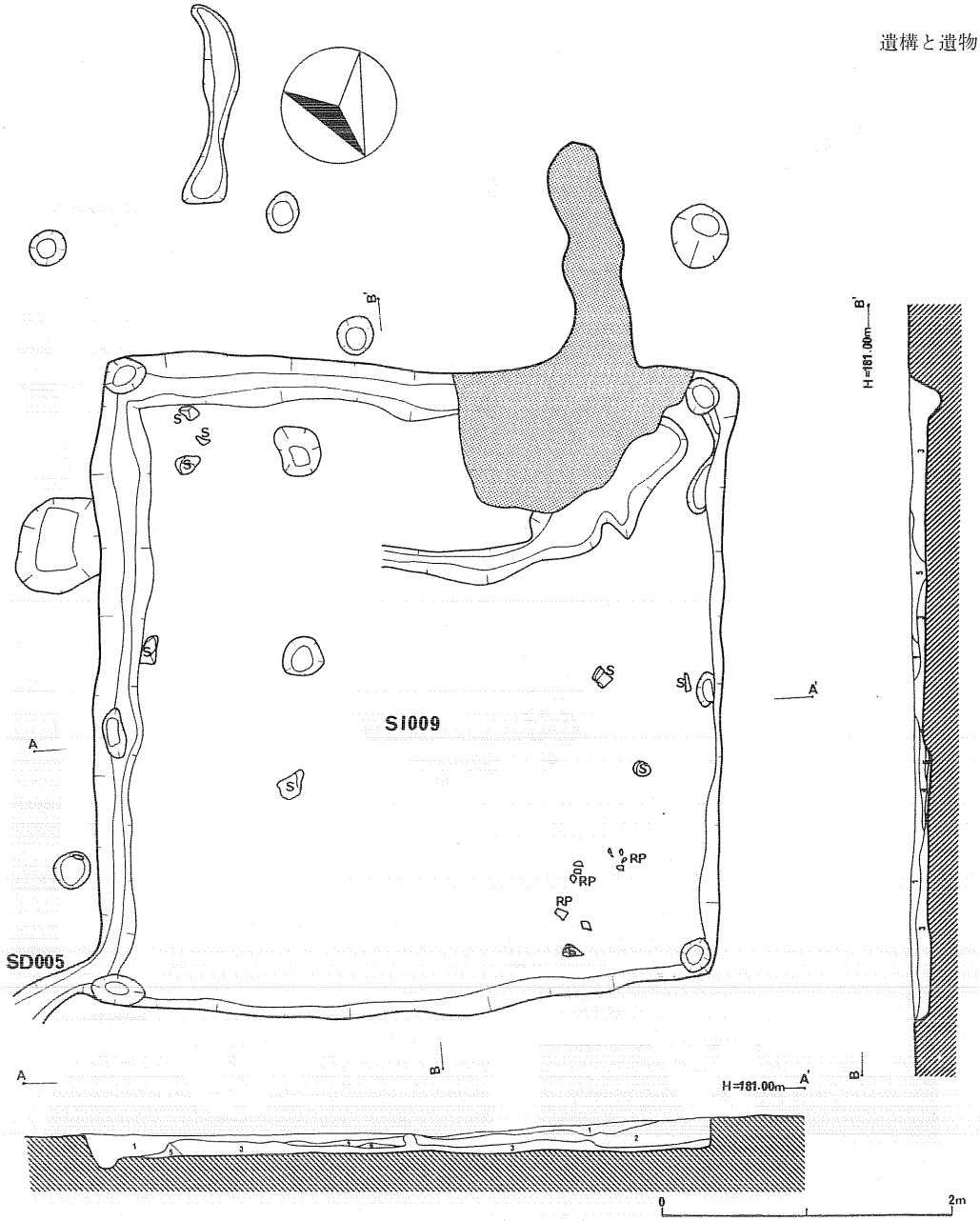
プラン確認　標準層位第Ⅳ層上面にて一部が確認されたが不明確だったため地山面が最終確認面となった。

壁面の状態　上面が削平されているため壁の立ちあがりははっきりしているが全体の状態は不明である。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　南壁沿いと東壁沿いに確認されている。かまど燃焼部より東側に，住居跡北東隅に排水溝と思われるＳＤ005が走っている。この溝はＳＩ001竪穴住居跡の付属溝であるＳＤ004により切られている。

柱穴，ピット　住居跡四隅と東壁，西壁の中間部に２個，住居跡南壁外，東壁外に５個計11



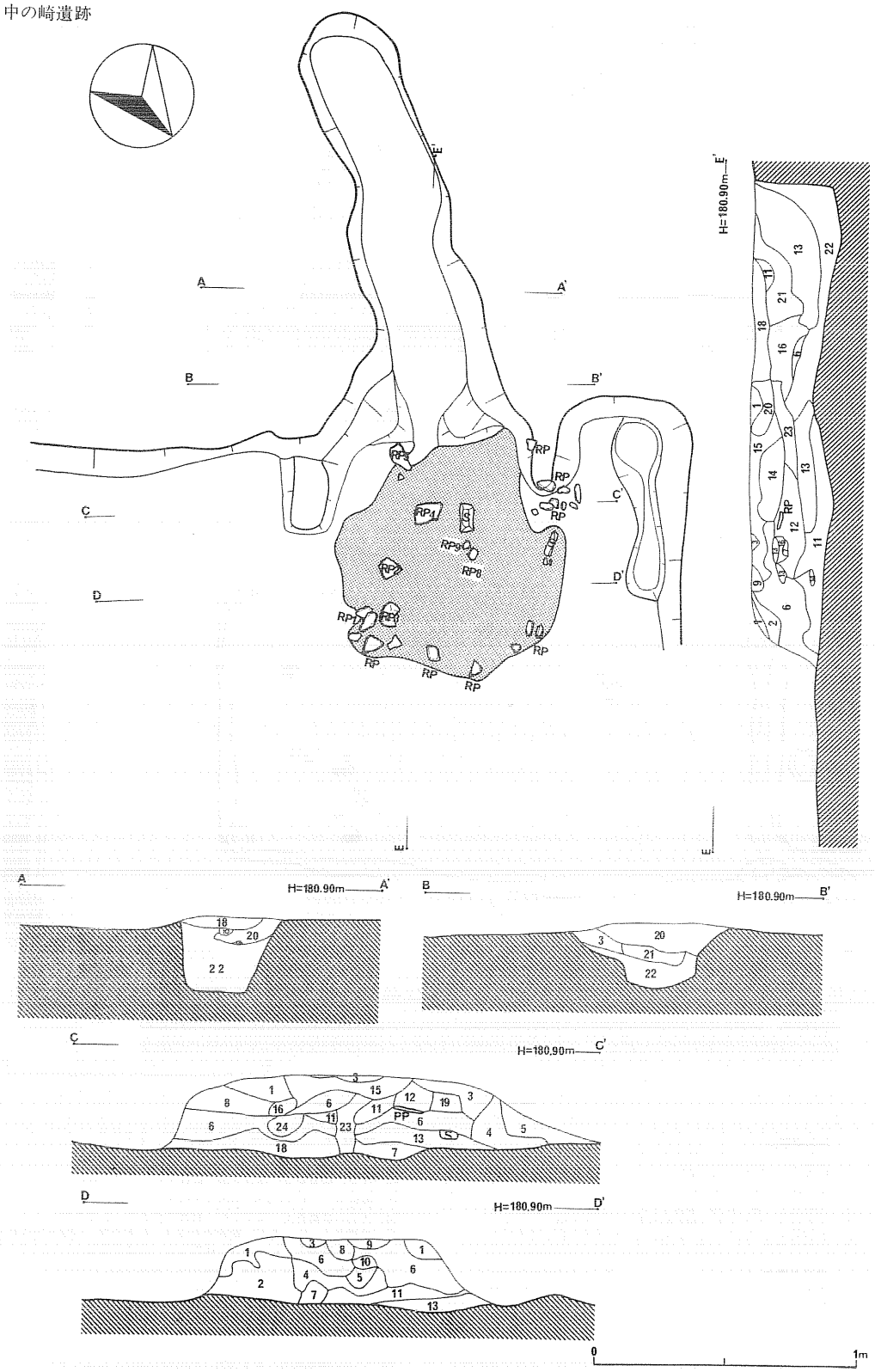
第21図　SI009竪穴住居跡

住居跡埋土

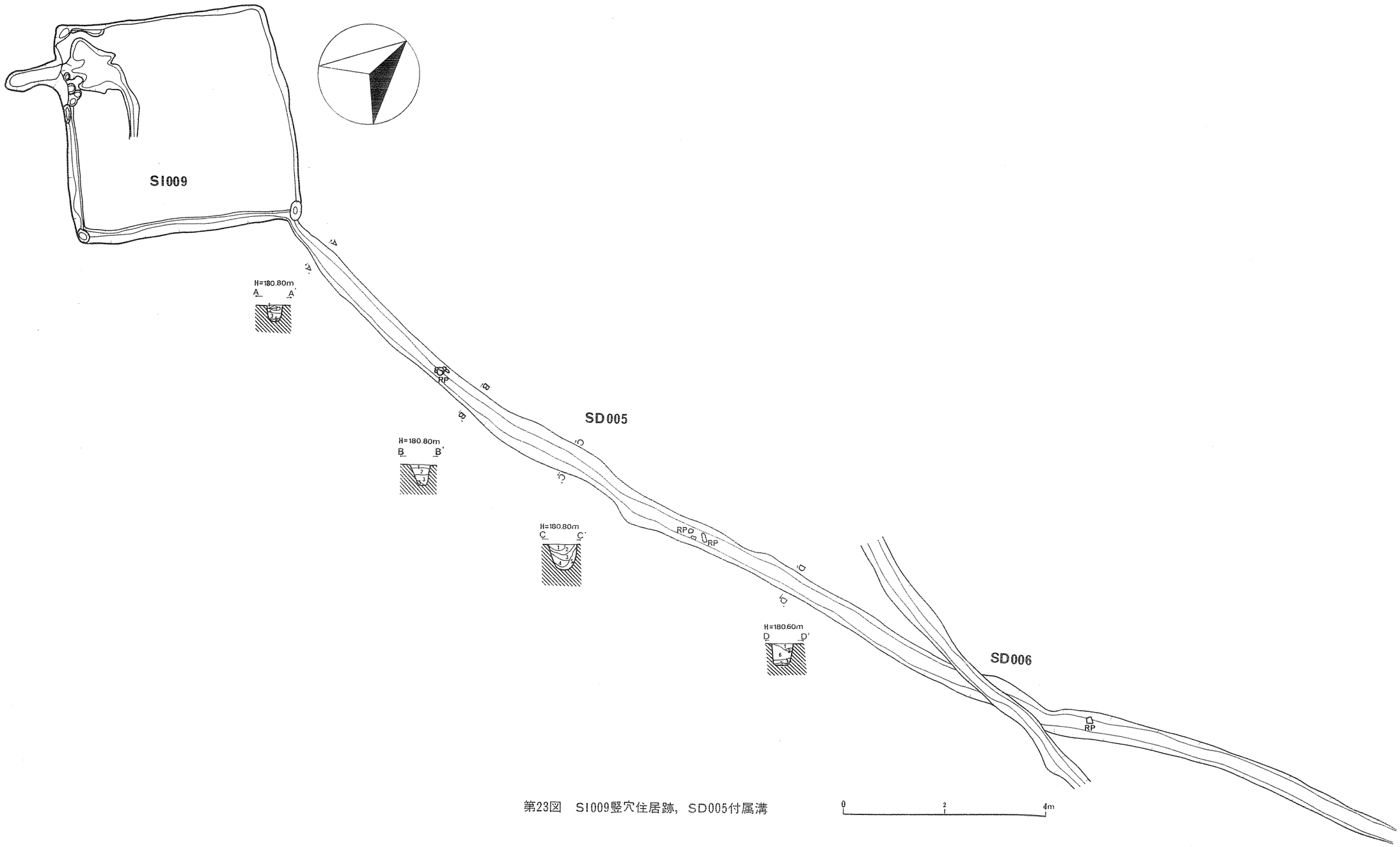
1．黒色土　10YR3/1　粘性ややあり　しまり中　浮石10%混入
2．黒色土　10YR1/1　粘性ややあり　しまり中　浮石30%混入
3．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中
4．黒褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中
5．黒褐色土　10YR3/1　粘性ややあり　しまり中
6．灰黄褐色土　10YR5/2　粘性あり　しまりよし

カマド埋土

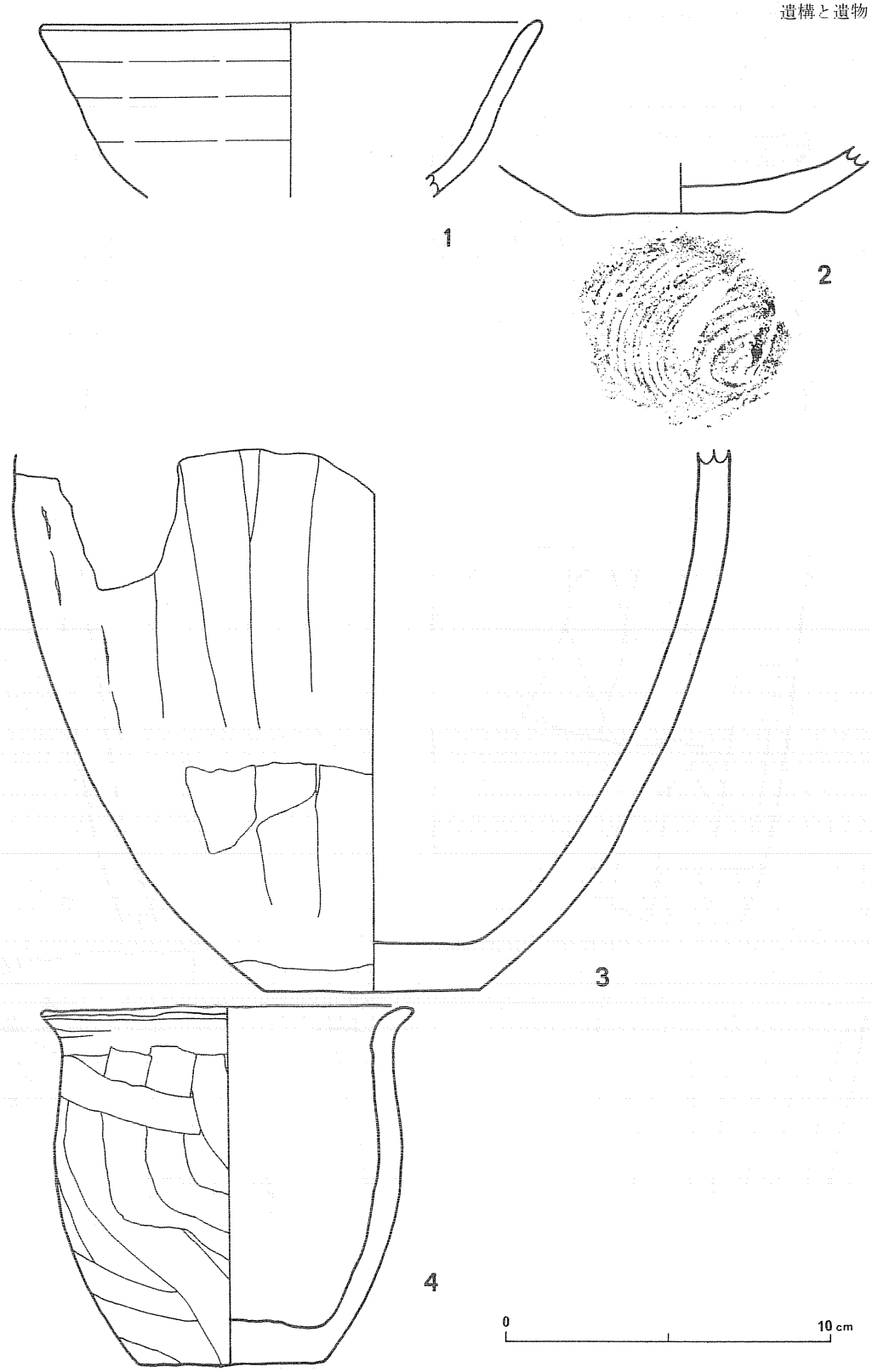
1．黒褐色土　7.5YR3/2　粘性ややあり　しまり中　小粒子50%混入
2．褐色土　7.5YR4/3　粘性ややあり　しまり中　小粒子20%混入
3．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中
4．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中
5．極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性ややあり　しまり中　小粒子25%混入
6．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　小粒子20%混入
7．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中
8．暗褐色土　7.5YR3/3　粘性ややあり　しまり中
9．暗褐色土　7.5YR3/4　粘性ややあり　しまり中
10．明褐色土　7.5YR5/6　粘性あり　しまりなし
11．褐色土　10YR4/4　粘性あり　しまりなし
12．にぶい黄褐色土　10YR5/3　粘性あり　しまりなし
13．褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり　しまり中
14．にぶい黄褐色土　10YR5/3　粘性ややあり　しまり中
15．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中　小粒子15%混入
16．にぶい黄橙色　10YR6/4　粘性なし　しまりなし
17．明赤褐色土　5YR5/6　粘性なし　しまり中
18．黒褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中　小粒子40%混入
19．にぶい黄橙色土　10YR6/3　粘性ややあり　しまり中
20．褐色土　7.5YR4/6　粘性ややあり　しまり中
21．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中　小粒子50%混入
22．黒色土　10YR1/1　粘性ややあり　しまり中　小粒子10%混入
23．にぶい赤褐色土　5YR5/4　粘性ややあり　しまり中
24．にぶい黄橙色土　10YR6/3　粘性ややあり　しまり中



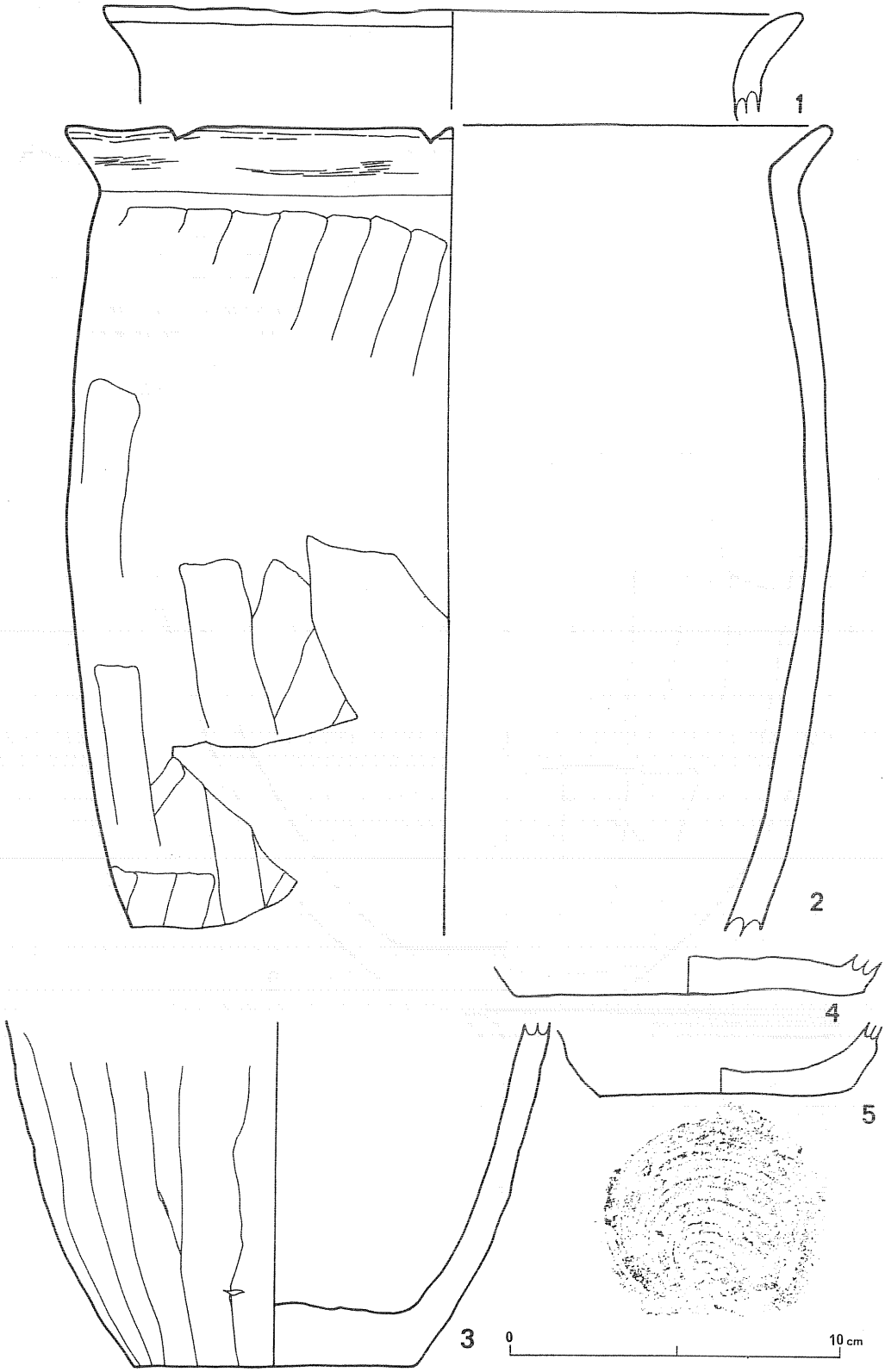
第22図　SI009竪穴住居跡カマド



第23図　SI009竪穴住居跡，SD005付属溝



第24図　SI009竪穴住居跡出土遺物



第25図　SD005溝跡出土遺物

第26図　SI012竪穴住居跡

住居跡埋土

1．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし
2．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし
3．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　白色粒子50%混入
4．黒褐色土　10YR3/1　粘性なし　しまりなし　黄褐色土(10YR5/6)20%混入
5．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし　黄褐色土(10YR5/6)極大3%　白色粒子10%混入
6．炭化物
7．撹乱

カマド埋土

1．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　浮石混合土
2．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　浮石10%混入
3．橙色土　7.5YR6/8　粘性ややあり　しまり中　黒褐色(10YR3/2)混入
4．褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり　しまりなし　焼土10%混入
5．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中　炭化物，黒色土(10YR3/2)20%混入
6．明黄褐色土　10YR7/6　粘性あり　しまりよし　粘土(天井袖部分)
7．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまりよし
8．黒色土　10YR2/1　粘性なし　しまりよし　浮石20%混入
9．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　浮石30%混入（混合土）
10．褐色土　7.5YR4/4　粘性なし　しまり中　焼土
11．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりよし　焼土5%，炭化物5%混入
12．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　浮石10%混入
13．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中
14．黒褐色土　10YR3/2　粘性あり
15．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまりなし　焼土10%混入
16．褐色土　7.5YR4/4　粘性なし　しまりなし（煙道天井粘土の崩れたもの）又は煙道部のため加熱による変化
17．にぶい黄褐色土　10YR5/4　褐色土(7.5YR4/6)，にぶい黄橙色土(10YR5/4)混入　煙道の粘土が加熱したための変化
18．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　浮石5%混入
19．黒褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまり中　浮石10%混入
20．明褐色土　7.5YR5/6　粘性なし　しまりよし　焼土
21．黄褐色土　10YR5/6　粘性なし　しまり中

個の柱穴が検出された。他に住居跡中央部やや東側に1個と南側に1個の計2個のピットが確認されている。

かまど　上部削平のため遺存状態不良である。袖部及び芯材の確認はできなかった。

遺物とその出土状態　遺物出土量は多い方である。坏の底部はいずれも回転糸切りである。甕の口縁部は反りのほとんどないものと反りの明確なものが混在するが，いずれも頸部は短いのが特徴である。また砂底の土器も1点出土している。

第25図は付属溝から出土した遺物で，いずれも土師器である。5は坏で内面黒色処理で，底部は回転糸切りである。甕は反りの明確なものが多く出土しており，その頸部は短い。

ＳＩ012竪穴住居跡

第6表	挿図番号	第26～30図	図版番号	図版16・17・57・58
遺構名	ＳＩ012	検出地区	6－Ā，6－Z，7－Ā，7－Z，8－Z	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	528cm	515cm	515cm	510cm
	壁高	44.3～53.4cm	28.5～39.9cm	35.5～41.0cm	28.6～42.1cm
	壁溝幅	11.0～15.0cm	12.0～19.0cm	7.0～15.0cm	11.0～15.0cm
	壁溝深	11.0～16.7cm	6.9～13.0cm	5.0～8.7cm	8.9～18.0cm

形態	方形	面積	28.9m²	主軸方向	N31°E
かまど	位置	南西壁南寄り		構築素材	芯部石組

プラン確認　地山上面にて確認した。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。

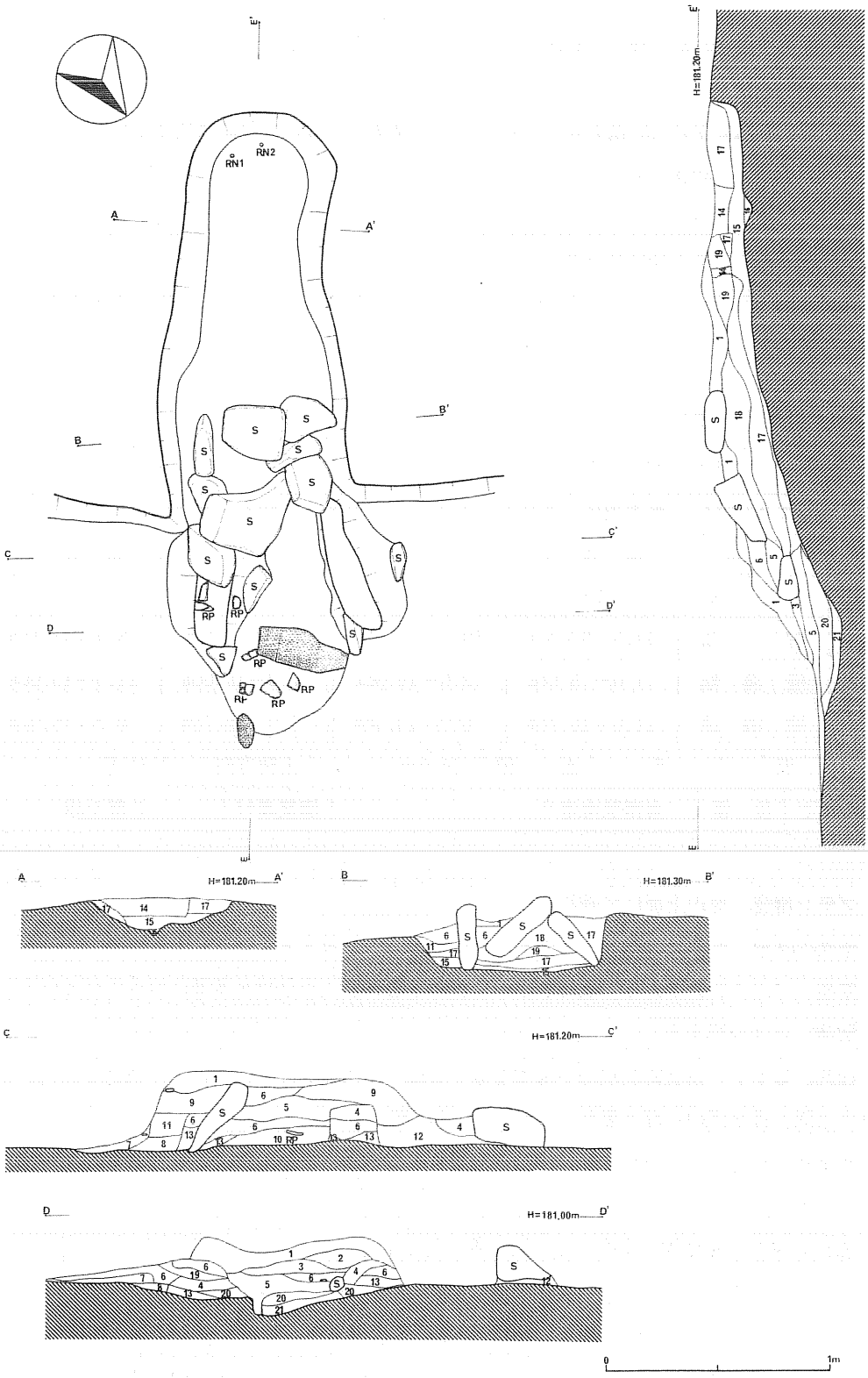
床面　平坦で堅固である。壁材に用いられたと思われる炭化材が多量に検出されている。

壁溝　ほぼ全周する。

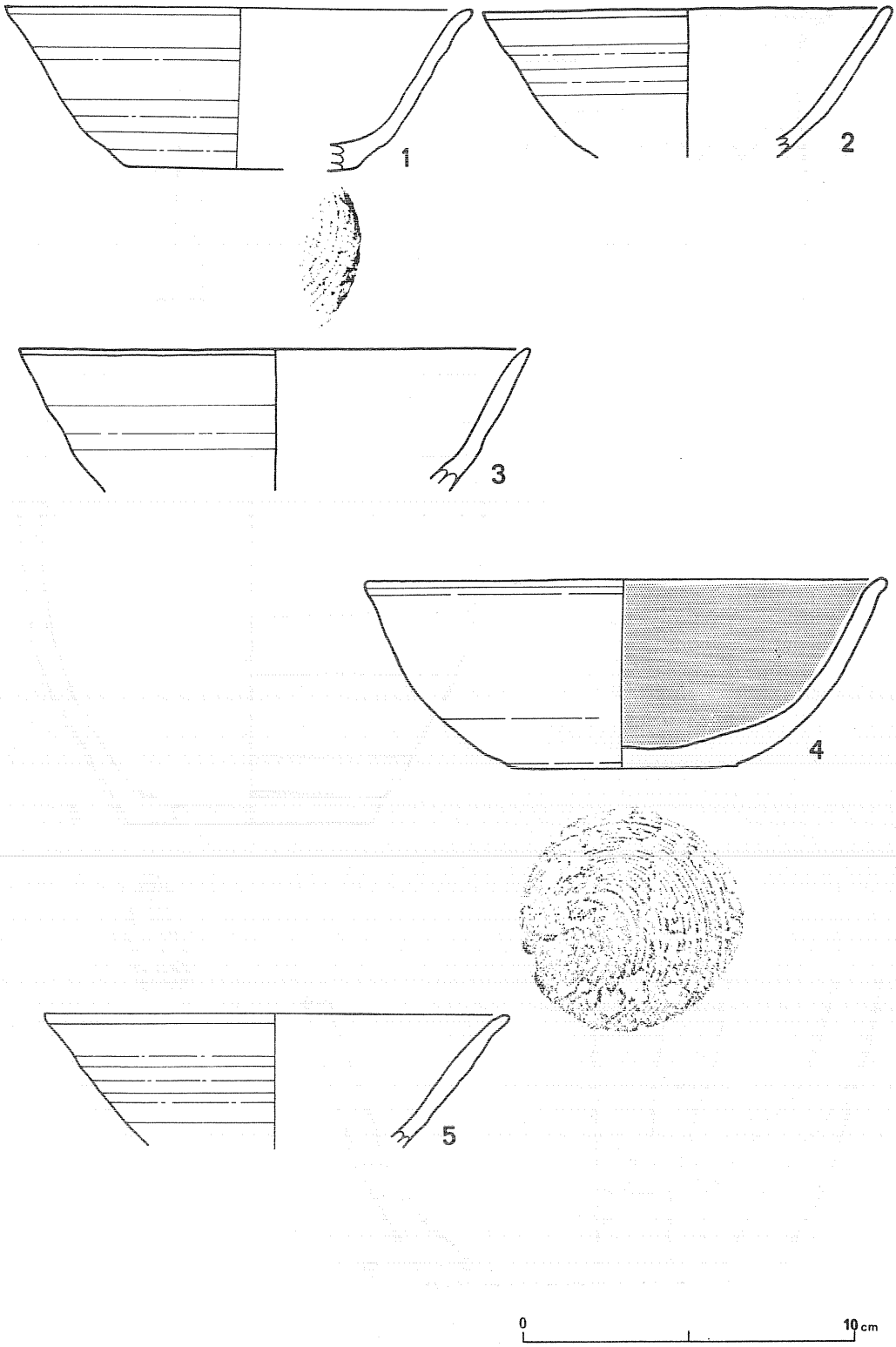
柱穴，ピット　住居跡四隅及び南壁を除く各壁の中間部に計7個の柱穴が検出された。住居跡南東隅に排水溝の一部と思われるピット1個が確認されている。

かまど　扁平な石を芯材として構築されたものである。煙出口部において鉄器2個が検出されている。

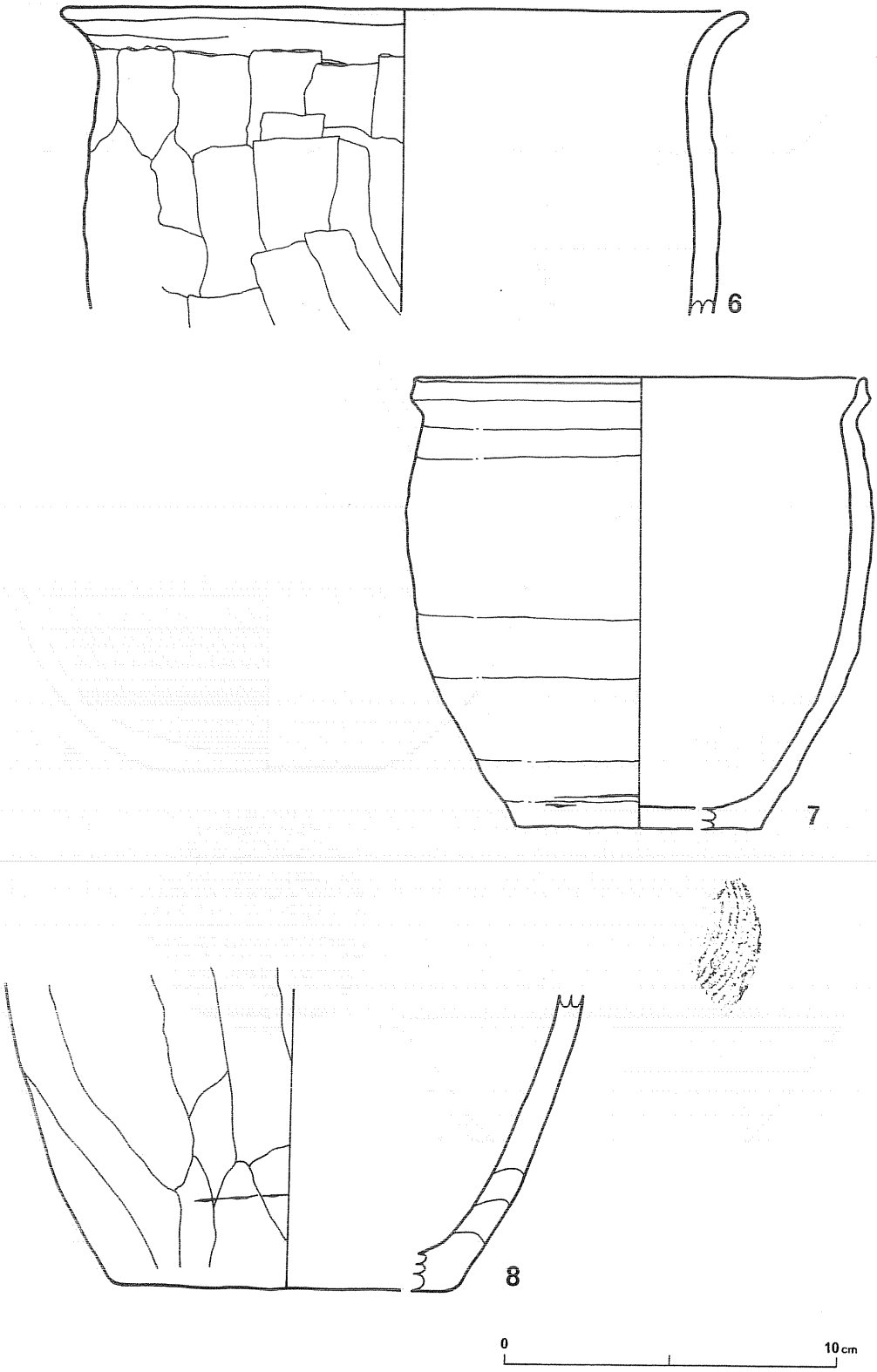
遺物とその出土状態　遺物の出土量は多い方である。坏の比率が比較的高いが，坏は底部ヘラ切りのものが1点出土しているが，他は回転糸切りされている。土師器甕の口縁部は外反するものが多いが，その頸部は短い。P.149第30図9は須恵器甕である。これは，ＳＩ012竪穴住居跡床面から出土したものであるが，特に頸部の片側は0.5～2cm程の小破片になっており，



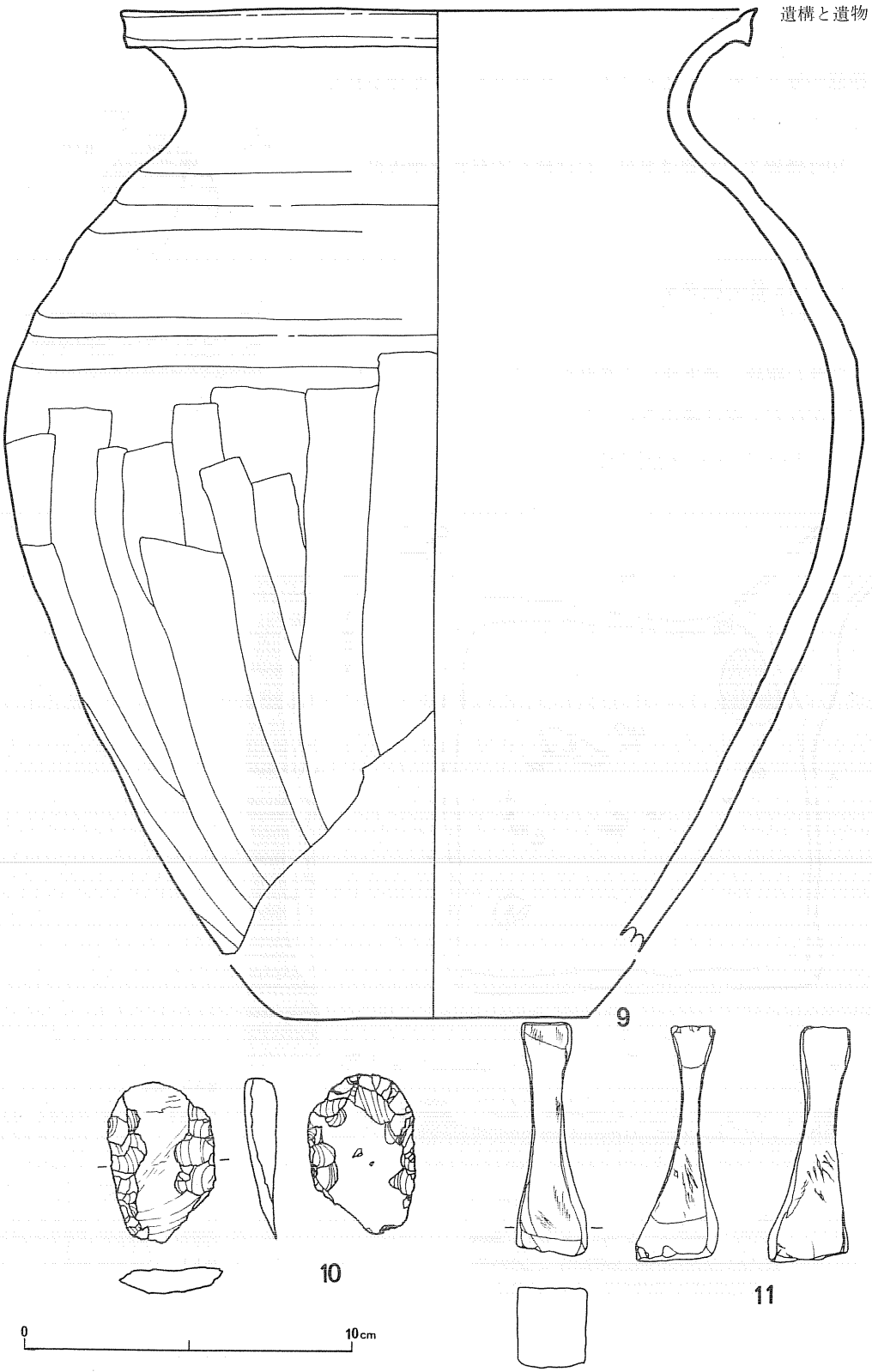
第27図　SI012竪穴住居跡カマド



第28図　SI012竪穴住居跡出土遺物(1)



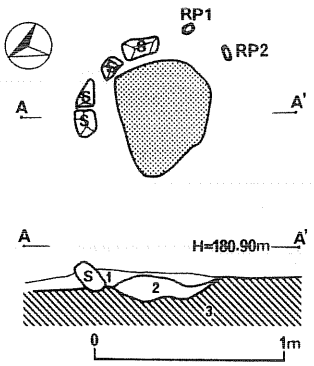
第29図　SI012竪穴住居跡出土遺物(2)



第30図　SI012竪穴住居跡出土遺物(3)

頸部の極めて狭いところに大きい圧力がかかって砕かれたような状態で出土した。

10は掻器で，石質は頁岩。11は砥石で石質は凝灰岩である。

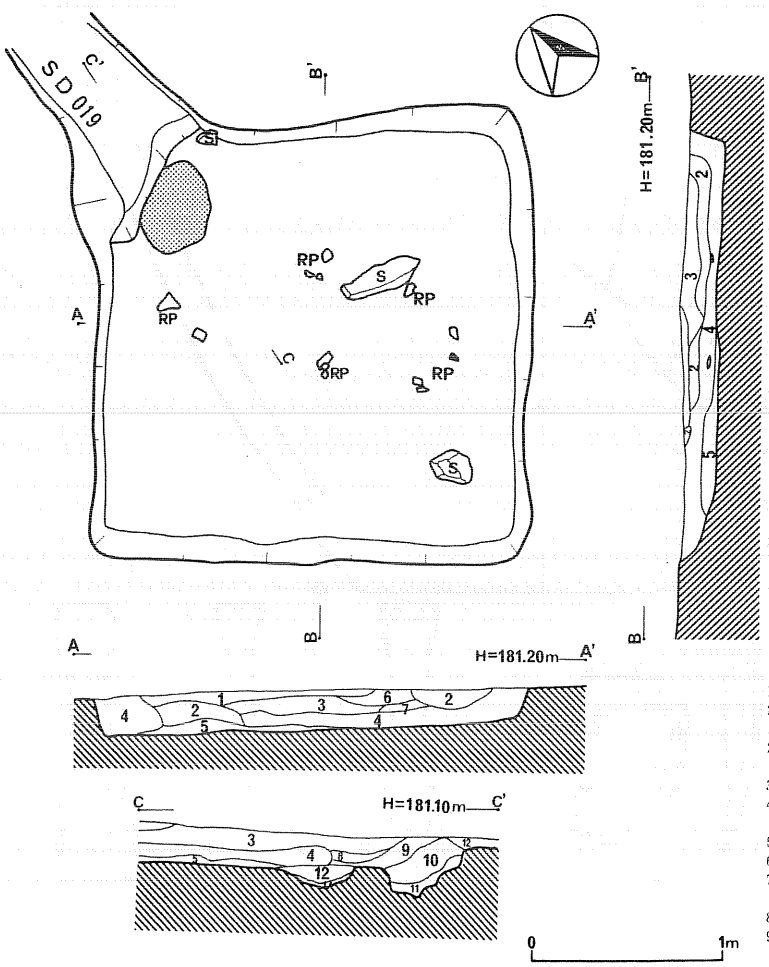


第31図　SI014竪穴住居跡

SI014竪穴住居跡

プラン確認　標準層位の第Ⅷ層にて検出したが，上部の削平がひどく壁は検出されなかった。

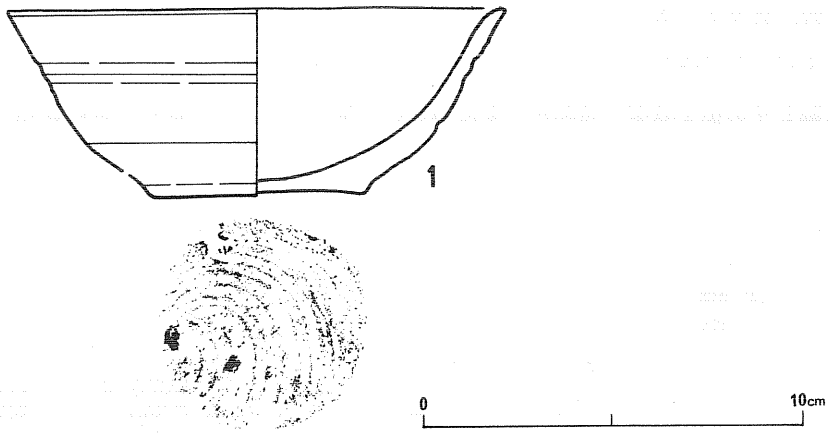
炉　60cm×45cmの範囲で焼土が検出されており，その回



第32図　SI018竪穴住居跡

住居跡の埋土

1．黒褐色土　10YR3/2　しまり中　浮石少量混入
2．黒褐色土　10YR3/2　浮石混入　下部には部分的にロームブロックを混入
2'．浅黄色土　10YR3/3　黒褐色土(10YR3/2)にブロック状の浮石混入
3．黒褐色土　10YR3/2.5　しまりなし　浮石少量混入
4．黒褐色土　10YR3/3　しまりよし　2層と酷似するが混入する浮石の量が少ない
5．黒色土　10YR3/1　粘性あり　浮石少量混入
6．黒褐色土　10YR3/2　砂質土　浮石混入
7．黒色土　10YR1.7/1　粘性あり　しまりよし　混入物なし
8．暗褐色土　10YR3/4　しまりなし
9．暗褐色土　10YR3/3　しまりなし　下部に焼土混入　浮石，炭化物混入
10．黒褐色土　10YR3/2　しまりなし　黄褐色ブロックを50%混入
11．黒色土　10YR1.7/1　しまりなし
12．オリーブ褐色土　2.5YR5/4　粘性あり　しまりよし



第33図　SI018竪穴住居跡出土遺物

りを数個の石が囲む石囲炉である。縄文時代のものと思われる。

覆土　断面観察による覆土の状態は次のとおりである。

1．黒色土　10YR2/1　赤色極小粒混入。粘性ややあり。

2．褐色土　7.5YR4/4　焼土。炭化物極小粒2～3％混入。

3．黒褐色土　10YR2/3　標準層位第Ⅷ層。

SI018竪穴住居跡

第7表	挿図番号	第32・33図	図版番号	図版58
遺構名	SI018	検出地区	6—Ā，6—Z	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	240cm	(180)cm	230cm	(168)cm
	壁高	14.2～18.7cm	18.2～22.7cm	13.2～22.7cm	18.3～23.3cm

形態	方形	面積	5.2m²	主軸方向	N40°E
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　遺跡西側は表土が薄く，その直下の地山上面から検出された。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをしている。

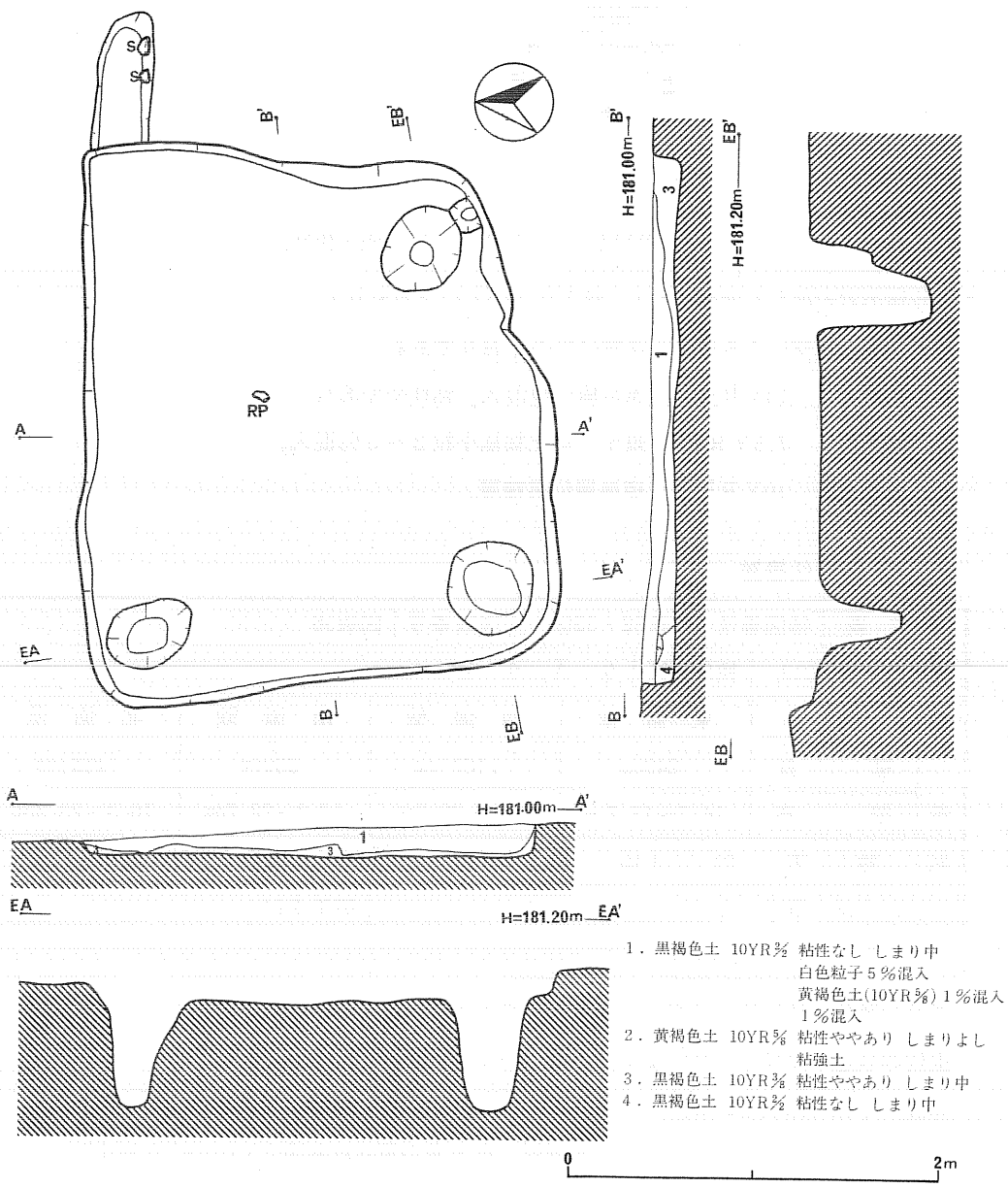
床面　平坦で堅固である。

壁溝　壁溝は確認されているが，北側隅に排水溝と思われる溝（SD019）を検出した。しかし発掘範囲西端のため，全体は不明である。またSD019の下部に縄文時代晩期初頭の土壙を検出したが，範囲外のためその計測は不可能であった。

柱穴，ピット　確認されず。

かまど　北側隅付近に焼土が確認されているが，かまどは検出されていない。

遺物とその出土状態　遺物出土量は少ない。第33図１は坏で底部は回転糸切りである。その他は土師器甕の破片が数点出土したのみである。



第34図　SI034竪穴住居跡

ＳＩ034 竪穴住居跡

第 8 表	挿図番号	第34図	図版番号	
遺構名	ＳＩ034	検出地区	10—Ｓ，11—Ｓ	

法		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	205cm	244cm	265cm	303cm
	壁高	13.3～14.9cm	12.4～14.4cm	16.2～19.6cm	5.0～ 7.1cm

形態	方形	面積	7.1m²	主軸方向	不能
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　ＳＩ009竪穴住居跡の南方で検出された。Ⅳ層上面でＳＩ009の一部が検出されているが，その面でＳＩ034竪穴住居跡は検出されておらず，不確実ながらＳＩ034の方が古い可能性がある。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをしている。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　検出されなかった。

柱穴，ピット　北東隅を除く三隅に３個の柱穴が確認された。

かまど　検出されなかった。

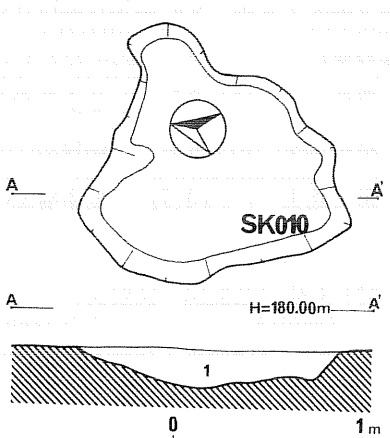
遺物とその出土状態　遺物は土師器の甕の胴部破片が１点出土したのみである。

ｂ．土壙

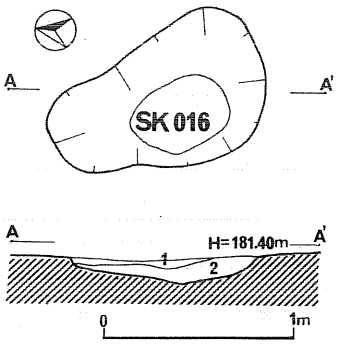
ＳＫ010 土壙（第35図）

15—Ｕ地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部136×132cm，壙底部134×108cm，深さ20cm，面積（壙口部における平面積で以下同じ）1.272m²を測る。床面は凹凸があり，壁も不明確であるが，ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はＮ77°Ｅである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

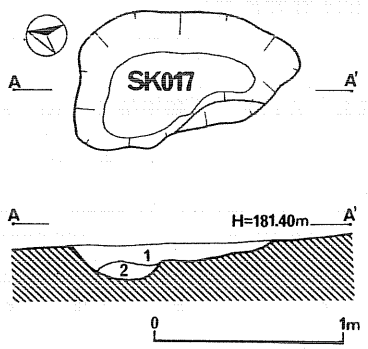
１．黒色土　10ＹＲ1.7/1　粘性中。しまり悪し。
　　黒褐色土10ＹＲ2/3 2％混入。



第35図　ＳＫ010土壙



第36図　SK016土壙



第37図　SK017土壙

SK016土壙（第36図　図版18）

7－V地区より標準層位の第Ⅷ層（以下標準層位はローマ数字で示す）にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部119×70cm，壙底部54×36cm，深さ14cm，面積0.664m²である。床面は若干の凹凸があり，壁はゆるやかな立ち上がりを呈する浅い小土壙である。主軸方位はN38°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒色土　10YR2/1　しまりやや悪し。粘性ややあり。ほとんど混入物含まず。

2．暗褐色土　10YR3/3　粘性中。3層への漸移層。

3．黒褐色土　7.5YR3/2　標準層位の第Ⅷ層。

SK017土壙（第37図　図版18）

7－V地区から第Ⅷ層にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部122×72cm，壙底部80×42cm，深さ18cm，面積0.688m²である。床面は北側が一段落ち込んでいる。壁はゆるやかな立ち上がりを呈する。主軸方位はN5°Wである。断面観察における埋土の状態は以下のとおりである。

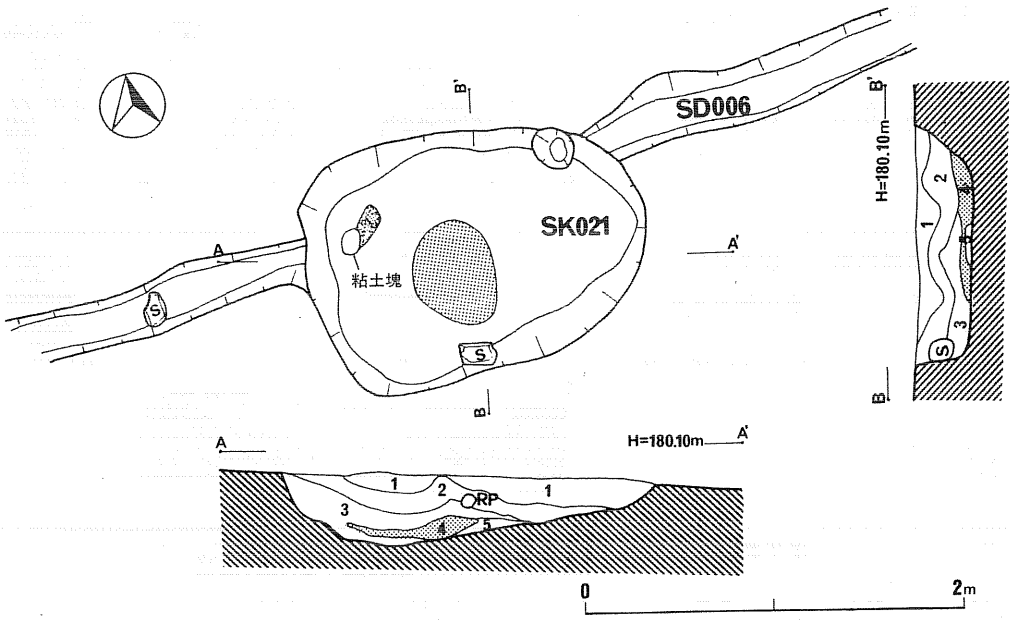
1．黒色土　10YR2/1　しまりやや悪し。粘性ややあり。ほとんど混入物含まず。

2．暗褐色土　10YR3/3　粘性中。3層への漸移層。

3．黒褐色土　7.5YR3/2　標準層位の第Ⅷ層。

SK021土壙（第38図　図版18）

16－P，16－Q地区より地山上面にて検出された。平面形は楕円形を呈する。壙口部182×128cm，壙底部158×104cm，深さ38cm，面積2.0m²である。床面は西側にゆるやかに傾斜しており，壁はゆるやかな立ち上がりを呈する。床面から焼土及び炭化物が検出された。SD006溝跡を切っており，これより新しい。西側に粘土塊がある。主軸方位はN70°Eである。遺物は土



第38図　SK021土壙

師器片が出土している。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/1.5　粘性中。しまり中。白色粒子混入。

2．黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまりなし。50%白色粒子混入。黄褐色土中粒1%混入。粘性やや強し。

3．黒色土　10YR1.7/1　部分的に2層とのさかいめに帯状に焼土を混入する。粘性中。しまり悪し。

4．赤褐色土　5YR4/6　焼土。

5．黒褐色土　7.5YR2/2　黄褐色＋黒色小粒をまだら状に混入。

SK024土壙（第39図　図版19）

5－$\overline{A}$，5－Z地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部186×126cm，壙底部164×96cm，深さ34cm，面積1.68m²である。床面は西側ではほぼ平坦であるが，東側は若干の凹凸がある。壁面も東側はしっかりしているが，西側は不明確なところもある。主軸方位はN45°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/2　一様に浮石を含むが特に多いところがある。粘性中。

2．黒色土　10YR2/1　土壙の最下部に帯状に堆積。粘性中。下部に焼土混入するところあり。

3．暗褐色土　10YR3/3　黄褐色大粒20%混入。

4．浅黄色土　2.5Y 7/4
浮石

5．黒褐色土　10YR 2/2.5
炭化物白色極小粒含む。

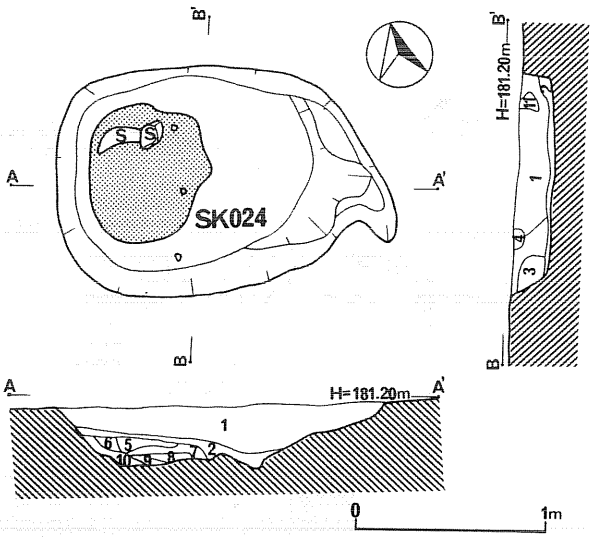
6．黒褐色土　10YR 2/3
炭化物白色極小粒含む。焼土多し。

7．褐色土　7.5YR 4/4
焼土小粒含む。炭化物含む。

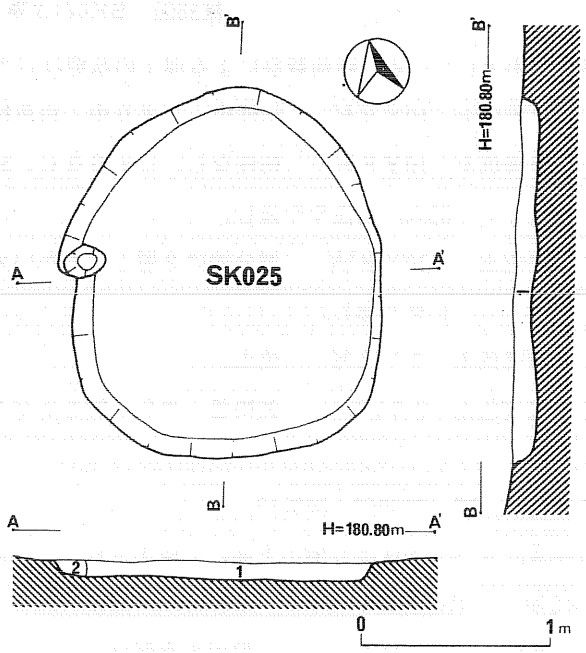
8．明赤褐色土　5YR 5/8
焼土。

9．黒色土　10YR 1.7/1
灰が多量に混じる。

10．黒色土　10YR 2/1
炭化物極小粒含む。



第39図　SK024土壙



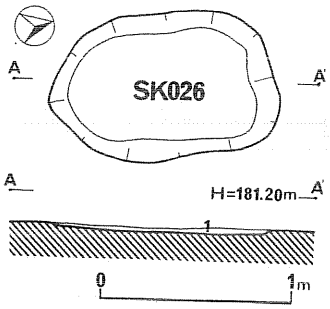
第40図　SK025土壙

SK025土壙　（第40図　図版19）

10－Y，10－Z地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部196×170cm，壙底部175×146cm，深さ14cm，面積2.660㎡である。床面はほぼ平坦で浅い土壙である。主軸方位はN30°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒色土　10YR 2/1　粘性中。しまり弱。褐色土10YR 4/6と暗褐色土3/4を1～2％まだら状に混入。3％位火山性白色粒混入。

2．暗褐色土　10ＹＲ3/6　粘性中。しまり弱。



第41図　ＳＫ026土壙

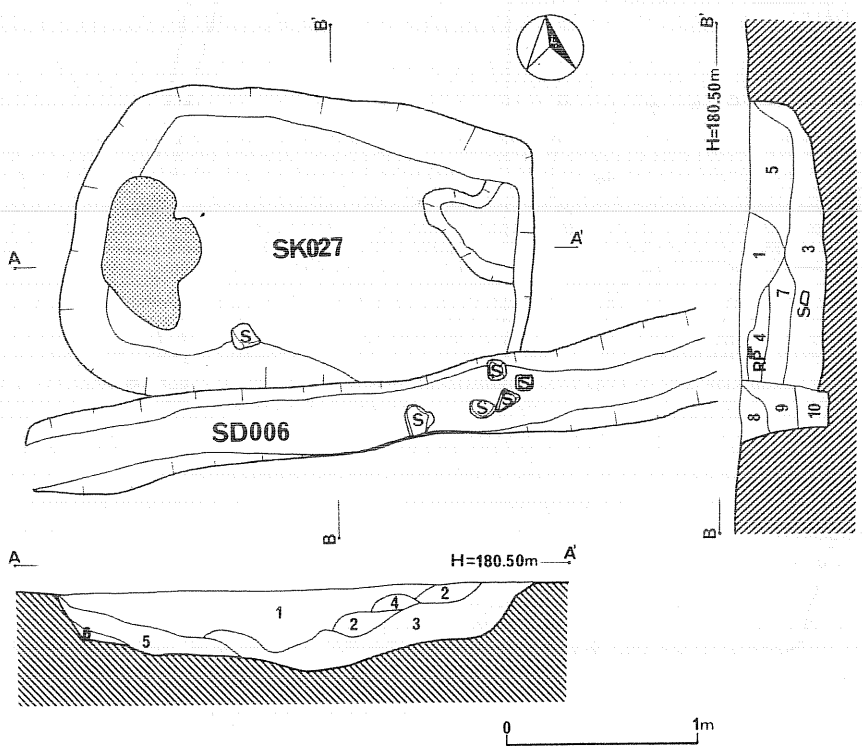
ＳＫ026土壙（第41図　図版19）

10－Ｙ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部120×78cm，壙底部97×55cm，深さ４cm，面積0.776㎡である。上部は削平されており，床面はほぼ平坦な浅い土壙である。主軸方位はＮ31°Ｗである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

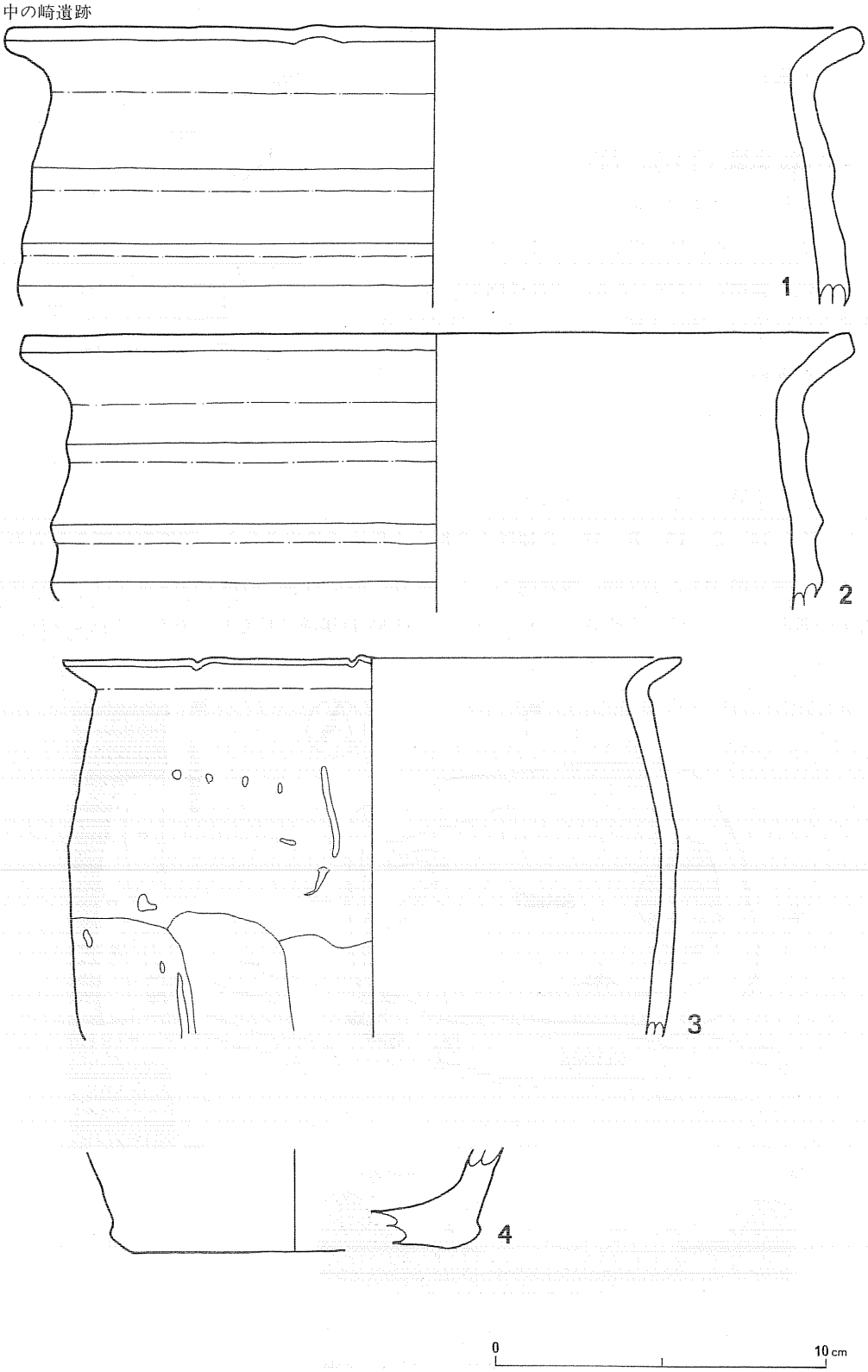
1．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性中。しまり弱。火山性白色粒３％混入。

ＳＫ027土壙（第42・43図　図版20）

14－Ｒ，14－Ｓ，15－Ｒ，15－Ｓ地区より地山上面にて検出された。平面形は隅丸長方形を呈する。壙口部244×170cm，壙底部210×126cm，深さ56cm，面積3.472㎡である。床面は若干の凹凸があり，壁はやや急に立ち上がる。ＳＤ006付属溝に切られており，これより古い。



第42図　ＳＫ027土壙



第43図　SK027土壙出土遺物

また埋土の状態をみると，浮石の上から焼土が検出されており，浮石よりも新しいものと思われる。主軸方位はN54°Wである。遺物は第43図に示す土器が出土した。いずれも土師器の甕でロクロ使用のものもある。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　7.5YR2/2　黄褐色極大～小粒2～3％混入。浅黄色2.5Y7/4の浮石が大～極小粒状に5％混入。

2．黒褐色土　10YR2/2　浮石を斑状に5％混入。

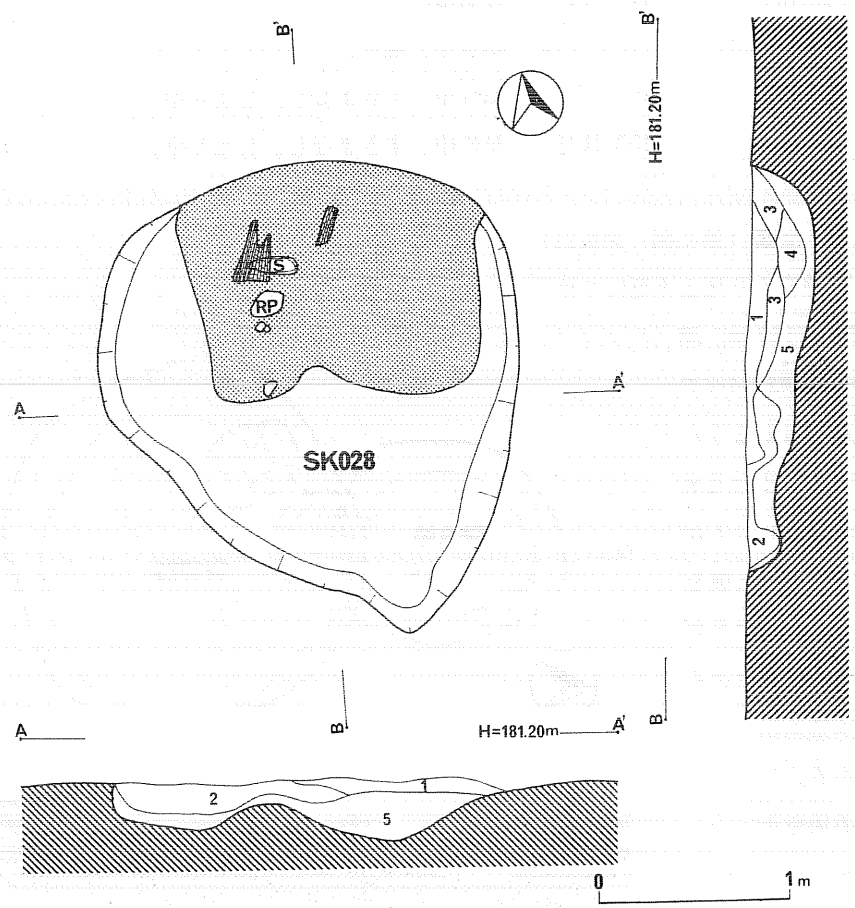
3．黒褐色土　10YR2/1.5　黄褐色小～極大粒10％混入。浮石の混入はほとんど見られない。

4．暗褐色土　10YR3/3　にぶい赤褐色5YR4/4の焼土含む。炭化物極小粒5％混入。

5．黒色土　10YR2/1　5をベースに浅黄色2.5Y7/4の浮石が部分的には20％混入。

6．黒褐色土　10YR2/2　白色極小粒1％混入。しまり悪し。

7．暗褐色土　7.5Y3/3　7をベースに浅黄色2.5Y7/3の浮石が大きいブロック状に入る。



第44図　SK028土壙

8．黒褐色土　10YR2/3　黄褐色大～中粒2％混入。しまり悪し。

9．黒褐色土　10YR2.5/1　白色極小粒一様に2％混入。しまり中。

10．黒褐色土　10YR2.5/1　9層と似ているが白色極小粒はほとんど含まない。黄褐色大粒1％混入。しまりよし。

ＳＫ028土壙（第44図）

8－T，9－T地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部257×225cm，壙底部237×210cm，深さ32cm，面積4.04m²である。床面は中央部に若干の盛り上がりを持つ。焼土と炭化材が検出されており，遺物は土師器の甕の破片が出土している。主軸方位はN4°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒色土　10YR1.7/1　粘性中。すきまなし。しまり中。浮石5％混入。

2．浅黄色土　2.5Y7/4　浮石層。

3．にぶい赤褐色土　7.5YR4/4　粘性中。焼土。

4．黒褐色土　10YR3/2　粘性中。すきまなし。しまり中。

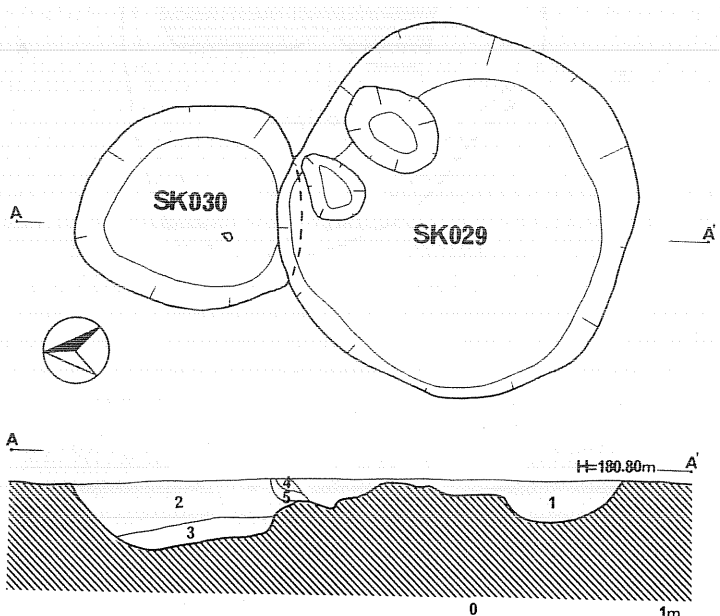
5．黒褐色土　10YR3/2　粘性中。すきまなし。しまり中。

ＳＫ029土壙（第45図　図版21）

11－U地区より地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部198×190cm，壙底部157×160cm，深さ22cm，面積2.84m²である。床面はかなりの凹凸がある。また北東部には2個のピットがある。ＳＫ030土壙を切っておりこれより新しい。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土

10YR3/2　白色極小粒1％混入。粘性ややあり。しまりやや



第45図　SK029・030土壙

悪し。

4．暗褐色土　10ＹＲ3/3　ＳＫ030内の埋土がＳＫ029内に２回目に崩れ落ちたもの。

5．暗褐色土　10ＹＲ3/3　ＳＫ030内の埋土がＳＫ029内に１回目に崩れ落ちたもの。

ＳＫ030土壙（第45図　図版21）

11－Ｕ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部122×107cm，壙底部92×78cm，深さ36cm，面積0.85㎡である。床面はほぼ平坦であり，ＳＫ029土壙より古い。主軸方位はＮ０°である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

2．暗褐色土　白色極小粒50%混入。粘性なし。しまりよし。

3．黒色土　（10ＹＲ2/1）

4．暗褐色土　ＳＫ030内の埋土がＳＫ029内に２回目に崩れ落ちたもの。

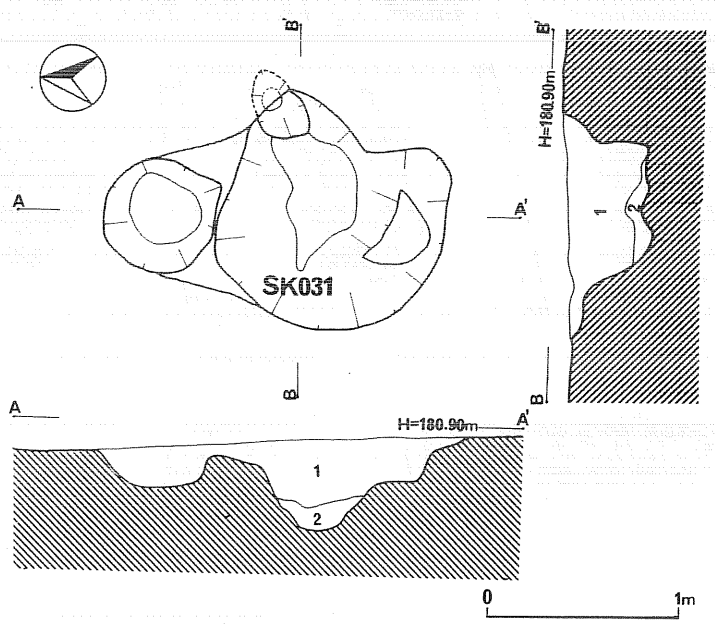
5．暗褐色土　ＳＫ030内の埋土がＳＫ029内に１回目に崩れ落ちたもの。

ＳＫ031土壙（第46図）

10－Ｗ地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部180×126cm，壙底部160×100cm，深さ48cm，面積14.4㎡である。床面はかなりの凹凸があり，北側の落ち込みは別の遺構とも思われるが，断面観察しても不明確なため同一の遺構として扱った。主軸方位はＮ3°Ｅである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒色土　10ＹＲ1.7/1　粘性中。しまり弱。

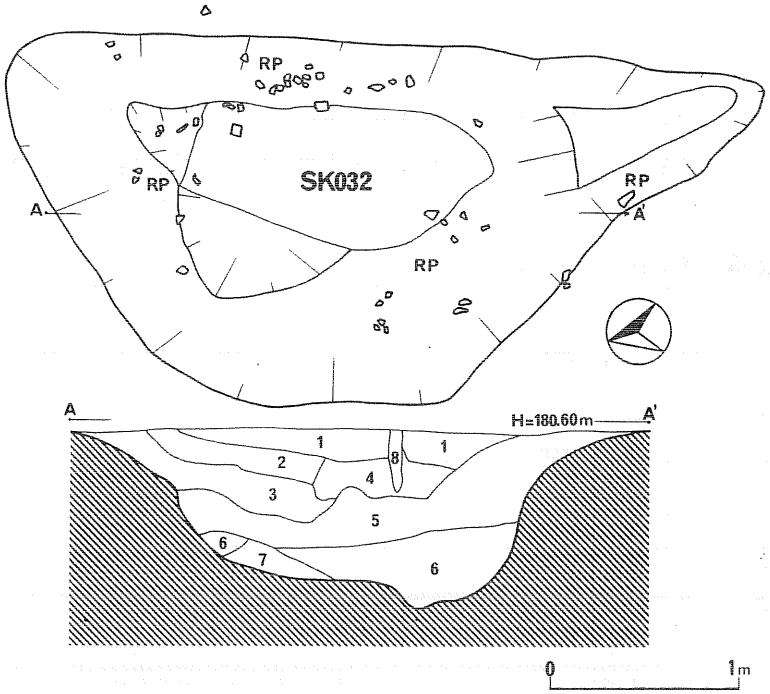
2．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性中。しまり弱。明黄褐色10ＹＲ6/8を下部に２%混入。



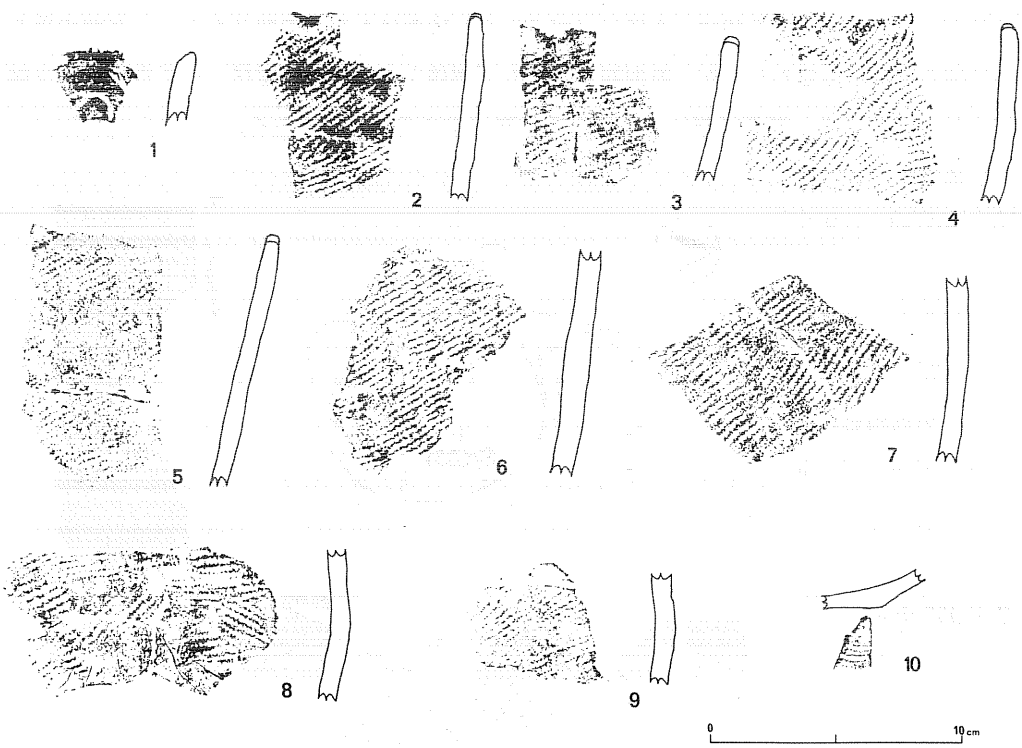
第46図　ＳＫ031土壙

ＳＫ032土壙（第47・48図　図版21）

11－Ｘ，12－Ｘ地区より地山上面にて検出



第47図　SK032土壙



第48図　SK032土壙出土遺物

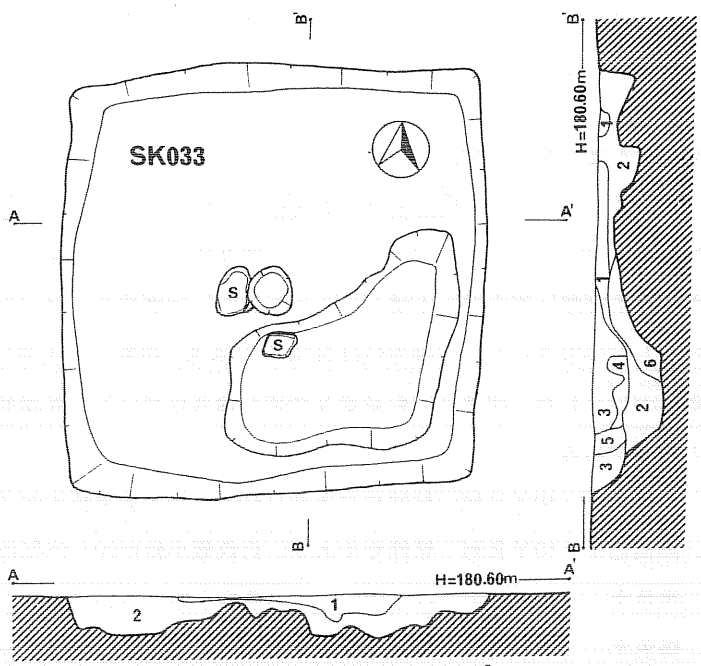
された。平面形は不定形を呈する。壙口部396 × 190 cm，壙底部196 × 104 cm，深さ94cm，面積5.38m²である。床面は若干の凹凸がある。主軸方位はN37°Eである。第48図に示す遺物が出土した。1～9は縄文時代のもので単節RL縄文を縦位に回転施文する。10は土師器坏の破片で回転糸切り技法が施される。遺物は浮石直下の床面からバラバラの状態で出土しており，浮石降灰後の風倒木痕に，遺物の流れこんだものと考えられる。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3　白色小～極小粒一様に50%混入。

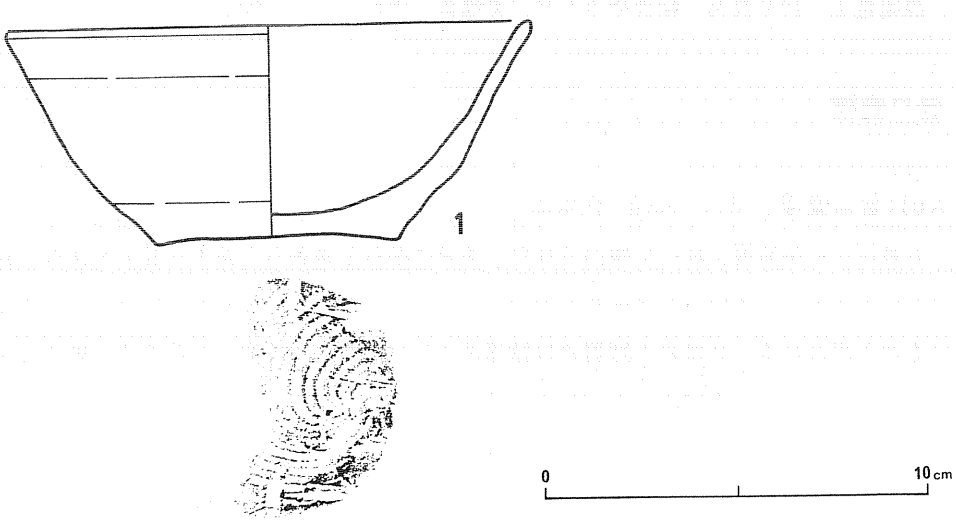
2．黒褐色土 10YR3/2　炭化物小粒，黄褐色小～中粒50%混入。

3．黒褐色土 10YR2/2　白色極小粒を主に下層に帯状に10%混入。

4．浅黄褐色土 2.5Y7/4　浮石の



第49図　SK033土壙



第50図　SK033土壙出土遺物

かたまり。

5．黒色土　10YR1.7/1　ほとんど混入物なし。ごく一部に白色極小粒をごく少量混入。しまり悪し。

6．黒色土　10YR2/1　ほとんど混入物なし。ごく一部に白色極小粒をごく少量混入。しまり悪し。

7．黒褐色土　10YR2/2.5　地山への漸移層。黄褐色極大粒を20%混入。

8．撹乱

ＳＫ033土壙（第49・50図）

12－Ｖ，12－Ｗ地区より地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形の竪穴状遺構である。壙口部224×222cm，壙底部200×208cm，深さ36cm，面積4.84m²である。床面はかなりの凹凸があり，南東部に不定形の土壙がありこれを切って構築されている。また中央部にはほぼ円形のピットが検出された。主軸方位はＮ18°Ｅである。遺物の出土量は少ないが，第50図に示す土師器坏が出土した。底部は回転糸切りで切り離されている。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり。10YR7/6明黄褐色土がまばらに混入。

2．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり。白色極小粒が20～25%混入。

3．黒色土　10YR2/1　ぼそぼそして白色極小粒15～20%混入。

4．褐色土　10YR4/4　粘性ややあり。10YR7/6明黄褐色土２～３%混入。

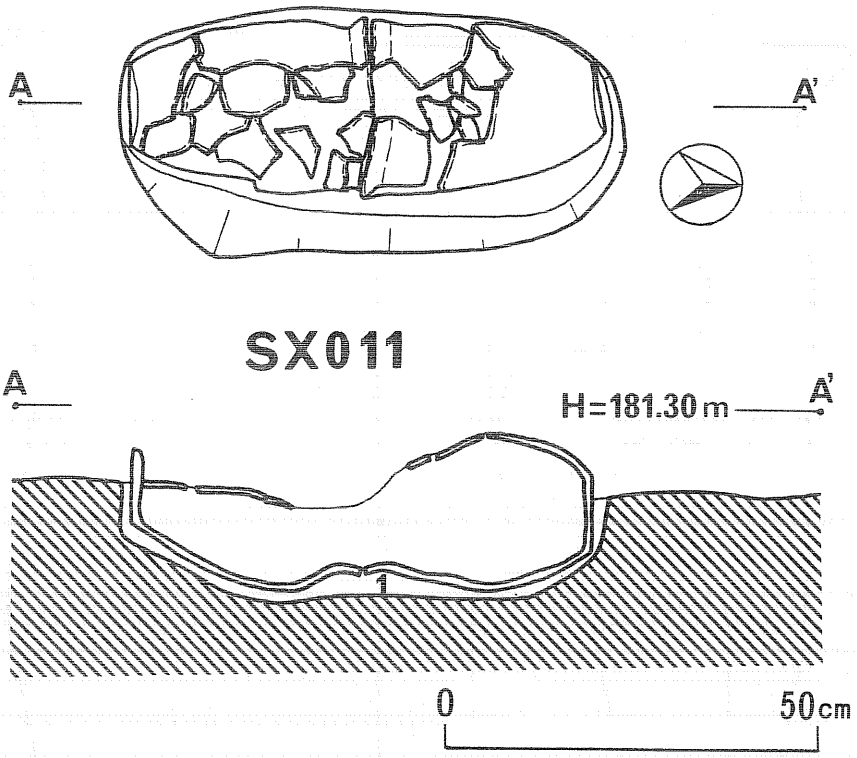
5．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり。白色極小粒が25～30%混入。

6．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。黄褐色土中粒が３～４%混入。

ｃ．合口甕棺

ＳＸ011合口甕棺（第51～53図　図版22）

９－Ｓ地区から第Ⅶ層上面にて検出された。本来は浮石上面から土器より若干大きめに掘りこんだものであろう。甕棺内及び掘り方内のいずれの埋土にも浮石が混入しており，これより新しいものと思われる。２個の土師器の口縁部を合わせて横位に埋葬したもので，甕の大きさ（口径×器高×底径）は南側のものが23.3×31.0×10.0cm，北側のものが20.5×29.0×9.4cmである。調整はいずれも口縁部指ナデ，胴部ヘラケズリが施される。主軸方位はＮ19°Ｗである。廻りにピット等は検出されなかった。なお，この掘方内外の土はリン分析，^{14}Ｃ年代測定を行っており，それらについては付編（P.249，250）を参照されたい。断面観察による埋土の状態は次



第51図　SX011合口甕棺

のとおりである。

1．黒色土　7.5YR2/1　火山性極小粒を混入。粘性弱。

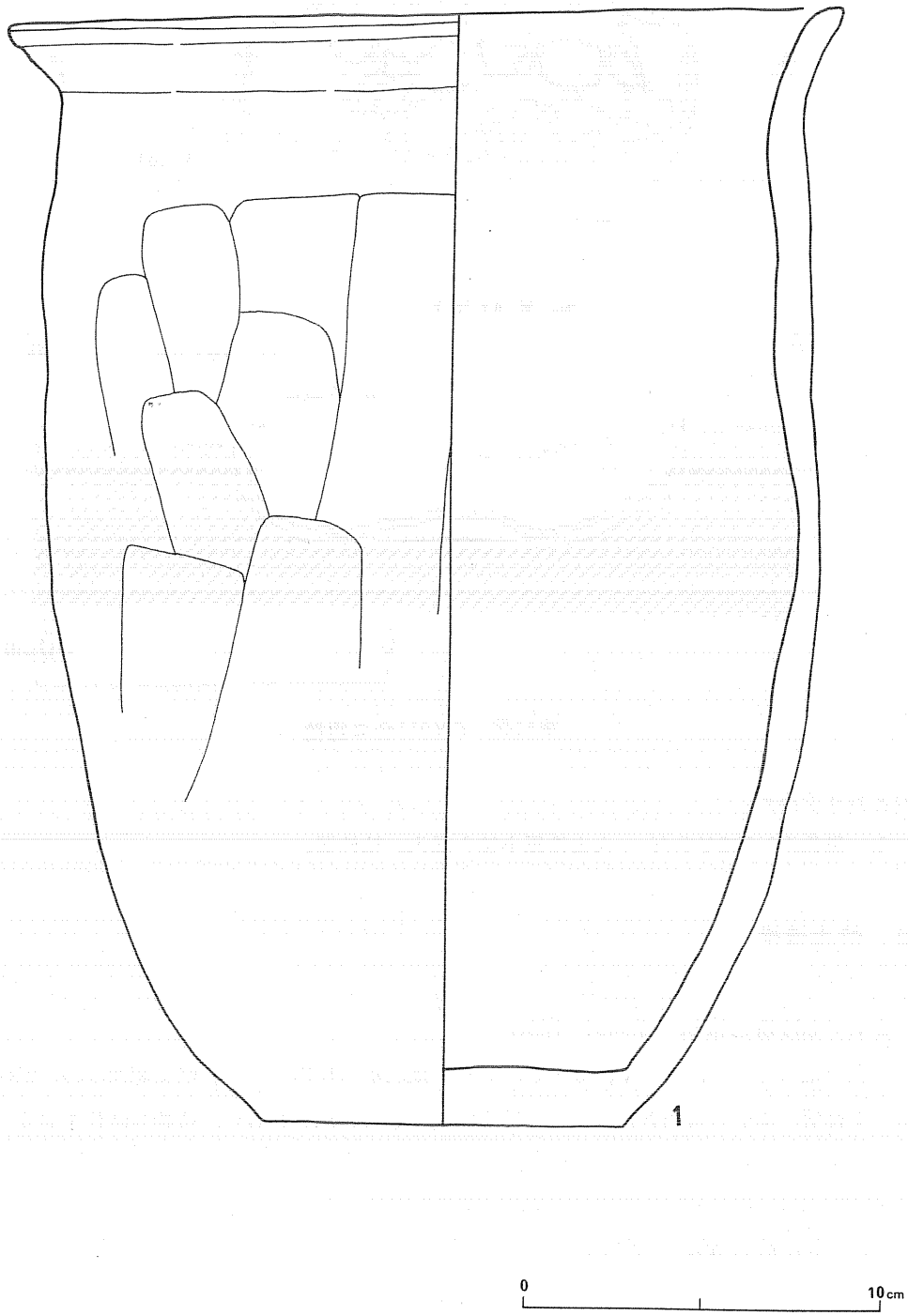
d．焼土遺構

SXF035焼土遺構（第54図　図版23）

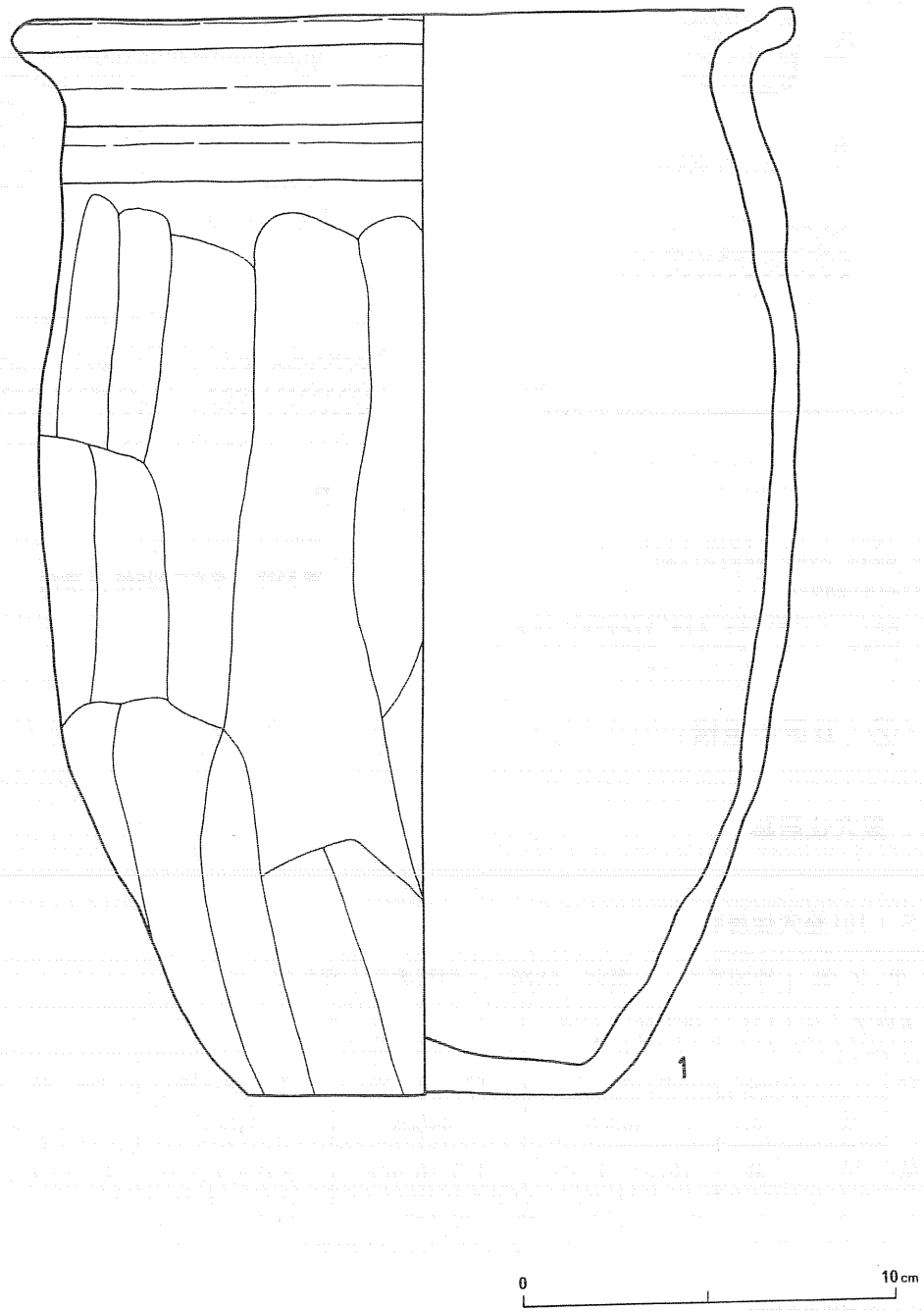
I区南端の4－U，4－V，5－U，5－V地区から検出された。焼土範囲は35×21cmである。第Ⅷ層上面から検出されており，縄文時代のものと思われるが，遺物等時代を確定づけるものは出土しなかった。

SXF036焼土遺構（第55図）

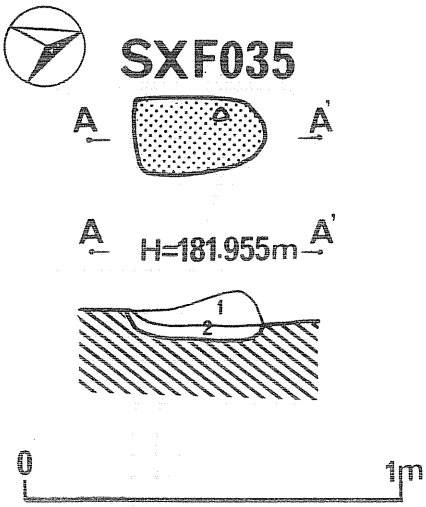
12－Y，13－Y地区より第Ⅷ層上面にて検出された。中央部が20cm程掘りこまれており，中央程よく焼けている。遺物が出土しないので時期は不明であるが縄文時代のものと思われる。ピットその他これに伴うと思われる遺構は検出されなかった。



第52図　SX011合口甕棺実測図(1)



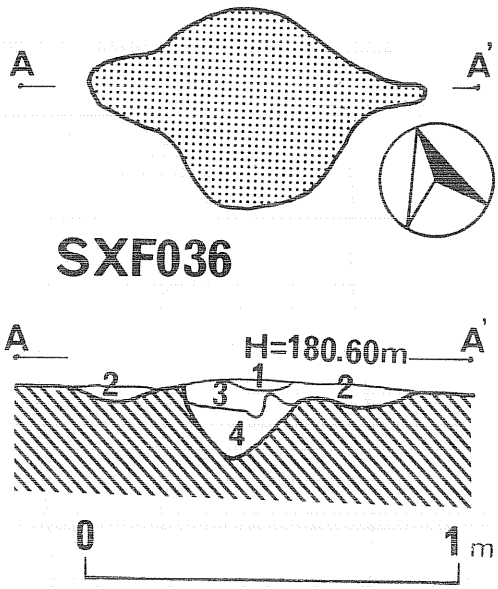
第53図　SX011合口甕棺実測図(2)



第54図　SXF035焼土遺構

▲SXF035焼土遺構埋土
1．赤褐色土　5YR4/6　白色極小粒1%炭化物1%混入しまりよし。焼土。
2．黒褐色土　10YR3/2　赤色極小粒1%混入。

SXF036焼土遺構埋土▶
1．黒褐色土　7.5YR3/2　炭化物，赤色極小粒5%混入。
2．褐色土　7.5YR4/4　焼土，炭化物，黄褐色極小粒2～3%混入。
3．明赤褐色土　5YR5/6　焼土化著しい。小礫を含む。他ほとんど混入物なし。
4．黒褐色土　7.5YR3/2　標準層位の第Ⅷ層。



第55図　SXF036焼土遺構

②　Ⅱ区の遺構

a．竪穴住居跡

SI101竪穴住居跡

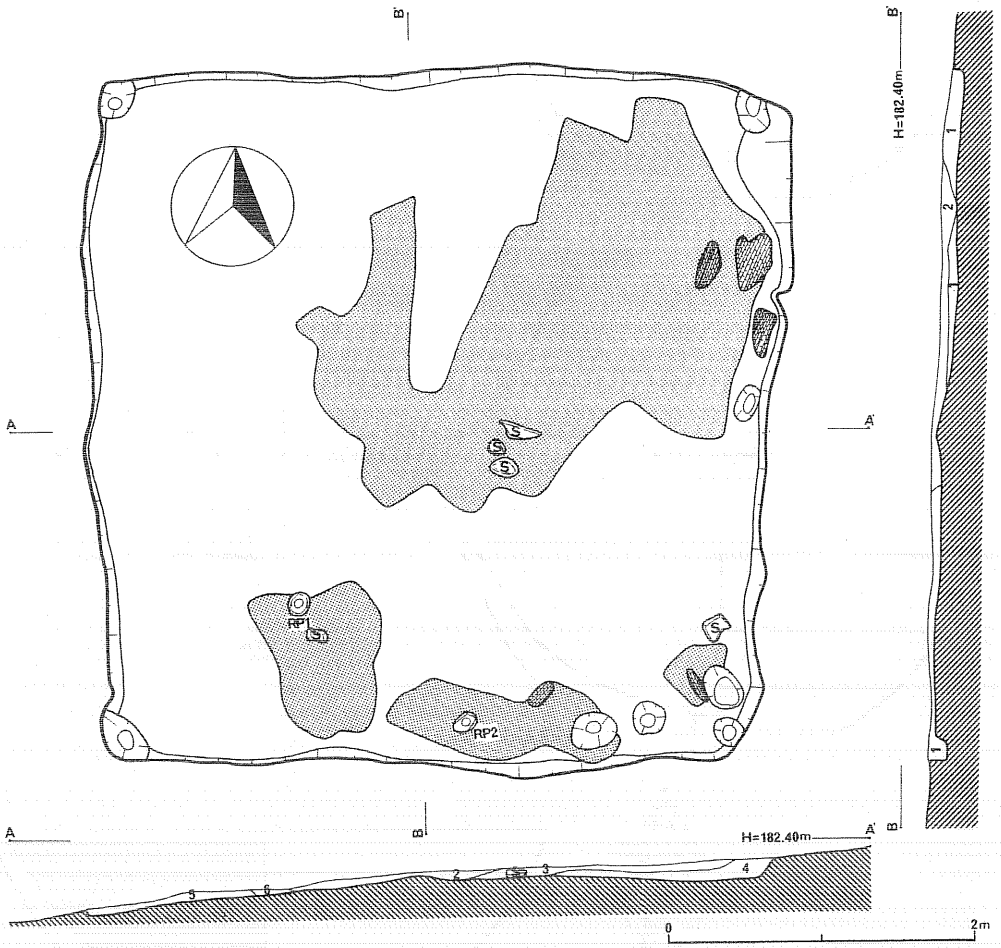
第9表	挿図番号	第56～58図	図版番号	図版25・60
遺構名	SI101	検出地区	44－J，45－J，45－K	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	433cm	446cm	418cm	452cm
	壁高	16.9～31.5cm	4.5～6.8cm	9.0～14.5cm	11.4～17.4cm

形態	方形	面積	20.1m²	主軸方向	N14°E

SI101竪穴住居跡埋土

1．褐色土	10YR4/6	粘性ややあり	しまり中	黒褐色土10%混入。焼土少量混入。
2．黒褐色土	10YR3/2	粘性あり	しまりよし	褐色土7%混入。焼土少量混入。
3．黒色土	10YR1.7/1	粘性ややあり	しまり中	
4．黒褐色土	10YR2/2	粘性なし	しまりなし	黄褐色土，焼土混入。浮石層。
5．明黄褐色土	10YR6/8	粘性ややあり	しまり中	暗褐色土5%混入。
6．　〃	10YR5/6	粘性あり	しまりよし	



第56図　SI101竪穴住居跡

プラン確認　黄褐色土地山上面にて確認された。若干の削平を受けており，特に西側は著しい。

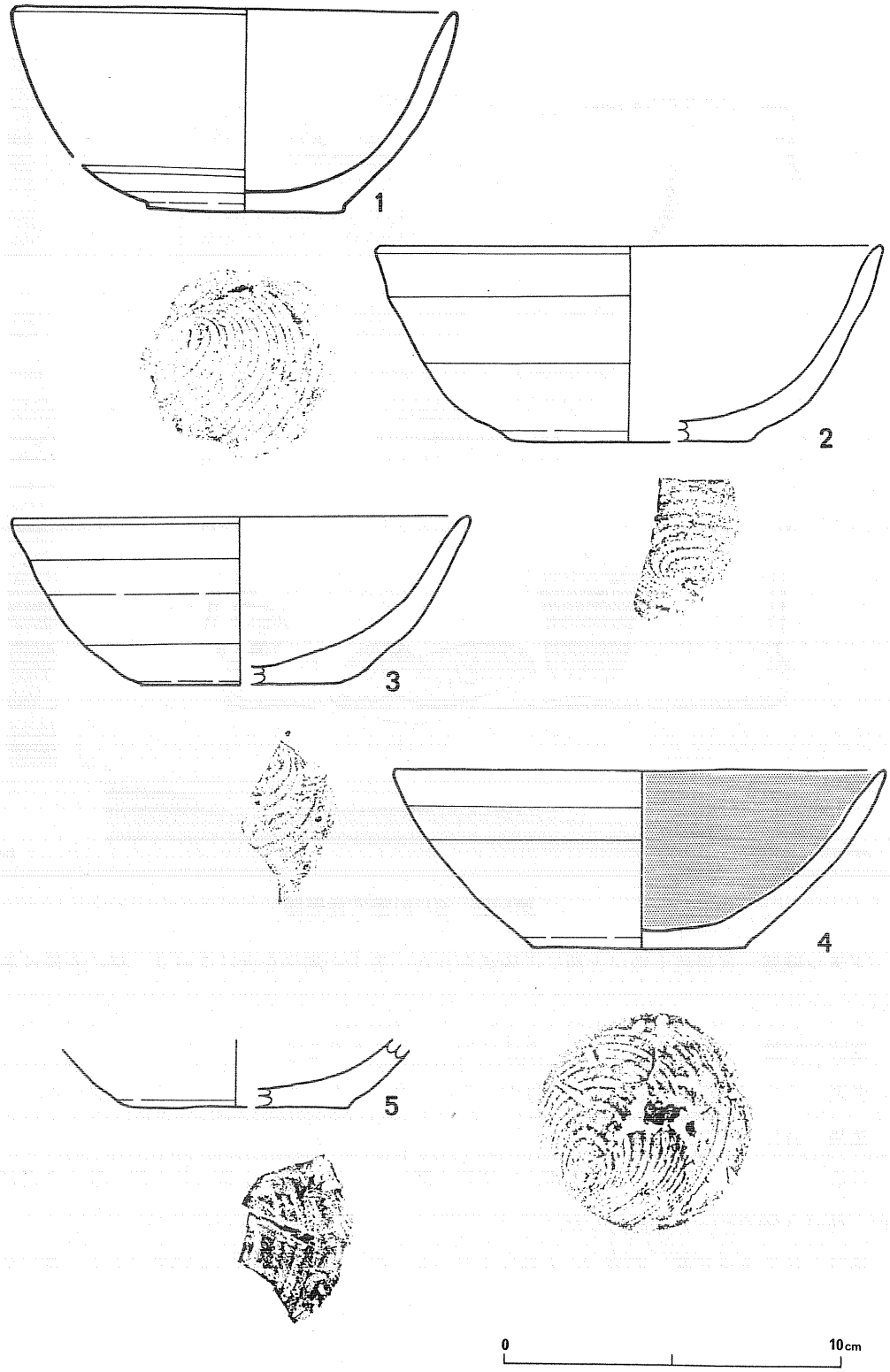
壁面の状態　壁はしまりがよく，垂直に近い立ちあがりをする。

床面　平坦で堅固である。焼土範囲が，床面全体にわたっており，焼失家屋と思われる。

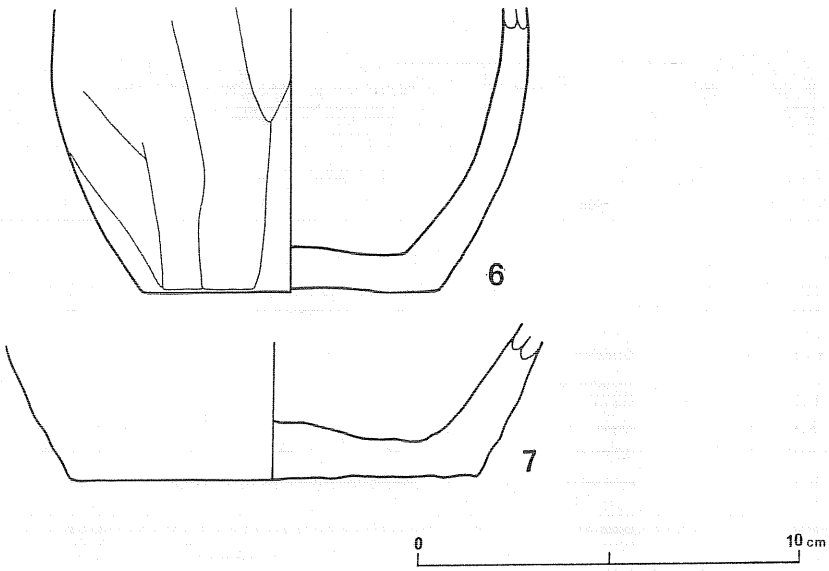
壁溝　確認されず。

柱穴，ピット　住居跡四隅の壁溝内と東壁中間地点の壁溝内に1個の計5個の柱穴を確認した。他に3個のピットも確認した。

遺物とその出土状態　遺物の出土量は少ないが，坏の割合が高いのが特徴である。第57図1～5は土師器の坏で底面は回転糸切りである。甕は出土量が少なく，大型のものはほとんどない。口縁部は若干のくびれがあり頸部の短いものである。



第57図　SI101竪穴住居跡出土遺物(1)



第58図　SI101竪穴住居跡出土遺物(2)

ＳＩ102竪穴住居跡

第 10 表	挿図番号	第59～62図	図版番号	図版26・60・61
遺構名	ＳＩ102	検出地区	38－Ｖ，38－Ｗ，39－Ｖ，39－Ｗ，40－Ｖ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	500cm	527cm	482cm	482cm
	壁溝高	25.8～30.9cm	25.8～36.6cm	34.1cm	17.6～23.5cm
	壁溝幅	13.0～25.0cm	12.0～20.0cm	8.0～17.0cm	10.0～23.0cm
	壁溝深	17.1～19.1cm	16.4～25.7cm	14.3cm	8.2～14.3cm

形態	方形	面積	24.8m²	主軸方向	N27°E
かまど	位置	不明		構築素材	

プラン確認　地山上面で確認した。上面は削平されている。

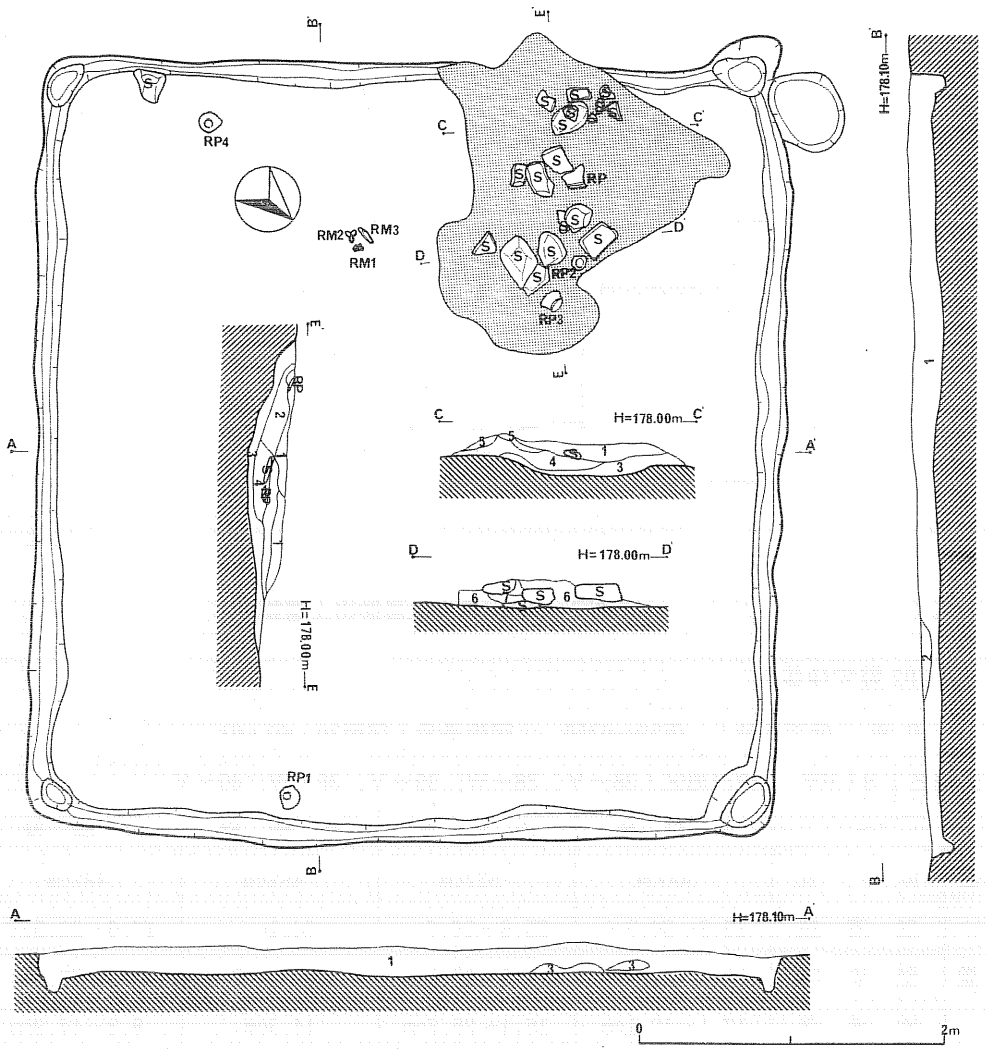
壁面の状態　壁はしまりがよく，垂直に近い立ちあがりをする。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　ほぼ全周する。

柱穴，ピット　住居跡四隅の壁溝内に柱穴を確認した。その他住居跡外にも１個ピットを検出した。

かまど　遺存状態は極めて不良であり，煙道部，煙出口部及び袖部は確認されなかった。



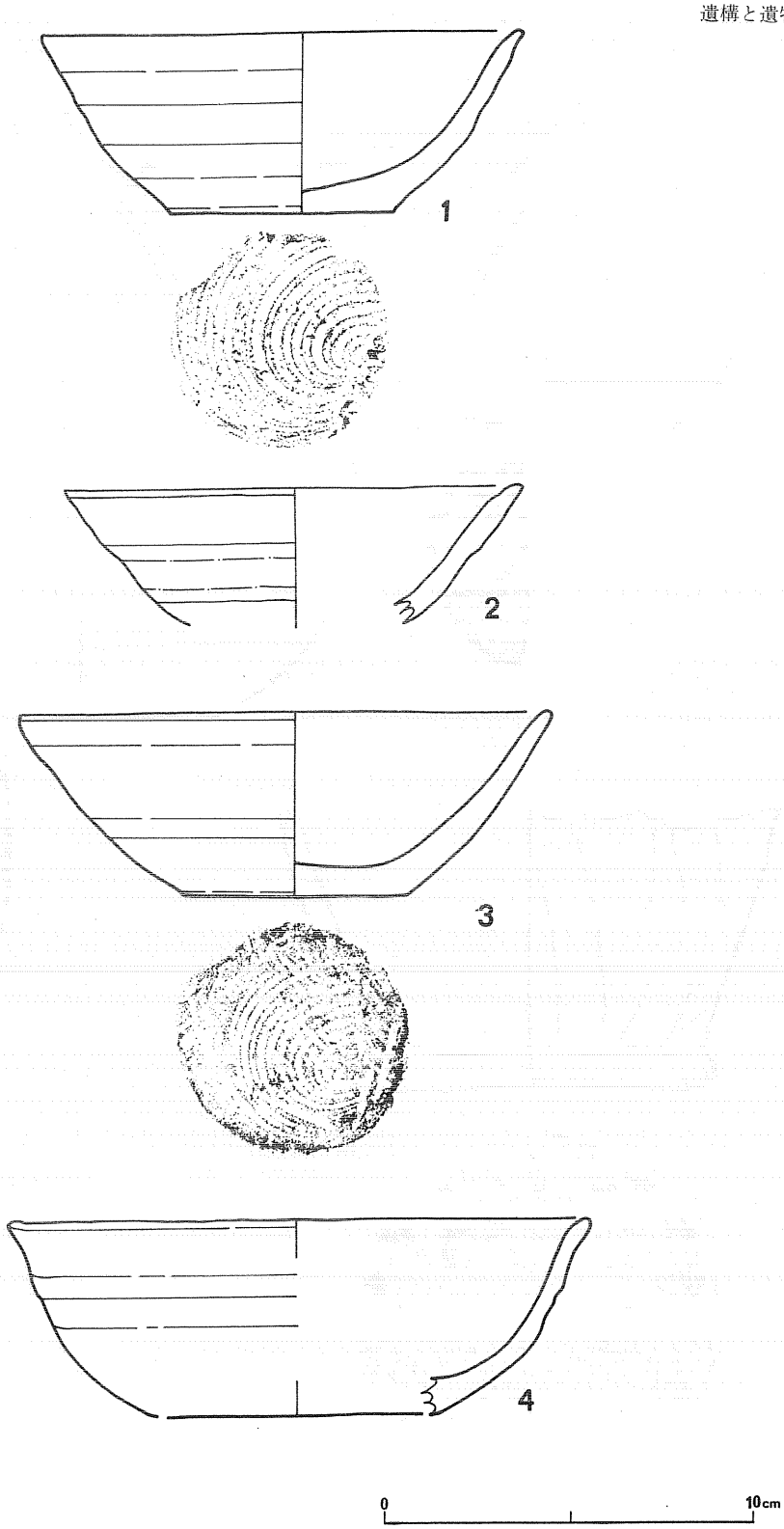
第59図　SI102竪穴住居跡

住居跡埋土

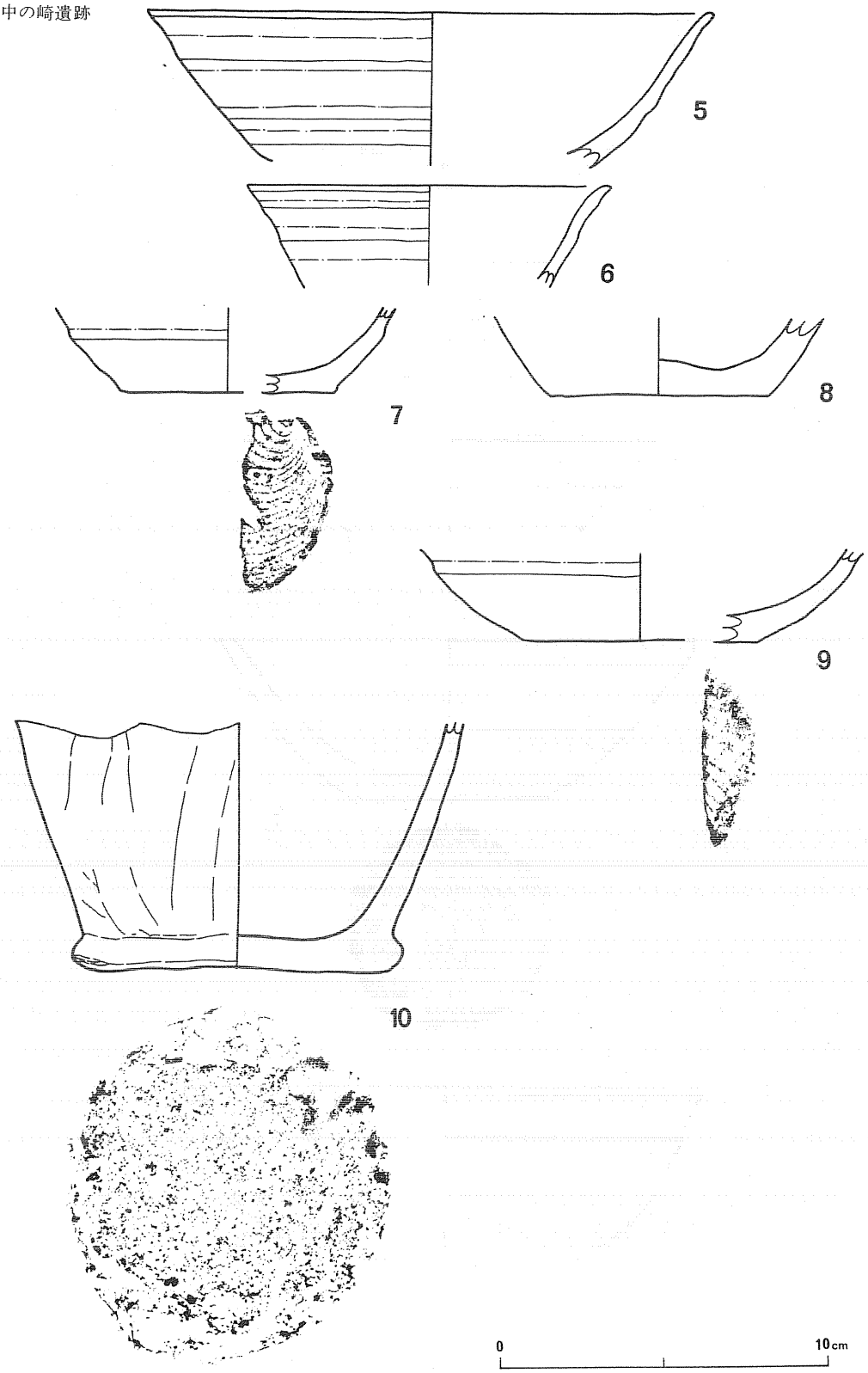
1．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性ややあり　しまりよし　ザラザラした砂粒混入
2．黄褐色土　10ＹＲ5/6　ブロック
3．降積

カマド埋土

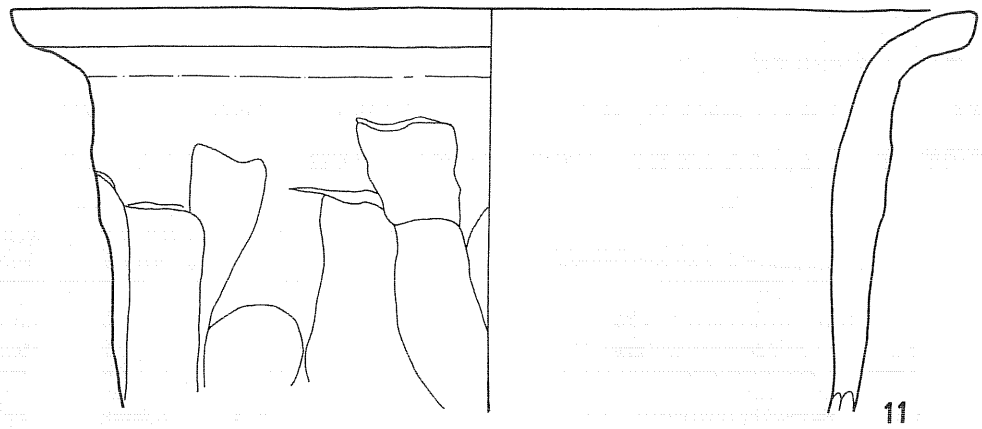
1．暗褐色土　7.5ＹＲ2/3 粘性なし　しまりあり
2．黒褐色土　7.5ＹＲ2/2 粘性なし　しまりあり
3．にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
4．明赤褐色土　5ＹＲ5/8　粘性なし　しまりあり
5．赤褐色土　5ＹＲ4/8　粘性なし　しまりあり
6．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性ややあり　しまりよし　ザラザラした砂粒混入
7．大湯浮石のブロック

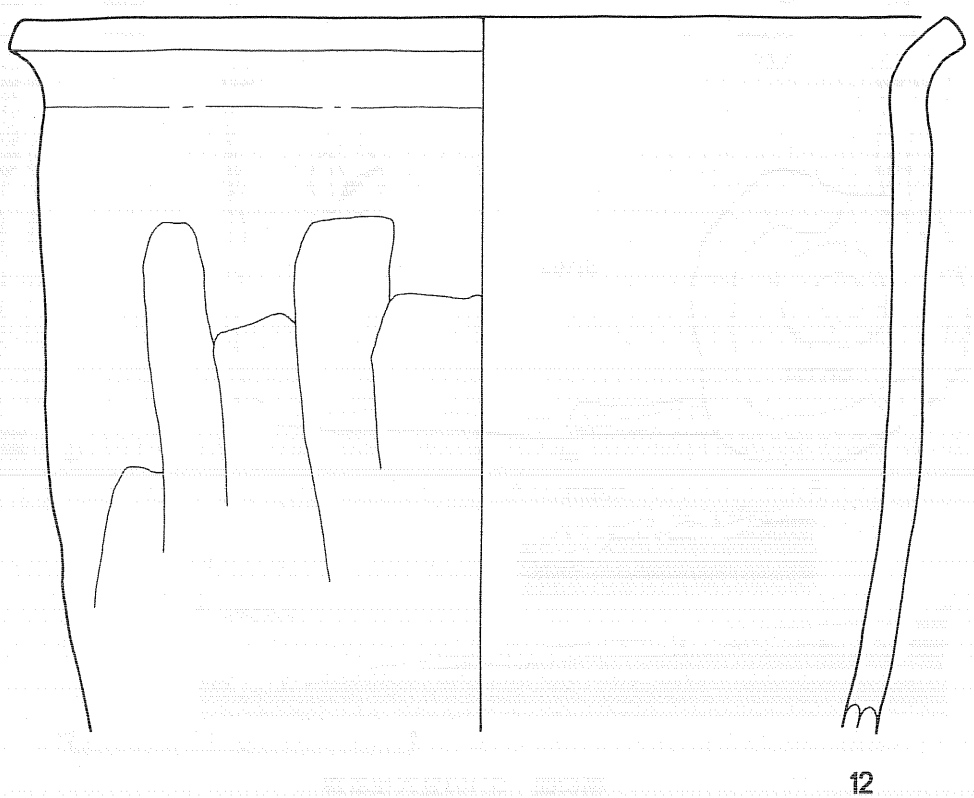


第60図　SI102竪穴住居跡出土遺物(1)



第61図　SI102竪穴住居跡出土遺物(2)

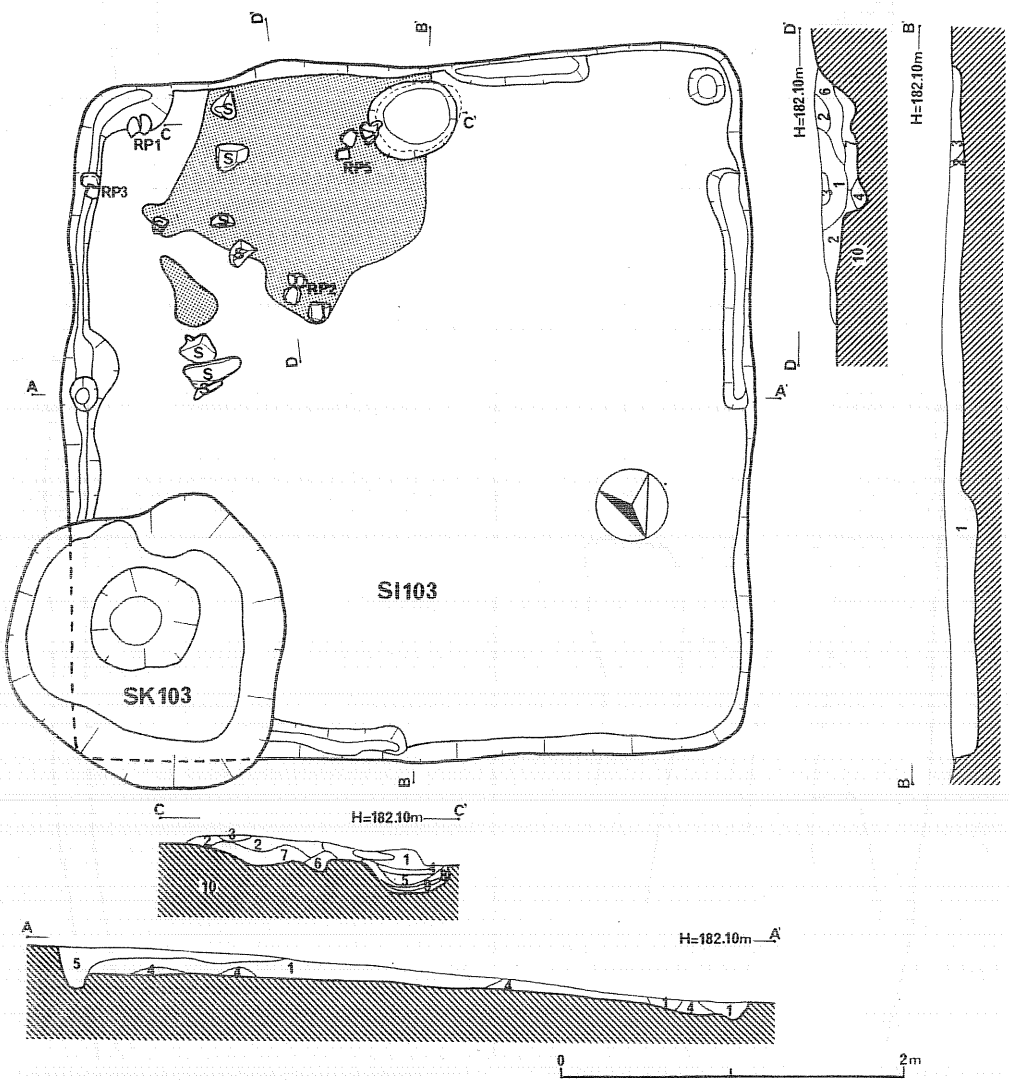




0 10cm

第62図　SI102竪穴住居跡出土遺物(3)

遺物とその出土状態　遺物の出土量は中程度である。第60図１～４，第61図５～７・９は土師器の坏で４を除いて回転糸切り技法が施される。10は砂底の土師器甕である。胴部はヘラナデ調整されている。また土師器甕の口縁部は比較的反りの明確なものが多く出土している。



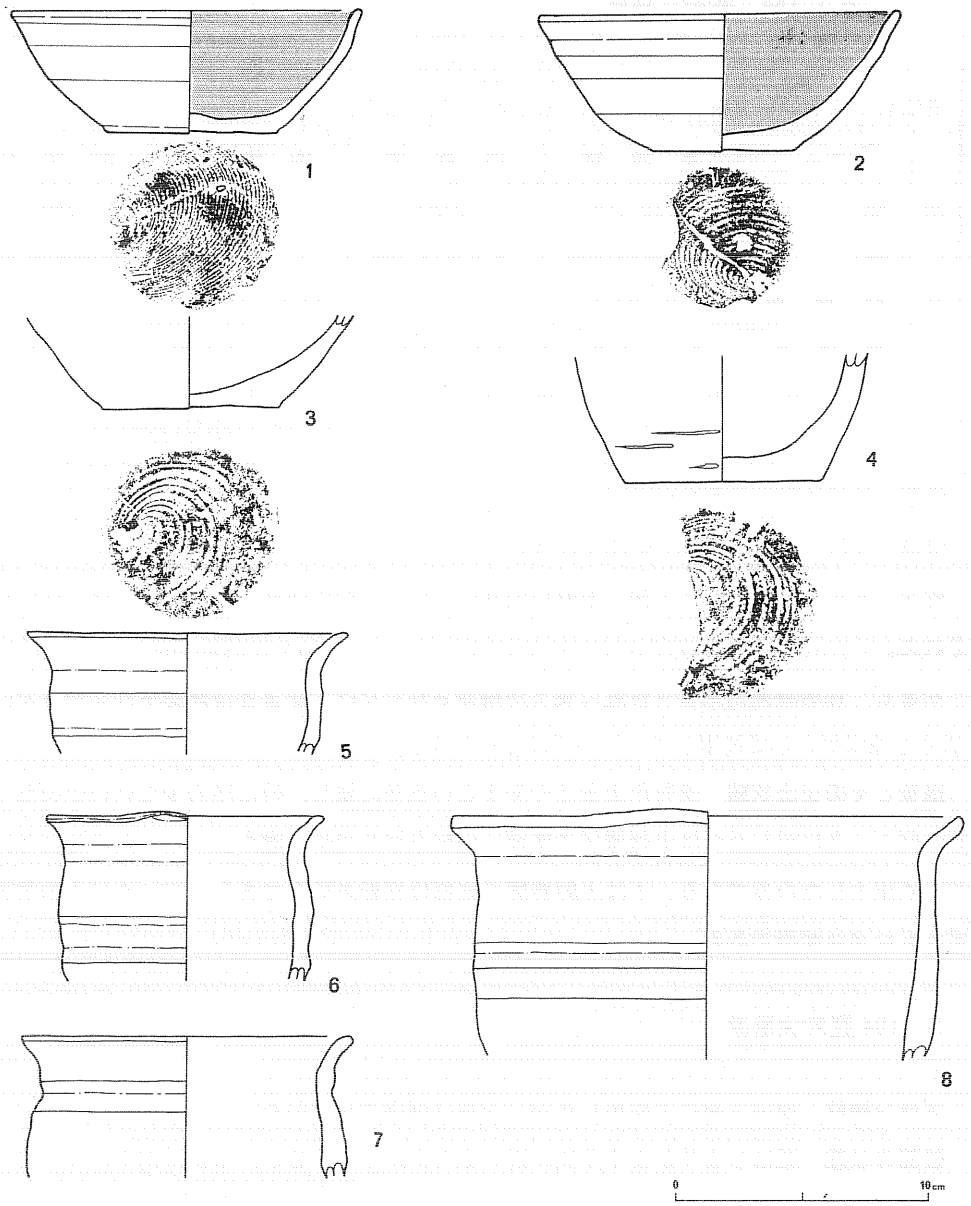
第63図　SI103竪穴住居跡

住居跡埋土

1．暗褐色土	10ＹＲ3/4	粘性あり	しまりあり	黄褐色土(10ＹＲ5/6)15～17㎜径のかたまりで40%混入。
2．にぶい黄褐色土	10ＹＲ5/4	〃	〃	
3．暗褐色土	10ＹＲ3/4	粘性ややあり	〃	
4．黄褐色土	10ＹＲ5/6	粘性あり	〃	
5．褐色土	10ＹＲ4/4	粘性ややあり	しまりなし	
6．黄褐色土	10ＹＲ5/6	粘性あり	しまりあり	
7．〃	〃	〃	〃	

カマド埋土

1．にぶい黄褐色土	10ＹＲ4/3	粘性ややあり	しまり中	赤褐色土(５ＹＲ4/6)20㎜のかたまりで30%混入。
2．灰褐色土	10ＹＲ4/2	〃 あり	〃 よし	粘土質でかたくしまっている部分内赤褐色土(５ＹＲ4/6)混入。
3．黒色土	10ＹＲ2/1	〃 なし	〃 中	粗砂５%混入，赤褐色土(５ＹＲ4/6)まだら状に若干混入。
4．にぶい黄褐色土	10ＹＲ5/4	〃 なし	〃 なし	灰黄褐色土(10ＹＲ5/2)まばらに混入。 } もろくてやわらかい。
5．にぶい黄褐色土	10ＹＲ4/3	〃 なし	〃 なし	４の10ＹＲ5/4が若干混入，炭化物がごくわずかにみられる。 } もろくてやわらかい。
6．褐色土	10ＹＲ4/4	〃 あり	〃 なし	10ＹＲ4/2が若干混入，粘土質でかたい。
7．暗赤褐色土	５ＹＲ3/4	〃 あり	〃 なし	赤褐色土(５ＹＲ4/6)がみられる。
8-a.にぶい黄褐色土	10ＹＲ5/3	〃 あり	〃 なし	かなりかたい，加熱されてかなりかたい。全層中で最もかたい。
9-b.黒褐色土	10ＹＲ3/2	〃 なし	〃 なし	２㎜前後粒径の砂で形成されている。
10．黄褐色土	10ＹＲ5/6	〃 あり	〃 なし	浮石混入。



第64図　SI103竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ103 竪穴住居跡

プラン確認　地山上面にて確認されたが，上面は削平されている。

壁面の状態　壁の立ちあがりははっきりしているが上部が削平されているため南壁と西壁が掘り込みが少ない。実際の生活面は上のレベルであったと思われる。また北東隅はＳＫ103 土壙により破壊されている。

ＳＩ 103　竪穴住居跡

第 11 表	挿図番号	第63・64図	図版番号	図版28・62
遺構名	ＳＩ103	検出地区	45－Ｋ，46－Ｊ，46－Ｋ	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	(257)cm	409cm	380cm	(280)cm
	壁高	24.3～25.8cm	8.4～11.1cm	8.1～17.9cm	3.9～20.4cm
	壁溝幅	8.0～20.0cm	(15.0～23.0)cm	(11.0～18.0)cm	(17.0～24.0)cm
	壁溝深	7.3～13.8cm	(4.3～ 4.8)cm	(5.5)cm	(3.9～ 7.0)cm

形態	方形	面積	14.3m²	主軸方向	N32°E

床面　平坦で堅固である。

壁溝　住居跡四方の一部に壁溝が確認された。

柱穴，ピット　西南隅に１個，南壁中間部に１個，東壁中間部に１個の計３個の柱穴が確認された。

かまど　住居跡南壁東より付近に焼土が確認されただけでかまどは確認されなかった。焼土部分を地床炉として使用していたのではなかろうか。

遺物とその出土状態　遺物出土量はやや少ない部類に属し，特に坏の少ないのが特徴である。第63図１～３に示したのは土師器坏で底部は回転糸切りで切り離す。この３点の他に坏は破片が１点出土したのみである。４は土師器甕で底部は回転糸切りである。５～８は土師器甕でいずれもロクロ使用である。

ＳＩ 104 竪穴住居跡

プラン確認　地山上面にて検出したが，上面は削平されていた。

壁面の状態　壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをするが，上面は削平をうけている。

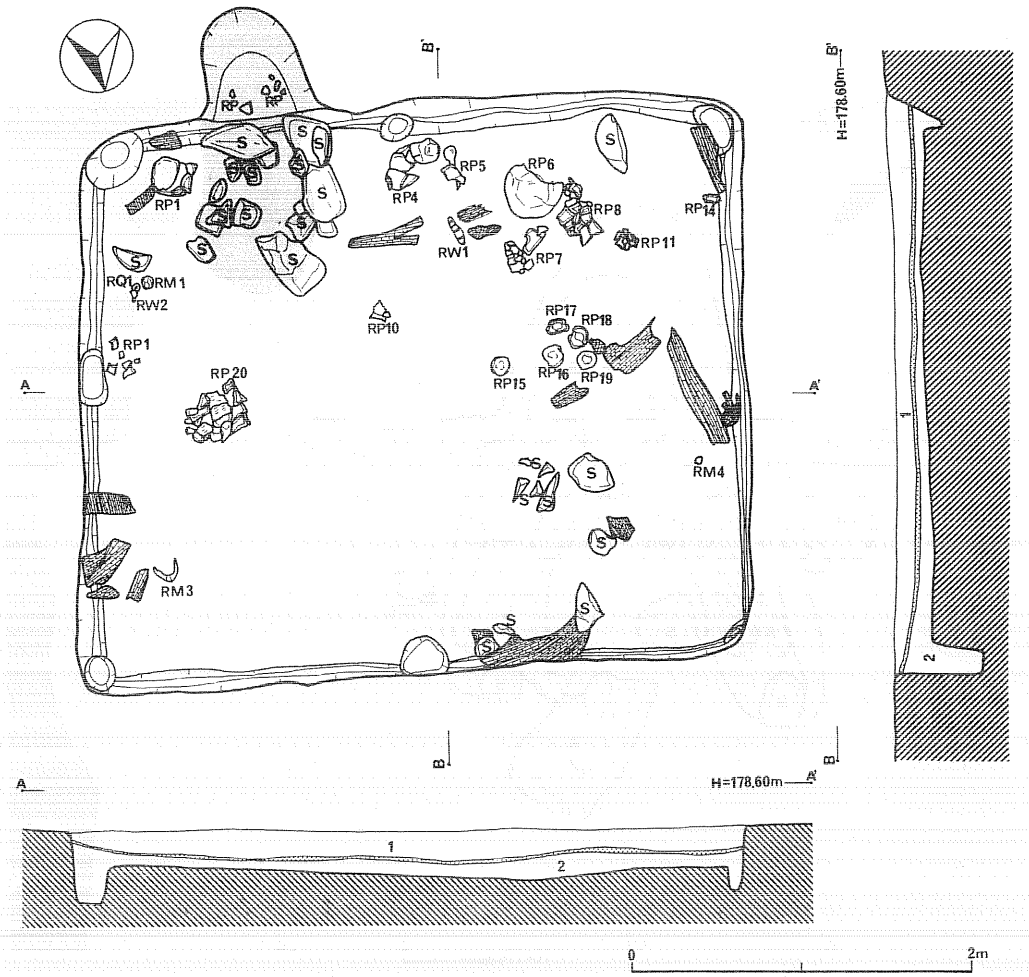
床面　平坦で堅固である。

壁溝　ほぼ全周する。

柱穴，ピット　北西隅を除く三方と西壁を除く各壁の中間部に３個の計６個の柱穴が確認された。

かまど　扁平な石を芯材として構築されたものであり，天井部，袖部ともに遺存状態は比較的良好である。しかし，煙道部は上面が削平されている。

遺物とその出土状態　遺物の出土量はやや多い方である。それに伴って坏が完形の状態で９点出土した。第67・68図１～９は土師器坏で，いずれも底部は回転糸切りである。ＲＰ15～19



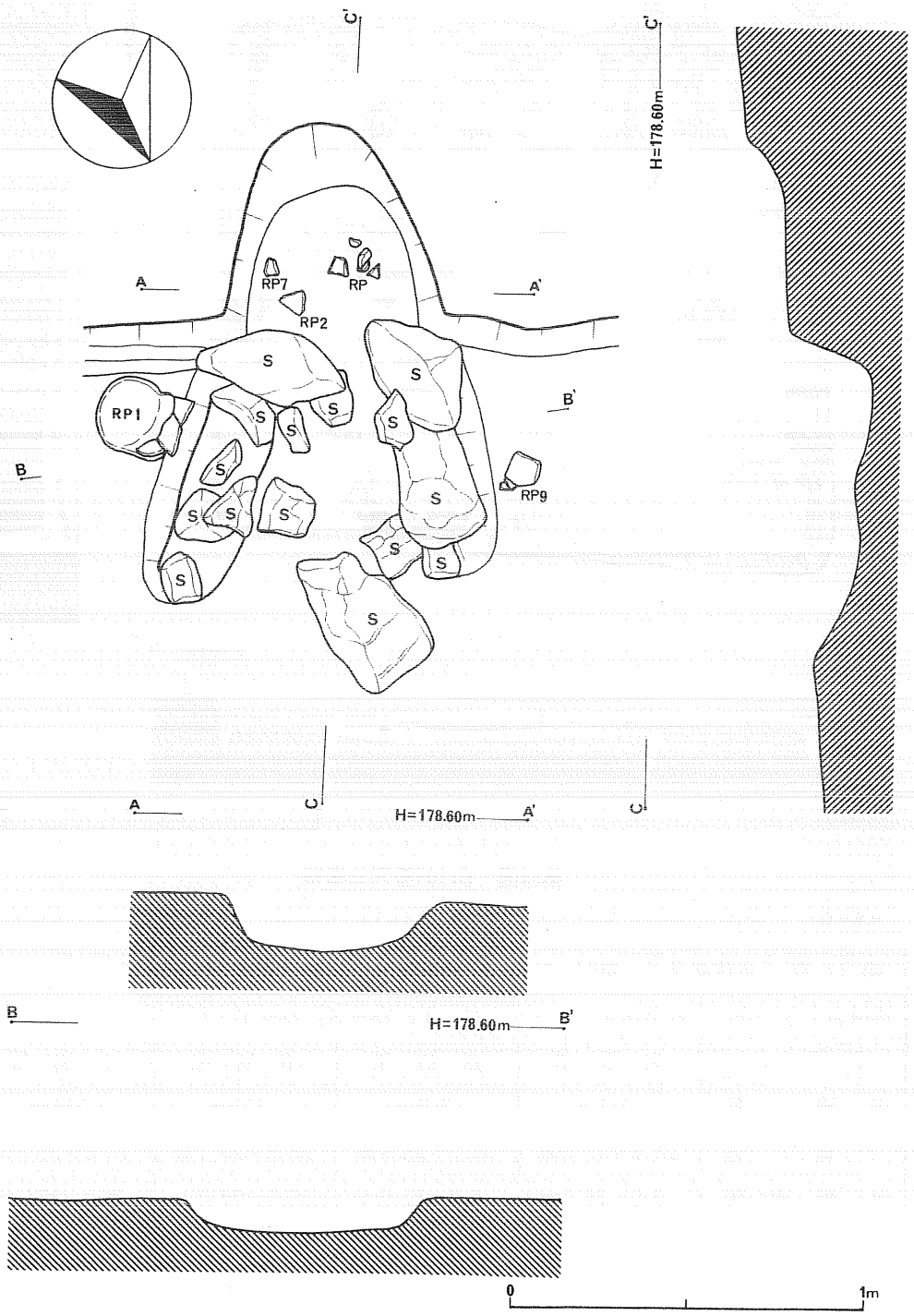
第65図　SI104竪穴住居跡

住居跡埋土　1. 暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり，しまりなし。黄褐色大粒3～5%混入。　2. 黒褐色土　10YR3/3　粘性ややあり。

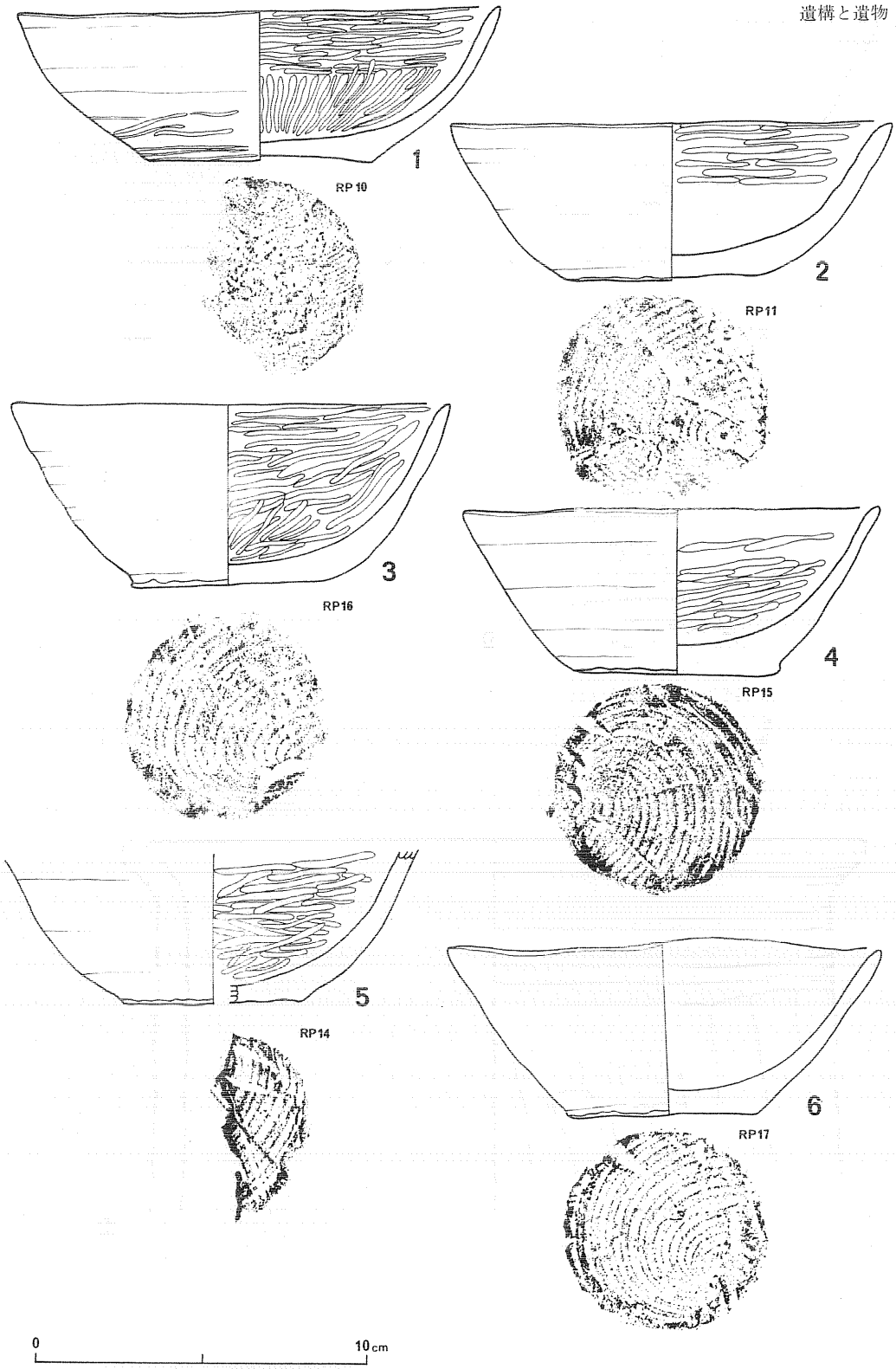
第 12 表	挿図番号	第65～71図	図版番号	図版29～32・62～66
遺構名	SI 104	検出地区	37－S，37－T，38－S，38－T	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	315cm	318cm	377cm	385cm
	壁高	24.7～27.0cm	32.7～35.5cm	25.5～37.1cm	17.8～23.3cm
	壁溝幅	5.0～16.0cm	6.0～12.0cm	10.0～20.0cm	5.0～13.0cm
	壁溝深	2.0～11.8cm	6.9～15.9cm	11.9～14.5cm	3.5～15.1cm

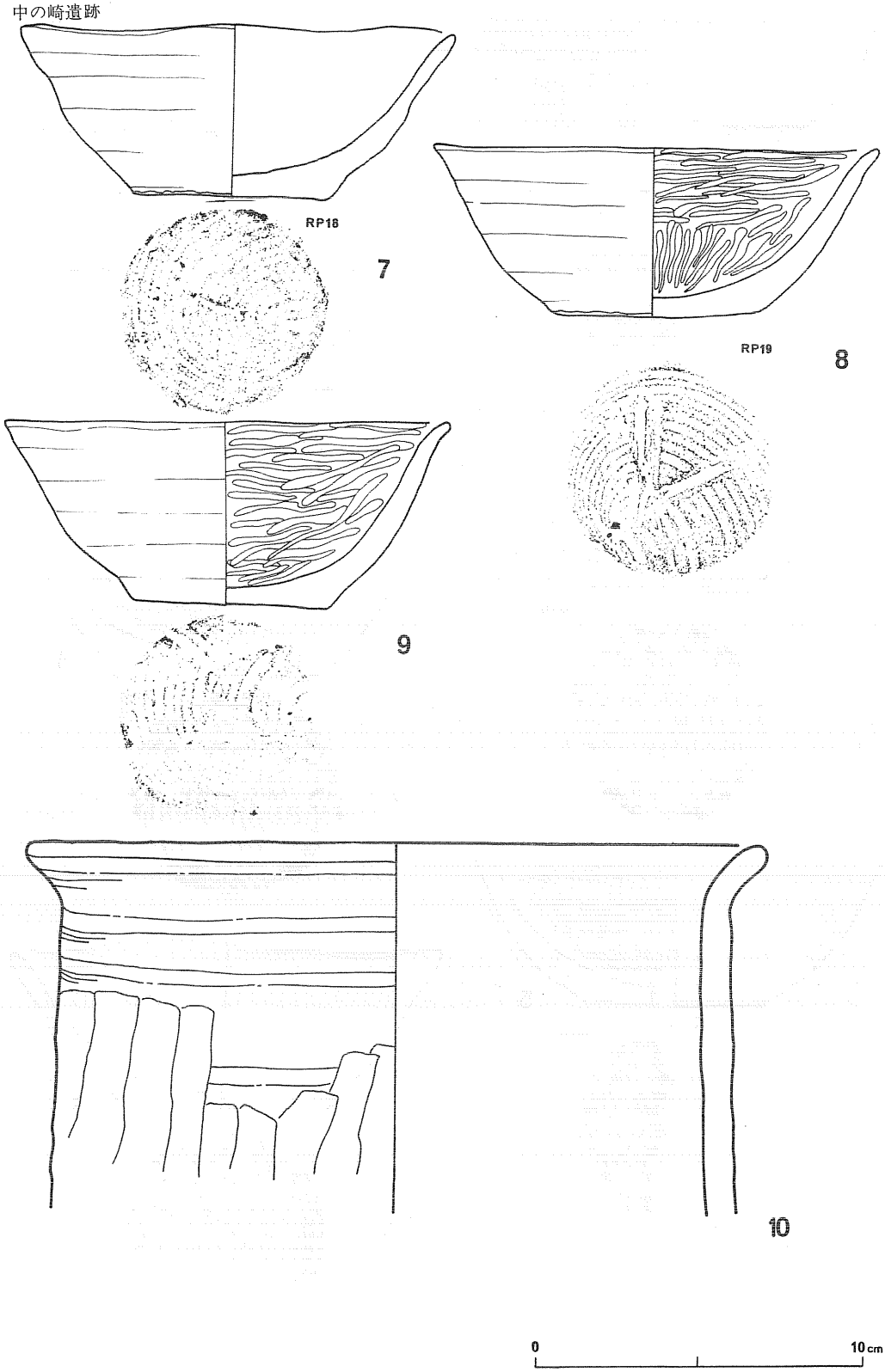
形態	方形	面積	13.2m²	主軸方向	N21°E
かまど	位置	西壁北寄り		構築素材	芯部石組



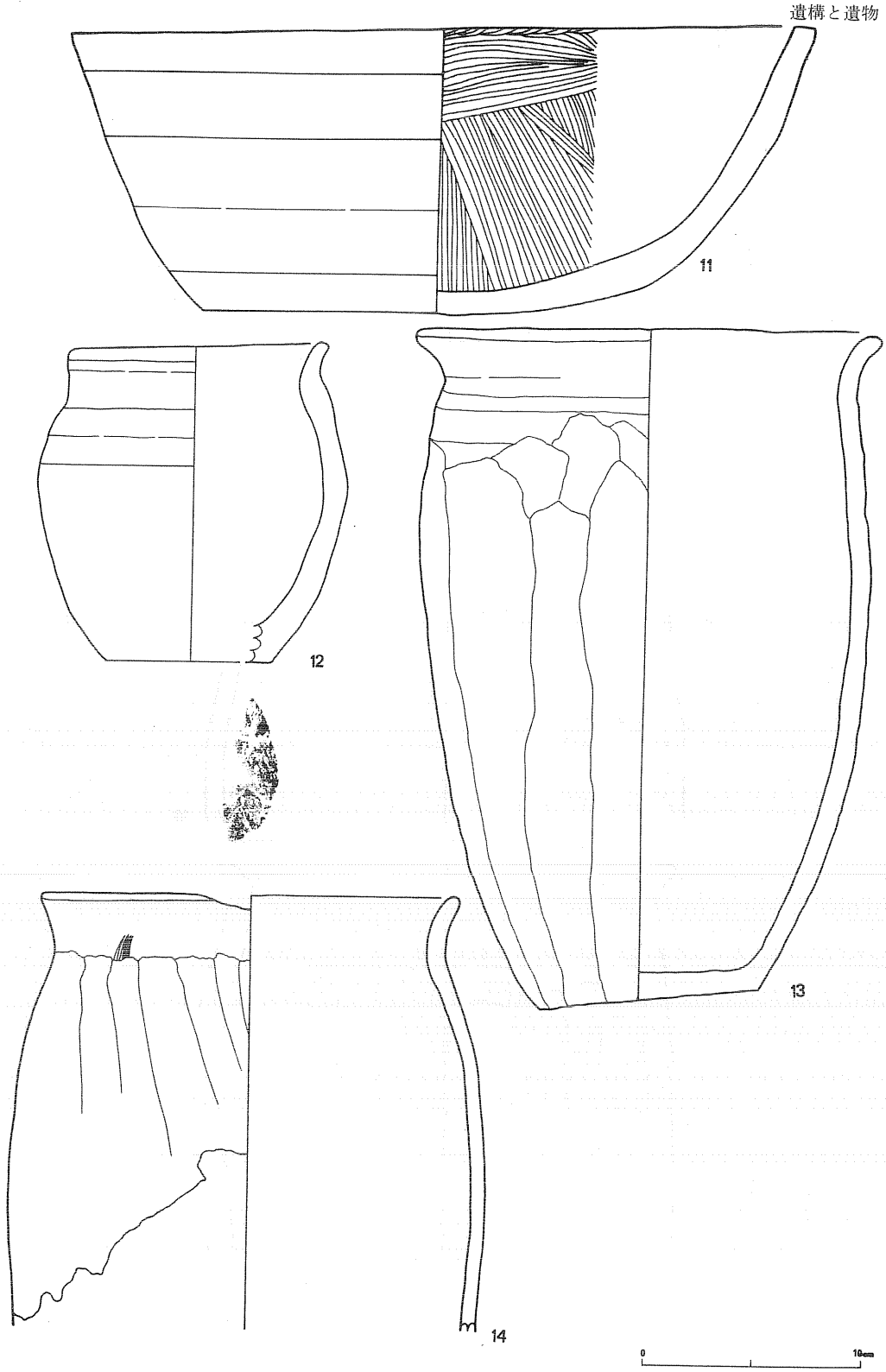
第66図　SI104竪穴住居跡カマド



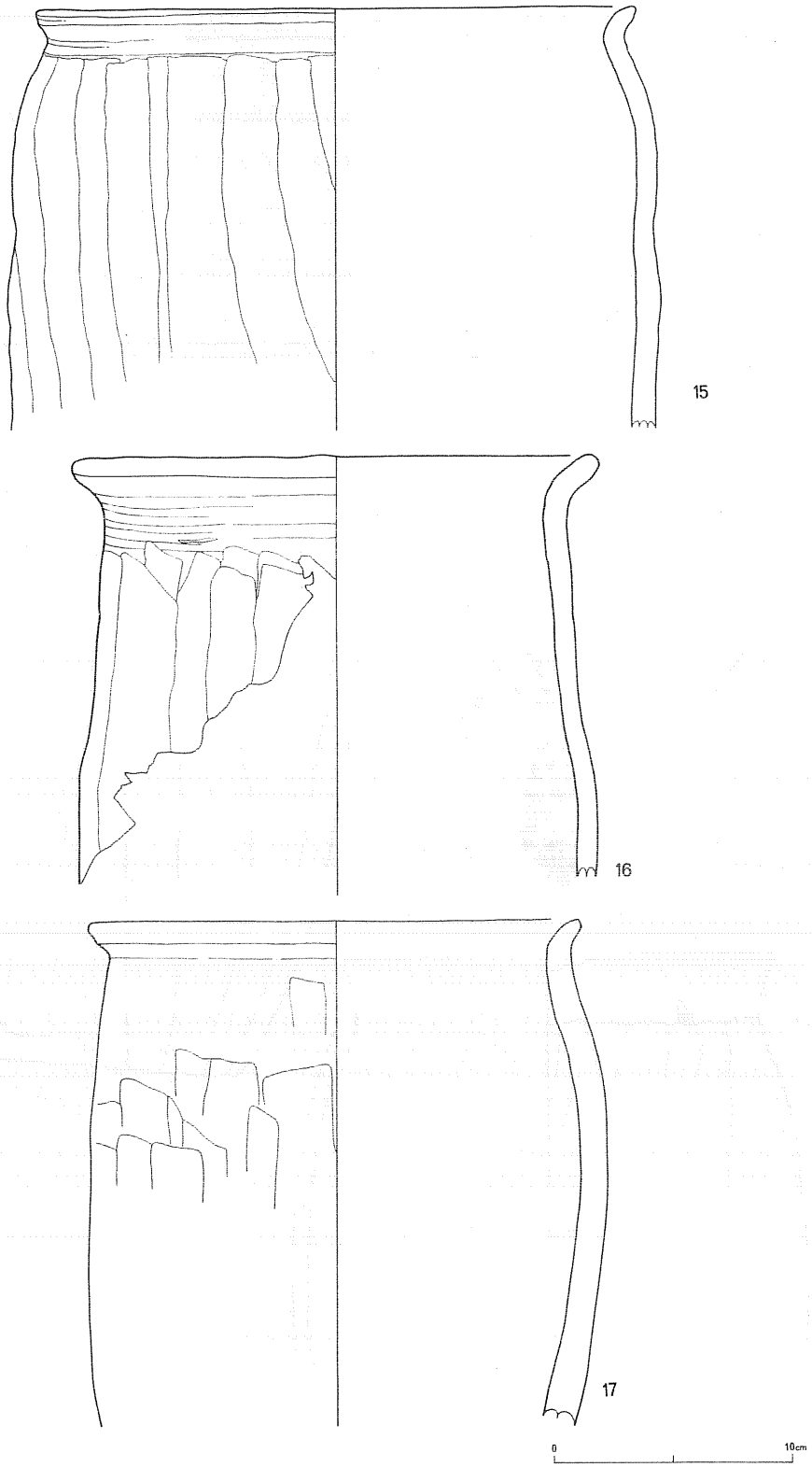
第67図　SI104竪穴住居跡出土遺物(1)



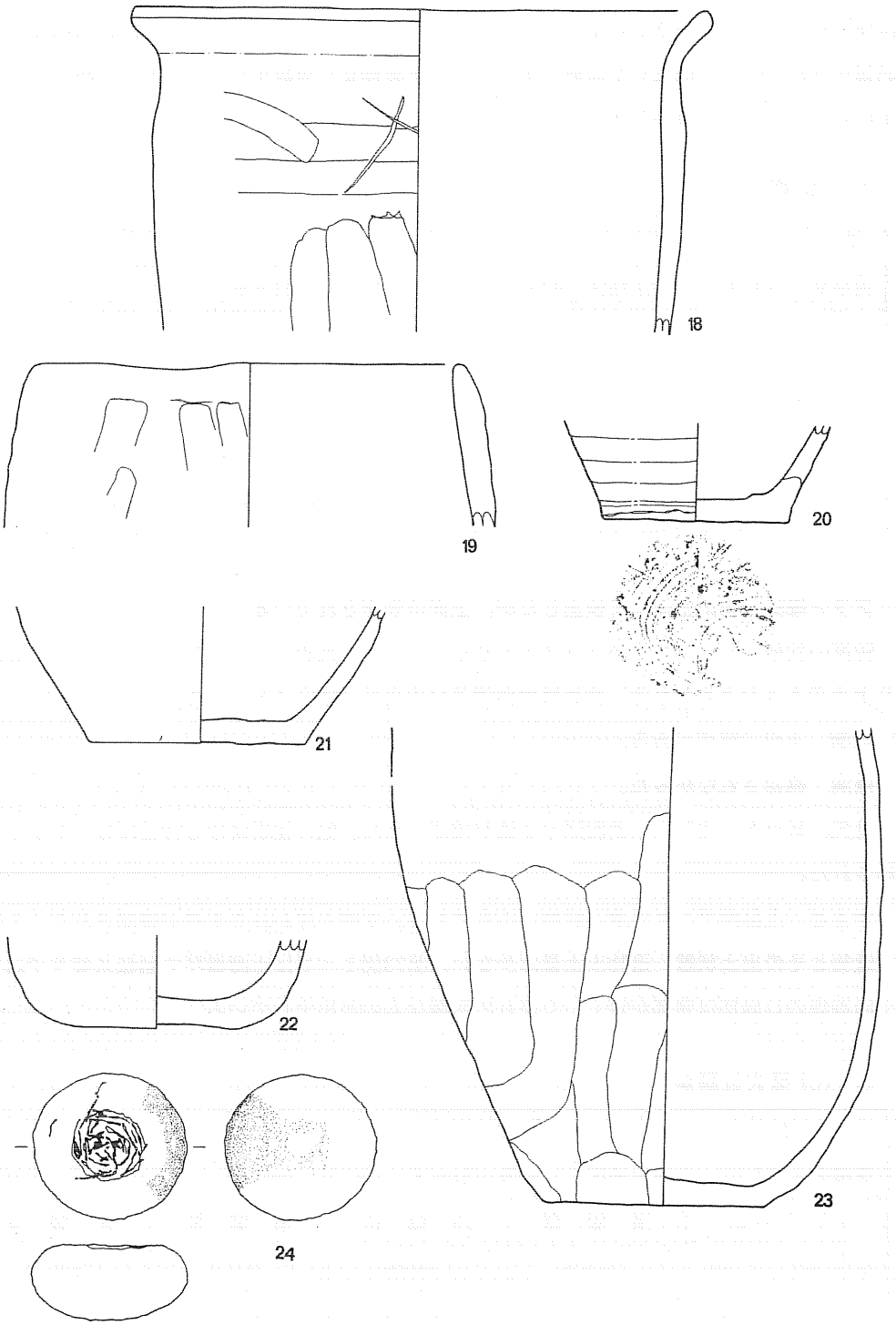
第68図　SI104竪穴住居跡出土遺物(2)



第69図　SI104竪穴住居跡出土遺物(3)



第70図　SI104竪穴住居跡出土遺物(4)



第71図　SI104竪穴住居跡出土遺物(5)　0　10cm

は住居跡中央やや西寄りからまとまって正立した状態で出土した。11は堝で，口縁部は平らに調整がされており，倒立した状態で出土した。土師器甕も他数出土しており，一部にロクロ使用が認められる。口縁部は頸部が短いが，くびれのあるものが多い。

ＳＩ106 竪穴住居跡

第 13 表	挿図番号	第72・73図	図版番号	図版33・66
遺構名	ＳＩ106	検出地区	43－Ｇ，43－Ｈ，44－Ｇ，44－Ｈ	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	(55.0)cm	235cm	(125)cm	195cm
	壁高	3.4～3.6cm	10.8～11.7cm	(4.8～7.8)cm	9.8～11.2cm

形態	方形	面積	4.5m²	主軸方向	N29°E
かまど	位置	西壁中央		構築素材	芯部石組

プラン確認　地山上面にて検出したが，上面は削平されている。

壁面の状態　壁は立ちあがりははっきりしているが，実際は上面が削平されており，これより上まであったと思われる。住居跡南側隅及び中央部は攪乱されている。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　確認されなかった。

柱穴，ピット　北側隅，西側隅の２個が確認された。他に住居跡中心付近にピットが１個確認された。

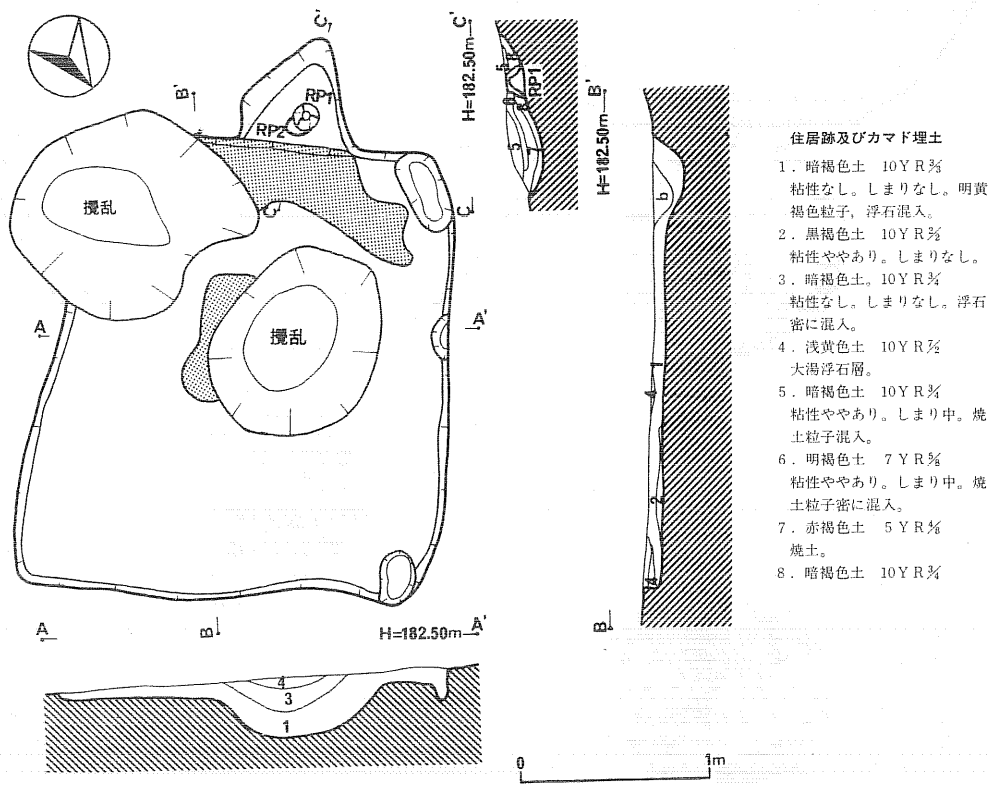
かまど　上部削平のため遺存状態は不良である。支脚と思われる土器が確認された。

遺物とその出土状態　遺物出土量は少ない。第73図１～３は土師器坏で回転糸切りである。土師器甕の口縁部は頸部が短く，くびれの明確なものが出土している。

ＳＩ107 竪穴住居跡

第 14 表	挿図番号	第74～78図	図版番号	図版34・35・67・68
遺構名	ＳＩ107	検出地区	31－Ｒ，31－Ｓ，32－Ｒ，32－Ｓ	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	528cm	540cm	608cm	599cm
	壁高	37.2cm	15.2cm	17.5cm	20.9～24.4cm
	壁溝幅	10.0～19.0cm	6.0～20.0cm	6.0～14.0cm	7.0～19.0cm
	壁溝深	2.7cm	4.6cm	3.9cm	5.6cm



第72図　SI106竪穴住居跡

形　態	方　形	面　積	35.2m²	主軸方向	N28°E
かまど	位　置	南壁中央に焼土		構築素材	

プラン確認　地山上面にてプランを確認したが，上面は削平されている。

壁面の状態　壁はしまりがよく，ほぼ垂直である。

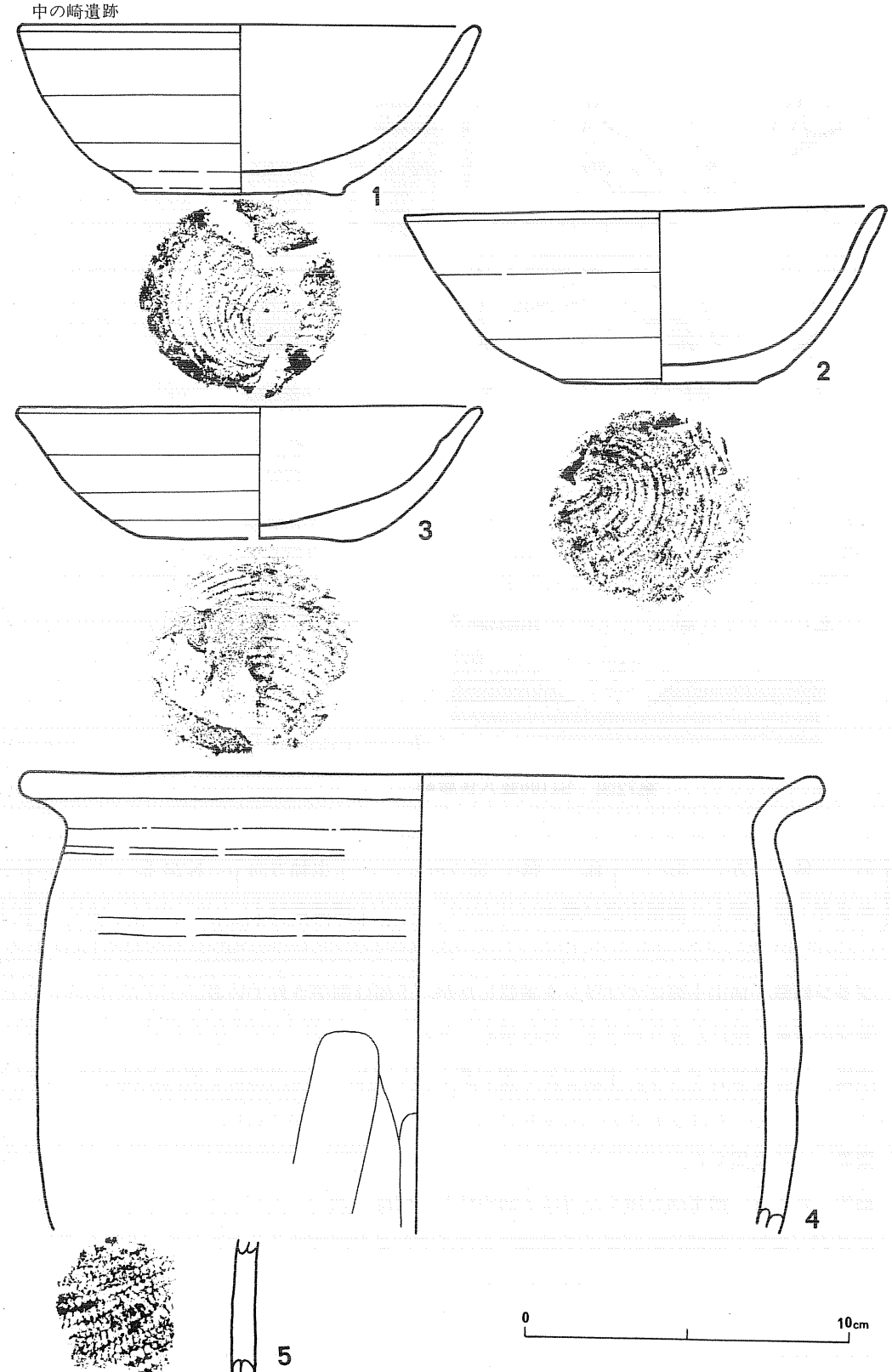
床面　平坦で堅固である。床面全体に礫が多くみられた。また炭化物も検出されたが，カヤ状のものが多い。針葉樹と思われる炭化材が西側の一部から検出された。

壁溝　ほぼ全周する。

柱穴，ピット　南東隅を除く三方に3個の柱穴を確認した。

かまど　南壁中間部付近に焼土を確認するのみでかまどは確認されなかった。

遺物とその出土状態　遺物出土量はやや多い方に属する。堝が破片ながらも3点出土している。第76図7～9がそれで，SI104竪穴住居跡出土のものと違い口縁部に反りがみられ，調整その他をみても当竪穴住居跡の方が新しいものと思われる。土師器坏も多く出土しており

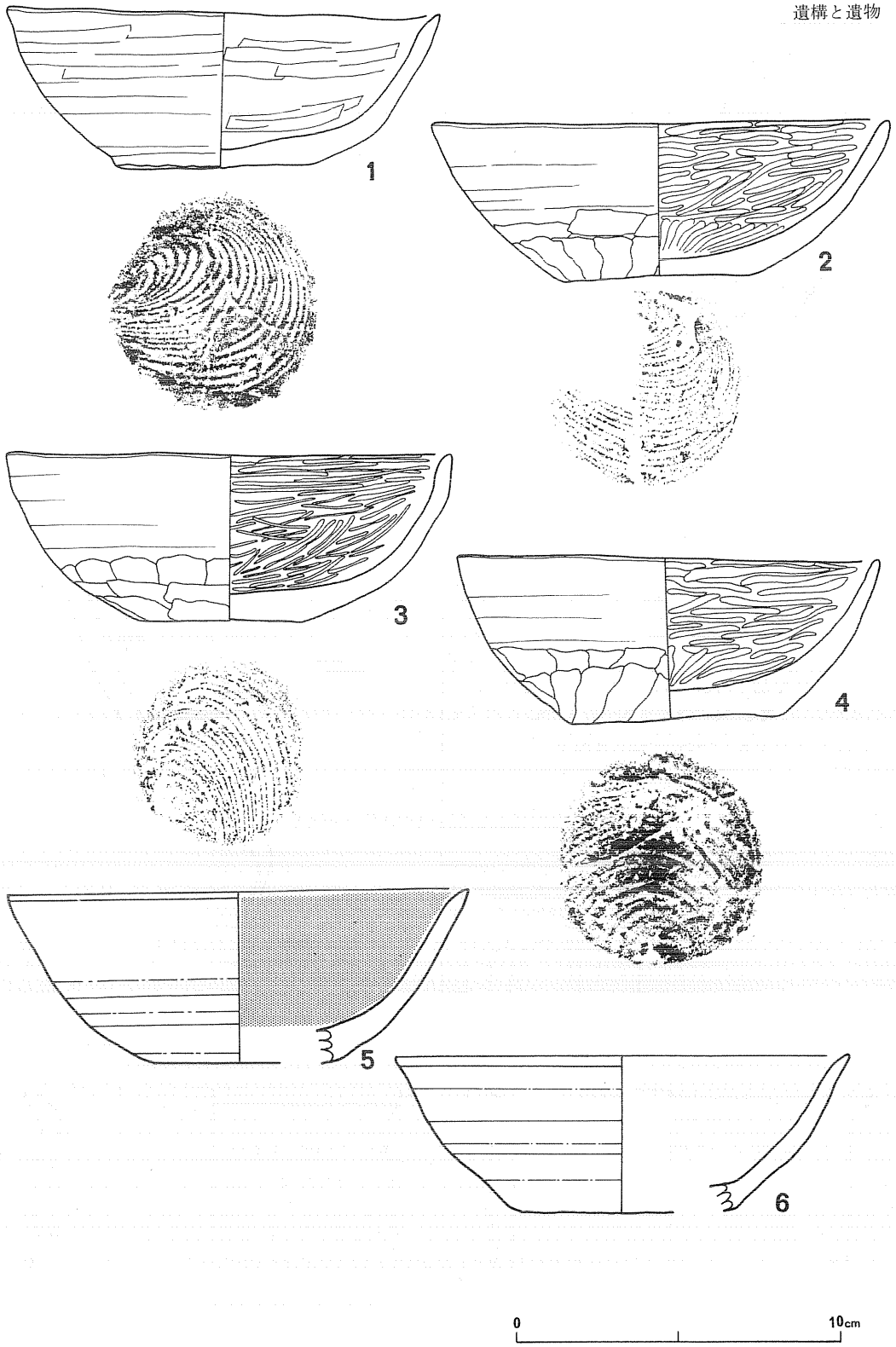


第73図　SI106竪穴住居跡出土遺物

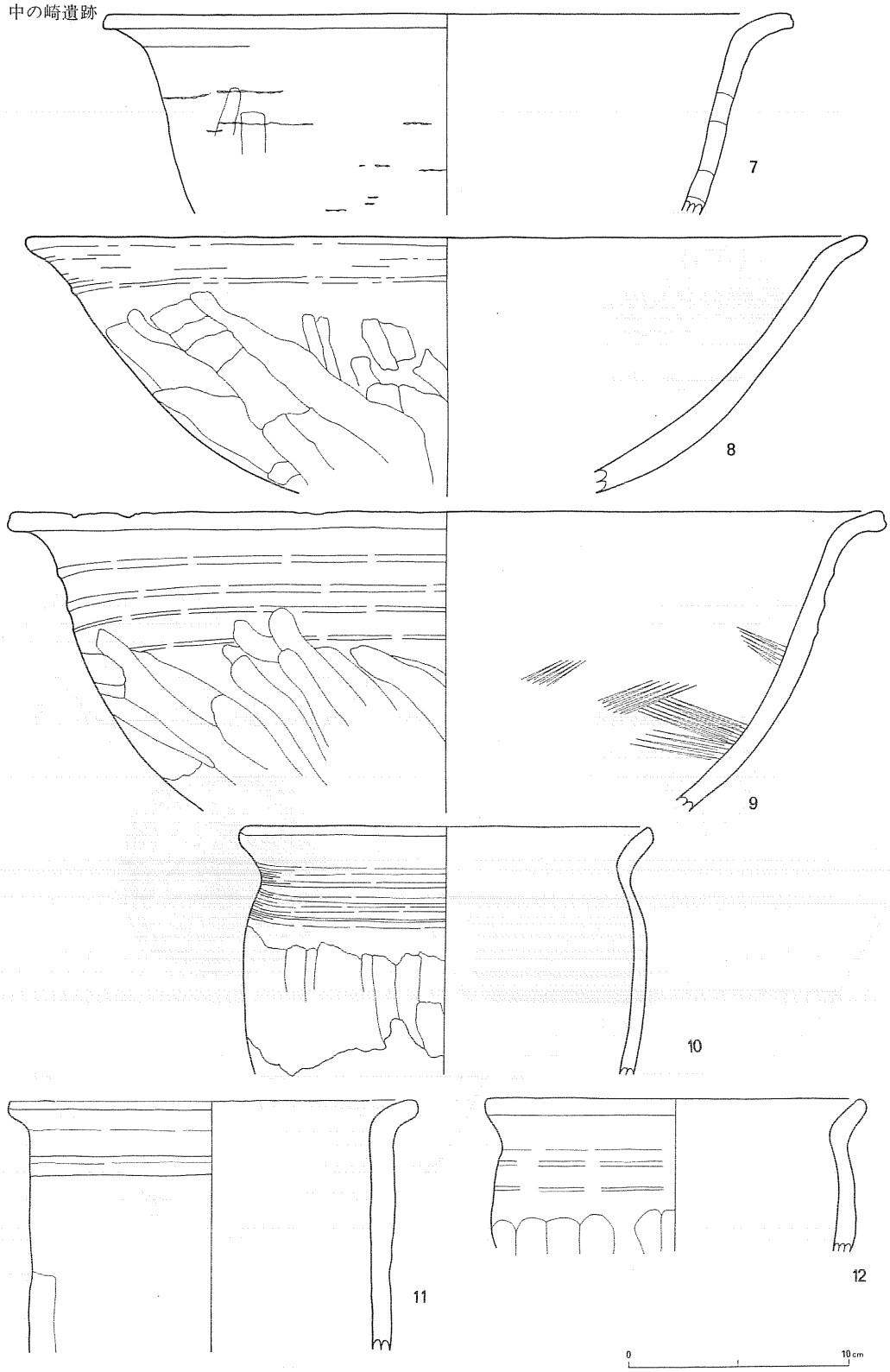
住居跡埋土

1．黒 色 土 10YR2/1 しまりあり 粘性なし
2．黒褐色土 10YR3/2 しまりあり 粘性なし
3．暗褐色土 7.5YR3/3 焼土粒子(5YR5/6)混入

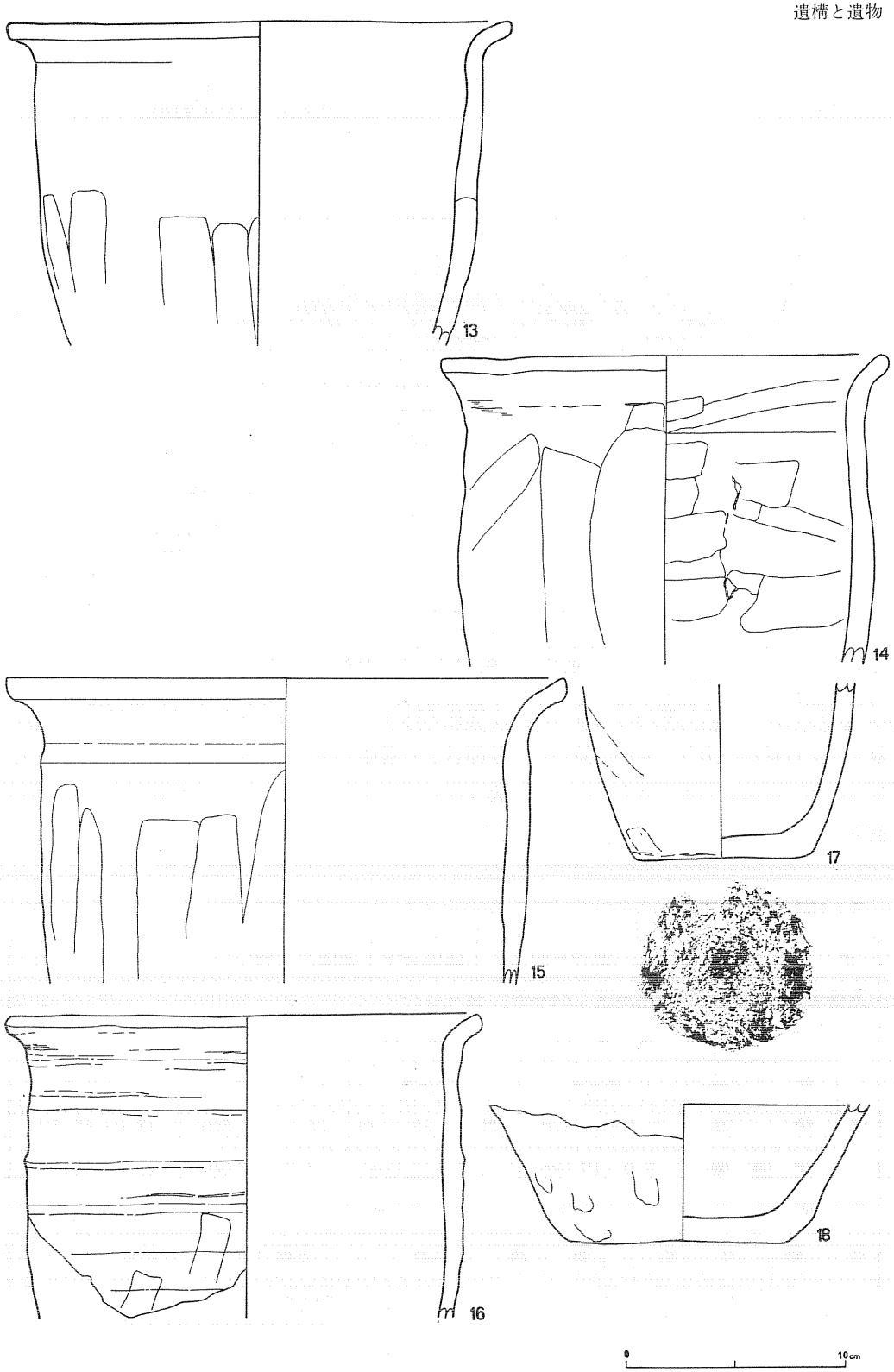
第74図　SI107竪穴住居跡



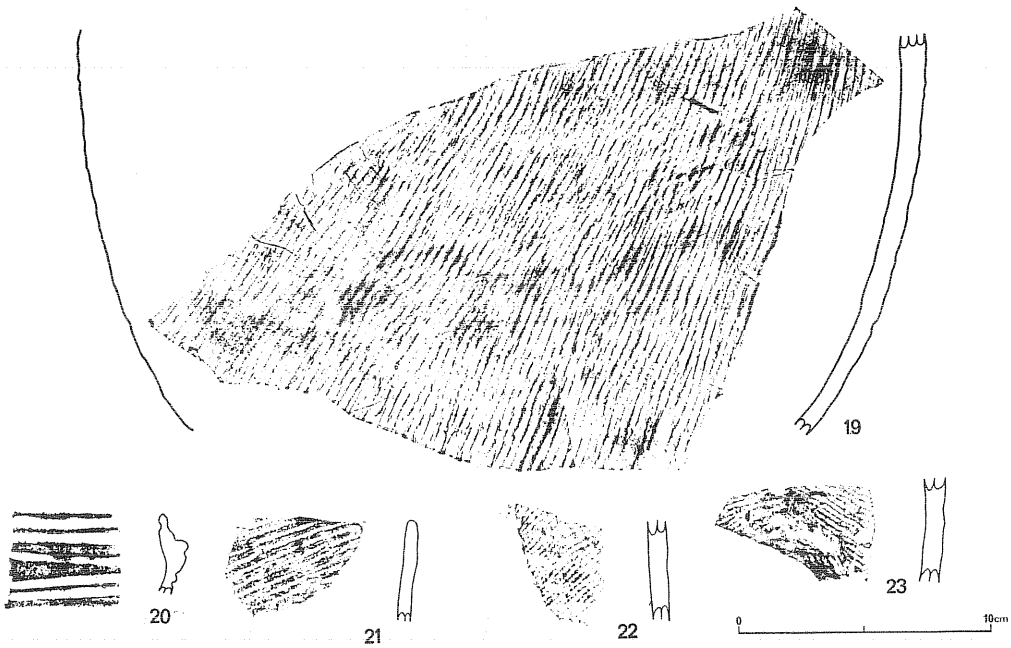
第75図　SI107竪穴住居跡出土遺物(1)



第76図　SI107竪穴住居跡出土遺物(2)



第77図　SI107竪穴住居跡出土遺物(3)



第78図　SI107竪穴住居跡出土遺物(4)

(第75図), いずれも回転糸切りである。土師器甕はほとんどのものにロクロ使用が認められ, 最大径が口縁部にあり, 頸部は短いが, 頸部以下の胴部がほとんどふくらまない器形を持つ。第78図19は須恵器の甕で外面に叩き目が施される。第78図20～23は混入した縄文時代晩期の土器である。

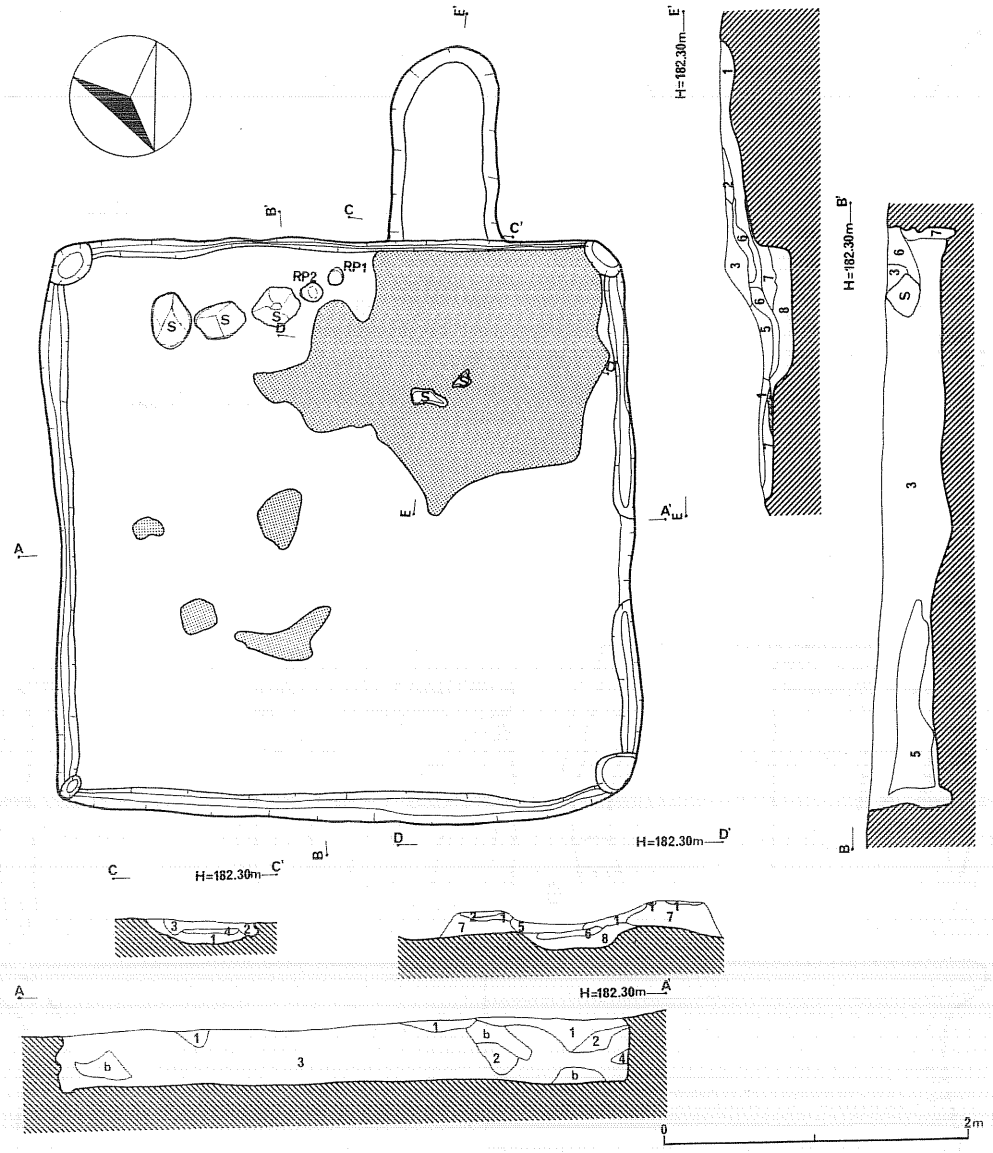
SI108竪穴住居跡

第15表	挿図番号	第79～82図	図版番号	図版36・69
遺構名	SI108	検出地区	44－F, 44－G	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	362cm	356cm	357cm	371cm
	壁高	39.0～44.1cm	(36.0～58.3)cm	35.9～37.5cm	48.0～65.5cm
	壁溝幅	8.0～19.0cm	6.0～17.0cm	4.0～11.0cm	10.0～22.0cm
	壁溝深	1.1～10.0cm	2.0～ 7.1cm	4.2～11.7cm	6.8～11.6cm

形態	方形	面積	15.2m²	主軸方向	N32°E
かまど	位置	不明		構築素材	

プラン確認　地山上面にて確認されたが, 上面は若干の削平を受けている。



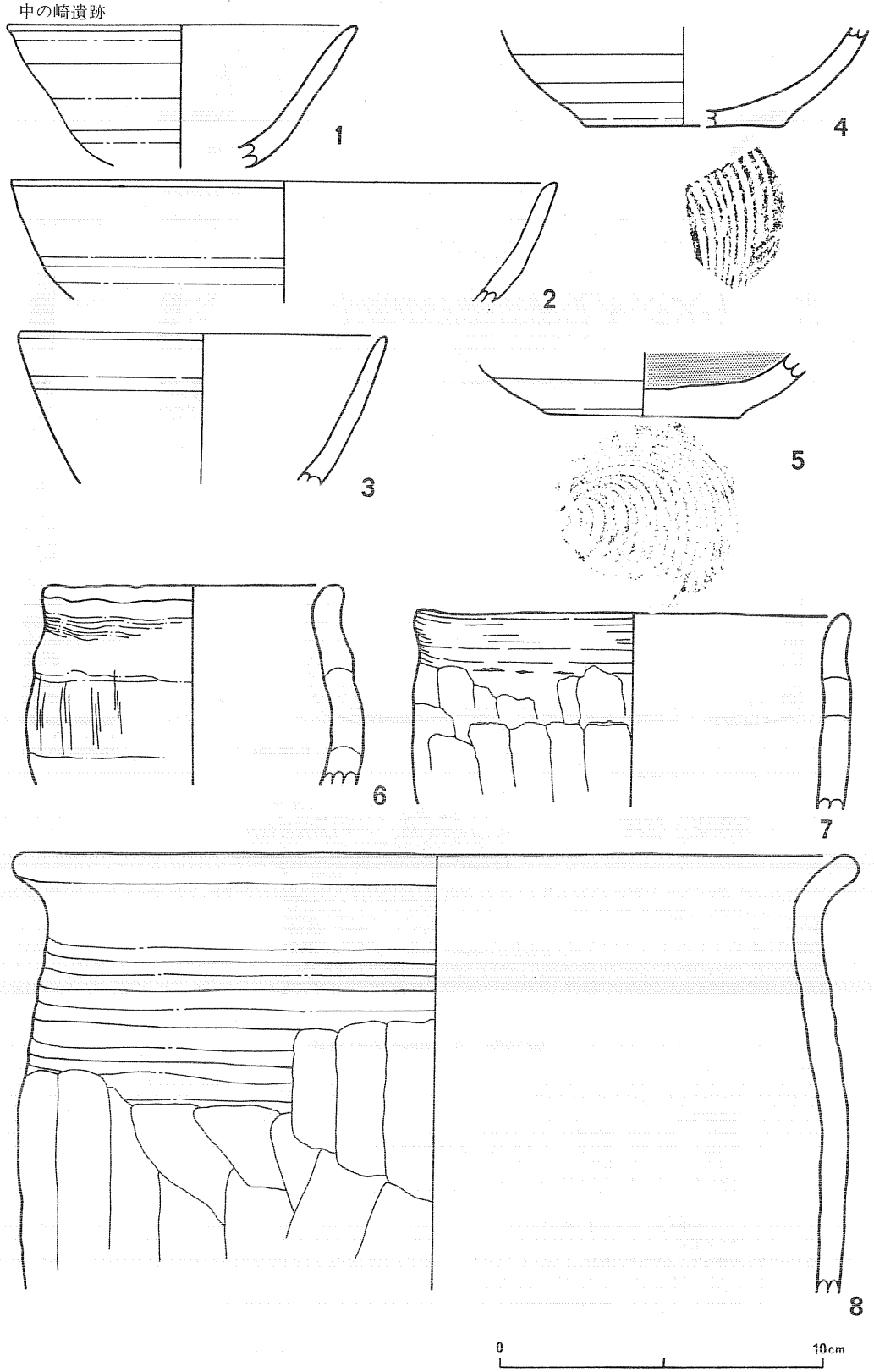
第79図　SI108竪穴住居跡

住居跡埋土

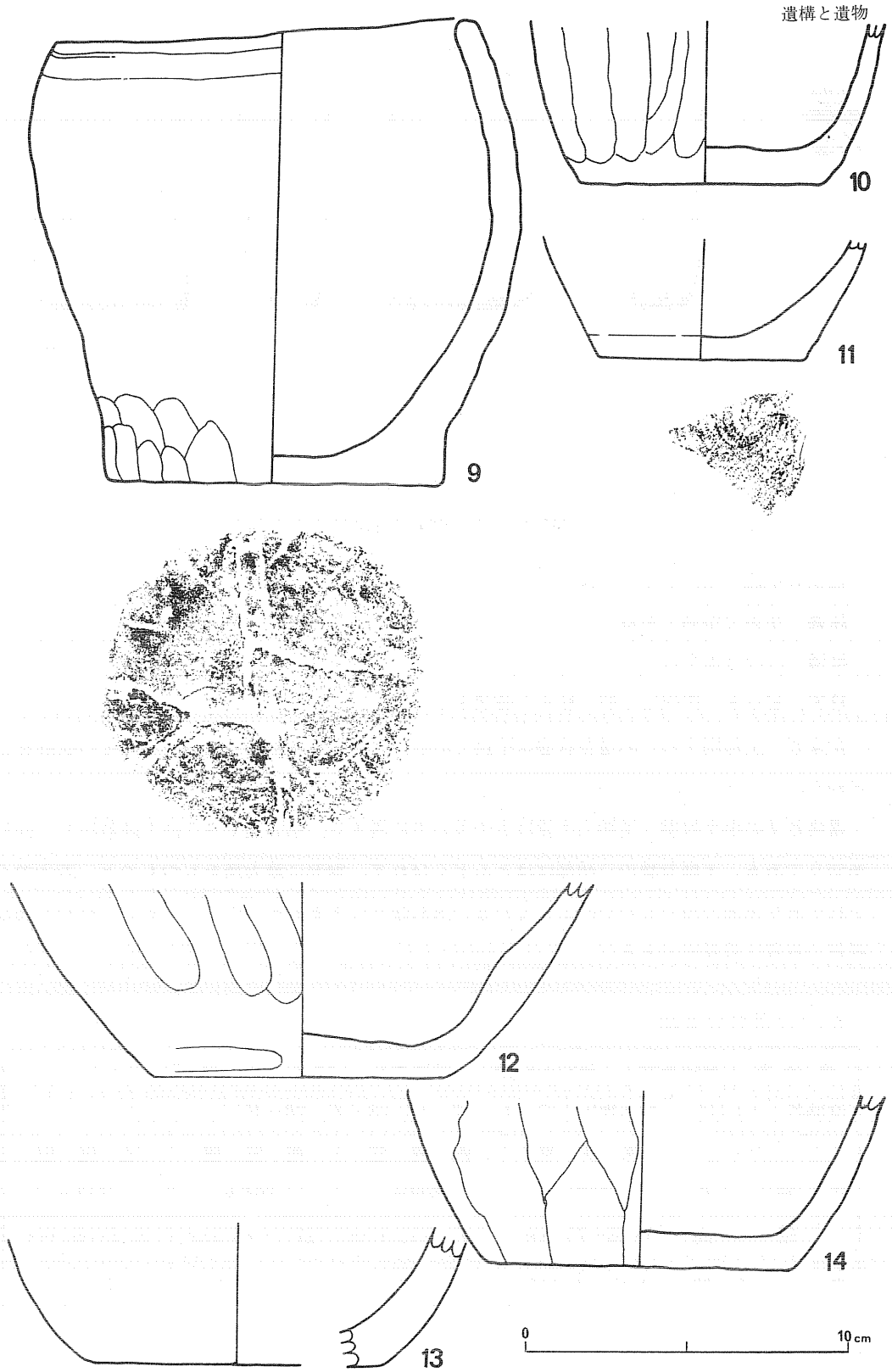
1．黒色土　10YR1/7　粘性なし　しまりなし
2．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし　浮石20～30%混入
3．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　浮石層　明黄褐色土直径２～３cmブロック混入
4．黄褐色土　10YR5/6　粘性ややあり　しまりなし
5．褐色土　10YR4/6　粘性なし　しまりなし　明黄褐色粒子密に混入
6．にぶい黄橙色土　10YR7/2　粘性あり　しまりよし
7．にぶい黄橙色土　10YR7/2　浮石層

カマド埋土

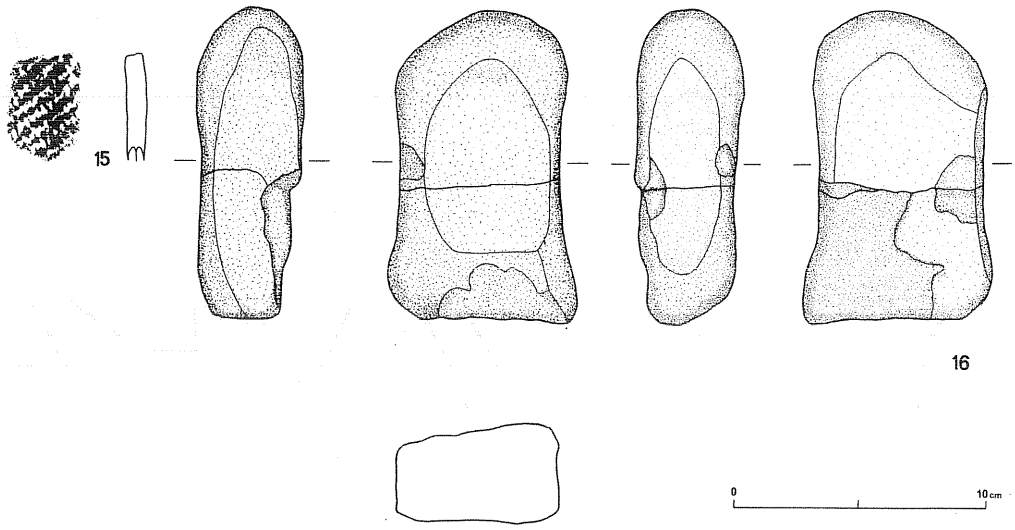
1．赤褐色土　5YR4/8　焼土
2．にぶい黄橙色土　10YR7/4　粘性あり　しまりよし
3．暗褐色土　10YR3/3　焼土粒子まばらに混入
4．暗褐色土　10YR3/4　焼土粒子密に混入
5．褐色土　7.5YR4/6　粘性なし　しまりなし　焼土
6．明赤褐色土　5YR5/8　焼土
7．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR5/8)粒子混入　浮石層
8．褐色土　10YR4/4　粘性ややあり　しまりなし　明黄褐色粒子，浮石密に混入



第80図　SI108竪穴住居跡出土遺物(1)



第81図　SI108竪穴住居跡出土遺物(2)



第82図　SI108竪穴住居跡出土遺物(3)

壁面の状態　壁はしまりがよく，ほぼ垂直に立ちあがる。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　ほぼ全周する。

柱穴，ピット　四隅に4個の柱穴を確認する。

かまど　上部削平のため遺存状態は不良である。しかし，袖部はわずかながらその痕跡をとどめた。

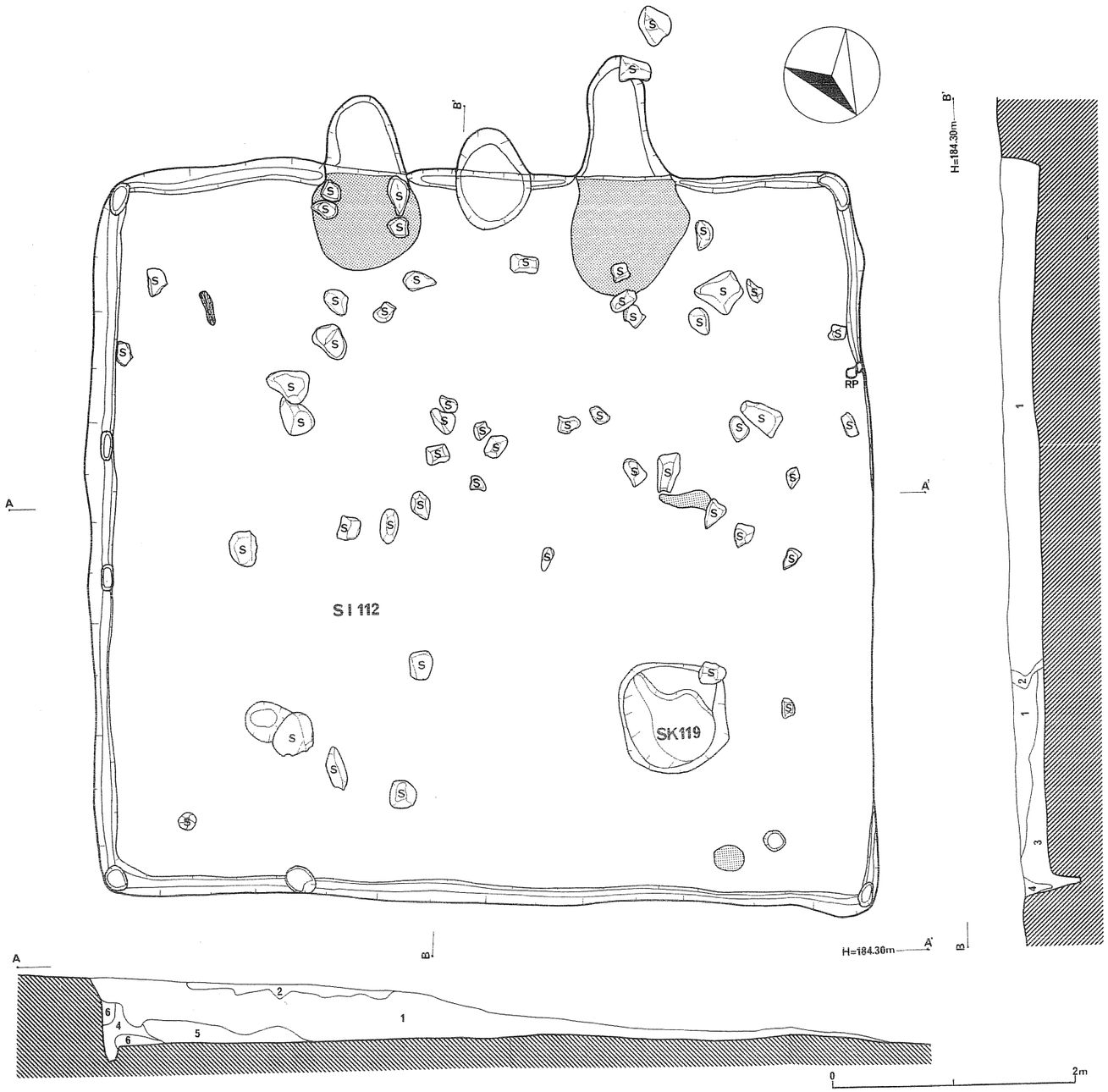
遺物とその出土状態　遺物出土量はやや多い方に属する。第80図1～5は土師器坏で，回転糸切りである。土師器甕の口縁部はほとんどくびれず，胴部に最大径をもつものと，若干のくびれがあり頸部の短いものが出土している。第81図9は木葉痕をもつものである。第82図16は砥石で石質は凝灰岩である。

SI112竪穴住居跡

第16表	挿図番号	第83～87図	図版番号	図版37　38・70・71
遺構名	SI112	検出地区	27－E，27－F，28－E，28－F	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	537cm	608cm	594cm	632cm
	壁高	66.0～73.7cm	(8.1～12.1)cm	27.1～68.3cm	20.5～69.0cm
	壁溝幅	12.0～28.0cm	(5.0～16.0)cm	9.0～22.0cm	7.0～20.0cm
	壁溝深	13.1～17.5cm	(7.2～10.0)cm	14.5～21.3cm	19.7～22.8cm

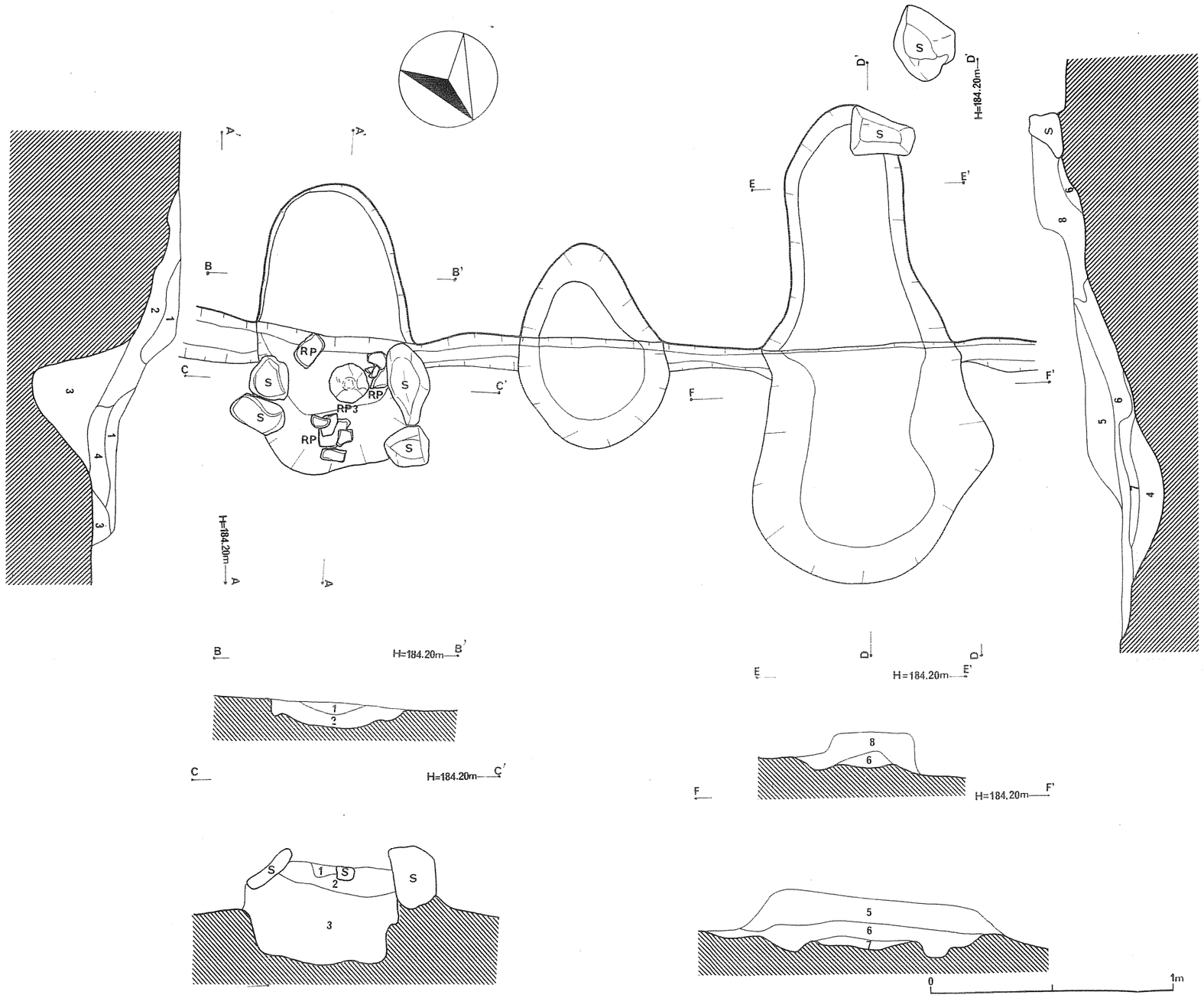
形態	方形	面積	43.9m²	主軸方向	N38°E
かまど	位置	南壁西側(廃絶)→南壁東寄り		構築素材	芯部石組



住居跡埋土

1．黒褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　にぶい黄橙色土(10YR7/2)浮石混入　明黄褐色(10YR6/6)粒子混入
2．黒色土　10YR1/3　粘性なし　しまりなし
3．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR6/6)粒子10%混入
4．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中
5．黒褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　にぶい黄橙色土(10YR7/2)浮石混入　明黄褐色(10YR6/6)ブロック混入
6．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中

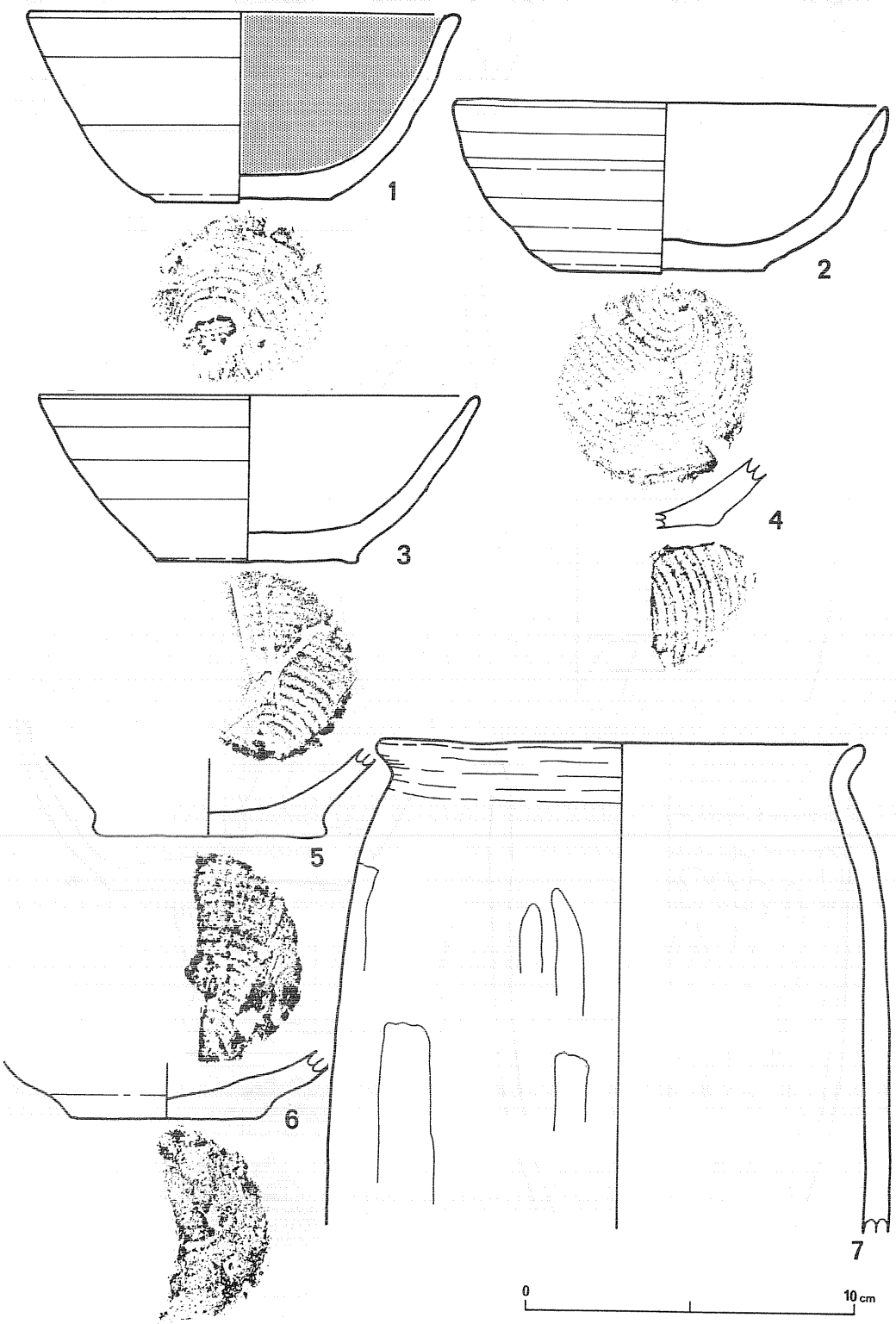
第83図　SI112竪穴住居跡



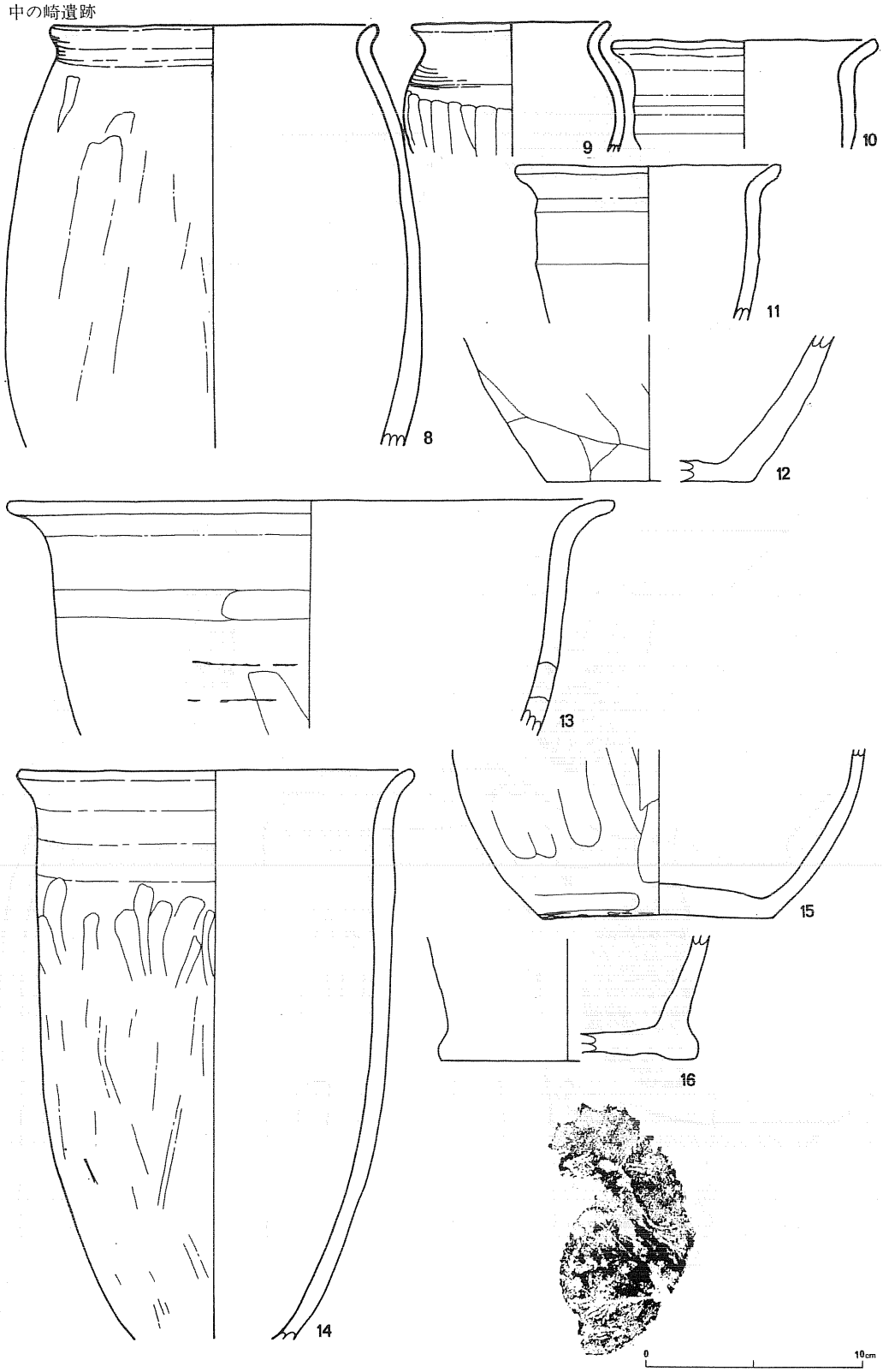
カマド埋土

1．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10ＹＲ6/8)粒子まばらに混入
2．にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4　粘性ややあり　しまり中　焼土粒まばらに混入
3．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし　しまりなし
4．明赤褐色土　5ＹＲ5/8　粘性なし　しまりあり　焼土
5．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし　しまりなし　焼土粒子にぶい黄橙色土(10ＹＲ6/4)混入
6．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし　しまりなし　焼土粒子10～20%混入

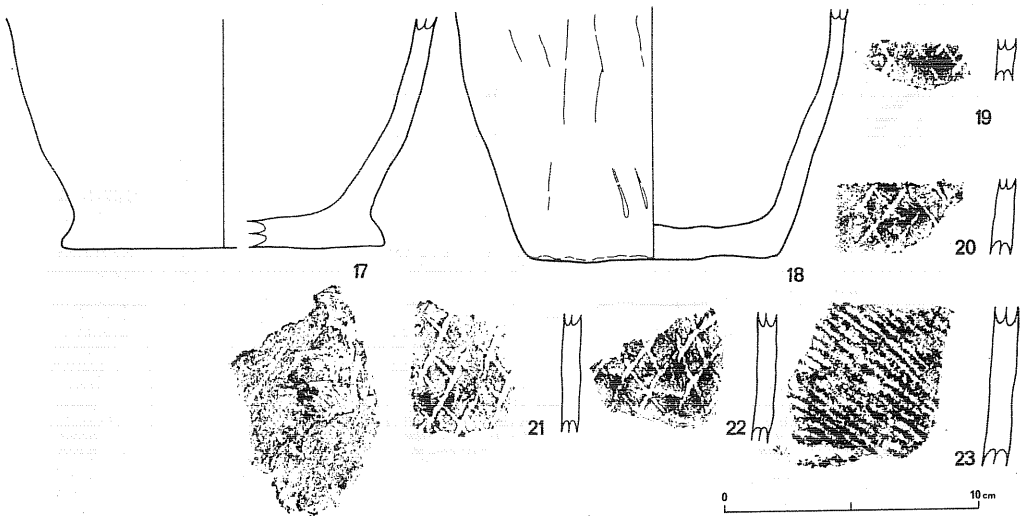
第84図　SI112竪穴住居跡カマド



第85図　SI112竪穴住居跡出土遺物(1)



第86図　SI112竪穴住居跡出土遺物(2)



第87図　SI112竪穴住居跡出土遺物(3)

プラン確認　地山上面にて検出されたが，北西部は削平が著しい。

壁面の状態　壁はしまりがよく，ほぼ垂直な立ちあがりをする。

床面　平坦で堅固である。北西部にＳＫ119土壙があり，これを切っている。

壁溝　ほぼ全周する。

柱穴，ピット　住居跡四隅と南壁中間部に１個計５個の柱穴を確認する。他に東壁壁溝内に２個，北壁壁溝内に１個と住居跡内に２個の計５個のピットを確認する。

かまど　ＳＩ112竪穴住居跡において新旧２個のかまどが確認されている。南壁西側のかまどはなんらかの理由で廃絶され，南壁東側に扁平な石を芯材として新たに構築されたと思われる。新しいかまどの燃焼部中央に支脚として用いられたと思われる土器が確認された。

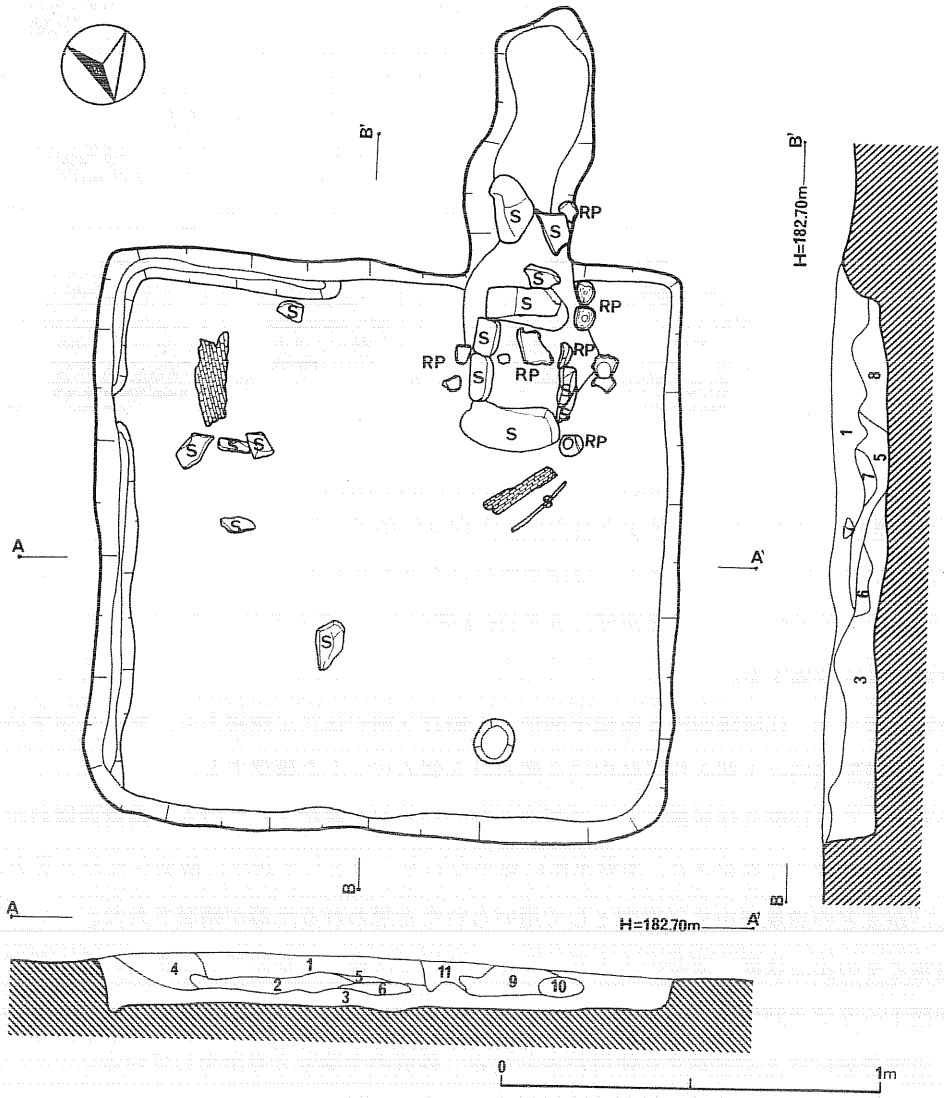
遺物とその出土状態　遺物の出土量は多く，Ⅱ区では最大，全体でも２番目の出土量である。第85図１～６は土師器坏で回転糸切りである。第86図13は塝で外反の度合いが大きいものである。土師器甕はほとんどロクロ使用がみられる。砂底の土器も２点出土している。

ＳＩ113竪穴住居跡

第 17 表	挿図番号	第88～91図	図版番号	図版39・40・71・72
遺構名	ＳＩ113	検出地区	37－Ｉ，37－Ｊ，38－Ｉ，38－Ｊ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	285cm	280cm	300cm	295cm
	壁高	15.2～26.3cm	14.5～15.5cm	11.6～18.4cm	21.3～29.3cm
	壁溝幅	12.0～22.0cm	―――	(16.0～19.0)cm	―――

形態	方形	面積	1.0m²	主軸方向	N40°E
かまど	位置	西壁北寄り		構築素材	芯部石組



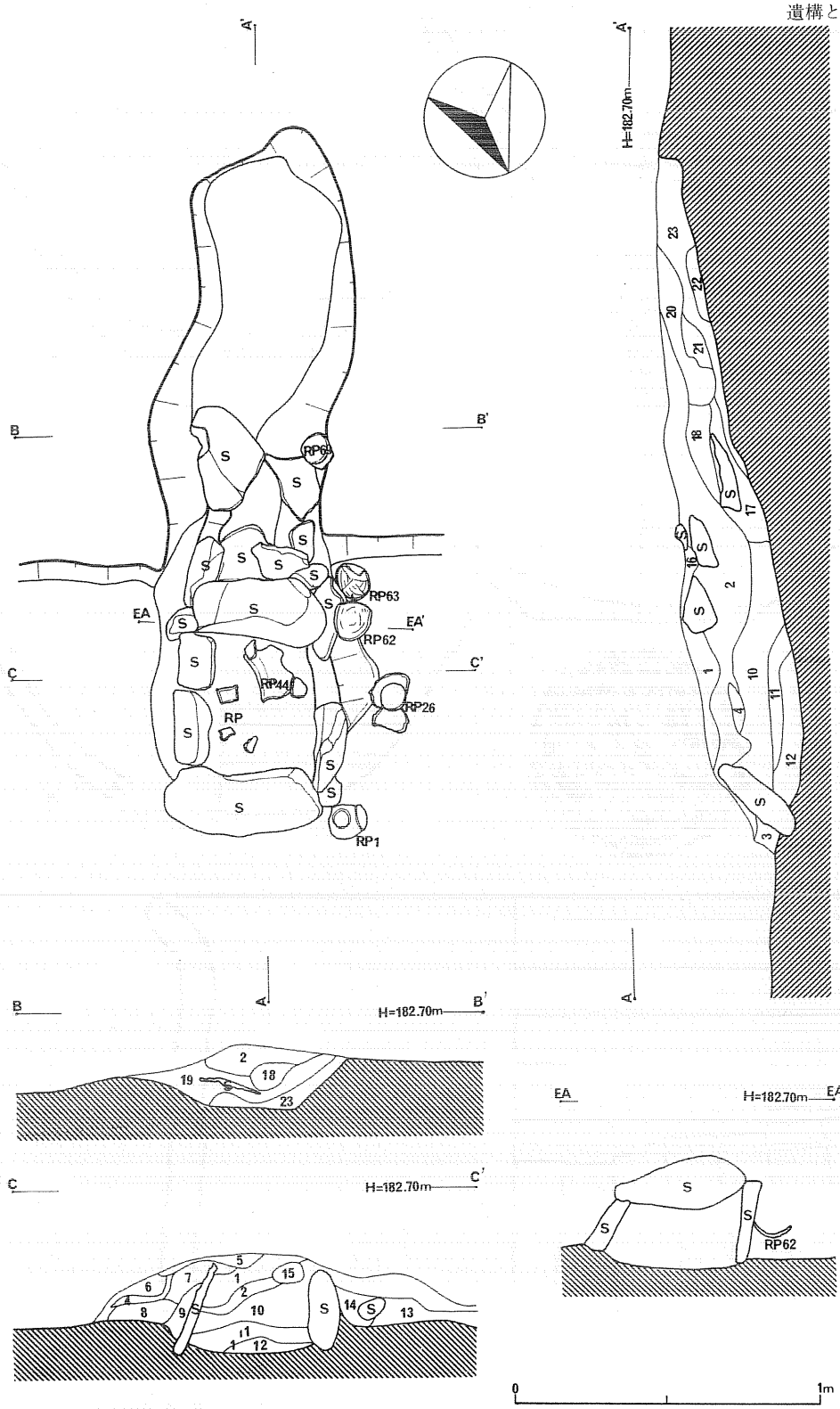
第88図　SI113竪穴住居跡

住居跡埋土

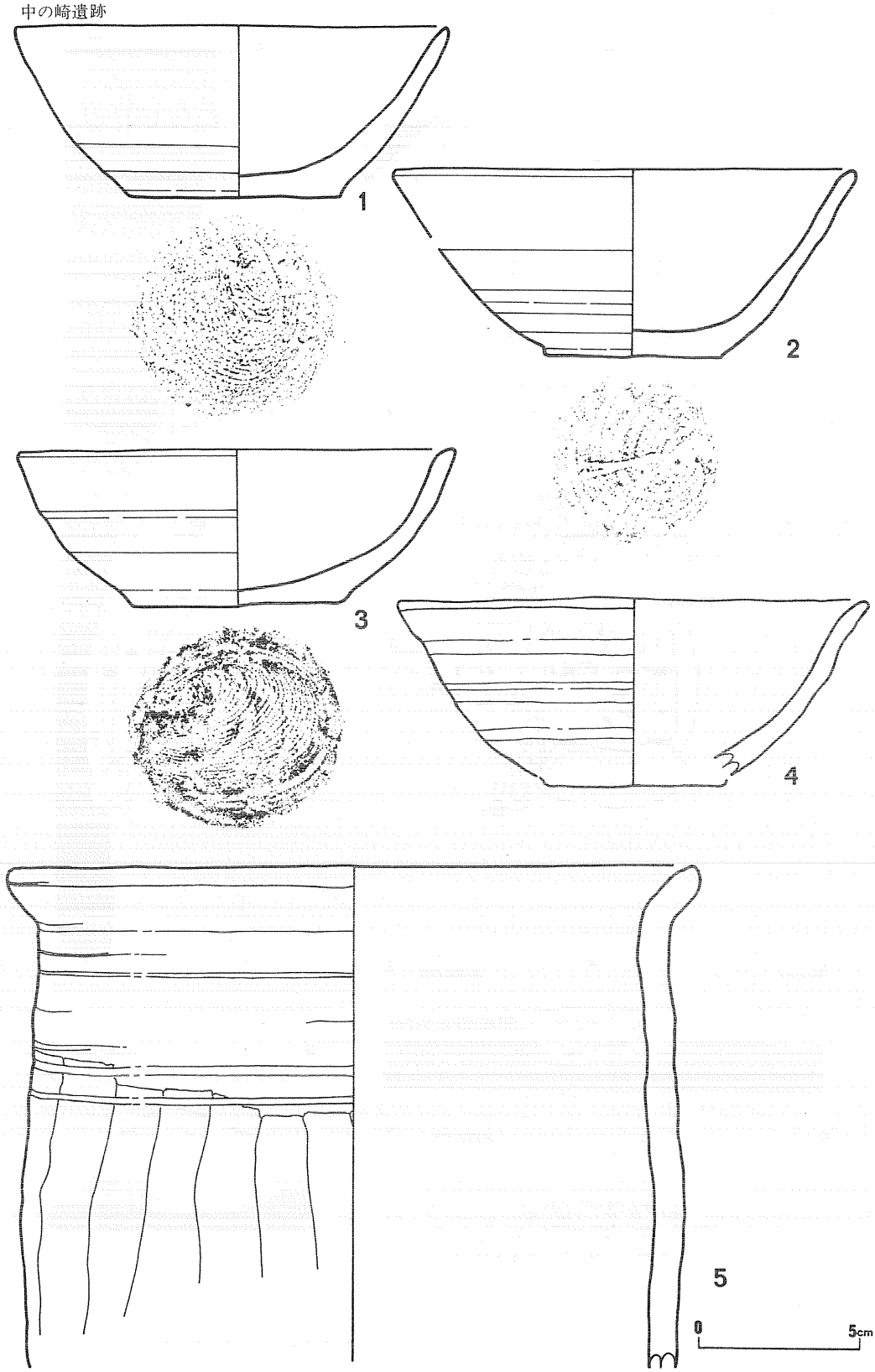
1．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり　しまりよし
2．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中　黄褐色土ブロック5%混入
3．黒色土　10YR1/2　粘性ややあり　しまり中　炭化物若干混入
4．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり　しまりよし　砂（にぶい黄褐色土ロック）10%混入
5．黒褐色土　10YR2/3　粘性あり　しまり中
6．黒色土　10YR1/2　粘性あり　しまりなし　浮石混入
7．にぶい黄橙色土　10YR6/4　粘性なし　しまり中　シラス質
8．暗褐色土　10YR3/3　粘性あり　しまり中　黄褐色土ブロック5%混入
9．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中　炭化物，シラス若干混入
10．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中　黄褐色土ブロック50%混入
11．黒色土　10YR2/1　粘性あり　しまりなし　やわらかい

かまど埋土

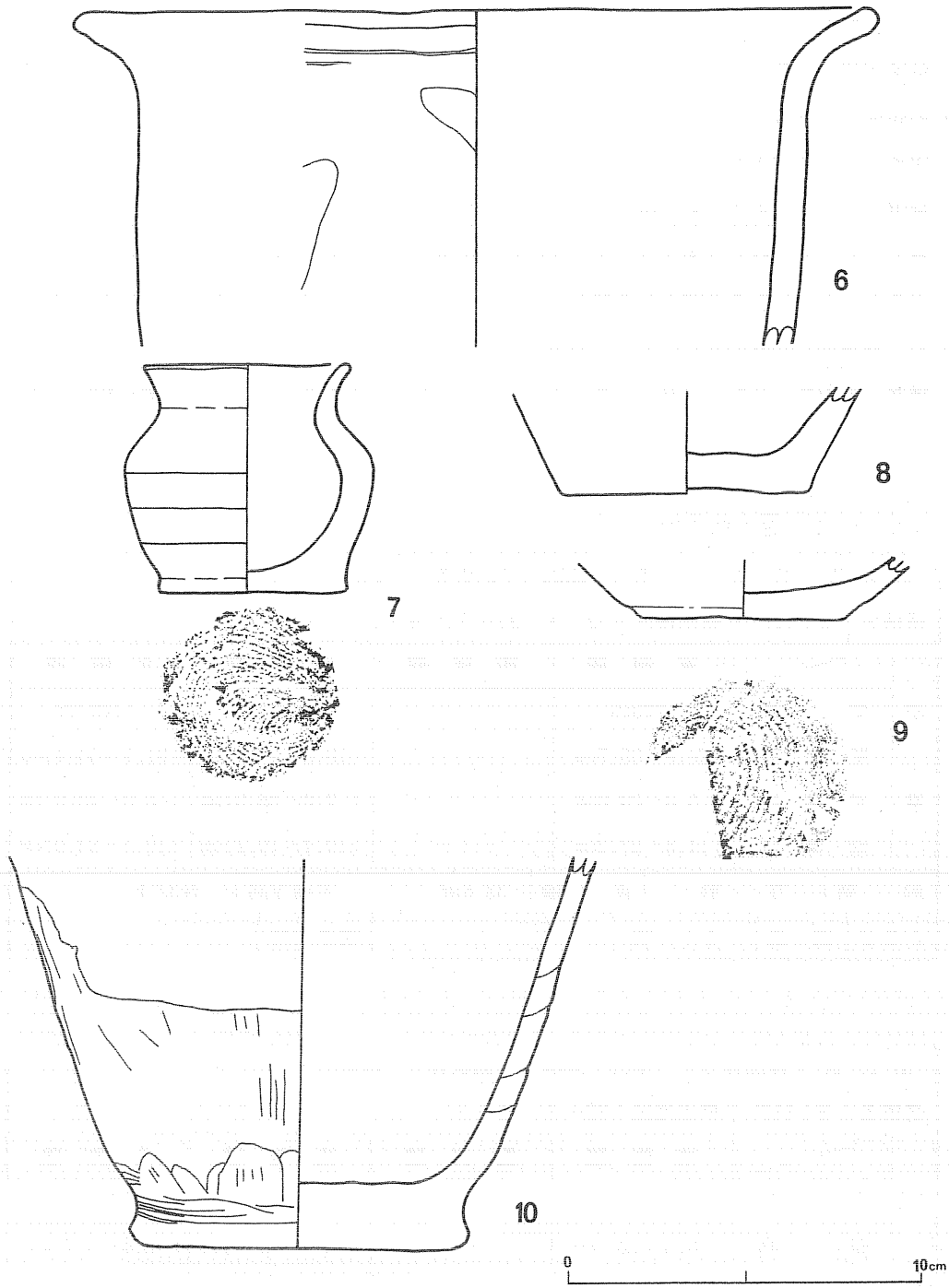
1．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし　浮石若干あり
2．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり　しまりなし　浮石若干あり
3．褐色土　7.5YR4/4　粘性あり　しまりなし　粘土である。
4．褐色土　10YR4/6　粘性あり　しまり中
5．黒色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまり中　浮石若干
6．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり　しまりよし　かたい
7．暗褐色土　7.5YR3/3　粘性ややあり　しまりよし　焼土若干混入
8．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり　しまりややよし　浮石若干
9．褐色土　7.5YR4/4　粘性あり　しまりよし　袖部である熱変化したもの
10．黒褐色土　10YR2/3　粘性あり　しまりなし　炭化物若干含む　浮石若干含む
11．褐色土　5YR4/6　粘性あり　しまりなし　粘土が熱変化
12．明赤褐色土　5YR5/4　粘性ややあり　しまりよし　粘土が熱変化したもの　ざらざら
13．黒褐色土　10YR2/1　粘性ややあり　しまりなし
14．褐色土　10YR4/4　粘性なし　しまりよし　粘土層
15．黄褐色土　10YR5/6　粘性あり　しまりよし
16．暗褐色土　10YR3/3　粘性あり　しまりよし　粘土
17．暗褐色土　7.5YR3/4　粘性あり　しまりよし　粘土が熱変化したもの
18．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　焼土混入　粘土質である
19．褐色土　10YR4/4　粘性あり　しまりよし　粘土質



第89図　SI113竪穴住居跡カマド



第90図　SI113竪穴住居跡出土遺物(1)



第91図　SI113竪穴住居跡出土遺物(2)

プラン確認　地山上面にて確認されたが，上面（特に西側）は若干削平されている。

壁面の状態　壁はしまりがよく，ほぼ垂直に立ちあがるが，南壁は不明確なところもあり，やや傾斜している。

床面　平坦で堅固である。床面の一部から炭化材を検出した。

壁溝　東壁と南壁の一部に確認される。

柱穴，ピット　柱穴は検出されず，住居跡北側東寄りに１個のピットが確認される。

かまど　扁平な石を芯材として構築されたものであり，ほぼ遺存時の原形に近い形を残している。煙道部の比較的長いかまどである。

遺物とその出土状態　遺物出土量は少ない。土師器坏は回転糸切りである。甕口縁部は頸部が短く，若干くびれがあり，一部にロクロ使用のものもみられる。

ＳＩ117・117'竪穴住居跡

第 18 表	挿図番号	第92・93図	図版番号	図版41・72
遺構名	ＳＩ117	検出地区	32－Ｊ，33－Ｊ，34－Ｊ	

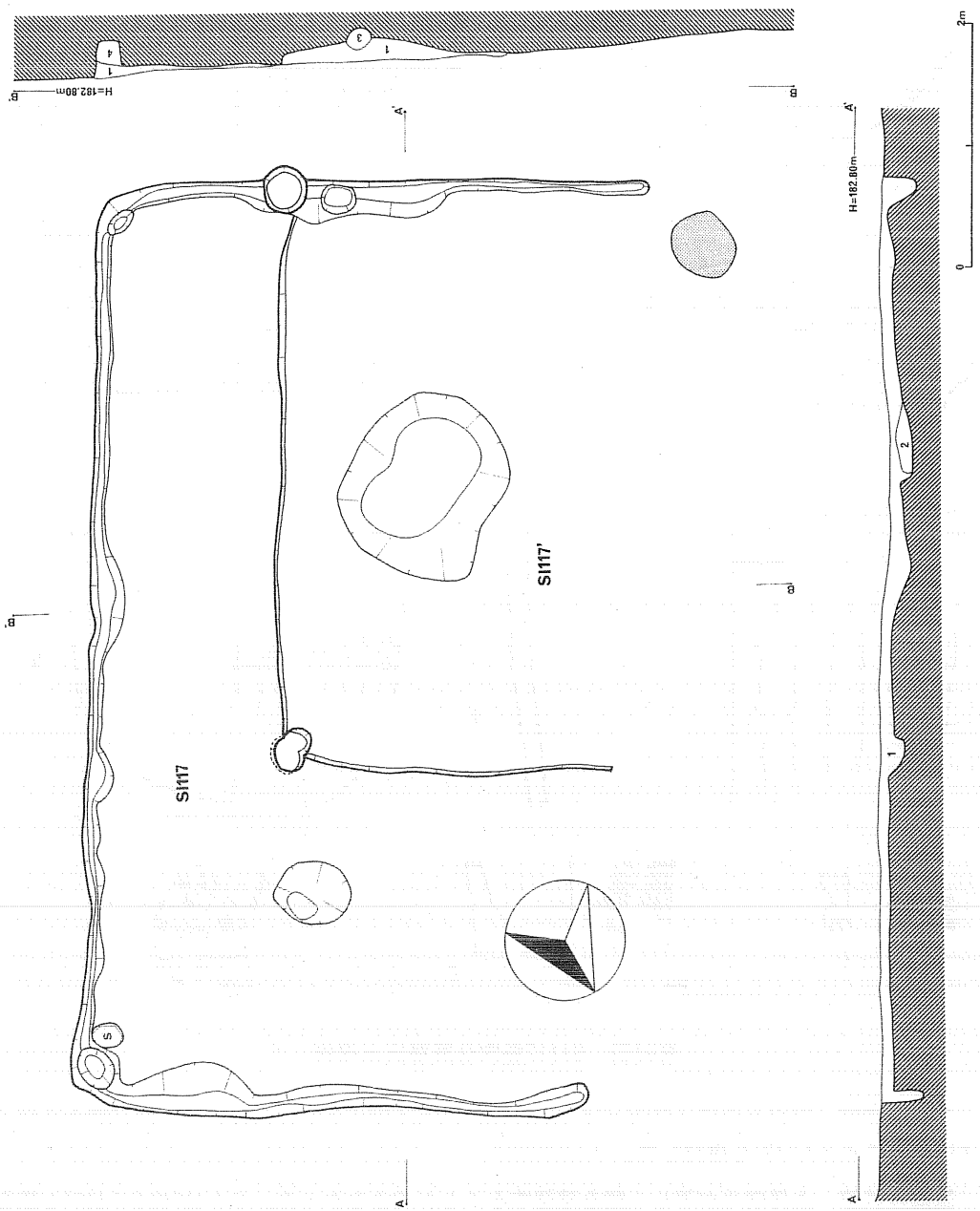
		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	730cm	――	(440)cm	(423)cm
	壁高	20.8～35.7cm	――	(10.3～27.9)cm	(31.1～33.4)cm
	壁溝幅	5.0～29.0cm	――	(7.0～36.0)cm	(8.0～43.0)cm
	壁溝深	14.5～27.2cm	――	(10.4～19.1)cm	(19.1～33.0)cm

形態	方形	面積	32.6m²	主軸方向	N32°E
かまど	位置	不明		構築素材	

第 19 表	挿図番号	第92・93図	図版番号	図版41・72
遺構名	ＳＩ117'	検出地区	32－Ｊ，33－Ｊ	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	497cm	――	(300)cm	(271)cm
	壁高	6.6～12.7cm	――	(10.3～27.9)cm	(8.4～8.7)cm
	壁溝幅	――	――	(3.6～ 7.0)cm	――
	壁溝深	――	――	(10.4～19.1)cm	――

形態	方形	面積	(14.1)m²	主軸方向	N31°E
かまど	位置	不明		構築素材	



第92図　SI117，117'竪穴住居跡

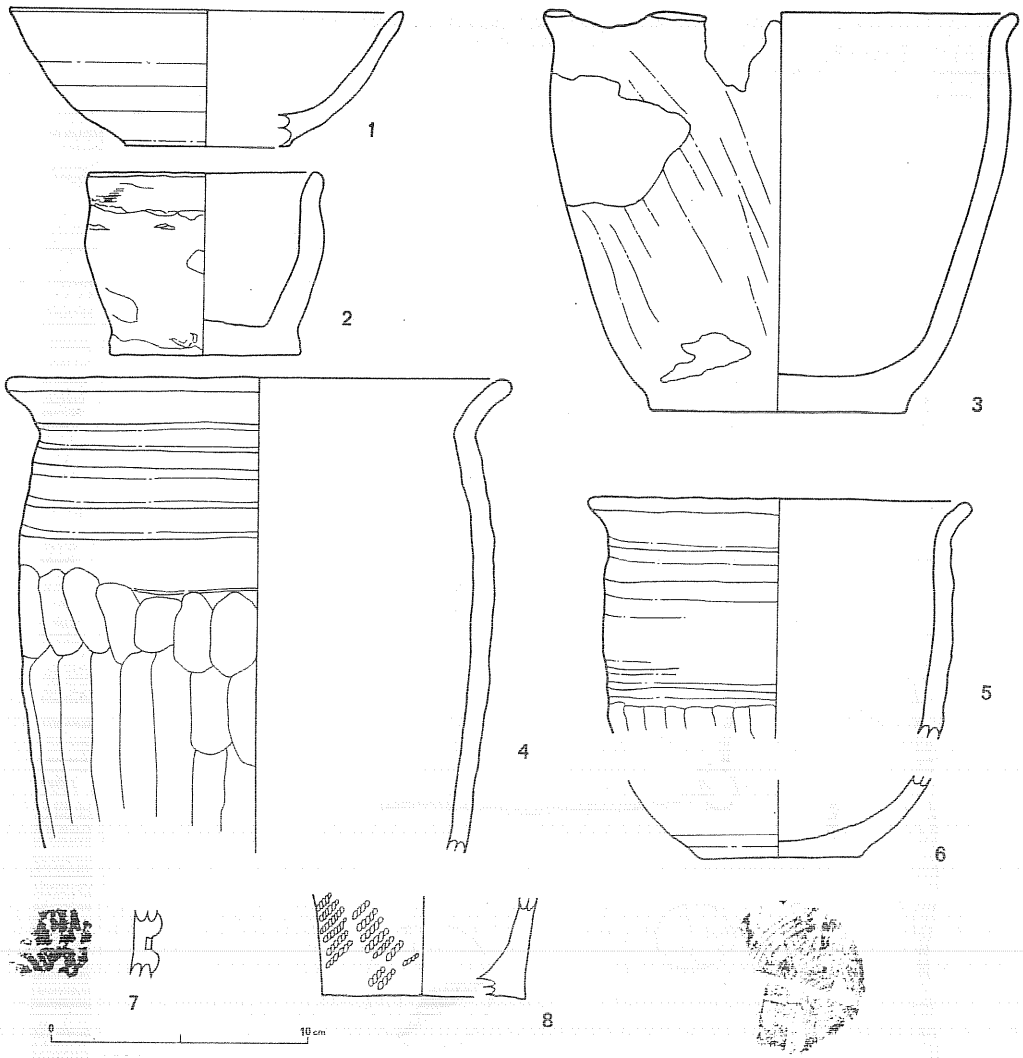
SI 117，117'竪穴住居跡埋土

1．黒褐色土　10YR2/3　粘性あり。しまり中。黄褐色中粒子混入。

2．黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまりなし。黄褐色粒子混入。

3．黒色土　10YR1.7/1　粘性あり。しまり中。

4．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり。しまり中。黄褐色大中小粒子混入。



第93図　SI117竪穴住居跡出土遺物

プラン確認　地山上面にて確認したが，上部がかなり削平されている。ＳＩ117の埋土を掘り下げたところＳＩ117'を確認した。

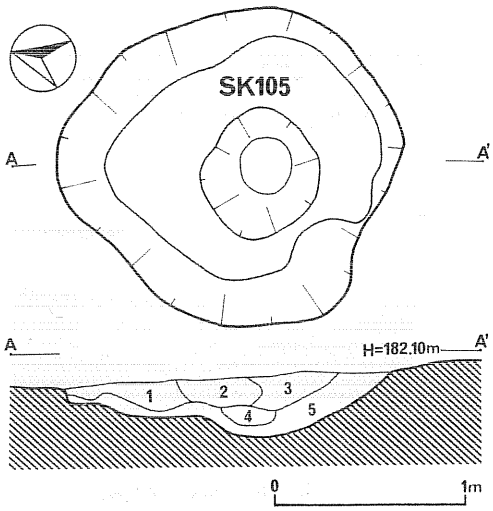
壁面の状態　上部削平が著しく壁を確認することができなかった。ＳＩ117はＳＩ117'と重復しているがこれはＳＩ117'を拡張してＳＩ117としたものと思われる。

床面　床面は若干の凹凸があり，あまり堅固でない。

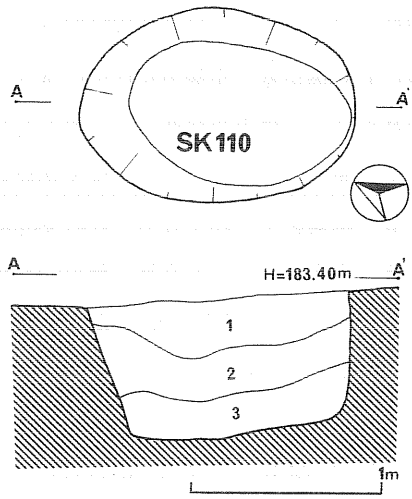
壁溝　ＳＩ117は壁が確認された部分においては壁溝が確認されている。

柱穴，ピット　北東隅及び南東隅の２個，南壁東寄りに２個計４個の住穴が確認されている。

遺物とその出土状態　遺物の出土量は少ない方であるが，坏の出土が特に少ない。土師器甕は頸部が短く，くびれのあるものが出土している。



第94図　SK105土壙



第95図　SK110土壙

b．土壙

ＳＫ105土壙（第94図）

46－Ｊ，46－Ｋ地区より地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部176×170㎝，壙底部142×150㎝，深さ31㎝，面積2.2㎡である。床面は中央部ほど深い鍋底状を呈する。ＳＩ103竪穴住居跡を切っており，これより新しい。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性中。しまり強。10ＹＲ6/1がブロック状５％混入。
　褐灰色土　10ＹＲ5/1　粘性弱。しまり強。粗砂および細砂状でボロボロしている。
　双方１：１の割合で不規則なまだら状に混合しあっている。

2．暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性強。しまり強。黄褐色10ＹＲ5/8がまだらに10％混入。部分的に１層の10ＹＲ6/1混入。

3．黒褐色土　2.5ＹＲ3/1　粘性強。しまり強。１層の10ＹＲ6/1が全体的に５％混入。浮石が若干混入。

4．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性強。しまり中。１層の10ＹＲ6/1がまだらに10％混入。全層で最も軟らかくもろい。

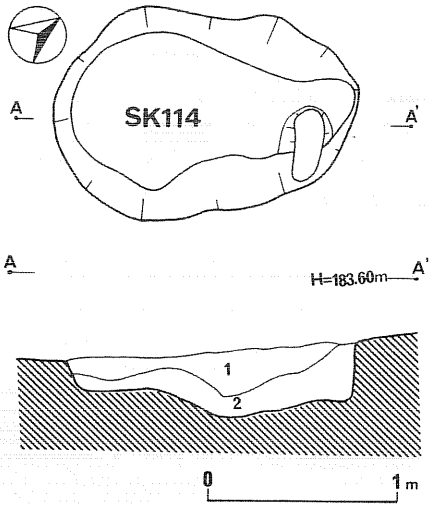
5．灰黄褐色土　10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色土10ＹＲ5/4が部分的にブロック状に１％混入。

ＳＫ110土壙（第95図　図版42）

35－Ｄ，36－Ｄ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部

144 × 116 cm，壙底部105 × 72cm，深さ74 cm，面積1.16m²である。床面はほぼ平坦で，壁も急激に立ちあがる。主軸方位はN11°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/3　炭化物粒若干含む。
2．黒褐色土　10YR2/3　浮石50%混入。
3．黒褐色土　10YR2/3　部分的に褐色土（7.5YR4/4）が混入。軽石少々含む。

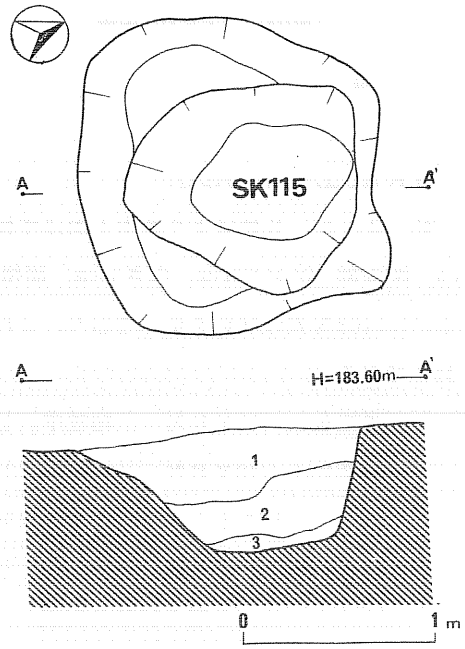


第96図　SK114土壙

SK114土壙（第96図　図版42）

35－K，36－K地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部160 × 110 cm，壙底部150 × 60 cm，深さ34cm，面積1.4 m²である。床面は若干の凹凸があり，北東部にピットを持つ。主軸方位はN84°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/2　黄褐色土3%混入。
2．黄褐色土　10YR5/6　砂礫10%混入。

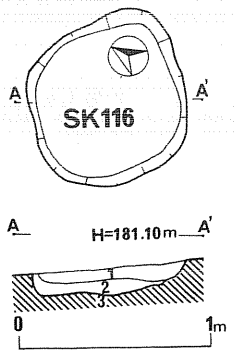


第97図　SK115土壙

SK115土壙（第97図　図版42）

35－K地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部194 × 178 cm，壙底部140 × 140 cm，深さ66cm，面積2.24m²である。床面はほぼ平坦である。主軸方位はN30°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR3/2　黄褐色土若干混入。
2．黒褐色土　10YR2/2　黄褐色極小粒若干混入。
3．褐色土　10YR4/6　粘性強。層左側ににぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）混入。



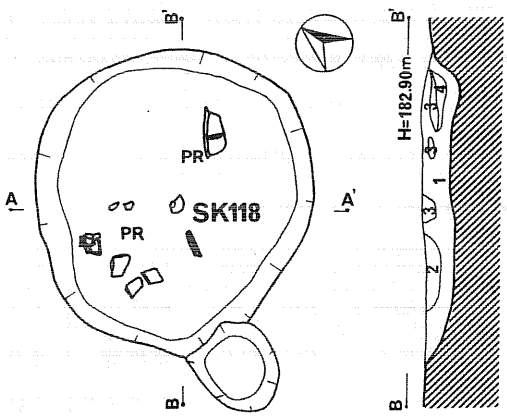
第98図　SK116土壙

ＳＫ116土壙（第98図　図版48）

45－Ｌ地区より地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部98×88cm，壙底部86×76cm，深さ14cm，面積0.6㎡である。床面はほぼ平坦な浅い小土壙である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

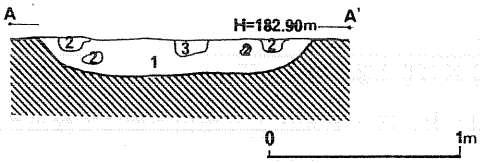
1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　浮石含む。

2．黒褐色土　10ＹＲ2/3　地山粒混入。

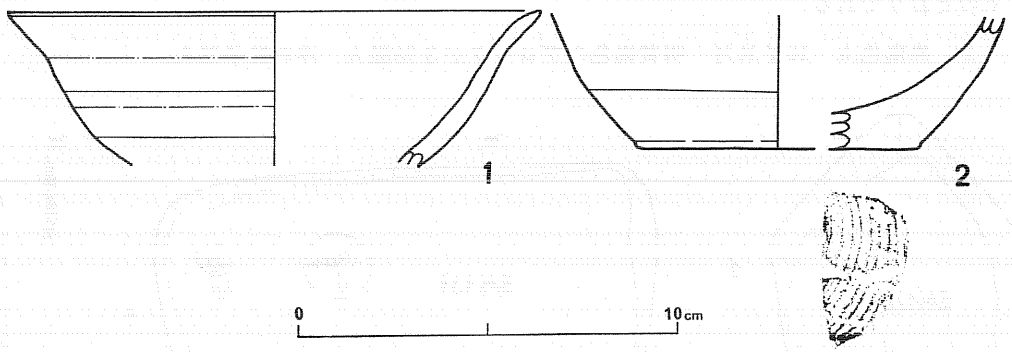


ＳＫ118土壙（第99図）

31－Ⅰ，32－Ⅰ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部194×152cm，壙底部168×134cm，深さ20cm，面積1.96㎡である。



第99図　ＳＫ118土壙



第100図　ＳＫ118土壙出土遺物

床面はほぼ平坦である。埋土は浮石がブロック状に混入し，浮石降下後に廃棄されたものと思われる。南側にはこれを切るピットを検出した。主軸方位はＮ1°Ｗである。第100図に示す土師器坏が出土した。底部は回転糸切りである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性弱。しまり大。

2．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性弱。しまり中。浮石大量に混入。

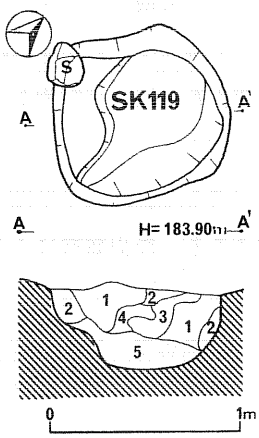
3．褐色土　7.5ＹＲ4/6　粘性中。しまり中。

4．にぶい黄橙色土　10ＹＲ7/2　浮石のブロック，炭化物や土器片が混入。

ＳＫ119土壙（第101図　図版43）

28－Ｆ地区より地山上面にて検出された。平面形はほぼ円形を呈する。壙口部92×90cm，壙底部84×72cm，深さ62cm，面積0.72m²である。床面は凹凸があり，壁も不明確なところが多い。上部はＳＩ112竪穴住居跡に切られている。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性弱。しまり弱。
2．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性中。しまり中。
3．黒色土　10ＹＲ1.7/1　粘性弱。しまり弱。
4．褐色土　10ＹＲ4/4　明黄褐色粒子密に混入。

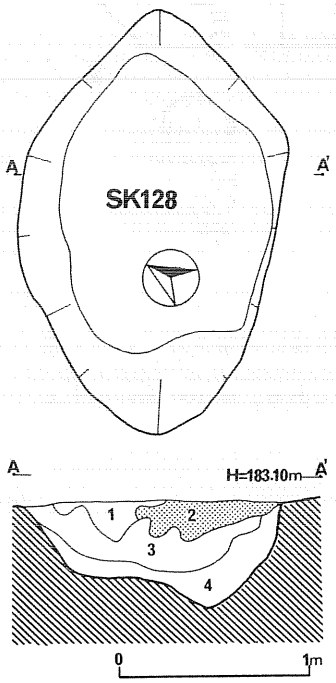


第101図　ＳＫ119土壙

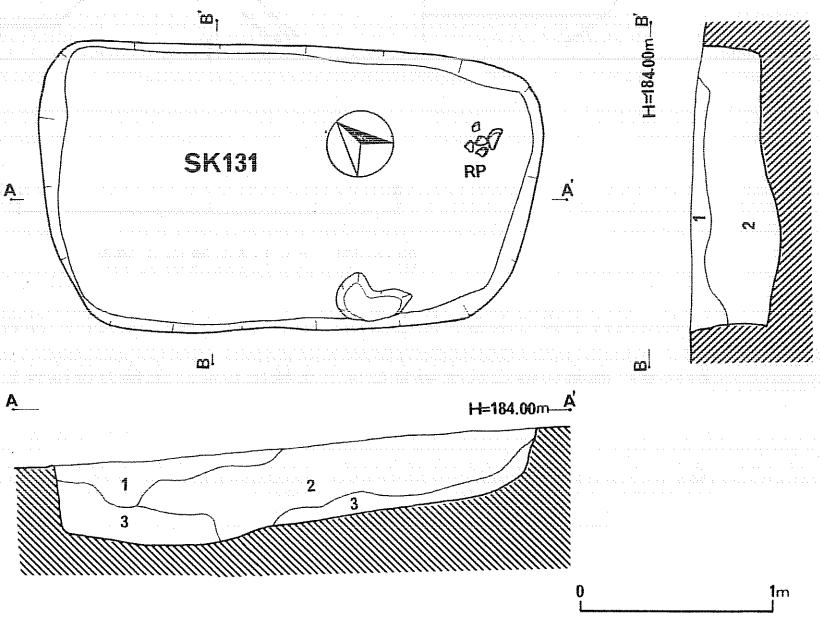
ＳＫ128土壙（第102図）

31－Ｈ，32－Ｈ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部224×134cm，壙底部138×112cm，深さ56cm，面積2.2m²である。床面は凹凸があり，上面に浮石を混入する焼土を検出した。主軸方位はＮ22°Ｅである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ3/1　明黄褐色のブロックが3％混入。浮石粒子混入。



第102図　ＳＫ128土壙



第103図　ＳＫ131土壙

2．明赤褐色土　5YR5/8　浮石のまじった焼土。しまり大。粘性弱。

3．黒色土　10YR2/1　しまり大。粘性中。

4．黒褐色土　10YR2/2　しまり大。粘性中。

SK131土壙（第103・108図　図版44）

31－E地区より地山上面にて検出された。平面形は不整隅丸長方形を呈する。壙口部260×150cm，壙底部240×140cm，深さ47cm，面積3.64m²である。床面はほぼ平坦で，壁も垂直に近い立ちあがりをする。主軸方位はN60°Wである。第108図1～6に示す土器を出土した。単節LR回転施文後磨消したもので，縄文時代後期のものと思われる。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/3　粘性強。しまり中。黒色土を混入している。

2．暗褐色土　10YR3/3　粘性強。しまり中。

3．褐色土　10YR4/6　暗褐色土混入。

SK132土壙（第104図　図版44）

30－G，31－G，31－H地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部200×106cm，壙底部166×70cm，深さ30cm，面積1.64m²を測る。床面は北側の土壙が南側の土壙を切っており，2つの土壙の重複と思われる。主軸方位はN30°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/2　大湯浮石混入。

2．黒褐色土　10YR3/2　黄褐色土を混入している。

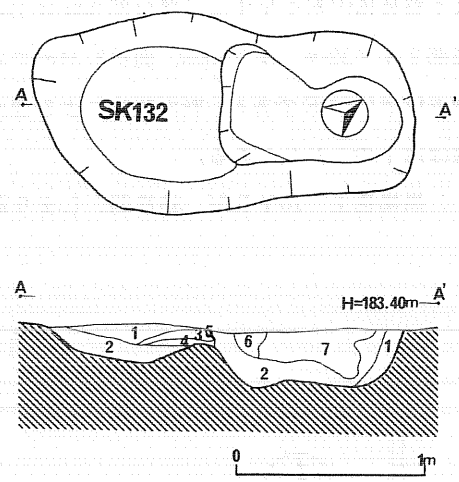
3．黒色土　10YR1.7/1　浮石を混入している。

4．暗褐色土　7.5YR3/4　4をベースに焼土を混入。

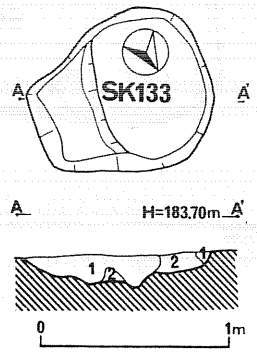
5．明褐色土　7.5YR5/8　焼土。

6．黒色土　10YR2/1　浮石を混入。

7．黄褐色土　10YR5/8



第104図　SK132土壙



第105図　SK133土壙

ＳＫ133土壙（第105図　図版45）

30－Ｆ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部96×84cm，壙底部80×74cm，深さ16cm，面積0.64m²である。床面は東側が若干落ち込んでいるが，比較的浅い土壙である。主軸方位はＮ81°Ｅである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

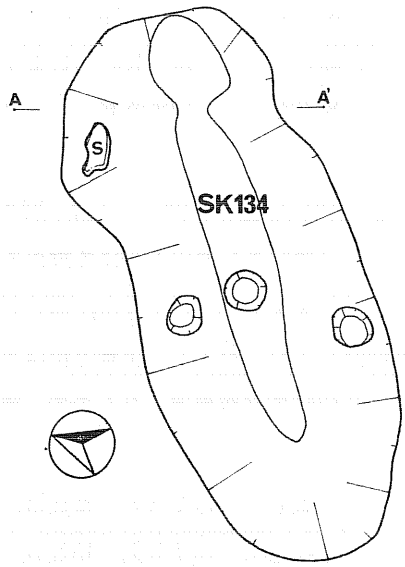
1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　浮石を混入している。

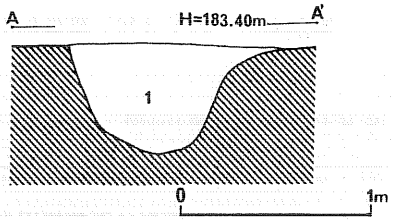
2．暗褐色土　10ＹＲ3/3

ＳＫ134土壙（第106図　図版45）

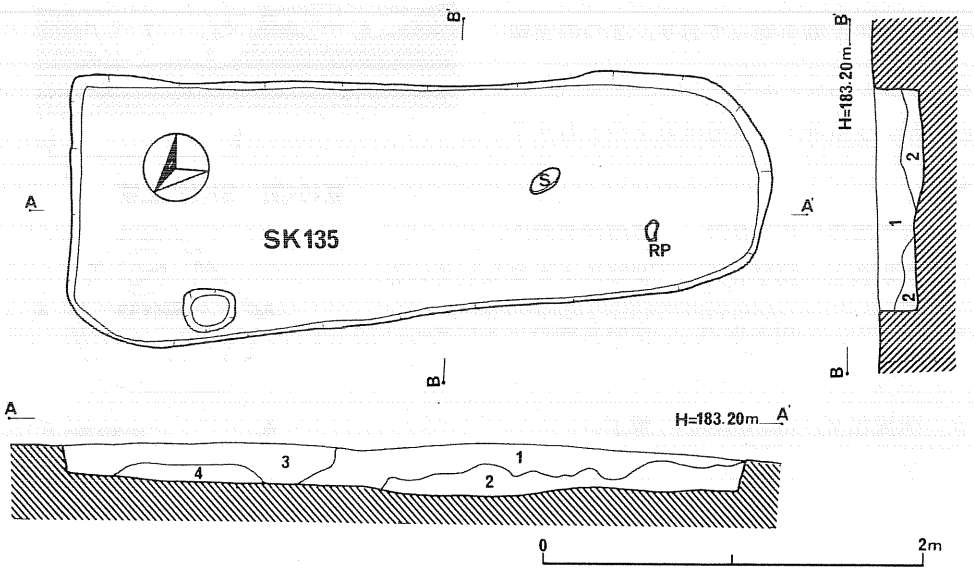
34－Ｅ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整長楕円形を呈する。壙口部300×120cm，壙底部234×32cm，深さ60cm，面積3.24m²である。主軸方位はＮ52°Ｅである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性弱。しまり弱。

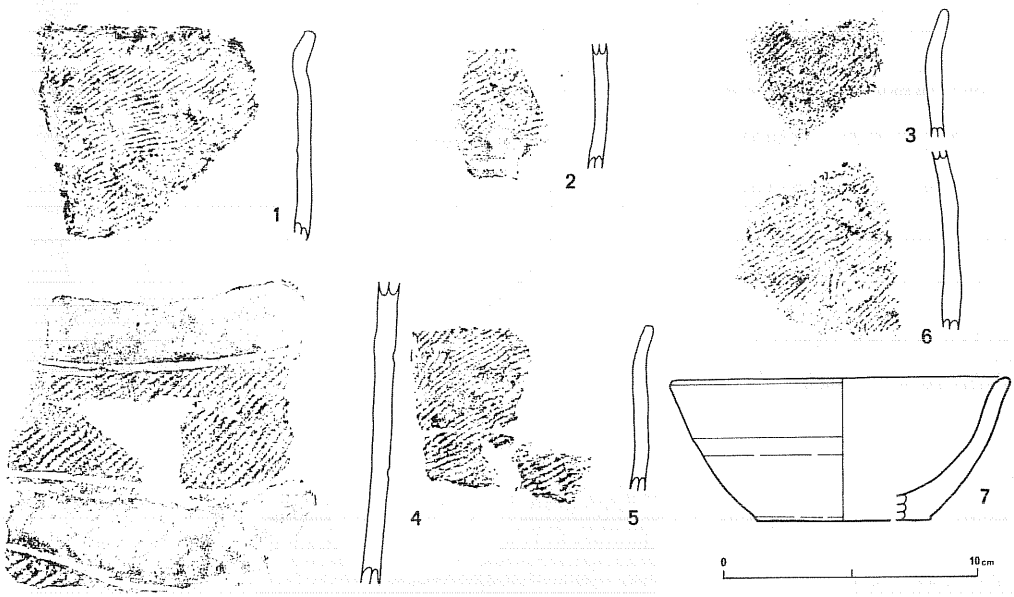




第106図　ＳＫ134土壙



第107図　ＳＫ135土壙



第108図　SK131，135土壙出土遺物

ＳＫ135土壙（第107・108図）

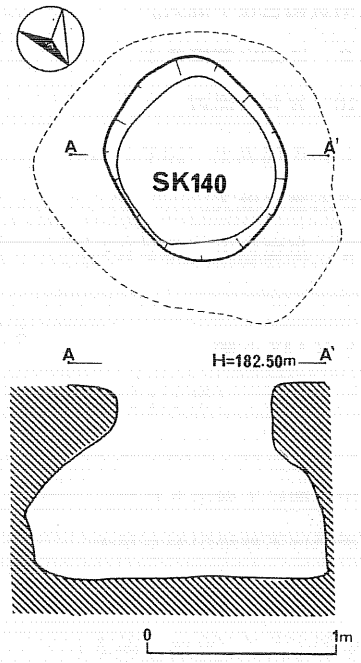
32－Ｈ，33－Ｈより地山上面にて検出された。平面形は隅丸長方形を呈する。壙口部366×130 cm，壙底部354 × 122 cm，深さ28cm，面積4.32m²である。床面はほぼ平らで浅い土壙である。主軸方位はＮ26°Ｅである。第108図7に示した土師器坏を出土した。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/2　浮石を少量含む。

2．暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3

3．黒色土　10Ｙ Ｒ2/1　浮石を多量に含む。

4．黒色土　10Ｙ Ｒ1.7/1　浮石を少量含む。



第109図　SK140土壙

ＳＫ140土壙（第109図　図版46）

38－Ｊ地区より地山上面にて検出された。壙口部102 ×86cm，壙底部164 × 146 cm，深さ102 cm，頸部84×78cm，面積1.84m²である。いわゆるフラスコ状ピットである。上面に土が充填されていなかったため，断面は計測できなかった。

ＳＫ141土壙

（第110図　図版46）

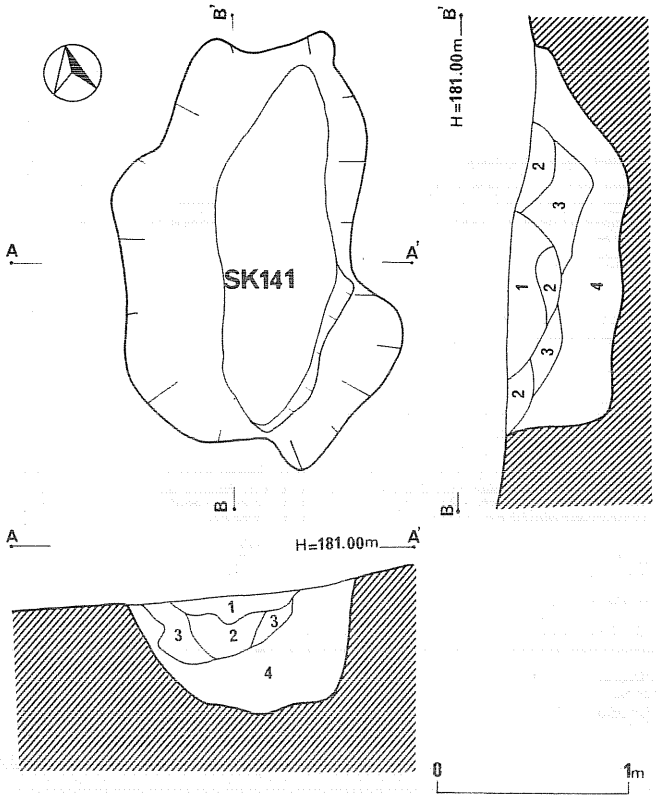
34－Ｍ地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部232×122cm，壙底部136×60cm，深さ62cm，面積2.44m²である。床面は若干の凹凸があり，東側の壁が急激に立ちあがる。主軸方位はＮ3.5°Ｗである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．暗褐色土　10ＹＲ3/3　明黄褐色粒子混入。

2．にぶい黄橙色土　10ＹＲ7/2　浮石。

3．黒褐色土　10ＹＲ2/3　浮石密に混入。

4．黒褐色土　10ＹＲ2/2

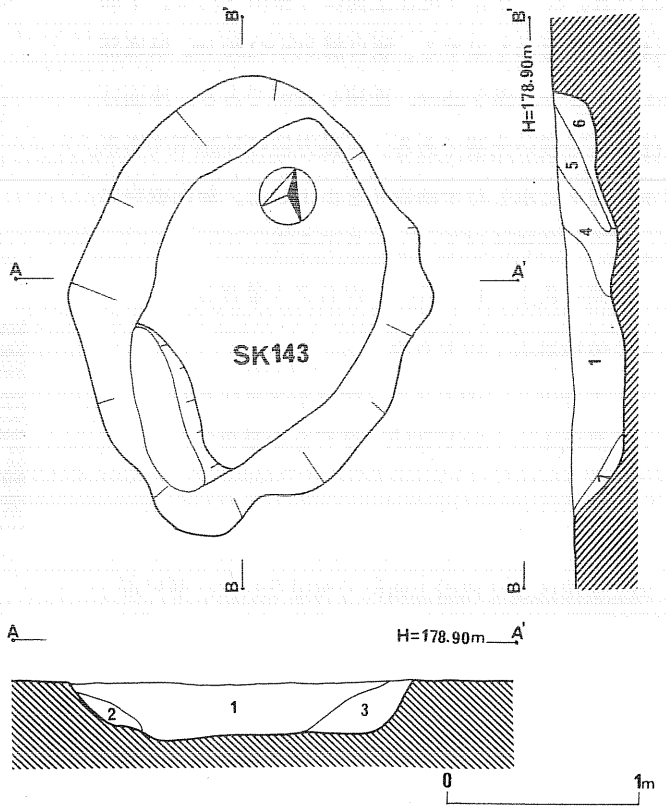


第110図　ＳＫ141土壙

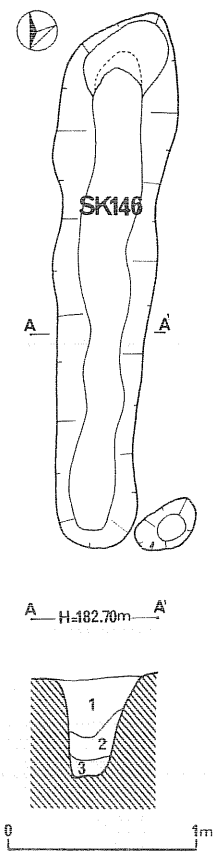
ＳＫ143土壙

（第111図）

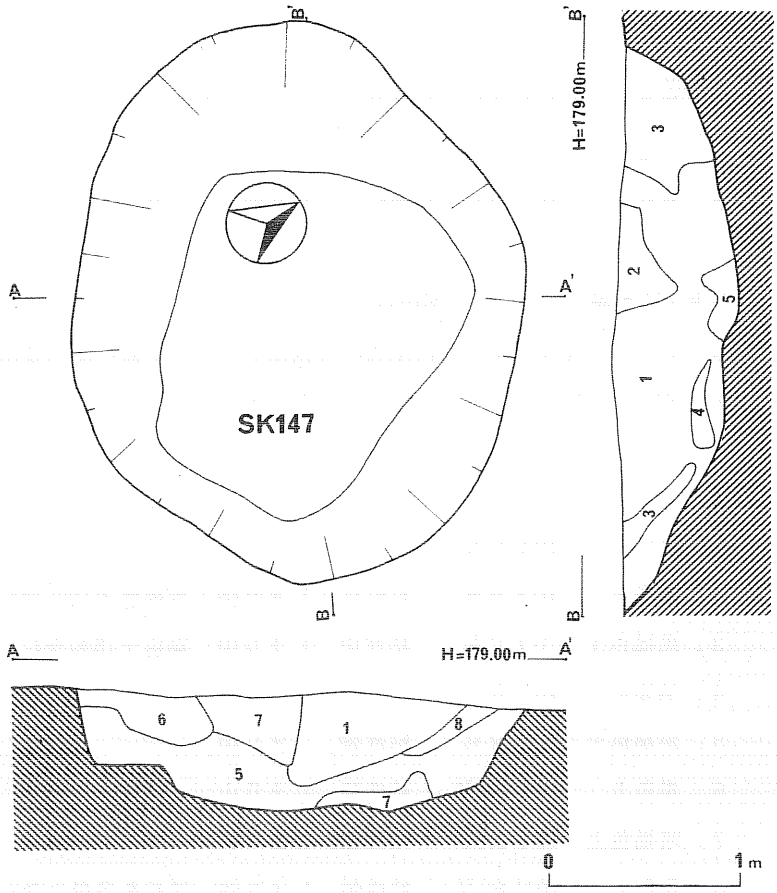
28－Ｑ，28－Ｒ地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙底部224×186cm，壙底部176×120cm，深さ30cm，面積3.16m²である。床面はほぼ平坦であるが，南西部にゆるい落ち込みがみられる。主軸方位はＮ43°



第111図　ＳＫ143土壙



第112図　SK146土壙



第113図　SK147土壙

Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/2

2．褐色土　10YR4/6

3．暗褐色土　10YR3/4　黒褐色土5％含む。

4．黒褐色土　10YR3/2

5．黒褐色土　10YR2/3

6．黄褐色土　10YR5/6

7．暗褐色土　10YR3/3

SK146土壙（第112図）

37－E，37－F地区より地山上面にて検出された。平面形は不整長楕円形を呈する。壙口部282×54cm，壙底部230×28cm，深さ52cm，面積1.36m²である。いわゆるTピットである。床

面はほぼ平坦である。主軸方位はN48°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．黒色土　10YR2/1　粘性強。しまり中。黄褐色土ブロック5％混入。
2．暗褐色土　10YR3/4　粘性強。しまり中。粘土ブロック5％混入。
3．褐色土　10YR4/6　粘性強。しまり弱。粘土層である。

SK147土壙（第113図　図版47）

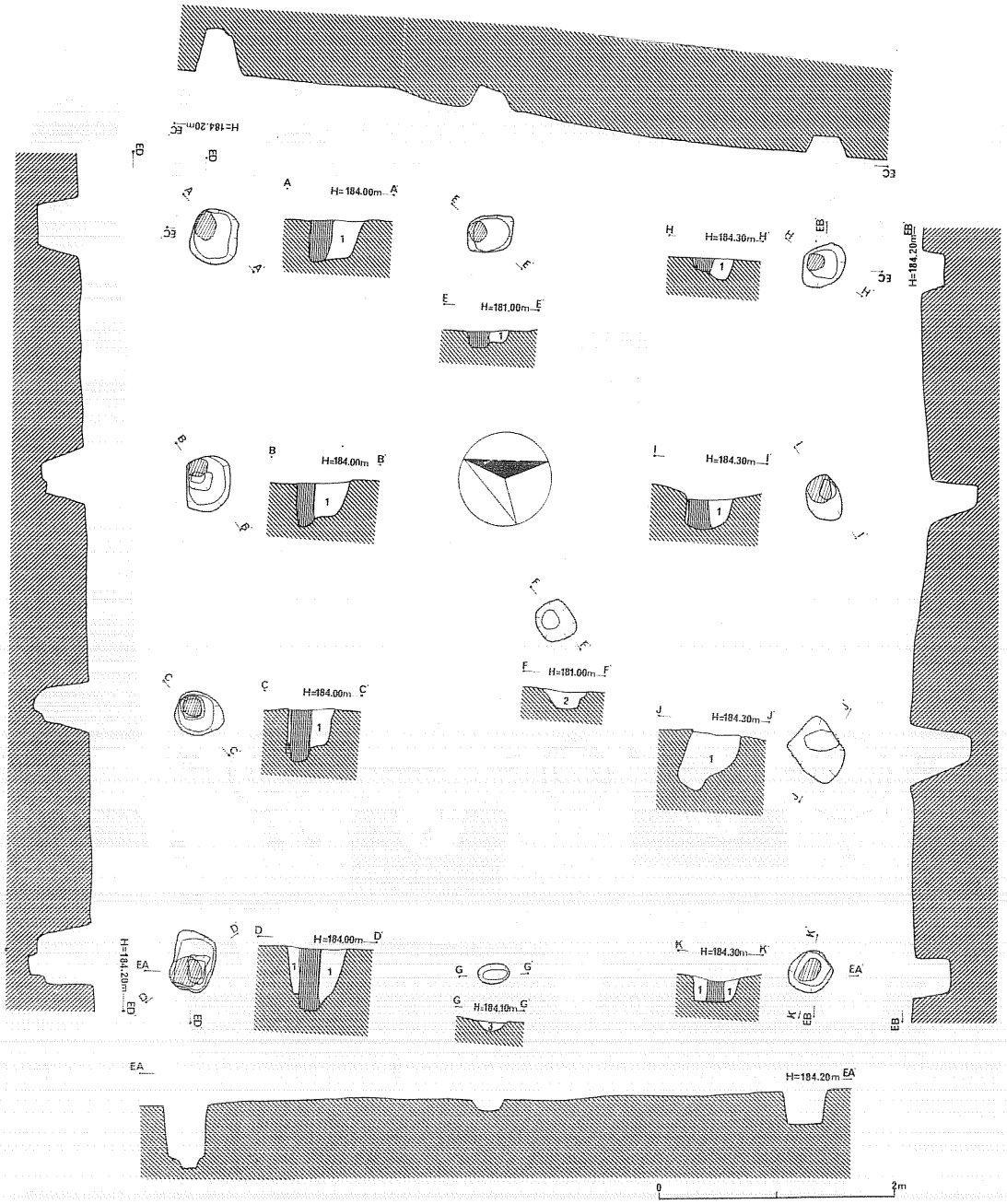
32－Q，33－Q地区より地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部294×240cm，壙底部184×146cm，深さ64cm，面積5.27m²である。床面は若干の凹凸があり，壁はゆるやかな立ちあがりを呈する。主軸方位はN70°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1．褐色土　10YR4/6　粘性中。しまり中。
2．暗褐色土　10YR3/4　粘性強。しまり強。黄褐色土10％含む。
3．黒褐色土　10YR2/3　粘性中。しまり中。褐色土15％含む。
4．黒褐色土　10YR2/2　粘性中。しまり中。
5．黒褐色土　10YR3/2　粘性強。しまり中。
6．黒色土　10YR1.7/1　粘性強。しまり中。
7．暗褐色土　10YR3/3　粘性強。しまり強。
8．黒色土　10YR1.7/1　粘性強。しまり強。浮石を多量に含む。

c．掘立柱建物跡

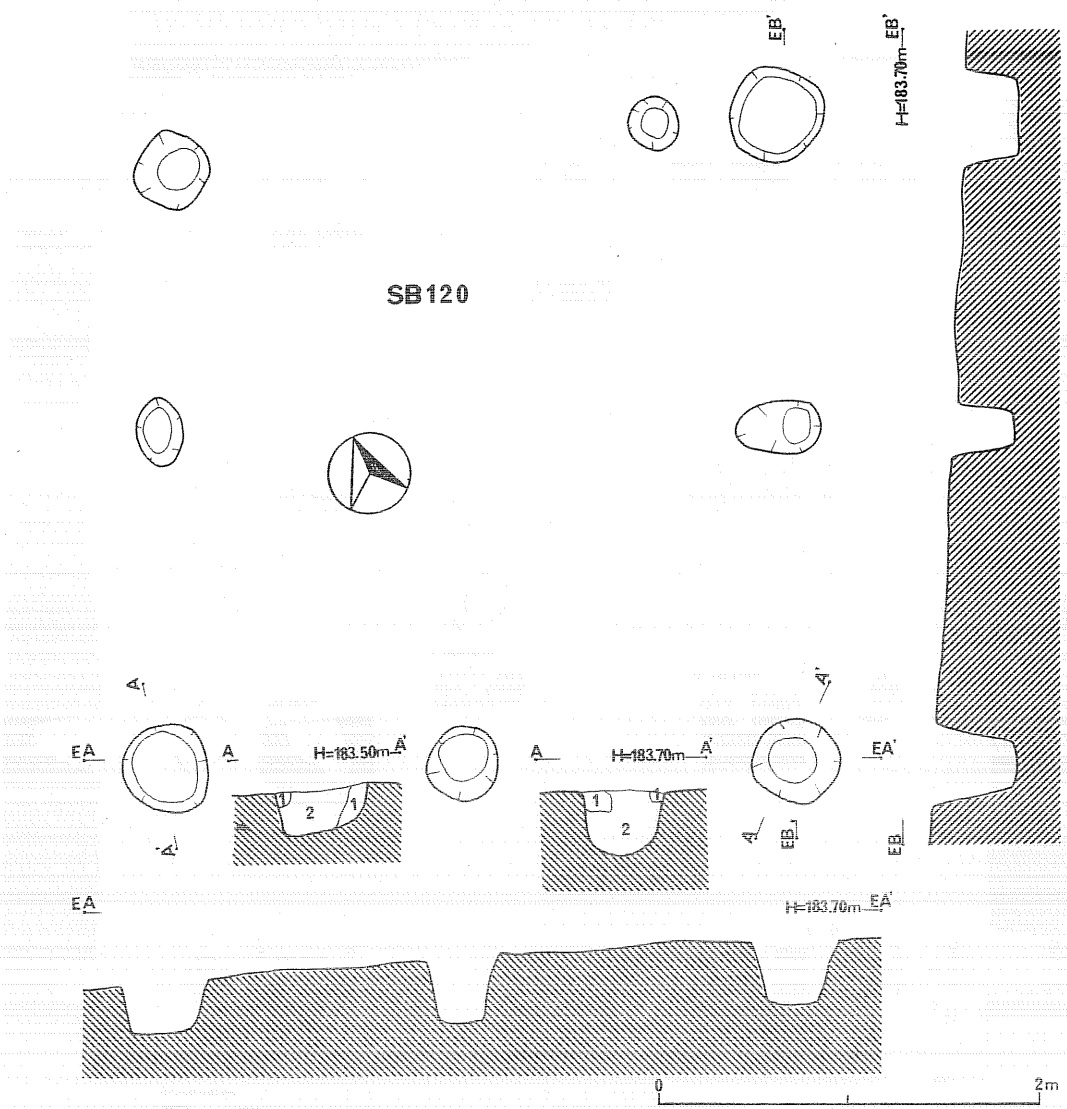
掘立柱建物跡は4棟検出されているが，いずれもII区の一番高い段丘面から検出された。この段丘面は多数のピットが検出されたところであるが，ほぼ全面が削平をうけており，建物跡と確認されたのはこの4棟にとどまった。いずれも規模は小さく2～3間のものである。このうちSB111掘立柱建物跡としたものは，ほとんどの柱穴から柱痕跡が確認されており，しっかりしたものである。次に主軸方位をみてみると，SB111とSB149掘立柱建物跡の主軸方位に同様の値が出た他は違っている。切り合い等もないことから時代的変遷と握むことはできなかった。また掘立柱建物跡に伴う遺物も出土しなかった。

計測値等は遺構実測図下に付した表を参照のこと。なお，図中の▥は柱痕跡を示す。



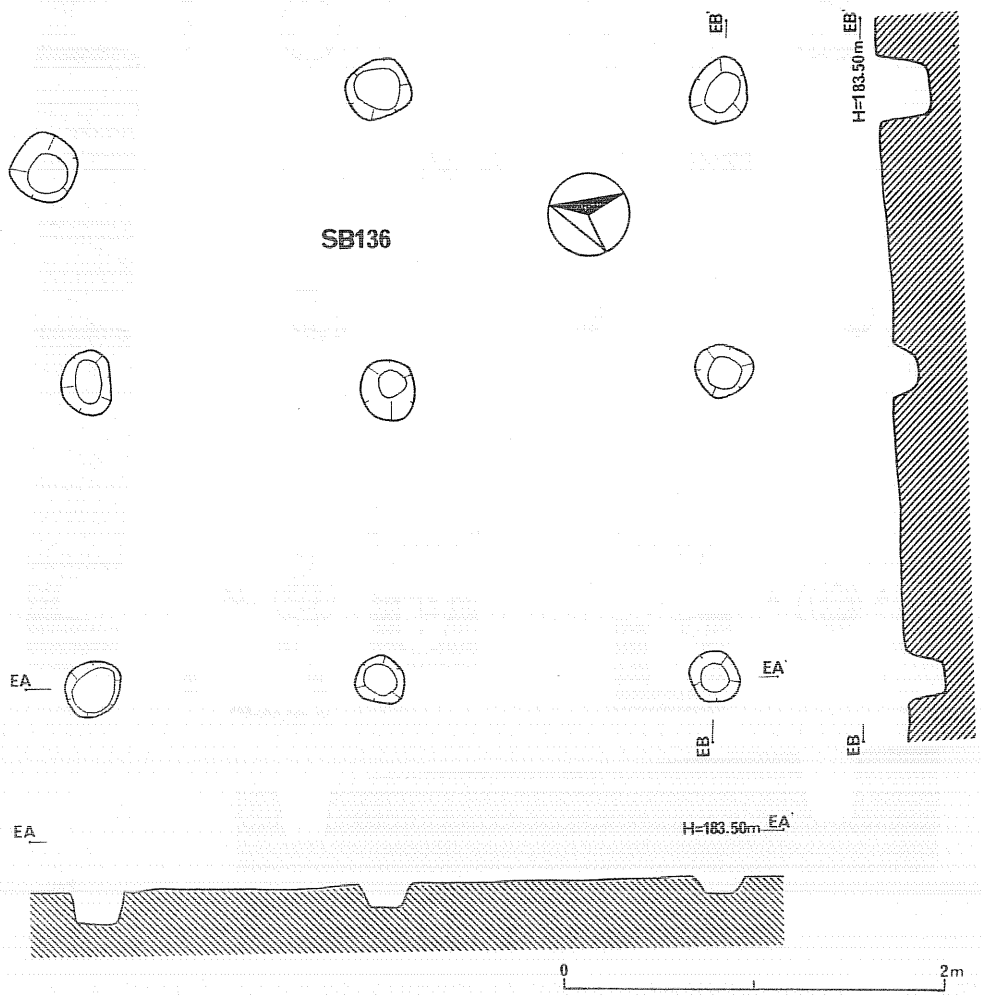
第114図　SB111掘立柱建物跡

第 20 表	検出地区	26－E, 26－F, 27－E, 27－F	挿図番号	114	図版番号	48上
遺 構 名	S B 111	規　模　6.21×5.14m	計画尺	1 尺≒29.9cm		
身舎	桁行　3 間	N E→N W　206＋204＋226	7 ＋ 7 ＋7.5尺			
		S E→S W　194＋216＋196	6.5＋ 7 ＋6.5尺			
	梁間　2 間	N W→S W　260＋268	9 ＋ 9 尺			
		N E→S E　210＋290	7 ＋9.5尺			
柱掘方平均値	径 36.7cm　深さ 31.6cm　柱痕の太さ 18.5cm			主軸方位	N30°E	



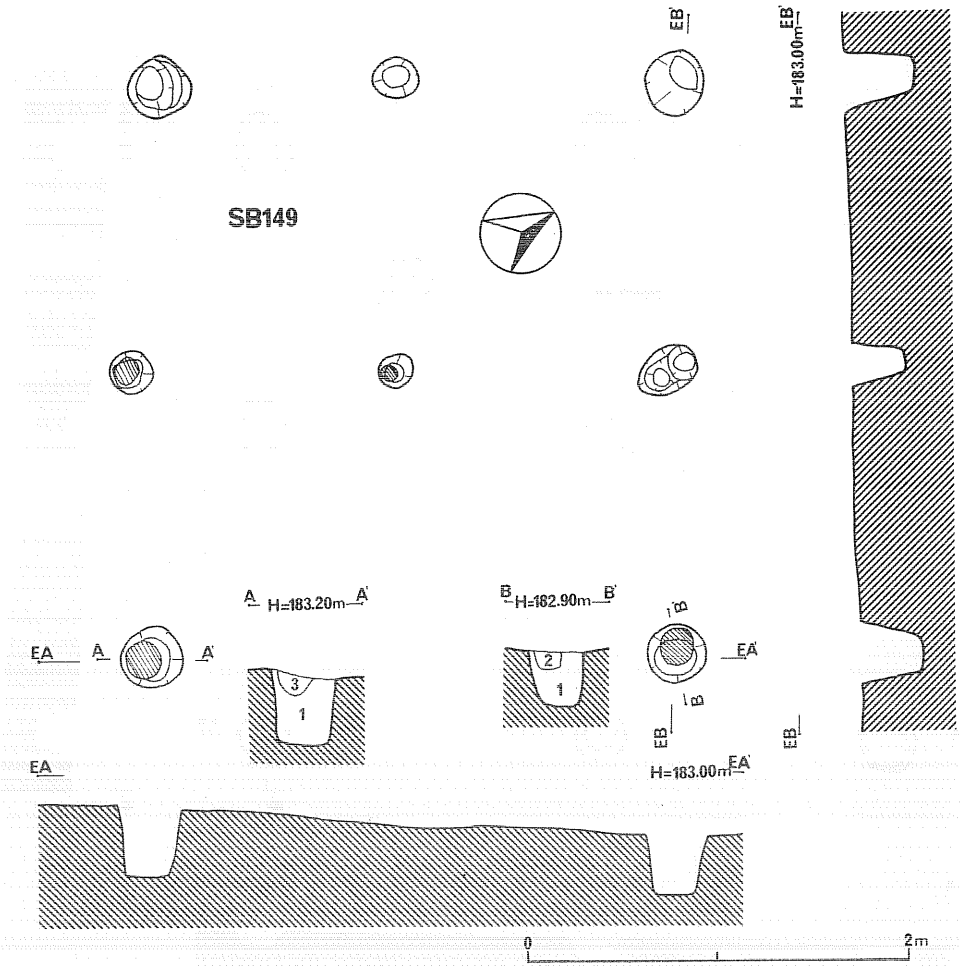
第115図　SB120掘立柱建物跡

第 21 表	検出地区	33－E，33－F		挿図番号	115	図版番号	
遺構名	SB120	規模	3.28m×3.24m	計画尺	1尺≒30.0cm		
身舎	桁行　2間	NE→SE　166＋176		5.5＋6尺			
		NW→SW　134＋180		4.5＋6尺			
	梁間　2間	NE→NW　316		10.5尺			
		SE→SW　174＋158		6＋5尺			
柱掘方平均値	径 41.1cm　深さ 29.0cm				主軸方位	N35°E	



第116図　SB136掘立柱建物

第 22 表	検出地区	31－G，32－G		挿図番号	116	図版番号	48下
遺 構 名	ＳＢ136	規　模	3.43×2.90m	計画尺	１尺≒30.0cm		
身舎	桁行　２間	ＮＥ→ＳＥ	180＋180	６＋６尺			
		ＮＷ→ＳＷ	150＋176	５＋６尺			
	梁間　２間	ＮＥ→ＮＷ	110＋160	3.5＋5.5尺			
		ＳＥ→ＳＷ	160＋150	5.5＋５尺			
柱掘方平均値	径 30.5cm　深さ 18.4cm					主軸方位	Ｎ４°Ｅ



第117図　SB149掘立柱建物跡

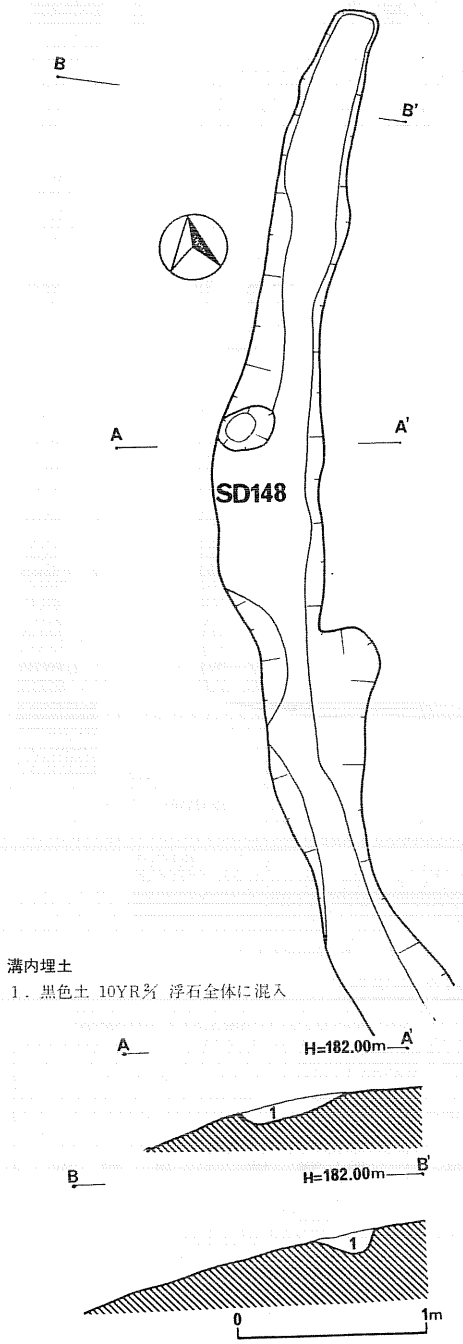
第 23 表	検出地区	35－H，35－I		挿図番号	117	図版番号	
遺構名	SB149	規模	3.00×2.80m	計画尺	1尺≒30.0cm		
身舎	桁行　2間	NW→SW150＋150		5＋5尺			
		NE→SE150＋150		5＋5尺			
	梁間　2間	NE→NW150＋130		5＋4.5尺			
		SE→SW280		9.5尺			
柱掘方平均値	径 27.0cm	深さ 33.5cm	柱痕の太さ 14.5cm		主軸方位	N30°E	

SI 301竪穴住居跡埋土

1．黒色土　10YR1/2　粘性あり　しまりなし　黄褐色(10YR5/6)1％大粒混入
2．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまり中　黄褐色土(10YR5/6)30％混入
3．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまりなし　黒色土(10YR2/1)明褐色土(7.5YR)
4．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中　赤褐色土(5YR5/6)30～40％混入　焼土？
5．黒色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　黄褐色土(10YR5/6)7～30％混入
6．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり　しまり中　黄褐色土(10YR5/6)5％混入　極小白色粒子10％混入
7．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし　黄褐色土(10YR5/6)10％混入

カマド埋土

1．黒色土　10YR1/2　粘性なし　しまり中
2．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし
3．褐色土　10YR4/4　粘性なし　しまりなし　焼土粒子(5YR5/6)混入
4．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまり中　焼土粒子(5YR5/6)混入
5．赤褐色土　5YR5/6　粘性ややあり　しまり中　焼土
6．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　焼土粒子(5YR5/6)混入
7．褐色土　10YR4/3　粘性なし　しまりなし　焼土粒子(5YR5/6)密に混入
8．黄褐色土　10YR5/3　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR5/6)粒子，ブロック混入
9．褐色土　10YR4/6　粘性なし　しまりなし　焼土粒子(5YR5/6)混入
10．褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中　焼土粒子(5YR5/6)密に混入　炭化物混入
11．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR5/6)粒子，浮石混入
12．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり　しまり中　焼土粒子(5YR5/6)密に混入
13．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR5/6)粒子密に混入
14．黄褐色土　10YR5/6　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR5/6)粒子，浮石混入
15．黒色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし
16．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり　しまり中
17．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまりなし　焼土粒子(5YR5/6)まばらに混入
18．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性あり　しまりよし　灰黄褐色(10YR5/2)混入
19．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし　しまりなし　明黄褐色(10YR5/6)粒子，浮石混入
20．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし　しまりなし　焼土粒子(5YR5/6)混入



第118図　SD148溝

d．溝

ＳＤ148溝（第118図）

Ⅱ区の第二段丘縁辺部にあたる29－Ｍ，30－Ｍ地区から検出された。縁辺部のため西側の壁は削平されており，両端も不明である。検出された総延長は4.90ｍである。

③　Ⅲ区の遺構

a．竪穴住居跡

ＳＩ301竪穴住居跡

プラン確認　地山上面にて確認したが，上面は若干削平されている。

壁面の状態　壁はしまりがよく，ほぼ垂直に立ちあがる。

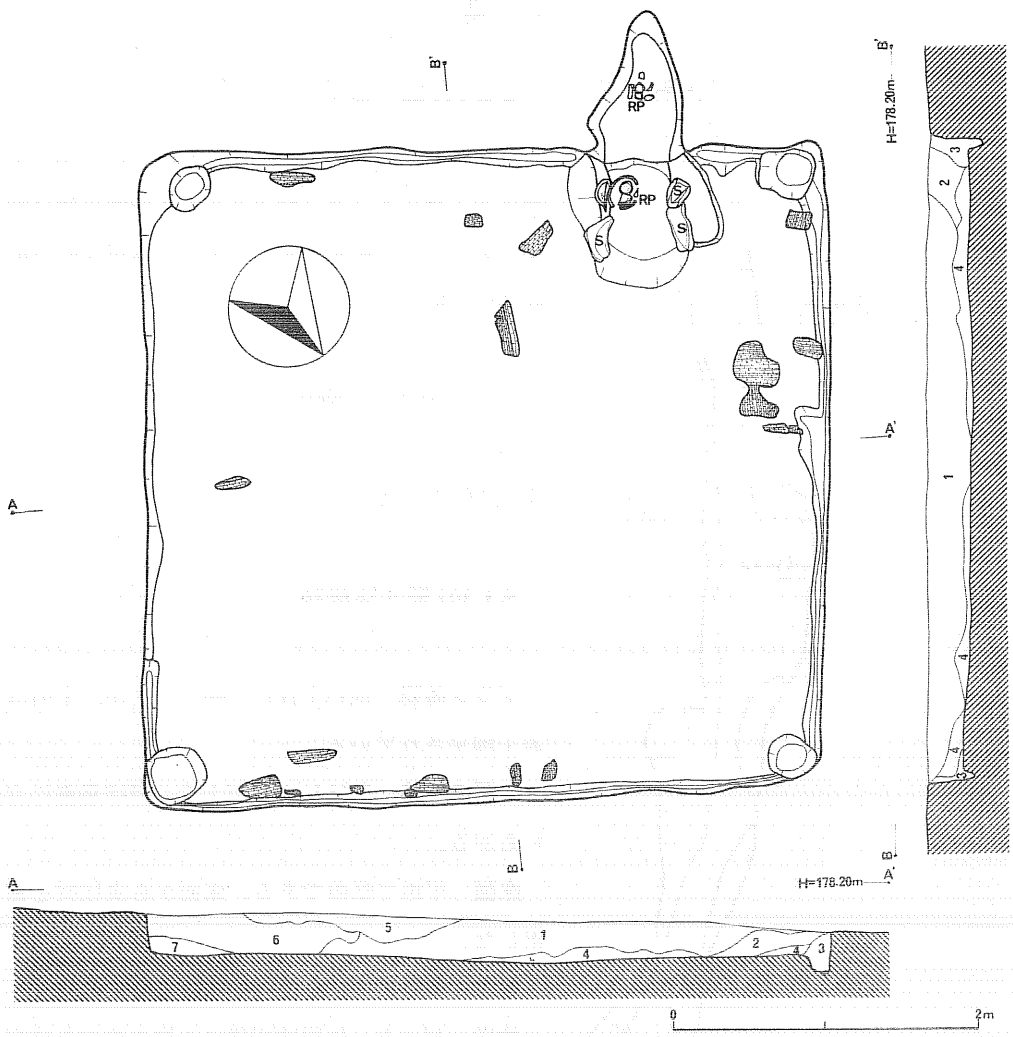
床面　平坦で堅固である。床面から炭化材を検出した。

壁溝　東壁の一部を除いてほぼ全周する。

柱穴，ピット　住居跡四隅に４個の柱穴を確認した。

かまど　扁平な石を袖部の芯材として構築されたかまどである。燃焼部から多量の土器片が検出されている。

遺物とその出土状態　遺物出土量はやや多い方に属する。土師器甕にはほとんどのものにロクロ使用が認められ，頸部が短く，若干くびれるものが多く出土する。



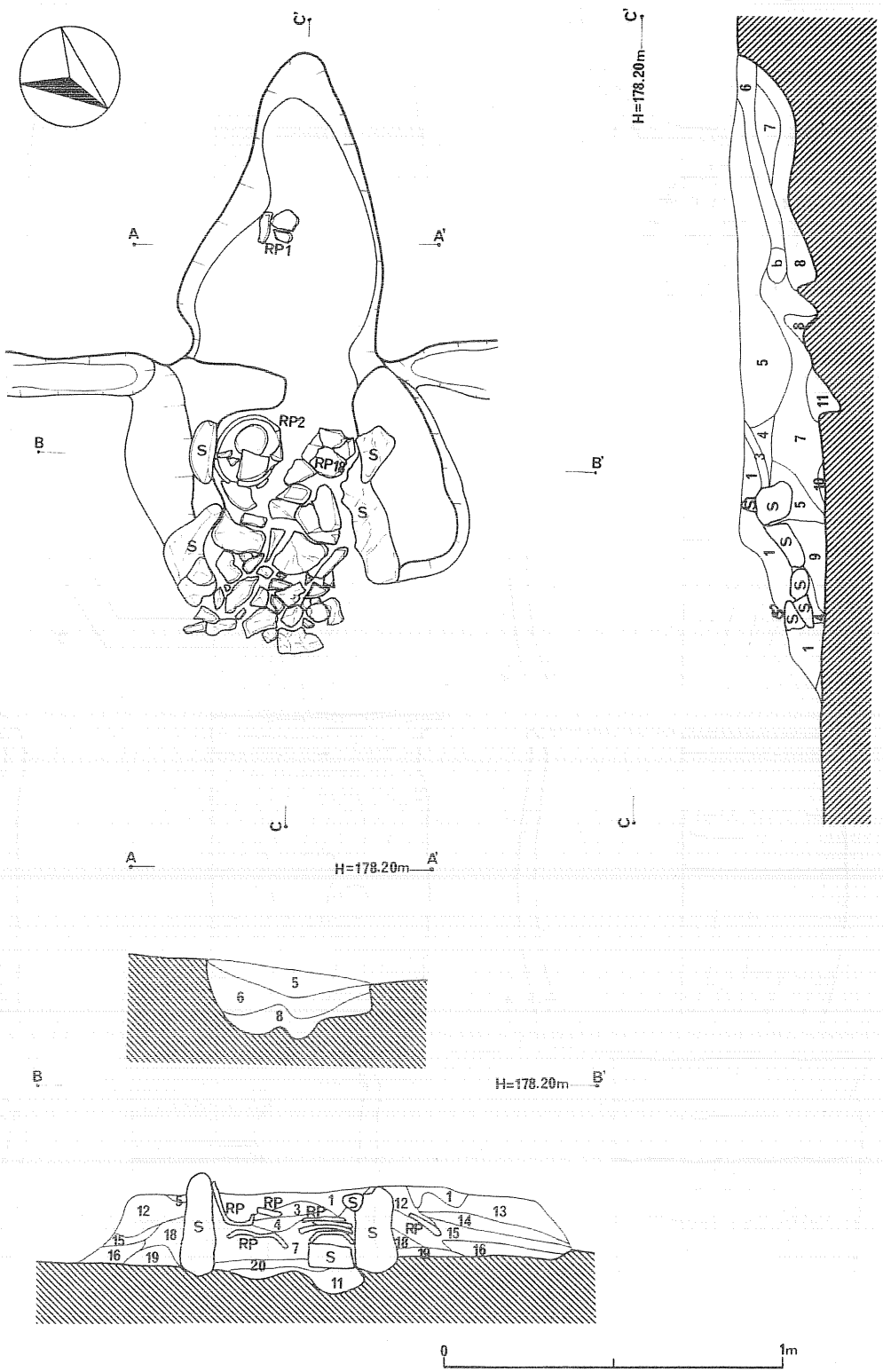
第119図　SI301竪穴住居跡

埋土はP.226参照

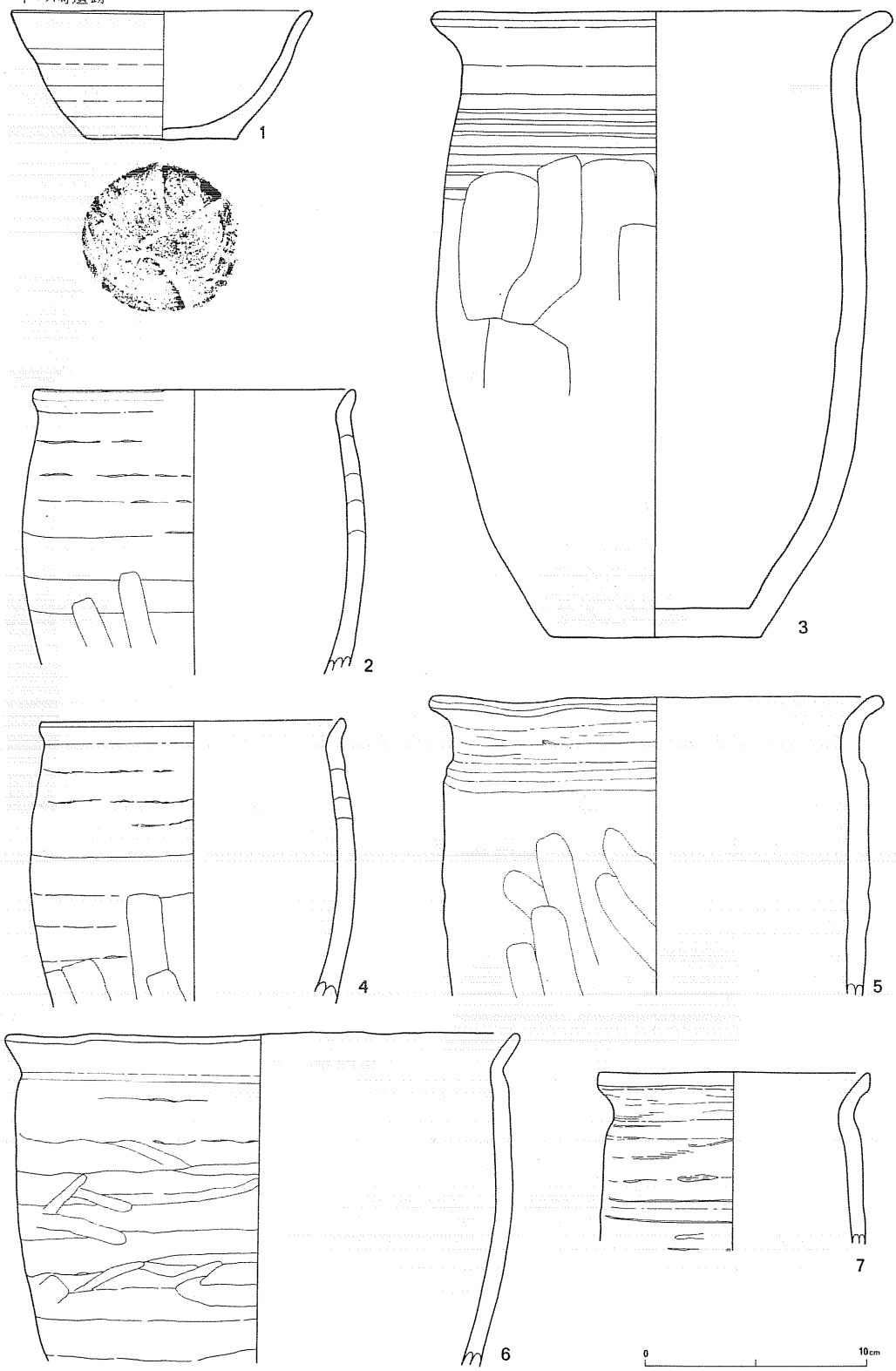
第 24 表	挿図番号	第119～122図	図版番号	図版74・75
遺構名	SI301	検出地区	55－X，55－Y，56－X，56－Y	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	420cm	410cm	435cm	430cm
	壁高	23.0～28.5cm	28.0～38.5cm	25.5～42.5cm	25.5～33.0cm
	壁溝幅	(9.0～11.0)cm	7.0～23.0cm	8.0～13.0cm	4.0～12.0cm
	壁溝深	(1.0～ 5.0)cm	8.0～ 9.5cm	7.5～13.7cm	6.5～ 8.0cm

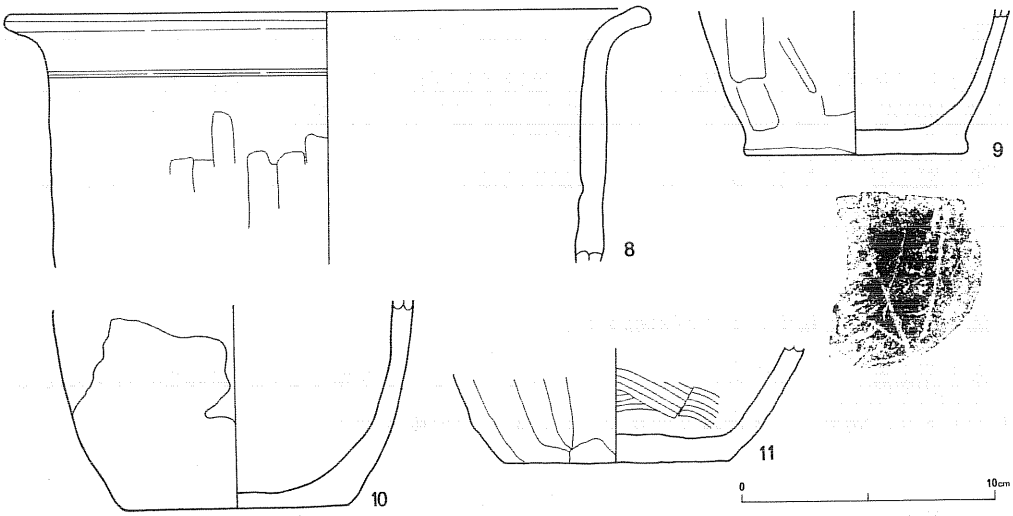
形態	方形	面積	19.5m²	主軸方向	N29°E
かまど	位置	南西壁西寄り		構築素材	心部石組



第120図　SI301竪穴住居跡カマド



第121図　SI301竪穴住居跡出土遺物(1)



第122図　SI301竪穴住居跡出土遺物(2)

(2) 遺　　物

a．土器

遺構外からも多数の土器が出土しており，その時期も縄文時代前，中，後，晩，弥生時代，平安時代とバラエティに富んでいる。その半数以上は縄文時代後，晩期のもので，平安時代のものがそれに次ぎ，縄文時代前・中期及び弥生時代のものは極めて少ない。以下第Ⅰ～Ⅶ群まで分類し，それぞれについて述べる。

第Ⅰ群土器

縄文時代前期に属するものを本群とした。

第1類土器　（第126図20）　口縁部に2条の隆帯を配し，その上に刺突を施す。それらの隆帯の上下には爪形の刺突が施される。

第Ⅱ群土器

縄文時代中期に属するものを本群とした。

第1類土器　（第126図21・22）　口縁部は波状をなし，口唇部及び口頸部には隆帯を廻す。また口縁部には撚糸圧痕文が施される。

第2類土器　（第123図1・2，第126図23～29）　地文として無節Lの縄文を施文したのち，太い沈線で曲線的文様を描く。

第Ⅲ群土器

縄文時代後期に属するものを本群とした。

第１類土器　（第 126 図30～56）　いずれも破片であるが，量的には多く出土した類である。地文として単節縄文を回転施文したのち，磨消手法を用いてモチーフを描いたものである。

第２類土器　（第 123 図３）　Ｓ字状沈線文を持つものを本類とした。

第３類土器　（第 127 図57～68）　入組磨消縄文を持つものを本類とした。量的には多く出土している。

第Ⅳ群土器

縄文時代晩期に属するものを本群とした。

第１類土器　（第 127 図69～73）　三叉文を持つものを本類とした。口縁部には突起をもつものもあり，胴部には単節縄文が横位または斜位に回転施文される。

第２類土器　（第 123 図４，第 127 図74・75）　羊歯状文を持つものを本類とした。胴部には単節縄文が回転施文される。

第３類土器　（第 127 図77～79）　雲形文・Ｘ字状文が施されたものを本類とした。

第４類土器　（第 124 図６～８，第 127 図16）　口縁部に平行沈線を施したものを本類とした。穿孔のあるもの（76），台付土器（８）もある。

第５類土器　（第 124 図９～11）　口縁部の沈線間が広くなり，その部分をていねいに調整したものである。

第６類土器　（第 124 図12）　細長いＴ字状文を交互に組み合せたものを本類とした。

第７類土器　（第 128 図81～88）　口縁部に帯状の無文帯を持つものを本類とした。

第８類土器　（第 128 図89～108）　変形工字文や口縁部に数条の平行沈線を持つものを本類とした。

第Ⅴ群土器

縄文のみ施されるものを本群とした。

第１類土器　（第 124 図13～17，第 125 図18・19，第 128 図 109 ～ 111・113，第 129 図114～116）　13，111は波状口縁を持つ。115，116は単節ＲＬと無節Ｌが回転施文されている。

第２類土器　（第 128 図 112，第 129 図 117 ～ 120）　結束を持つものを本類とした。

第Ⅵ群土器

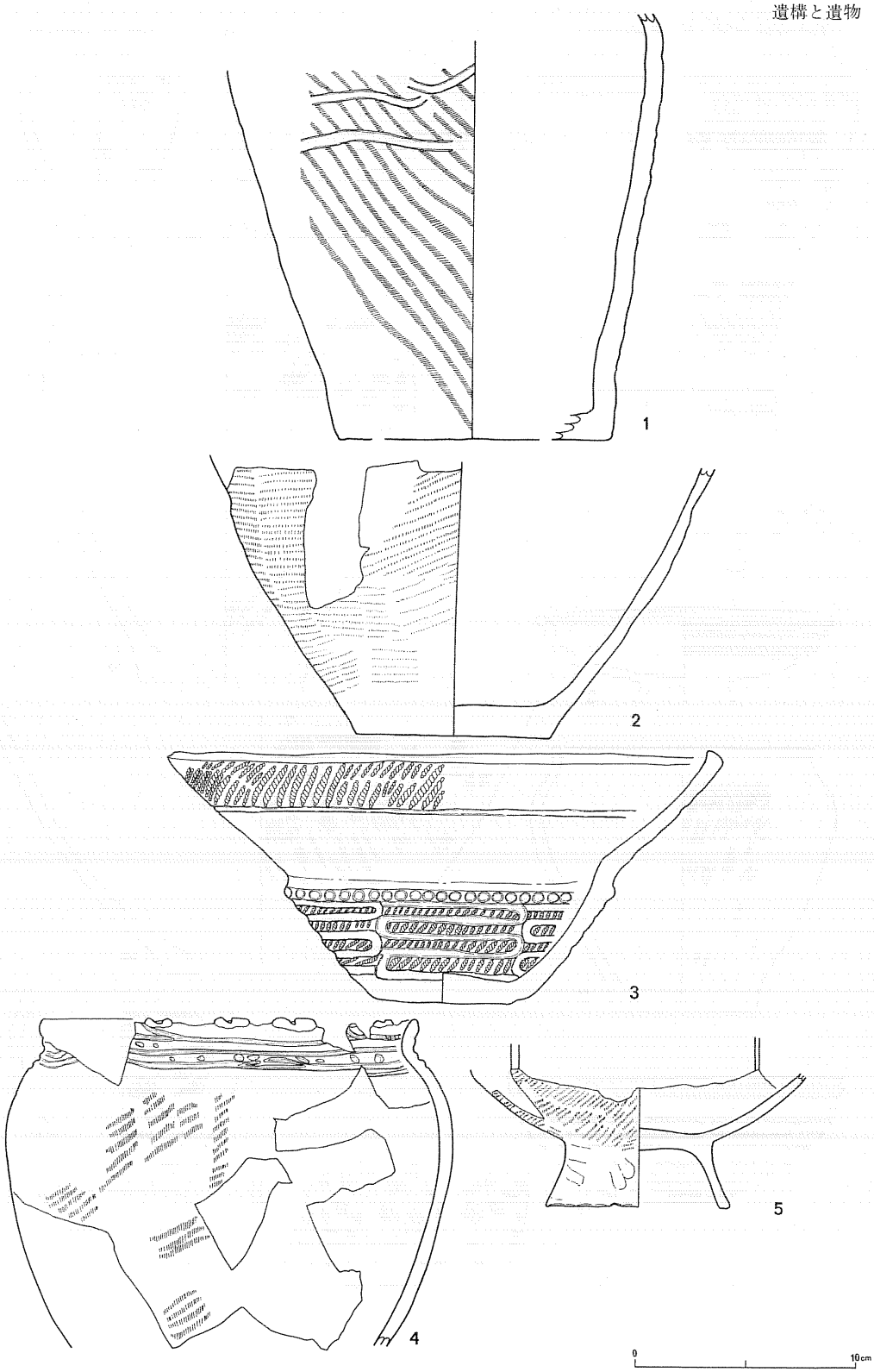
弥生時代に属すると思われるものを本群とした。

第１類土器　（第 129 図 121・122）　３条の沈線を廻らし，その下に３条の連孤状沈線文を施す。縄文は単節ＲＬ原体を縦位回転施文する。

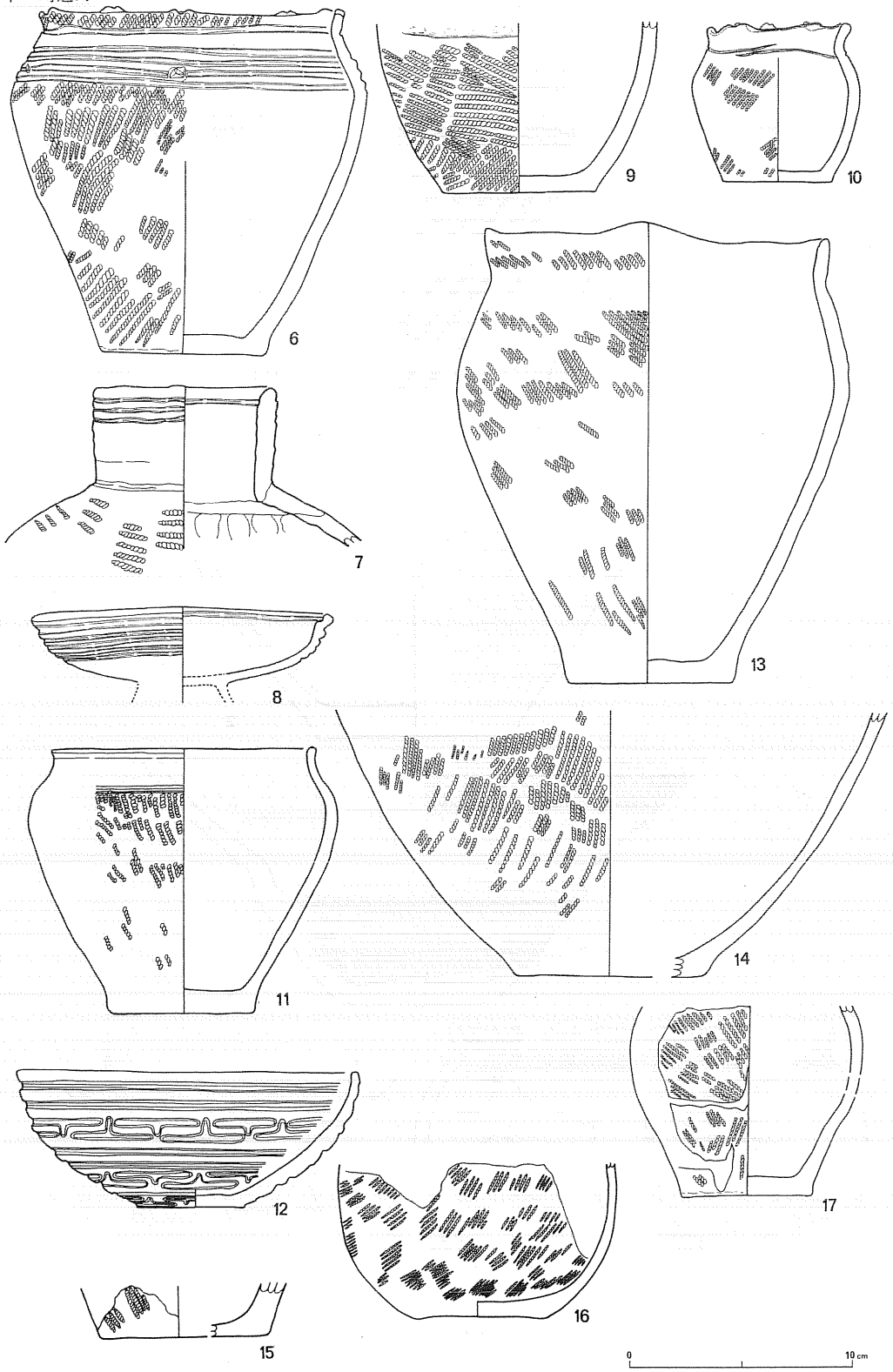
第Ⅶ群土器　（第 129 図 123 ～131，第 130 図 132 ～ 137・139・140）

平安時代に属すると思われるものを本群とした。

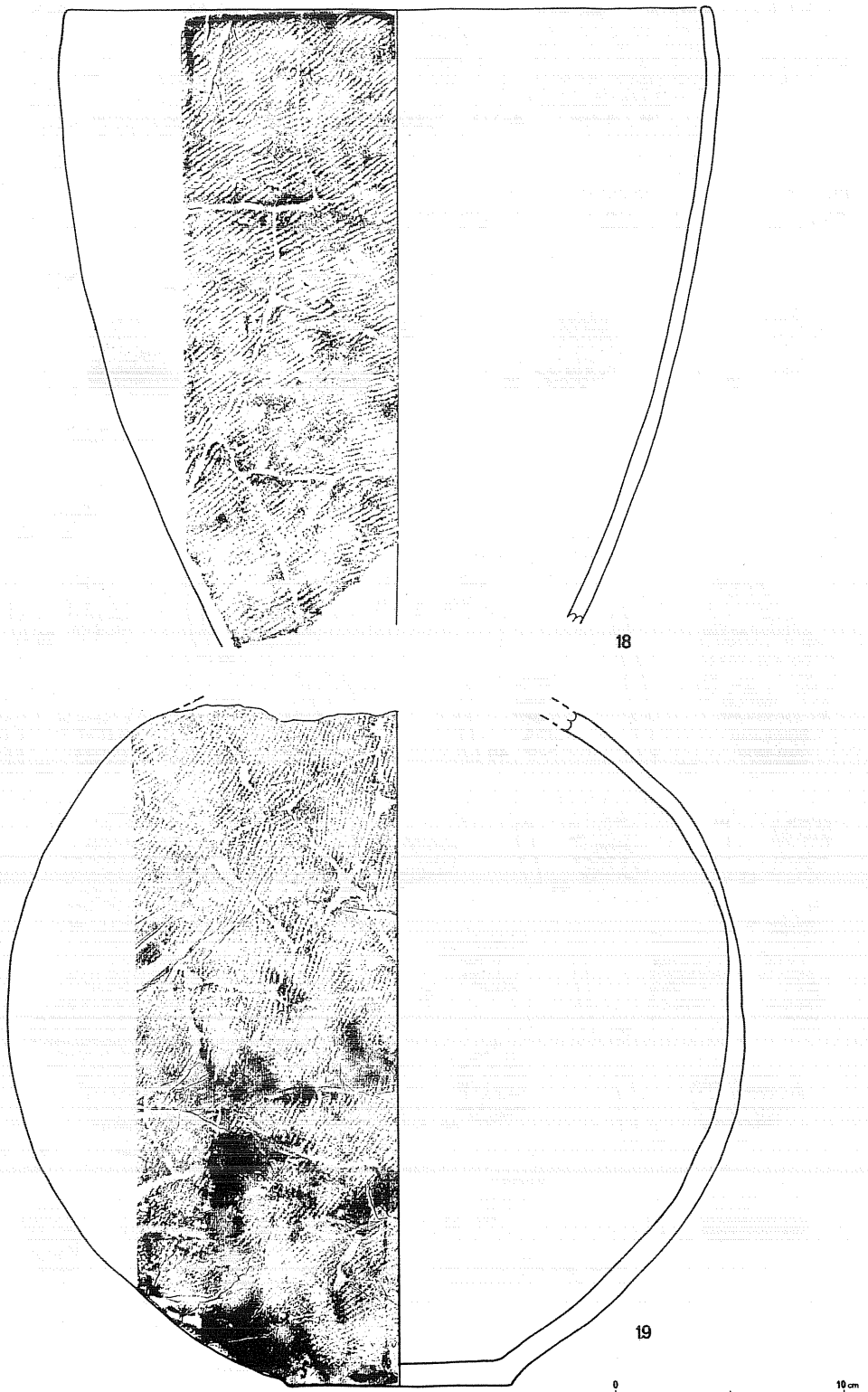
124 ～ 134 は土師器坏で，底部はいずれも回転糸切りで，内面黒色処理のもの（128，131）



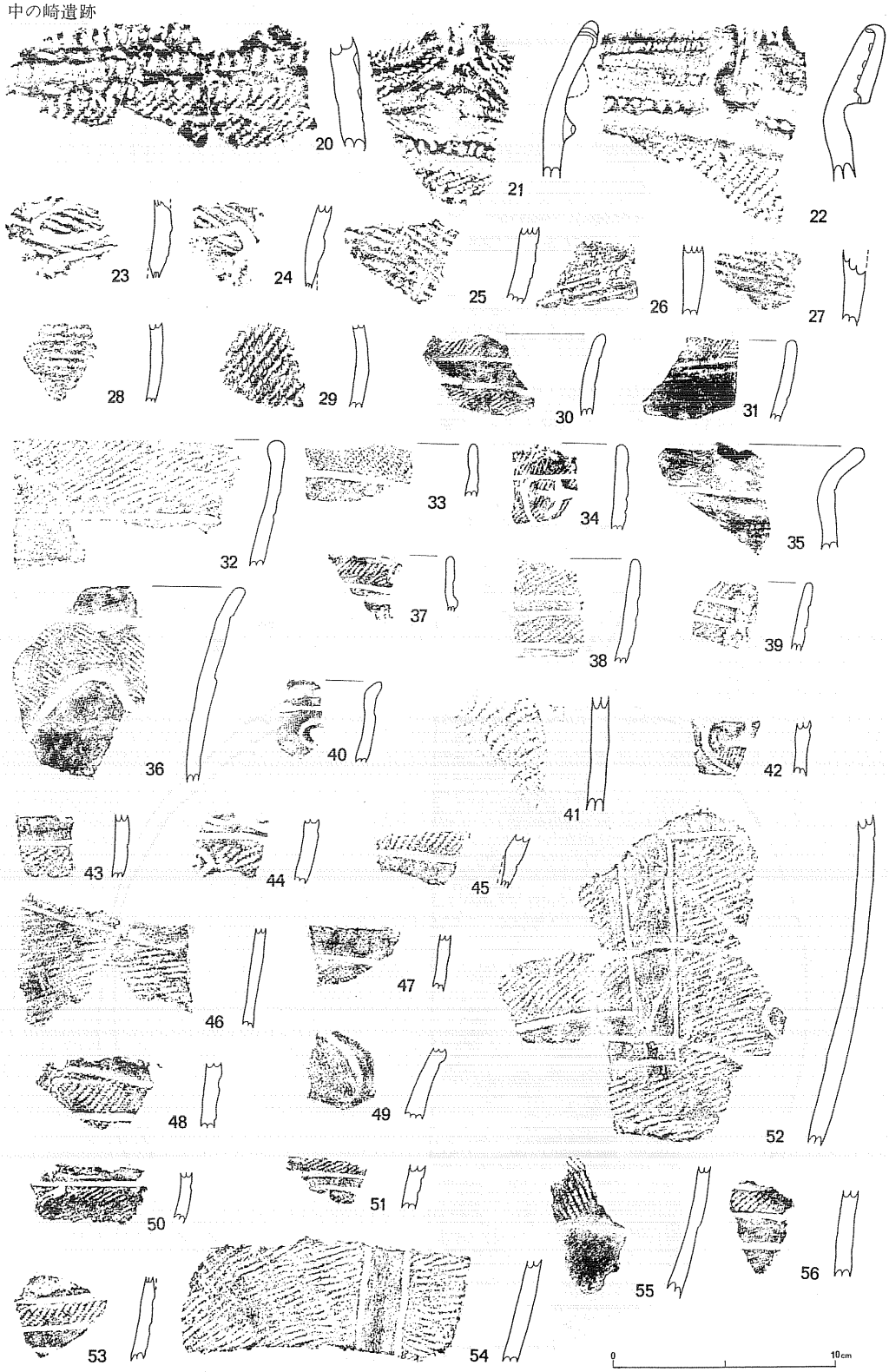
第123図　遺構外出土遺物(1)



第124図　遺構外出土遺物(2)



第125図　遺構外出土遺物(3)



第126図　遺構外出土遺物(4)

第127図　遺構外出土遺物(5)